緑

西部アマゾン日本人移住

７０周年記念誌

１９２９～１９９９

西部アマゾン日本人移住７０周年記念誌編纂委員会

移住七十周年記念誌発刊に際して

西部アマゾン日本人移住七十周年を迎え、記念事業として、「西部アマゾン日本人移住七十周年誌」を発刊の運びとなりました。

このアマゾンの厳しい自然環境の中で先人達は、幾多の困難を乗り越え、アマゾン地域に新たなる農業を興して、地域産業の振興と経済発展に大きく貢献してこられました。

これはブラジルにおける日系社会の偉大なる遺産であります。

この先駆者の足跡を記録にとどめ、貴重な記録、歴史を後世に伝えることは今が残された最後の機会であると認識して、移住誌編纂に取り組んだ次第であります。

今年の移住七十周年記念行事、移住誌の発刊には、日本政府の関係機関の方々をはじめ、当地の日系企業、商社、そして在留邦人各位の方々の絶大なる御支援、御協力を賜り、深く感謝申し上げます。

本移住誌が多くの皆さんに読んでいただき、後世における日系社会の繁栄の一助とならんことを念願いたし、本誌発刊の言葉とさせて戴きます。

一九九九年十一月

西部アマゾン日本人移住七十周年記念祭典委員会

委員長　村山　惟元

目　次

表紙題字　三木　祥弘
発刊のことば　西部アマゾン日本人移住七十周年
記念祭典委員会委員長……　村山　惟元

祝　辞
日本国外務大臣……　河野　洋平
駐ブラジル日本国特命全権大使……　鈴木　勝也
在マナオス日本国総領事……小林　健一
国際協力事業団総裁・・……　藤田　公郎
西部アマゾン七十周年記念式典においての
総理大臣メッセージ……　小渕　恵三

日本人移住者の歴史

■西部アマゾン開拓先史■
ペルー下りの日本人……中村弥寿平
アマゾン興業マウエス移住者の記録　……　三木　祥弘
アマゾン生活での思い出……　白柳　敏男
海外植民学校アマゾン開発先発隊の懐古…海外植民学校校友会
高拓生アマゾン移住者の記録　……パラー高拓会
我が思い出……　猪股　正

■戦後ジュート移住の歴史■……　羽田　重吉
■マナオス～イタコアチアラ街道道路工事■…　松田　和夫
■戦後各移住地の記録■
アマゾナス州・ベラビスタ移住地……　中村弥寿乎
ロンドニア州・トレゼ・デ・セテンプロ移住地…村山　惟元
ロライマ州・タイアーノ移住地……　三木　祥弘
アマゾナス州・エフィジエニオ・サーレス移住地…三木　祥弘
アクレ州・キナリー移住地……村山　惟元・川田　敏之
アマゾナス州・カショエイラ・グランジ移住地
……　高木　正敏・出田　務
■技術・花嫁・呼寄・開発青年（日系社会ボランティア）
の動静■……　梅津あや子
■マナオスにおける日本語教育■
西部アマゾン日伯協会日本語学校の沿革……　三木　祥弘
エフィジェニオ・サーレス日本語学校の沿革…　木場　克子
ベラビスタ日本語学校の沿革……　中村弥寿平
天理教ねむの木学園の沿革　……　音成　博子
マナオス日本人学校の沿革……　神田　久彦

■マナオス進出日系企業の変遷■……アマゾナス日系商工会議所

資料・年表

アマゾン移住の歴史移住年表　……

マナオスの日本人組織の始まり……

西部アマゾン日伯協会概要及び年表……

叙勲者氏名……

西部アマゾン日系人調査協力者氏名……

西部アマゾン日系人調査……

参考文献一覧……

結びの辞……三木　祥弘

（文庫注・編集段階で日本側の著作権との関係に不明な点があり、日本からの祝辞などは省略いたします）

祝　辞

日本国外務大臣　河　野　洋　平

（省略）

平成十一年十一月

祝　辞

駐プラジル日本国全権特命大使　鈴　木　勝　也

（省略）

平成十一年十一月

祝　辞

在マナオス日本国総領事　小　林　健　一

（省略）　平成十一年十一月

祝　辞

国際協力事業団総裁　藤　田　公　郎

（省略）　平成十一年十一月

西部アマゾン日本人移住七十周年記念式典における

小渕恵三日本国総理大臣からのメッセージ

（省略）

平成十一年十一月六日

日本国総理大臣　小　渕　恵　三

■西部アマゾン開拓先史――■

ペルー下りの日本人

中村弥寿平

まず、西部アマゾン日本人移民の歴史を述べる前に、ペルーからアマゾンへと下ってきた人たちについてふれなければならない。

アマゾンに戦後最初の日本人が移住したとき、既にアマゾンには大農場を持ち、現地人の労働者を多数使っていた人や、マナオスなどの都会で手広く商売をしていた日本人達がいた。その日本人達の中にペルー下りと呼ばれる、ペルーよりアマゾンに移動してきた人達がいた。

一八九九年に始まったペルー移民、アンデスの太平洋岸地域の、綿やサトウキビの耕地に労働者として移住してきた日本人移住者が、過酷な労働や低賃金に嫌気が差していたことに加え、アマゾンのゴム景気の話しを聞き、自分達も一儲けをとアンデス高地を越えてペルー領アマゾンに移動したのである。彼はペルー領アマゾンのマドレ・デ・ディオス川を下り、ボリビアを源流とするタンボバタ川との合流点プエルト・マルドナルドの町に達し、その前面を流れるマドレ・デ・ディオス川をさらに六百キロ下ったベニ川との合流点に出来たボリビア領

アマゾンのリベラルタの町に出るのが一般的なルートであった。

このリベラルタや、ブラジルのアクレ州と接するボリビア領コビバの町が、アマゾンで取れた天然ゴムの集積地として栄え、これらの町に移動した日本人は近辺のアマゾン地域に自生していた天然ゴム採集に従事した。当時ボリビア領コビバには約百人、リベラルタには二百人近くの日本人がいた。この他、ウカヤリ川を下ってペルー領イキトスに移動した日本人のグループもいた。

天然ゴム景気は、一九一〇年頃にマレー半島のゴムプランテーションが成功したことにより、価格が急落して幕を閉じた。

これらのペルー下りの人達は、ゴム景気が過ぎた後、ペルーやボリビアとの国境地帯で砂金掘りや、農業に従事し、水運を利用してブラジルのアマゾン地域の諸都市に散って行ったが、第二次世界大戦が始まるとともに、日本人は敵国人としての制約を受け、戦後これがなくなるまで大きな町には近づくことが出来ず、ソリモンエス河の上流地帯でジュート栽培に従事していた。

アマゾナス州マナオス市以外にも、ロンドニア州のポルト・ベーリョ市、グアジャラミリン市、アクレ州リオ・ブランコ市、ブラジレイア町にペルー下りの日本人が居住していたが現在では皆死亡している。戦後移住者がマナオス対岸のベラビスタ移住地に移住してきた当時、マナオス前面を流れるネグロ河のフルトゥアンチ（水上家屋）でバナナの卸売りをいた諏訪敏男氏、ネグロ河からソリモンエス河に通じる水路シボレナで、マナオスへ出荷する野菜を栽培していた高橋数馬氏、ソリモンエス河の少し上流で野菜作りをしていた田中氏と井野

氏、計四名のペルー下りの人達がマナオス市やその近郊に居住していた。

アマゾン興業マウエス移住者の記録

三木　祥弘

・不老長寿の妙薬、グァラナの由来

昔、マウエ族（アマゾン、マウエスに住むインヂオ）の酋長に一人娘があった。彼は娘を大変かわいがっていたが、なぜか娘は病弱で、種々な薬草をせんじて飲ますのだが効果なく、年頃になるとますます痩せ細り遂に死亡するのであるが、娘は死ぬ前に「自分は本当に短命であったが、私が死んだら必ずマウエ族のために不老長寿の薬草をあげます。」と約束した。酋長は懇ろに娘を葬り、墓の上に三日間も泣き伏しており、ふと墓を撫でると小さな草が生えていた。その草は良く伸びて花が咲き、実を付けてやがて熟れた。黄金の実の中からは、真っ黒な目玉のようなものが弾け出た。酋長はこれを見て、これは娘が約束した不老長寿の薬草に違いないと思い、その実を植えた。これが殖えてマウエスのグァラナになったのである。（マウエス郡役場所蔵、グァラナの起源史より）

・アマゾン初期移民の記録

今を遡ること九十年も前のブラジル政府は、国策として移民を導入

していた。一九二三年、パラー州知事ティジニオ・ベンデスは赴任前、在リオ日本大使を訪問懇談中、パラー州にても移民を入れて国土開発をしたい旨を告げ、もし同意があれば出来る限りの便宜を図ることを約束した。田付大使はこの吉報を外務省に伝え、翌年外務省は野田書記官に命じ、北伯、特にアマゾンの調査をせしめた。尚、当時の鐘紡社長の武藤山治はアマゾン開発に着目し、同社取締役の福原八郎にアマゾン調査団を組織させ、一九二六年パラー州の調査をした。

当時、大石小作（後アマゾン興業株式会社現地支配人）元鐘紡和歌山技師長は会社を辞職し、農牧産業調査のため自費で日本を旅立ち、三年間にわたりヨーロッパ諸国より北米を視察し、南米に入ってサンパウロにいた。彼は日本の調査団がリオ・デ・ジャネイロに来訪したことを知り、調査団の来伯の目的を知ると早速リオに赴き、この調査団に通訳として加わった。一行はパラー州四カ所にコンセッソン（土地の使用権利）を獲得。パラー州アカラ郡に南米拓殖会社を設立した。この知らせを知ったアマゾナス州知事エフィジエニオ・サーレスは福原に電報にてアマゾナスの調査を依頼したので、大石は単身でアマゾナス州の調査をした。

マウエスにたまたま不老長寿のグァラナがあるのを知り、そこへ行き調査をした結果、大いに有望性があるのを感じ、当時の郡長ミランダリオンにも会い、会社設立の意を固めたのである。

植民地建設地点はマウエス町上流四キロメートルと決め、マナオスに帰り一万町歩のこの土地使用権利の仮契約をして日本に帰国、会社設立に取りかかった。大石は旧知の沢柳政太郎（当時、東京大学教授、

元文部大臣）に相談、休職中の氏の実弟、沢柳猛雄（当時、海軍中佐）を用い、尚、知人の小川亀重（東京で薬局経営）、塚原喜義、相田忠一等の賛同を得てアマゾン興業株式会社を設立したのである。

マウエスの地に眠る大石小作氏夫妻の墓（1999年 中野氏撮影）

アマゾン興業株式会社一九二八年（昭和三年）九月十七日
設立登記
専務取締役　沢柳猛雄
常務取締役　大石小作、小川亀重

監査役　　塚原喜義、相田忠一

書記　　一名

会社概要

資本金　　二十五万円

株数　　一万株

時価　　一株　五円

最低持株　　一人　五株

各株主一人に対し、現地マウエスにて二十五町歩の土地を無償で払い下げる。

アマゾン興業株式会社現地要員

直営農場長　大石小作

社員　　増田太郎、羽野鶴雄、唐木道雄、三石　久、尾崎貞吉、久保田善久郎

以上七名の社員は一九二八年八月二十三日、現地マウエスに　到着した。会社の登記前である。二十町歩を伐採し、アマゾン　初期移民の第一歩を踏み出したのである。

会社は必要な建物を建て、猛烈に働いた。その翌年にはさらに百町歩を伐採しグァラナ定植中、第一回移民が現地に到着した。第一回移住者四十九名は、一九二九年十月十六日神戸発のさんとす丸で翌年一月二日にマウエスに到着した。四十九名の移住者の内訳は次の通りである。

（九家族三十二名）

北林梅吉　六名　東京
山根良忠　四名　鳥取
根尾哲朗　二名　富山
内山健吉　六名　静岡
福島　伝　四名　三重
武富健一　三名　神奈川
平川峰雄　二名　神奈川
古川　正　三名　神奈川
福永秀雄　二名　山口
（独身者十七名）
小島五二、
杉浦初二、
直木勝雄、
勅使河原要
宇野邦雄、
佐藤武雄、
庄司忠治、
宮内多賀雄
山中新之助、
奥村久衛門、
長尾誠四郎、
種子田秀雄
種子田光二、

墓地にある拓魂の碑（1999年 中野氏撮影）

水井治郎松、
広瀬友二、
野沢　暁
自柳敏男
以上四十九名の方々の中で、現在生存されている方は数少なくなっている。

・第二回植民（一九三〇年五月十四日神戸発、さんとす丸、七月二十二日マウエス到着移住者六十二名。）
（十三家族三十九名）
鈴木信次郎十名　北海道　　泉仁一郎　二名　青森
島田幸乃助　二名　北海道
楠　薫　三名　静岡
河野与平次　二名　広島
五味国竹　二名　静岡
弓場井末松　二名　広島
五味　栄　二名　静岡
岩田　清　二名　島根
岡田秀臣　二名　山口
東　春雄　二名　熊本
本田光一　三名　熊本
浅野輝茂　四名　岡山
（独身者二十三名）

小出秀雄、小出一郎、斉藤良雄、大野左門大野文吉、大野一悦、
藤井　官、槍口茂一　富田四郎次、市川正清、赤石幸雄、蛙田勝雄
鹿倉幸作、大久保繁治、山本修三、相川卓弥　栗山弥一、樋口敏一、
中尾文司、立川尚一　野原武雄、手島道雄、武藤桂治

・第三回植民（一九三〇年十月、リオ・デ・ジャネイロ丸）（三家族人名）
田中喜代治　二名　北海道
四釜要造　二名　北海道
吉岡　栄　四名　北海道

マウエス入植グァラナ栽培のため、第一次四十九名、第二次六十二名、第三次八名、合計百十九名の日本人が移住し、開拓事業に精根を傾けながら子弟の教育に心血を注いだ。現存する人はすでに少なくなった。

かくして植民は、マウエス町上流五十キロメートル地点（コロコロ村）より下流に向かって、二百メートルを一ロッテ（耕地）として配耕され、各自グァラナ栽培に取りかかったのである。

以下、年月を迫って会社、植民地に起きた様々な出来事を記したい。

一九二九年十一月　沢柳専務は大石夫妻、鈴木茂、松本武彦、永井すえ、樫村等と同伴現地社員補充会社の仕事を見て帰国、会社が百町歩の伐採をしつつあった時に第一回移民到着（一九三〇年一月）。

一九三〇年五月　大石退社、対岸に移転。同年七月沢柳専務、第二回移民と共にマウエス到着。大石と懇談するも、その内容を知る者はおらず、良きように取り計らうと言い、三石氏を責任者として帰国。

一九三〇年八月　上塚司、粟津金六来訪。会社は収容所、病院建設、同年十二月、植民地の家長と三石と折衝善後策を研究、会社には資金なし、仕事せず、社員や植民者は四散。

一九三三年三月　三石氏退社し久保田氏のみ残る。

現在も賑わうマウエスの船着き場（1999年 中野氏撮影）

日本外務省よりヤンマー四馬力、手押し精米機、脱穀機、計十台の寄贈を受け、一九三三年一月植民大会を開き、善後策、子弟の教育問題等について意見交換をし、日本人会、学校青年団が発足した。同年五月には林大使他二名が来訪され、マウエス町の有力者を招待して会

食した。久保田氏も会社を退き友人の家に寄食しており、氏の発案により各自耕地の登記をした。

退耕者が目立つ一九三七年には有志四名がパリンチンスヘジュートの視察に出張する。

一九三三年　マラリアが大流行。アマゾニア産業研究所と合併し、モーター船で、解体した家をアマゾニア産業研究所に運ぶ。

残るは病院で、後である人が処理したと聞く。

一九四五年　日本人移住者は敵国人となり、財産を没収され各自ジュート栽培に四散し、マウエス植民地に残る者は一人もいなくなりアマゾン初期移民はここに消滅したのである。

・白柳敏男自書

自作農の次男として生まれた私は、一九二八年当時（昭和三年農学校三年時代）農村のあまりにも深刻な疲弊を見て大いに憂慮した。私のような次男が日本にいるということは、なんだか邪魔者ではないかと密に思っていた。事実日本では国を挙げての海外移住を奨励していた全盛期であった。一町歩足らずの自作農から分家しても、それで食べていけるのだろうか等考えていた矢先、海外興業株式会社の海外事情を知らせる映画が村の小学校で上映され、それを見た私は海外に出ることを真剣に考えるようになった。そんな時、小生の村に日本力行会があることを知った。その力行会支部に行き、力行世界を読みふけったのである。力行会は一九〇〇年（明治三十三年）島貫兵大夫牧

師により設立され日本民族霊園救済が目的で、その事業の一環として海外学校を建てて移民の指導者を養成し、月刊誌「力行世界」を発行した。それを見ると大体植民地の事情が分かるので、それを借りて読み、また、支部の集会にも出席し一驚したのは、彼らが皆クリスチャンであったことである。彼らの激烈なる祈りと疲弊した日本を救うのは、海外移住の他になしと同調したのである。

一九二九年（昭和四年）　二月のある日、校長に呼ばれ、内山健吉（同窓生）　の親書を見せられた。手紙には同窓生で海外移住を志す者なきか等、それを知った小生は内山と面談することに決め、氏の住む川崎市へ行き懇談した。その結果アマゾンにて共同のグァラナ栽培をすることになった。また、野沢暁という隣村の青年も同行することになった。

農学校卒業後、先生の要望により六月まで母校で養蚕助手として奉仕した。内山はアマゾン興業株式会社の株主　（五十株）で、私たち三人の共同事業ということで登記所を通じて完全な契約書を作成した。渡航は十月と決まったが期限が三ヶ月以上あるので、助手を辞職後二ヶ月間浜松の聖隷農場に入り、大野耕二、長谷川保の薫陶を受けた。

一九二九年十月十六日神戸発のさんとす丸で翌年一月二日マウエス着の四十九名の友人と共に、マウェスの地に開拓の第一歩を踏み出したのである。会社は前年百町歩を伐採してグァラナ定植中、移民が到着した。移民はすぐ米を播種、会社は上流五十キロメートルの地点、コロコロ村の下流二百メートルを一ロッテとして移住者に分譲したが、

内山の土地は地形が悪く、氏はやむなく会社より下流一キロメートルの地点に現地人より土地を購入し、数人の土人を使用し伐採、住居建築が始まった。

九月に山焼きをしたが半焼きで、やっと五町歩を整地してグァラナを定植した。間作として米を播種、この時期より日雇いは一人も使用せず、内山の自力主義で、限られた資本を後日のために用意した。

この時期には、土曜日の夜には必ず野沢と二人で投網を持って夜打ちに行き、二百～三百匹の雑魚を捕るので食料には事欠かなかった。米も収穫二十俵、その後すぐマンジョカを植え、鶏も二十羽程飼い、卵を生産した。内山は、その後は伐採もせずにひたすらグァラナを手入れして、その生育を待っていたが、それは大きな誤算であった。マンジョカは出来たが米に事欠くようになったようである。その三年間、グアラナ定植後は土人を一人も使わず、小生等三人の労力のみであった。

第一契約の三年が過ぎた。必要な施設はすべて完備した。待ちに待ったグァラナも花を付けたが収穫は僅かで、野沢と相談して独立することに決め、内山に話すと承託した。五百ミル戴く（日当五ミル時代）、手持ち百三十円の金も半減し、労働服他、地下足袋は全部使い果たし、裸足で仕事をしていた。労働服はメリケン袋、炊事用具は会社の久保田から借りた。山刀も斧も借りた。七十三ミルで三人乗りのカノアを買い、すぐ植民地に行き、小島五三の家に寄食、内山が捨てたロッテ二町歩を伐採したが山焼きに失敗、一町歩から三十俵の米を収穫した。

この年に二十俵、植民四人で四トンをアマゾニア産業に売却し、一俵十七ミル売り三百七十ミルの金も入ったので、脱耕者のロッテをグアラナ六百本、マンジョカ二反の植え付けと共に百五十ミルで買い、一夜にして一般植民と肩を並べるようになったのである。野沢は私よりもまだ条件の良い所へ移転した。

私は、こうしてこの年（一九四五年）この土地に家を建て、一町歩の伐採をしてグァラナを定植、米を植え付け、日雇い人夫を一人も使わず、すべて自力で米の収穫後はマンジョカを植えたが、一九四七年に襲ったマラリアにより、この懐かしい耕地も他人に売りジュート栽培に出たのである。こうした中にあって私は瓦の家を建てた。そこに永住を決心していたからである。この時期には小売買いもし、パウローザも採り、グアラナ、ファリーニヤも出たし一人では多少余裕ある生活になった。カノアを三艘作ったのもこの時期である。その翌年に開いた土地からは、米一俵も取れなかった。イラウーナの害やマラリアで鳥追いが出来なかったのは私だけではなかった。当時、毎月巡回診察に来られていた戸田ドトールの奨めにより、私一人にあらず植民者の大部分はジュート栽培に移動するのであるが、グァラナの収穫は植民地に残る伊藤氏に歩合で頼み、大野氏とジュート共同栽培が始まった。最初の年はマラリアのため仕事も出来ず、そんな時、戸田ドトールの奨めにより、プラスモキーナを十二本続けて注射。このおかげで熱も出ずマラリアは完治した。

この年、十町歩より十五トンのジュートの収穫があり、上成績であったが農具等の支払いが多く残金は少なかった。翌年共同続く大野

氏は実直勤勉家である現地人と結婚して三人の子供をもうけだ。私もこの年にはマラリアも治ったので十分働くことが出来た。ジュート十四トンの大部分は一等品で、当時アマゾニア産業研究所ではジュートの格付けをして受け取っていた。この時期には、アマ産より前借りして仕事をしていた。現金三十五コントス、大野君と別れ大河に出る。イタピランガ郡レブジョン土地主と三人共同、この土地はこの地方の商人と話し、前借り十町歩の伐採をした。ジュートは良く出来たが労働者不足で失敗、やっと借金を返した。私は所持金も少なくなったのでラーモスに帰りファゼンジーニヤに落ち着くことになった。十町歩を伐採したが、山焼きが悪く失敗であった。友人の薦めにより結婚、持参金なし。相川氏と大江に出んと仕事を始めたが、友の薦めによりここに残ることに決めた。ジュート栽培に出て初めて一人になった。二年も続く失敗に、一つには土地を変えたことが原因ではなかったかと思っている。

マウエス市内のゴミ箱はグァラナの実が模られている。(1999年 中野氏撮影)

この後、一人になり堅実に仕事を始めた。不焼のバルゼアの一番良い土地に今一度テルサードを入れてジュート殻を積み、約一町歩、九月に火をつけたら見事に焼けた。後片付けもすることなく五日でジュートを播き終えた。今年はほとんど私一人だけで二トンのジュートを収穫した。アルキメデス五馬力の船外モーターを購入した。

大東亜戦争が始まり、日本人はすべて軟禁されたので約二年間思うように仕事も出来ず、この仕事を縮めて生活したが、この翌年もジュートが良く出来、この土地ファゼンジーニャを買うことにした。この土地にはシリンガ（ゴムの木）が三百本、カスターニヤが年八十バリーガ、船の材料になるイタウーバ材等があることが分かったので、二十コントス三年払いで地主と契約し買うことにした。商売も上々、シリンガの液を取れば生活できる好条件の土地である。この年には、船外モーターアルキメデス二馬力を買い、商売にジュート、そして船大工等生活もだんだん楽になったが、子供の教育のためマウエス町に家内、義弟、佐藤の子供五人の計十一人を移し通学させた。毎月一回レガトンをしながらマウエスへ食料を運ぶ。マウエスでは食料品やバナナ等を売り、家内は家計を助けてくれた。この時には牛も飼い仕事も順調であったのだが、そんな時に大病にかかる。

アマゾン産業のパリンチンスの戸田医師に六ヵ月の入院生活、全財産を使い果たし二百八十コントスと言う大金の借金が残った。当時ボリンデモーターが六十コントスの時代である。借金を払うのに三年かかり、払えたので商人サバ・アラウージョの好意により古いモーターを借金の形に受け取ってくれた。時は過ぎて一九七〇年には進学のため

末娘までマナオスに出ることになったので、義弟の佐藤と相談して各自マナオスに移転することに決めた。内山薬局で働いていた長男と相談してエドカンドに古い家を買い、そこに子供たちを集め雑貨商を開き、子供も共働きしながら通学した。そんな時、長女はセアラの進学校にあったが、この土地の人と結婚し、続いて長男、次女と二年の間に結婚、独立した。時は流れて長男は独立し薬局を経営していたが、支店を出すと言うので、雑貨商をたたみこの手伝いをすることになって現在に至るのである。

〔執筆者略歴〕

三木祥弘（みきよしひろ）

一九三一年、兵庫県に生まれる。

一九五五年一月、パラ州ベルテーラゴム園に雇用移民として入植し、同年九月、ロライマ州タイアーノ（コロネルモッタ）移住地へ転住。一九七六年五月、アマゾナス州エフィジェニオ・サーレス移住地に再転住し、現在に至る。エフィジェニオ・サーレス自治会長、西部アマゾン日伯協会副会長、事務局長。

アマゾン生活での思い出

白柳　敏男

・アマゾン河を上る

一九二九年十二月二十日、アマゾン興業株式会社（アマ興）第一回植民は、ベレーンに到着、南米拓殖株式会社（南拓）　の収容所に四日間入所し、南拓二回植民と別れてアマ興社員唐木氏のチャーターした蒸気船ビクトリア号に乗船してアマゾン河を逆航し、パラー州を通り、アマゾナス州マウエスのアマ興植民地に向かったのである。

朝、乗船し、サンタレン出身の某上院議員が子女同伴で便乗。出港しばらく後に昼食があり、船の中央に大テーブルを用意し、上院議員を上席に一同着席、三枚の皿が重ねられてあった。ガルフォ（フォーク）、ファカ　（ナイフ）、スプーン、ナフキン、銀製の水容器、花形に切った大マモン　（パパイヤ）、ソパ　（スープ）　が出され、音楽の吹奏があった。皆は上院議員を見習って食事をとり、昼食が終わって船の下へ行ってみると、四つ割の牛の生肉が吊り下がっていた。鶏、羊も一頭つないである。

これらをその都度料理して旅を続けるのである。九州大のマラジョウ島は河霞のため見えず、海としか思えなかった。大河、牧場、やしぶきの家。河岸には野猿、オオム、水鳥、大魚が姿を現す。河岸の太古の森、その雄大さに見とれていた。

上院議員の娘は盛んに私たちに話し掛けるが、全然分からない。や

がて指を出して、一、二、三と数え始め、日本語でなんと言うのか聞いてきたようだった。そこで私は指を折りながら、一、二、三と九まで言うと、彼女は変な顔をするので、後で唐木氏に聞いてみると、九の意味が分かった。

二日目、サンタレンで上院議員一同は下船した。船は所々に寄って、鶏卵、魚を積みつつの旅で、オビドスは夜のうちに通過したらしく分からなかった。そして七日後、目的地マウエスに到着した。

古い建物、土壁の家が後ろ向きに建っている岸では、人が手を振りながら往かい、岸には二十隻から三十隻のカノア（カヌー）と、五、六隻のパテロン（大舟）が着けられていた。一九三〇年一月二日、マウェスの町をさらに上り、アマ興直営農場に十時に着いた。河岸は黄土の断崖で、会社はその低地の所に位置し、そこには三軒の家があり十数人の人が盛んに手を振る岸には、モーター付きカノアが一隻あるものの、桟橋はなかった。昼食をとり、下船が始まると髭を生やした小柄な人が迎えに来た。すぐに大石小作だと分かった。会社にいる日雇い人夫と共に各自の荷物を担ぎ、やしぶきの収容所に入った時はすでに夕方で、ビクトリア号は汽笛を鳴らして去っていった。収容所は五メートル四方の部屋一つで、前に小さな炊事場があり、植民者は荷物の整理等で一睡も出来なかったことを覚えている。

・あわや大蛇に

それは私がピラルク（アマゾンの大魚を塩漬けにして乾かして保存食となす、アマゾン無二の産物）を買いに行った時の夜の出来事で

ある。この年（一九五七年）は私のアマゾン入植以来もっともひどいセッカ（早魃）の年であった。私の住むアマゾナス州マウエス郡ラーモス大河畔ファゼンジーニャから四キロ上流の所より、またカナル（水路）を三キロ遡るとアロイスザールと言うマウエス郡随一のピラルク漁場があるが、セッカのため水路は干上がり、カノアがなんとか通れるくらいだったので、この漁場付近に住む住人は日用品、特に一番必要な塩が品切れとなりたくさん捕れるピラルクも塩漬けが出来なくなった。これを見た私は、カノアでピラルク買いを始めた。当時ピラルクはキロあたり二百レースしか利益がなかったが、日に二百キロも買えば四十ミル（当時の日当五ミル）の利益があり、この利益金目当てにがんばったのである。

ある十一月の日曜日の朝二時に塩四俵、煙草一キロ、酒五本、手秤、金少々、全荷物を積み、カフェーを飲み出発した。その時、東方で雷鳴雷光がしていた。私が住んでいる場所から上流へ二キロくらいの所に、河岸が水流のために陥没して逆流している所があった。昔からここには大蛇が住むとの噂があった。

私はこの逆流を利用して何度も一休みするのだが、この時は雷雨となり暴風となったので、休まずヘモ（耀）を持ち、漕ごうとしたが、腕に力がなく体は骨を抜かれたようにだるかった。

どうしてこんなことになったのか、力無い腕をさすりながら、やっと五百メートル漕いだところで休むことにした。ちょうどそこは私の顧客オタビオと言うインヂオの家の前で、直径一メートル以上ある立ち木を利用した大きな桟橋があった。私はこの桟橋の後ろにカノアを引

きいれジャッパ　（椰子の葉で作った日よけ、雨除け）　の下で休んだ。物凄い雷光と暴風である。力無い身体をいたわりつつ、いることしばし四時頃にもなっただろうか、そんな時一瞬大波が桟橋を超え、カノアに半分程水が入った。風は強いがこんな大波が来るはずがない。ランバリーニヤ　（ランプ）は消え、真っ暗闇の中クーヤ（アマゾンのひょうたん、お椀の代わりに使われる）　を手探りで探す。カノアの水を出しながらこんなことを考えていた。やっと水を出し終わりランバリーニヤに火をともし、またジャッパの下に入り休んだ。暴風は過ぎ、雨も小降りとなったが体に力のないことには変わりない。そんな時、また雷光の明かりで私のいる下十メートルの所に黒い流木の如く五メートルくらいの浮いた物が見え、私のカノアでも流れているのかと思った。雨は止み、河は静かなそんな時、また大波が来た。それと同時に物凄い悪臭がし、私は朝飲んだカフェーを吐いてしまった。体はますます弱る一方で、岸に逃げようとするが立つことも出来ない。その時、私は始めて気が付いた。これはヘビの仕業である。ヘビは獲物を見つけると毒を吹きかけて麻痺させてからゆっくりと飲み込むとのことである。救いを求めるべく大声で家主の名、オタビオを三回続けて呼んだ。オタビオはすぐに義弟を伴って河岸を下って来て、二人で私を引きずるように引き上げて家に着き、私を吊り床に寝かせてくれた。時はすでに五時を回っており、彼の妻がカフェーを飲めと持ってきてくれた。私はその瞬間ひょいと立ち上がり、目が覚めた如くそのカフェーを受け取りご馳走になった。体は元どおりになっていた。この様子を見て、皆は一体どうしたことかと質問したので、

私はこの出来事について詳しく話をした。彼等はすぐに、それは大蛇の仕業であると言って疑わなかった。九死に一生を得たとはこんなことである。暴風後のラーモス河は静かに流れ、何事もなかったかのように私は三時間カノアを漕ぎ、漁場に着いて二百キロ余りのピラルクを買い、無事家に帰りついたのである。

・大鰐を捕る

雨期になれば私の住んでいたバルゼア（低地）は水没して漁場となるので、魚が良く釣れ食料に事欠くことはない。四月になれば、タンパキ釣りが始まる。タンバキは主に水中林の木の実を食べるので、木の実の落ちる水中五～六寸の所に釣り糸を吊るすのである。カジュラーナと言うタンバキの好きな木の実を見つけた私は、夕方針を仕掛けて翌朝行ってみると大きなタンバキが掛かっていた。その後、二、三日同じように仕掛けるのだが掛からない。疑問に思い針を調べると、魚が掛かった跡が歴然としている。インヂオに話すと鰐が盗むのだと言う。それで今度は鰐釣りが始まった。当時、鰐皮は相当な値がしていたけれども鰐釣りは始めてで、インヂオに教わりながら針は零番の一番大型、釣り糸は小指の太さで長さ四メートルのものが出来上がったので、夕方タンパキの腸を餌にしてカジュラーナの木に吊るしておいた。翌朝行ってみると綱が水中に引っ張り込まれている。さては掛かったなと網を引いてみたが動かない。

力いっぱい引くとゆっくり上がってきた。丸太のような鰐と分かったけれども、私は鰐を捕った経験がないのでインヂオに頼るしかない。

隣に三人の若者がいるので頼みに行った。彼等はすぐにモリを持って応援に来た。私には銃を持って行けと言う。

用意して現場に行くとインヂオたちは釣り糸を引き、獲物のいる所をモリで探って、ここだと思う所にモリを打った。見事に命中し、水底で大暴れしている鰐との戦いである。カノアで引いては危険なので、カジュラーナの大枝の上に網を通し、脇にあった倒木に二人がかりで引いたのだがびくともしなかった。

やむなく、他の一人が木に登り、三人の力で引くとやっと頭を出した。インヂオは私に撃てと言う。鰐を撃つのは目か頭の付け根、鰐は暴れつづけるが人が近くにいるので流れ弾にでも当たったら大変だと思い、私は鰐の後ろにカノアを廻し、静まるのを待った。銃は絶えず鰐の首根を狙っている。やや静かになったので撃った。命中し、鰐は大口を開けて木に噛みつき暴れたが、ついに弱って静かになった。死んだのである。今度は岸まで運ぶのが一仕事で、カノアには鰐を乗せる余裕がない。カノアにくくりつけて引きずりながら漕ぎ、やっとのことで岸に着いた時は十時だった。実に三時間も戦ったのである。四人で引き上げて計ってみたら、なんと四メートルもあり、アマゾン生活の中でこんな大鰐を見たのは初めてであった。こうしてタンバキを盗んだ鰐を撃ち捕ったのである。

・マラリアの惨事

一九三七年マウエス郡一帯にマラリアが大流行を来たし、一人として履病せざるものなしとまで言われた。マラリアは一日、二日、不定熱

と三種類あり、不定熱にかかると治療が難しい。長引くと黄疸を誘発して死に至り、当時大部分の人は最後には黄疸になって死亡した。植民者はお互いに手持ちのキニーネを分け合って飲み、最後にはマウェスの町には薬もなくなった。やむなくキーナと言う薬草を煎じて飲むのであるが、これもなくなり、カラパナウーバの木の皮を、一夜、水に浸して朝コップに入れて飲んで気休めとしていた。

そんなある日、私は熱に侵され自分の太股に注射針を刺したまま気を失い、気が付いた時はまだ針が刺さったままであった。働くことも出来ず、マンジョカ不足を来した。私は幸い毎年一町歩の新耕地を拓くので米にもマンジョカにも不足はなかったが、植民者には食うに事欠く人も出て、米をある人に貸したことも覚えている。私の持っているマンジョカ目当てにファリーニヤ作りが五家族、小さい小屋に重なり合って寝ていた。彼等は、働ける者は食料を得るため狩猟に行く毎日であったが、これも病の者にはままならず、食物があれば一家のように共同生活をするのである。私も彼等のためにどれだけ助けられたか、彼等は実に人情深い人種である。

当時植民地を訪れた人たちにより邦人の惨事を知った日本政府は、多量の薬品と注射器を送ってくれた。そんな時、アマ興より戸田ドクターの巡回診察が始まり、十分な治療が出来たので私は命拾いしたのである。薬は現地の人にも分け、注射器を持って毎日のようにブラジル人に注射して歩いた。そんな時、私の家で三人のブラジル人が死亡した。大工道具を持っていた私は、棺作りをした。ある時は、皆病気

のために死に、棺も作れず吊床にくるんで葬るのがやっとのこともあった。その時、私の住む対岸にカマロンと言うインヂオ部落があり、マヌエルと言うブラジル人が住んでいた。彼の妻も子供も死に、最後に彼一人となっていた。ある日、隣人がカノアで彼の家の前を通るとウルブーがたくさんいるので変に思い入ってみると、マヌエルはすでに死亡しウルブーに食われていたのである。

・病魔との戦い

一九五三年、私はアマゾナス州マウェス郡ラーモス河畔に住んでいた。九月のある日、仕事中煙草に火を付けようとして指先に小さな火傷をしたが、気にも留めずにそのままマンジョカ植えをしたが、指先が痛むので見ると皮膚が破れていた。それが原因で六ヵ月もの入院生活をしようとも夢にも思わなかったのである。

その夜は指先の痛みにより、一睡もせず四十度とも思える熱が出始めた。大変喉が渇き、指が木のように腫れ、激痛がはしり紫色となった。三日目には手のひらまで腫れ上がった。これは普通ではないと気付いた私は、対岸に住むベルミットと言う田舎医者に頼み、診察を受けたら、彼は腫れ物を見るなり、このままでは大変なことになるので一刻も早くパリンチンスに行き、戸田医師の診察を受けるべきだと言われた。岩田氏のモーターをチャーターして付き添いを雇い、三十余時間の後、やっとパリンチンスのヴィラ・アマゾニアの戸田病院に着いた。食事は全然取れず、ただ喉の渇きのため水を飲むだけ、全身の間節が痛み、腫れが回り歩行も出来なくなった。熱のため意識は朦朧

とし、熱は四十二度（看護婦の話）もあったとのことだった。私を運んでくれた岩田氏一行は帰り、その後、私は戸田医師が持ってきた消毒薬一リットルを飲み、頭を壁に打ちつけて自殺を図ったことや、その夜、夜中に起きて裸で外に飛び出し、わめき回ったことも記憶にある。

幸いマウエス植民地時代の友人、河野氏（当時メカニコとしてアマ産で働いていた）の厚意により、すべて責任を持って私の看護を引き受けてくれ、彼の家に移ることになった。移るとすぐ指と手のひらの二個所を手術し、手術後は熱も下がり落ち着いたので、私は何とかこのことを家内に知らせようと思ったが、田舎住まいには何とも仕様がなかった。ちょうどその時大野氏（数年前のジュート栽培の協力者）の妻が見舞いに来てくれた。この便を利用して河野氏の代筆で家内に手紙を託した。

大野氏は二日がかりで手紙を届けてくれ、それを受け取った家内はすぐにすべてを用意して、手が離れない子供三人を連れてモーター船でアマ興病院に下ってきた。その後、左上腕、右脇下を手術し、すでに三ケ月になったので病院を移ることにした。

その数日後、家内の父、浅野氏と長男を連れて、佐藤氏のアウロラ号に便乗して見舞いに来てくれた。着いたその夜、浅野氏は脳溢血で倒れ、歩行も出来なくなった。三人の子供を抱えて二人の病人の世話をする家内はどんなに苦労をしただろうか。

五ヵ月後、四回目の手術をし、やっと歩行が出来食事もとれるようになった。持ち金も底をついたのであるが、友達の佐藤、山崎、ブラジ

ル人サバ・アラウージョ氏等の厚意により何不自由なく病院療養生活を終え、六ヶ月後に退院したのである。

・人の情けに泣く

パリンチンスより退院して家に帰ってみると、一町歩の伐採をしておいた所がジュタールとなっているので不思議に思って行ってみると、ジュートは二メートルにも伸びている。向こうの方で人の声がするので呼んでみると、ジュートの除草作業らしく三人のインヂオが来た。私を見て驚くやら、喜ぶやらで、すぐ家に帰り四方山話。この中の一人はマノエルと言う前から知っていた人で、実直で良く働き、計算も出来るインヂオには珍しい人である。彼は対岸のベルミットと言う人のセリンゲイロ（ゴム採取人）であるが、どうしてここにジュートを植えたのかと質問すると、ドナ・ローザ（家内のブラジル名）がパリンチンスに下る時、滞在が長引くかもしれないので山を焼いて利用すればと彼に言ったと。それでマヌエルは、友人を使ってジュートを植えたとのこと。私は家内にそんなことを言ったこともなく、また、思いもしなかった。すべてを忘れていた。

「セリンゲイロは午後暇になるので、この時間を利用し、あなたの日用品も必要だったのでそれを使い働いていた。私は日当は必要ですが、このジュタールはあなたの物です」と彼は言った。私はジュートが出来ているとは夢にも思っていなかったので、このジュートはマヌエルあなたの物だと互いに所有権を譲り合っていたが、彼はどうしても受け取ろうとせず、私が引き取ることにした。彼は前からその気

持ちだったらしく、働いた日数、使用した日用品等の帳面を持ってきたので、すべてを計算し、彼には正当な日当を払い、品物を使った分だけ差し引いた。一ブラジル人の私への金銭的利害を超えた暖かい好意に泣いた。

病気でヴィラ・アマゾニアに入院中、パリンチンスのサバアラウージョという商人の見舞いを受けた。彼とは一年余りの商業取引があった。私を見舞った彼は、私の窮状を知ったらしく、注文も頼みもしないのに品物、米一俵、砂糖一俵、ミルク、石油、缶詰などを私の部屋に運ばせ、その上三コントスの大金を無利子無期限で貸してくれた。いつ全快するか分からない私に、かくも温かい心尽くしをしてくれたことは死んでも忘れることが出来ない。

アマ興高拓生と同年の佐藤行雄という人がいた。彼は高拓一の行商人で私とも取引があった。彼は月に一度商売のため、必ずヴィラ・アマゾニアを通り、その都度私を見舞い必需品を貸してくれた。この人にも三コントスの現金を無利子、無期限で借りた。こうして温かい人たちの好意により長い入院生活が何不自由なく出来たのであるが、これらの人々の中ではすでに他界した人もあり、この面影は脳裏に焼き付いている。恩も出来ず永遠の別れとなったが、今私のできることと言ったら、これらの方々の名前を書き留め、この紙の朽ち果てるまで残しておくことであり、それが万分の一の恩とならんことを切に願うばかりである。

パリンチンス入院中の私の負債は百八十コントスという大金であったが、帰宅後受け取ったジュートの利益と入院前作り終えていた五ト

ン積みの船体があったので、これを売却して半分以上の負債を支払ったのであるが、残り半分は二年かかってやっと支払うことが出来た。

・偶感

アマゾン初期の移民は、パラー州の南拓（南米拓殖株式会社）より始まり、アマゾン河中流のアマゾナス州パリンチンス郡のアマ産（アマゾン産業研究所）と、アマゾナス州マウエス郡のアマ興（アマゾン興業株式会社）の三ヵ所である。南拓では、ある篤志家により十本の胡椒苗をインドより持ってきて、これを植え、一時は世界の三分の一の生産高を誇るまでにのし上がった。パリンチンスのアマ産にあっては、一篤農家尾山氏が、インドから持ってこられたジュートの種子の中から二本の新種を発見し、その種子を拡げブラジルの麻の自給を可能にする一大産業となした。アマゾン河畔の六千数百キロの範囲に住むブラジル人をもどれだけ裕福にしたか、その功績は絶大なるものがある。マウエス郡のアマ興のグァラナ栽培には何ら顕著なる功績はない。私はアマゾナス・マウェスに入植した第一回移民の一人であるが、人の成功、不成功はその人の努力のみにて決することは出来ない。すべては運命であると思われる。

アマゾン河畔にある田舎墓地の夏草の下に眠る友は廿指に余るだろうが、日本に帰国した友もある。あるいは世界の果てに生きしものもあろうが、私の知る限りその多くは若くして病魔と闘い、事成らずして逝きし者のみ、これらの友の面影は眼前に彷彿する。

白柳氏は、一九九四年三月二十日、八十四歳で他界されました。（本文は原文のまま掲載致しました。）

〔執筆者略歴〕

白柳敏男　（しろやなぎとしお）

一九一〇年、静岡県に生まれる。

一九二九年、アマゾン興業株式会社第一回移民として単身マウエスに移住。一九七〇年、マナオスに移転。一九九四年三月二十日、八十四歳で逝去。

海外植民学校
アマゾン開拓先発隊の懐古

海外植民学校交友会編

一九一八年、植民を目的とする人材養成のために、東京世田谷に「海外植民学校」を創立した校長である崎山比佐衛氏は、青山学院大学の神学部を卒業、一九一四年から二年間にわたり南米、北米を歴訪した。

海外植民学校は、一九二九年までに十一回の卒業生三百余人と関係者を含めて、約千三百人が海外で活躍している。崎山校長は一九二七年五十四歳の時、再度南米に渡り、一九二八年七月にマウエスを訪れた。マウエスがグァラナの特産地であることを知っての訪問であっ

た。マウエスは風光明媚な土地であり、ここに移住者を入植させ、グァラナを栽培、収穫した実を加工して販売する構想を抱いて日本に帰国した。

崎山氏は帰国後の一九二九年に海外植民学校の卒業生である伊藤松之助氏をマウエスの土地選定のために派遣した。一九三〇年七月、伊藤氏の選定した土地登記のため、海外植民学校主事の今井修一氏が同校卒業生である宇野丹治と共にマウエスに入り、五百町歩の土地の登記をおこなった。

一九三二年九月、海外植民学校分校設立のため、崎山校長自ら一行十名と共にマウエスに移住した。崎山校長夫妻は校舎建設の協力を求めるために一九三九年四月から翌年四月まで、南伯、アルゼンチンを訪れマウエスに帰着した。ところが帰ってみると健康地と安心していたマウエスがマラリアの発生により、留守番をしていた人たちもほとんどマラリアにかかっている状態であった。崎山校長も旅から帰って二ヶ月目にかかり、一九四一年七月二十四日、享年六十七歳でその生涯を閉じた。

アマゾン興業、大石小作氏の耕地、そして海外植民学校の耕地は現地人の耕作地となったり、再生林の森になっている。

・アマゾン開拓先発隊の懐古

（一九五八年発行の海外植民学校校友会誌より抜粋）

水と緑の天地アマゾンに三十年、植民学校分校建設の先駆として、単身移住し、崎山校長入植の基盤を築いた伊藤松之助氏の手記からの

抜粋である。

鰐と大蛇の水境、サルとインヂオの住む密林に分け入ってゴム液の採取、これが一般世人のアマゾンに対する認識であり、知識であると言っても過言ではあるまい。私にとっては、植民学校と世田谷を切り離しては考えられないように、崎山先生とマウエスとは「心同体となったのである。

マウエスは風光明媚の地、減水期ともなれば、浜の真砂にも劣らぬ、雪をも凌ぐ白砂が出て河岸を覆い、一層その美を増すのである。絶対の健康地と先生が太鼓判を押したマウエスも一九三六年来マラリアの発生するところとなり、先生はアルゼンチンより帰着後まもなくマラリアにかかり、教会堂建設をも見ずして逝いたのである。交友としての我々に求遠のゆかりを持つに至ったマウエスについて、私は三十年の記憶を辿り、記録（日記）をめくり、先生と私、マウエスと私、といった形で書いてみたいと思う。もとより不才の私、ミミズの戯言にも及ばぬ夢のうわ言に終わるかもしれないが、事実は事実で天地神明に恥ざるところ、これをなんと言えども否定することはできないであろう。殊に、先生と私の関係については、あくまで事実の記録であって、先生への讃美歌でないことをお断りしておく。また、これは創作ではないので、勢い所々筆を抜かねばならぬところもあると言った訳で、その辺は諸兄の洞察によって自ら明白となるであろう。

私が先生の命を受けて一人マウエスにやって来たのは、一九二九年の一月であった。当時マウエスには、アマ輿の一行が仕事を始めていた。大石小作氏を支配人として、他に六名の青年が彼を助け、内三名

は校友で、唐木、羽野、尾崎の三君であった。先生からマウエス郡長に宛てた紹介状を貰って来たので、同氏に私の来意を告げ、当分同氏宅に厄介になることにし、大石氏に敬意を表しに行った。一行は、前年九月について、時期としては遅れていたが、百町歩を伐ってのけ、河岸に小屋を建て、名実ともに戦争のような奮闘をしていた。私に対する先生の命は、土地の獲得、グァラナ栽培習得であったので、先生が大石氏に依頼してあった同件について伺ったのみで、私については何もお願いしなかったと言うのは、仕事はじめの氏の許にあっては、グァラナ栽培の習得不可であったからである。

私は郡長レオン氏に頼んで、既成に就労すべく、グァラナ耕地と名の付く唯一のイガッポー耕地に住み込んだのであったが、大石氏が「伊藤と言う奴は生意気な野郎だ」と校友に当て付けて怒ったと後で知った。　土地の問題については、いろいろとレオン氏から聞いた。先生が欲した土地は、町の対岸でラギーニョから上であった。ちょうどアマ輿の真正面であった。同地帯には、六、七家族の先住者がおり、これを入手するのは困難であるが、そこを過ぎればリモン河まで誰もおらず、これが最適の土地であるとレオン氏は説明してくれた。私は早速先生にその旨を報告した。折り返し「よろしく頼む」　の日本語電報を受けた私は、翌日大石氏を訪問し手続き進行をお願いして、万が一崎山先生が来ないようなことがあれば、自分たちの面目にかかる問題であるから、この件については積極的斡旋はこころ良しとはしないと言うので、彼等の誠意なきことを見た私は同件について手を切り、先生が託しておいた土地獲得費一コントを受け取って帰った。日

曜を待ってレオン氏を訪ね、同氏を煩わして同氏推薦の土地を見に行き、一コントを氏に渡し手続き方を依頼した。同氏は快諾してくれた。こうして土地問題が安定したので気が楽になり、グァラナザールの除草に専念していた。イガツポーに突然山内君が訪ねて来た。夢かと疑うような会合であった。同君は卒業後間もなく、さんとす丸処女航海で渡伯の折り、私が渡航費稼ぎに時事新報の地方専売店設置員となって相馬の中村にいた時、途中下車して訪ねてくれたことがあった。横浜まで見送りに行った私は、さんとす丸船上で別れの握手をして以来の会合なので、非常に懐かしく語り明かしたように覚えている。私がマウエスに来たことについては、同君が考えていたような情実にとらわれていたものではないことを知った彼は、多いに共鳴しアマゾン旅行予定を変えて、共に働くことを約束した。

風光明媚なマウエス河を望む（1999年 中野氏撮影）

翌日、支配人にその旨を告げ、私の住み込みを止めて二人で自炊して除草請け負いを始めた。働いてみると収入が多いので、インヂオを一人雇い、サンパウロで引いたエンシャーダの腕に自信を持たせ、崎山耕地伐採費を稼ぐべく奮闘していたある日、インヂオがカフェーを作っていた火の不注意で、グァラナザールに燃え広がり、除草未済の大半を焼いてしまった。火消しに終日働いてへとへとになり、山内君と二人で河岸に出て、話す元気もなく地上に仰向けとなり、空に輝く星を見ながら、この疲れきった体が自分の体力で回復するであろうかと思ったほど五体の血が干上がってしまったような感じであった。そんなことでせっかく働いた金も手に入らず、イガッポーを出て無一文で崎山耕地の伐採を始めた。ダビデと言う老夫婦が最後の住人で、テーラ・プレッタは彼の所有であると言っていたテーラ・プレッタと言えばアマゾン地方では、テーラ・フィルメの最肥沃の土地で（これはインヂオが住んだ跡で、永年の耕作により黒土と化したものである）我々としては、それを手に入れたかったので、ダビデ老人に頼んで書類を見せてもらった。彼の所有は前面五百メートルとなっており、テーラ・プレッタは完全に彼の所有外であることが解った。そこで、二人で相談の上、ここを本拠として仕事を始めた。ここが先生一家がマウエスに着いて、彼等の土地で初夜の夢を結んだ所であり、今宵、君子未亡人が女手一つで守っている所である。

ダビデの家を越して三軒目にアンナと言う女主人が住んでおり、そこのバラックが空いていたので借り、ここから毎朝河岸の白砂を踏んで通った。マウエス河は町からリモン河に向かって進むので、乾いた

砂をギューギュー踏み、朝の柔らかい太陽の光に目を細めながら歩む我等の意気は昂然たるものだった。

ここで一言しておく。一文無しでイガッポーを出た我等がどのようにして仕事を進めたか。そこは山内君のことである、町の商人から伐採用具と食費を出させたのである。山刈りを終わり、バラックを建て、山内君は財布を叩き、私は文無しでインヂオが欲しがっていた赤毛布を渡し、ともかく労働者の支払いを済ませた。崎山一家を迎えるべく大きなバラックを建て、アンナの所からここに移った。

当時、アマ興を始め、一般入植者大石氏の如き頑鉄の人でさえ、バラックの新築祝として近所の住民を集め、ダンス会を開くのが習慣になっていた。私たちも例に漏れずアマ興社員を始め、近所の人々、手伝ってくれた人々を招待した。

新バラックに移り、米播きには時期が早かったので、その間、アマ興入植者のバラック建てを請け負ったり、パーリヤを採ったりして食費を稼いだ。米を作れとの先生の命があったので一町歩播き、四十俵収穫した。米の収穫後、山内君は結婚しラモスに出て商売を始めた。レガトンで儲けて今日の大成を見るに至った。山内君が出て一人となり、エンシャーダを引きながら走馬灯の如く私の頭を過ぎるものは、先生は果たして来るであろうか。来るとすればいつ頃か、そのことだけが行き来して一日を過ごすようになった。夜になると先生宛てに手紙を書くのが日課であった。先生からも絶えず音信があった。学校の経営難を訴え、諸先生方の給料支払いも滞りがちで心は矢の如くマウエスに走れども、現在のところ、いつ行けるか見通しがつかないと

言って来た。先生は手紙の中にいつでもマウエスを祝し、耕地の上に、私の上に、主の恵み豊かならんことを祈ると書くのを忘れなかった。

先生の渡伯日時不確定の報は、私にとって大きなショックであった。それは同盟国から突然国交断絶状を叩きつけられたも同然であった。と言うのは、モヂアナのフォルタレーザでこちらに来ることを引き受けた時、ただ一つ私は条件をつけた。それは先生が再渡伯後、私が帰国することであった。先生は快諾した。日本に帰って一年位で一家をまとめて来ると約束した。

私の帰国は、国を出る時の両親との約束を果たすための、私の一身上のこともあった。

山内君の協力を得て、山を刈りバラックを建て、米を作って一日千秋の思いで先生を待っていた私には「とんぼ釣り今日はどこまで行ったやら」と母の心境が同感できた。曇りがちな心を抱えて過ごす日が多くなった。ある日、今井先生が宇野君を同伴してやって来た。今井先生は、先生の心に変わりはないが、周囲の事情がそれを許さず、現在のところいつ渡伯できるかはっきりしない旨を告げ、アマゾン分校設置運動について土地所有権が必要なので、その手続き方々マウエス視察に来たと語った。それで早速町に行き、登記所を訪ねて地権を取った。先生の委任状がないので、不在地主の登記不可とあって、名義は今井修一となっていたが、その後名義変更をしたか否かは私の知るところではない。土地名はボン・ジェズーズである。

在学当時の今井先生の印象は、いつもコテコテとポマードをつけた

髪をきちんと分けて、後方に二、三本の後れ毛を立て、凡帳面な表情をし、木で鼻をかんだような感じであったが、二十日余り寝食を共にして見ると、それは反対で情実豊かな先生であった。気をひいてみると、自分はマウエスに来る意志はないと正直なことを言った。君らのような感激、情熱は自分には起きないと言った。

使命を果たした今井先生は、宇野君を残してマナオスを見て南下すべく別れていった。別れるに先立って、宇野君をここに置いてもらえるだろうかと言うので、私は無給で働くのならとの条件のもとに引き受けた。私にとっては口が一つ増えた訳である。

宇野君が慣れるのを待って私はアマ興に日給稼ぎに行き、一週間働いて帰ってみると、彼はムクインにやられ夜も眠れないと言っていた。私はアマゾンに来て第一に受ける洗礼で、そのうちに慣れると彼に言った。慣れるということは動作においては、その熟練、上達であり、精神的には事に当たっての感情麻痺である。水中に糞をたれ尿を放ち、その水を飲むと言ったら諸兄は驚くであろう。好んで水中に糞をする訳ではない。横断するのに一時間半もかかるのであるから、腹の調子の悪い時はどうにもならぬ。こちらに来た当時、一緒にカノアを漕いでいた土人が川に小便をし、少し過ぎて用水を汲んで飲むのを見て変な感じがした。しかし、考えてみれば毎日飲んでいる水は用水を水瓶に汲んでいるのである。とは思いながらも、直接川水を汲んで飲む気にはなれず、渇きをしのんで家に着いてから水瓶の水を飲むと言ったものだが、それもいつ慣れるともなく慣れるのである。用水を飲んで生活していながら、汚物は一切川に投げ捨てる。水は三寸流れ

ば清まるか。ムクインに負けると炎症を起こしてフェリーダ（傷）になる。

宇野君は詩人的な男で、日曜にはいろいろ語りながら過ごした。軍隊生活に入った新兵古兵の感じで、話している中にも私のほうがアマゾンの水を多く飲んでいると思われる点が感じられた。私は、次の週働くべく月曜の未明にカノアを仕立ててアマ興に行った。マナオス発信で今井先生から手紙が来ていた。

滞在中の謝意と私の結婚問題であった。

この辺でマウエスの自然に触れておこう。当地方は雨期と乾期、増水期と減水期とに分かれている。十一月から四月が雨期で、もっとも雨の多いのは二月か三月である。バイショ・アマゾナスとアルト・アマゾナスによって差はある。ソリモンエス、マデイラ河は四月半ばに減水し始める。当地方は六月半ばから始まり、十月末まで減水する。減水期から増水期に入るのは覿面で、減水が止まったと思う瞬間増水してくる。自然美はなんと言っても乾燥期で、六、七月ともなれば分校地側からアマ興岸に向け、風に抗して淡黄色の小さな蝶が、ひらりひらりと、それは一つの乱れもなく一斉に対岸目指して飛んでいく。これが終日いつ果てるともなく、ある期間毎日続くのである。実に無数である。無数と言う言葉はこんな状態から生まれたのであろう。

月の美はやはり八月、満月時は河岸に下りて、この頃から現れてくる岩に腰掛けて月見をする。空に一点の曇りなく、星の光も消えるような月光が水面に輝く、夜は風がなくて、さざ波に映える月影、金波銀波、万金に勝る眺めである。昼は九時頃から風が出て、対岸から吹

いてくる。波は終日岸辺を洗う。マウエスに来ての当時は、このゴロゴロという音がカーマ（ベッド）に横になっても耳に残る。赤道直下であるので、日光の直射は強く、小蟻を巣から取って放り出せば見ている間に焼け死ぬほどである。目陰に入れば実に涼しい。この風は自然の大扇風機で、強い日光の直射を浴びて働くものを潤すのである。水また水のアマゾンは河また河で湖水も多く従って魚が豊富だ。魚類においては世界第一と言われるが、日常の食膳に供せられるのは小範囲で、ジャラキ、タンパキ、ツクナレ、アカラ等である。

商品価値のある物では、ピラルクが一位を占める。ピラニヤは種類が多くピラニヤ・プレッタはその最大なもので、歯は鋭く、たまには釣り針を食い切るほどである。ベスカにも種々の方法があり、主に呼び釣りである。ピラニヤは釣り竿でゴボゴボと音を立ててピラニヤを呼ぶ。タンパキは木の実を食う魚で、増水期に水中林に水が侵入してくると、ボンガという物で木の実が水中に落ちる音を真似して釣る。ツクナレは鮎式で餌のない針に赤白の布をつけ、なぎなた流に水面を撫でると小魚と間違い飛びついてくる。

ピラルクは肺を有し時々浮かび上がって呼吸をするが、それは瞬間のことであり、魚体を見ることはほとんどない。土人は水の動きを見て見当をつけ、投槍の先に銛をつけ、銛には紐をつけ、それに浮きをつけたもので射止める。大なる物は骨抜きで八十キロ位のものがいる。

ペイシ・ボイは草食魚で水牛でなく魚牛で、牛と異なる点は角がないのと、足がヒレに変わっただけである。鯨のように頭に穴があり、

ブーウブーウと水煙を立てて息を吹き出す。ペイシ・ポイの雌牡ともに生殖器が人間のものとほとんど同じであると言うが、私はお目にかかっていない。十月からは投網の時期でジャラキをはじめ、雑多な小魚を捕る。ジャラキは清水魚でマウエスのようなリオ・プレットに棲むが、濁川に出て産卵するので群をなして下る。これが十二月半から一月末まで続く。

群れを追って投網で捕るのであるが、どんな素人にも捕れるので、二十から三十隻のカノアが出て群れを追う様は壮観である。

山狩りとして、コチア、パッカ、タツー等を始めとして鹿、山豚、アンタ等。鳥類ではムツン、ジャクー、イナンブー等があり、ラーゴに行けば、パト（鴨）、ガルサ（白鷺）、マグアリー（鶴）等が群れをなしている。先住人は「明日のことを思い煩うことなかれ」を、地で行っているのである。常食はマンジョッカ粉で半町歩も植えれば一年の食料があり、グァラナを二百～三百本あれば衣類が補われるといった具合で発展性はない。州政府の賄いとしても、自然ゴム、カスターニヤが主であり農業としては、近年アマ産会社と殖民の努力で成功したジュート産業があるくらいのものである。最近は鉱業方面に目をつけ開発に努めているが、資本と技術に乏しい国としては、勢い外国（アメリカ）に頼らねばならず、成績は上がっていない。アマゾン地帯における鉱物類の豊富なことは、ユネスコ派遣である坂本教授の証言のごとくである。多方面にわたる技術と資本を持つ大アマゾンである。

一九三二年五月、私はインヂオの娘と結婚した。同年七月、先生から

一家をまとめて渡伯決行、八月ベレーン入港、同市まで出迎えせよとの命を受けた。

マウエスを後にした伊藤氏は、マナオスに転居して日系団体の通訳をされていた。氏のお世話になった方は大勢であろう。

また、編集子宅にも何度か足を伸ばされ、クラボという柑橘類が大好きであったことを記憶している。同氏は既に他界され、謹んでご冥福をお祈りする。

高拓生

アマゾン移住者の記録

パラー高拓会編

・アマゾン入植の幕開け

一九二六年、当時の駐伯日本全権大使田付七太は水路パラー州を公式訪問したが、これを知ったアマゾナス州知事は是非ともアマゾナス州訪問も実施して欲しいと大使に要請した結果、受け入れてマナオス市を訪問した。

当時アマゾナス州はゴム産業も衰退しており、他に目立った産業はなく、日本人移住者を導入して全地域の農業開発を計画していたため

と、また、パラー州知事が日本政府に対して百万町歩の土地の無償譲渡を申し込んでいたことに刺激され、パラー州と同様に百万町歩の土地の無償譲渡を申し入れた。

田付大使は帰京後、同大使一行の通訳官として同行した粟津金六に対し、同氏の名前でコンセッソン契約を締結するように勧めた。粟津金六は当時ブラジルを訪問して新市場調査中の東京の実業家中西源三郎と話しアマゾナス州知事申し出の百万町歩を受け付けることとし、一九二七年二月マナオス市を訪問し譲渡契約を締結した。

一九二七年三月八日の州官報にて、一九二六年十月二十日付け法令・第一一四号、第三条、E、K項に基づき、二年間の期限で百万町歩の土地内の選択をする権利の許可が発表された。

次いで、三月十一日には両者の間で二年間の選択契約が署名された。百万町歩もある遊休地内での選択権なのでいろいろな選択が考えられたが、結局次のような方法が決められた。すなわち、次のように指定されたいずれかの地域の百万町歩を選ぶことが出来た。

（一）　スクンドリ河、カヌマ河、マディラ河。右岸を境界とし、パラナ・ド・ラーモス河、パラウアリ河、左岸奥行、南　へ第六平行線まで。

（二）　ソリモンエス河右岸、コアリとテフエ河間の地域。前者は右岸、後者は左岸奥行、第六平行線まで。

（三）　ネグロ河、右岸地域、カプリ河右岸とチンビーラ河。左岸を境界として、第三十平行線まで。子午線六十三度に　　相当する。

二年間の選択契約とは、契約締結後、一年間の間に認可責任者は指定地域の調査を行い、会社を設立する。そして一個所の地域または連続する地域を合計百万町歩まで選択することが出来る。この条件を満たした後、一年間に入植地を建設する。

粟津、山西両名が百万町歩無償譲渡の契約を行ったものの、アマゾン開発には多額の経費と技術及び長期間を要し実施不可能とのことが判明したので、田付大使は、熊本県出身で神戸高等商業学校の同輩である粟津金六及び神戸商高より調査に派遣されて帰国した同高の後輩辻小太郎を呼び、アマゾン開発の諸細目を検討の上、調査に必要なる経費下付申請を行った結果五百円の補助金を受け取ることが出来た。

一九三〇年、上塚は渡伯してサンパウロ州に在住する各分野の専門家、技術者二十名を集めて調査団を組織しアマゾンに向かった。マナオス市に到着した同調査団はアマゾナス州知事ドルバルポルトの好意により、モーター船を傭船してアマゾン中流を調査した結果、イタコアチアラ町よりパリンチンス町を中心とした地点に百万町歩の土地を選定し、同時にパリンチンス町より下流のヴィラ・バチスタ耕地を購入して本部基地と定

め、これをヴィラ・アマゾニアと命名した。そして調査団の一部を現地に残して直ちにアマゾニア産業研究所施設の建設を開始した。調査終了後マナオスに帰着した上塚司、粟津金六等は調査結果をアマゾナス州知事に報告すると同時に土地の譲渡契約書を粟津金六より上塚司名義に変更した。

上塚司はヴィラ・バチスタを購入すると、直ちにパリンチンス郡長外官憲を招待してアマゾニア産業研究所の起工式を盛大に行い、同研究所内に農事部、気象観測所、病院、実業訓練所の四部門を設け、各部門の責任者を定め、粟津金六を所長に任命した。前記四部門は決定すると同時に、各責任者はそれぞれの部分に必要なる道路、職員宿舎、売店、農事試験場、病院、港湾等の建設を開始した。

・国士舘高等拓殖学校の設立

一九三〇年、アマゾン地域の調査を終了して帰国した上塚司は、言葉、風俗、習慣も知らない多数の邦人移住者を異国の地に送り出すことは、必ず烏合の衆の団体となり、種々の問題が起こることを懸念して、各グループの中心人物となる人材の養成が必要であると感じて、東京世田谷にある国士舘武道専門学校内に国士舘高等拓殖学校を設立して中等学校卒業以上の資格ある生徒の募集を始めた。

入学した生徒に対する授業は南米地理、ポルトガル語、農業、土木、農産加工、獣医学、体育等であり、一九三一年に至り第一回卒業生四七名を送り出した。

入学した生徒の家庭は、ほとんど中流家庭以上の子弟であり、鍬も鎌も握ったことのない者ばかりであったので、農業実習の必要を感じ、農地のある場所に学校を移すことを計画し調査した結果、小田急沿線の登戸に約二町歩の土地を購入して、校舎新築を開始した。名前も日本高等拓殖学校と改名し、辻小太郎を主事に任命した。このため、第二回生は二学期までは所定の授業を受けることが出来たが、第

三学期は校舎が未完成であり、生徒は付近の農家に分宿し、授業を受けることが出来ず、道路工事などに従事した。

その他卒業生家族、アマゾニア産業研究所従業員家族等が百五十名渡伯した。

百万町歩の土地無償譲渡契約は、連邦政府を通せず、単にアマゾナス州知事と粟津金六、山西源三郎との間に行われたものであるが、一九三四年に至り、ブラジル政府は新憲法第一三〇条を発布して一万町歩以上の外国人に対する売買、譲渡等は連邦政府の承認を得なければ成立しないことになった。そのため、上塚司は百万町歩の譲渡契約が連邦政府にて問題化することを懸念して、アマゾナス州知事に対して、連邦政府がこの契約を承認するよう依頼したが、当時ブラジルにはナショナリズムが台頭しており、政府要人には百万町歩の土地を譲渡することは国防上好ましくないことであるとの意見が強く、ついに譲渡契約に関する契約書は無効となった。また、日本国内においても、満蒙進出の気運が強く、日本人のアマゾン進出に対しての反対の者もあり、加えるに第一回生、第二回生の帰国者の話によりアマゾン地域の内情も悲観的な報告によって入学希望者が少なくなったためと、百万町歩のコンセッソンを失った今日、日本高等拓殖学校を経営して指導者を養成することは無意味であるとの観点から、せっかく大きな理想と希望を持って創立した日本高等拓殖学校を、涙を飲んで閉鎖することに決定した。その後閉鎖された高拓は陸軍に買収されて陸軍科学研究所に変身した。

・ボア・エスペランサ、アンジラ模範移住地の建設

一九三一年に渡伯した第一回生四二名は農業実習所訓練生として約五十町歩の耕地としてヴィラ・アマゾニア敷地内を伐採してカスターニヤ、グァラナ、米、マンジョカ等を植え付けたが一年間の実習が終了すると共に個人的に入植する土地を選定することになった結果、ラーモス河の支流ウイクラッパ河岸に風光明媚で健康的高台を入植地と決定し、ボア・エスペランサと名づけた。

しかし、一年間の実習により食料品も少なく、娯楽も少なく、また農産物の販売市場も少ないアマゾン地域で営農することは将来性がないと見切りを付けた第一回生の半数以上は南伯に転住し、または帰国し、一部はアマゾニア産業研究所所員として残留した結果、十九名が入植することになった。

入植した一回生は直ちにカスターニャ、グァラナ、米等を植え付けて入植第一歩を開始したが、一九三三年アンジラ模範移住地の開設に伴い、御薗福衛、泉桂治、佐藤行夫、日高正治、有田忠夫、国宗淳、馬場三郎、金子玄三生、小山松喜、大平茂登吉、吉村明の十一名がアンジラへ転住し、大石隆大家族が残留した。その後、大石隆人もジュート栽培のため、低湿地帯に転住したので、第三回生の森進一郎が耕地を譲り受け現在に至っている。

一九三二年第二回生は渡伯したが、アマゾニア産業研究所所長栗津金六は、すでに南伯地域に在住する邦人移住者が、肥沃な土地で営農し、優秀な成績を上げているのに対し、アマゾン地域は強酸性の痩せ地で生産性がなく、交通不便であり、またマラリア病が猛威を振るう

熱帯地で営農することに危惧を感じており、このことを上塚氏に進言した。

しかるに辻小太郎の意見はジュート栽培を主幹作物として営農を行えばアマゾン開発は可能であるとの意見で、上塚司もその意見に同調したため、両者の意見が対立し粟津金六は辞任することを申し出た。そのため、一九三三年一月、辻小太郎が渡伯してアマゾニア研究所所長に就任したが、すでに渡伯していた第二回生は両者の意見に惑わされて多数の者が南伯の移住地に転住した。

辻小太郎は一九三三年に渡伯する第三回生に、この不穏な空気の中で一年間の農業実習を行わせることはかえって害があると考え、新移住地を建設して直接入植させることを計画した。

ラーモス河沿いに約四十キロメートルの地点に在るアンジラ地区を新入植地と決定して、これをアンジラ模範移住地と命名した。同移住地には、ボア・エスペランサ移住地より転住した一回生十一名と二回生の残住者の一部及び、三回生全員が入植して、越智栄が所長に、高相正寿が副所長に就任した。

しかるに、これら高拓生の配耕された耕地は前面百メートル、奥行き二百～五百メートルの小面積であり、この小面積の土地に永住して農業を営むことは不可能との理由により、移住地より四キロの原生林に新移住地を造成することになった。この移住地は、二戸あたり前面二百メートル、奥行き一キロの耕地で、タワコエーラ、サンタルチア、ボアフォンチ及びドッセの四地区に分かれ、第一回生より第七回生まで約二百家族が入植した。

入植者の主なる作物はカスターニヤ、ゴム、カフェー、グァラナ、米、マンジョカ等であったが、この地域は痩せ地で、陸稲は町あたり籾で十から十五俵位の収穫しかなく、永年作のカスターニャその他は収穫まで、長年月を要するので経済的には非常に苦しい状況であった。また、せっかく植え付けたマンジョカも一年ほど経過し、収穫期に入ったが精製設備も技術もなく、放棄状態にあった。すなわち農業者に確固たる農法がないため、暗中模索的農業に従事していたのである。このため、多数の入植者の中には耕地を放棄して南伯地域へ転住する者も出てきたが、一九三六年頃より、尾山良太の発見した新ジュート種は多収穫で経済的にも非常に有利であることから、大部分がパリンチンス周辺のバルゼア地帯に移り、ジュート栽培にしたので、多数の経費と入植者の血と汗で造成されたこの移住地も一瞬にして消滅し、古賀邦次家族のみが残留した。

・新ジュート種の発見

辻小太郎はインドの低湿地帯におけるジュート栽培状況を研究した結果、アマゾン地域の低湿地帯もジュート栽培に有利であり、これをアマゾン開発に必要なる主幹作物とすべきであるとの考えを持っていた。その理由は次の通りである。

（一）　ブラジルは世界一のカフェー生産国であり、多量の麻をインドより輸入しているので、此れをアマゾン地域で栽　　培すればブラジルは経済上非常に有利な立場となる。

（二）　世界的に需要のある農作物であるジュートはアマゾン地　　域

で生産すれば国内需要を満たし、残りを外国に輸出し　　て外貨獲得も出来、ブラジルの経済に貢献できる。

(三)　多額の資本を投入することなく、どんな規模のジュート園でも経営することが出来る。

(四)　永年生作物は収穫までに長時間を要し資金が停滞するが、ジュートは一年生作物であるため、資金の回転が早い。

上塚司は辻小太郎の計画は非常に有利であるとして、これを採用し、インドより種子を取り寄せ、またサンパウロにて現地種を集めて、調査団を組織する時に持参し、鹿児島高等農林学校出身の荒木衛門に試作を命じた。ジュートをアマゾナス州の気候に適応させることを目的としてアマゾニア産業研究所を設立、荒木衛門は産業研究所開設と同時に、ヴィラ・アマゾニア低湿地で八回に渡り試作を行ったが、背丈は一～二メートルに伸びると開花して、繊維の生産量少なく、採算が取れないことが判明してこの試験は失敗に終わった。

一方アンジラ移住地に入植した高拓生も、同移住地対岸の低湿地帯に小面積を与えて試作させたが、荒木衛門の試作結果と同様になった。尾山良太の試作した耕地内に背丈が三メートルも伸び、枝も出ない新しいジュートが二本発見された。尾山は種子を採取すべく大事に育てたが、一本は河水に流され、残った一本より若干の種子を採取することが出来たので、その種子の一部をアマゾニア産業研究所農事部に渡し、残部は自分の耕地に植え付けて種子の増産をはかった。そしてアマゾニア産業研究所では、この新種を尾山種と命名し、外部に発表した。一九三五年にいたり、新ジュート種の種子も若干増収されたの

で、アマゾニア産業研究所は同所の少し上流にあるフォルモーザ島を買収して尾山良太に、また中内義一二の両家族に試作栽培を依頼した。第一年目に尾山良太は六トン、中内義正は三トンのジュート繊維を収穫することが出来た。（中内義正はヴィラ・アマゾニアにて試作した。）この繊維はベレーン市のマルチン・ジョルジ商会に販売された結果、非常に良質の繊維であるということで、今後とも大量に買い付けしたいと申し出てきた。尾山種ジュートは諸経費を差し引いても、尚百％純利益があったことが判明したので、タワコエーラ、サンタルジア、ボアフォンチその他の高拓生の全部がパリンチンス付近の低湿地地帯に進出し、このジュート栽培を始めた。戦後はすべての日本人が思い思いの地に土地を求め、自らも栽培し、さらに伯人にも種子を配給し栽培を指導したのでその生産量は年々増加し、一九六五年の最盛期には六一、五〇〇トンの生産量に達した。この頃には高拓関係者及び、マウェス地域よりの栽培者を含め、約七十五家族の邦人がジュート栽培に従事していた。

　このジュート生産量はブラジルの需要量をオーバーして、一部を外国に輸出することが出来た。しかるに一九七二年と一九七五年の大洪水のため、せっかく刈り取って浸水したジュートは激流に流され収穫が出来ず、多大の損害を受けた者が多く、またその頃発明されたナイロン製サッカがジュート製サッカより安価のため、ジュートの消費量が減少し、価格が暴落した。

このため、多くのジュート栽培者はベレーン近郊に転住し、ピメンタ栽培に移ったのである。しかし、不利になったとは言え、伯人農業者

はアマゾン河低湿地帯の主要農産物としてのジュート栽培を続けているのである。残った高拓関係者は、ジュート栽培は中止して牧場経営、またはジュートやその他の産物の仲買業、すなわち商店経営者と転化して行ったのである。

・アマゾニア産業株式会社の設立

一九三一年設立されたアマゾニア産業研究所は、アマゾン地域における経済的に有利な作物の研究を行ってきたが、新ジュートの発見によりジュート繊維の買い付け、梱包、輸出等の必要性が生じてきたので、上塚司はこれを会社組織に変更することにした。このため、彼は当時の大蔵大臣高橋是清を通じて日本における経済界の大物たる郷誠之助に依頼し、彼の音頭により三井合名、三菱合名、住友合資、安田保険、東洋綿花等の出資金とアマゾニア産業研究所の資産を含め、百万円の資本金とし、一九三五年十月にアマゾニア産業株式会社を設立し、上塚司が社長に就任した。会社の営業目的は上記の通り、ジュート繊維の買い付け、梱包、輸出及びジュート栽培者に対する融資または斡旋等を行い、ヴィラ・アマゾニアに本社を置き、マナオス、イタコチアラ、ベレーンに支店を開設した。

アマゾン中流地帯におけるジュート産業の隆盛に刺激されたパラー州知事は、マラジョー島を中心とするアマゾン河下流地域にもジュート産業を起すべく計画して、アマゾニア産業株式会社に対し、州政府の費用をもってジュート試験場の開設を要請した。会社側はこの要請を引き受け調査した結果、マラジョー島にあるプレーベス町近郊に試

験場を設け、場長に越智栄、従業員として池上欣次、石原義人、石原義雄の三名を任命した。

八紘会館（ビラ・アマゾニア）
高拓生を中心に、邦人たちが建設した日本の宮造りの広壮な建築物。
アマゾン邦人の集合場であったが、現在は荒廃している。
（1976年 井上氏撮影）

契約による試験期間は二年間で、一九三八年に開設した。

しかるに、同地域は強酸性の粘土質土壌で、表土はほとんどなく、また一日に二回の河水の干満があり、農地に浸水するので作業は非常に困難であり、せっかく植え付けたジュートも一、五メートルくらいしか成長せず、加えて悪性のマラリアが暴威を振るい、会社の従業員や労働者が罹病して作業は進まず、試験を続行することは不可能との判断から閉鎖することに決定し、一九四〇年，サンタレン市上流のサ

ント・アントニオに新たに土地を求め移転した。上記試験場開設と同時に、場長越知栄はアマゾニア産業株式会社のマナオス支店長に任命され、池上欣治が場長に任命されたが、一九四一年に至り、第二次世界大戦が勃発して試験場は閉鎖された。

・第二次世界大戦の勃発

一九四一年世界大戦が勃発したが、ブラジルは参戦せずに傍観の立場であった。しかし一九四二年、ブラジル商船バイペンジー号がアマゾン河口にて敵国(ドイツ)　の潜水艦に撃沈されたのを機に参戦した。一部有識者の間では、この潜水艦による撃沈は、アメリカがブラジルを参戦させるために行った陰謀であり、当時のドイツは自国の潜水艦を南米まで送る余裕はなかったと言われている。

そのため、日伯両国は国交断絶して日本の公館は閉鎖し引き揚げたが、アマゾニア産業株式会社及びトメアスーに在った南米拓殖会社の資産は敵国人財産としてブラジル政府に接収されたので、せっかく苦労して建設したアマゾン地域開拓基地を失った。各所で家屋の焼き討ち、婦女子への暴行、銀行預金の封鎖が行われた。

日伯両国の国交断絶により、アマゾナス産業株式会社幹部社員は必ず拘留されると推測した辻小太郎は、全従業員に対し出来るだけ地方に分散退去するよう勧告したが、幹部従業員の多くは最後まで踏みとどまり、会社の最後を見届けてから退去するとの意見が強く、辻小太郎家族のみパラー州サンタレン市下流イッキー島に退出した。

国交断絶後数日を出ずして、マナオス市より軍隊が出動してヴィ

ラ・アマゾニアに到着。下記幹部従業員家族は危険人物として、トメアスー移住地に設けられた敵国人拘留所に収容され、重労働に従事した。収容された家族は、越知栄、高村正寿、九十九利雄、三宅義郎、岸田好明、畑中実、安藤美代次郎の七家族であった。アマゾニア産業株式会社の責任者である辻小太郎が全従業員を残して一家族だけ脱出して拘留を逃れたことに対しては、責任のない行動であったと非難されているが、また一方、辻小太郎は全従業員に勧告しているのに対し、この勧告を受け入れず最後まで残留した者にも落ち度があるとの言葉もあり、結局このことは第三者の判断を待つより方法はないと思われる。

しかるに、ブラジル政府は終戦と同時に接収したアマゾニア産業株式会社の基地ヴィラ・アマゾニアを何の通知も行わず、経緯不明のままマナオス市のJ・G・アラウージョ商会に当時の金で、七百コントで売却してしまった。また、封鎖されていた移住者の銀行預金は終戦後二年目に至り三十％差し引きの上返還されたが、当時はインフレが次第に高まりつつあり貨幣価値が下落して多大の損害を被った。

・アマゾン地域へ邦人移住者五千家族導入許可

サンタレン下流イッキー島にてジュート栽培に従事していた辻小太郎は夫人の死去を機会にサンタレン市に移り、小さな雑貨商を開いた。

一九五一年五月、労働党より立候補して大統領に当選したゼッリオ・バルガスが北伯地域視察のためにサンタレン市に立寄った。当時の労

働党サンタレン支部長ユリアス・ピントは辻商会の保険係として働いていたが、辻小太郎は同氏を通じてバルガス大統領に会見を申し込んだところ許可を得られたので、邦人五千家族を導入してアマゾン地域を農業によって開発することを強調したところ、同大統領はこの意見に賛同した。

辻小太郎は邦人移住者導入理由として次の事項につき説明した。

（一）　アマゾン開発事業は商業、工業または鉱業面からの開発は資本、技術面の不足、運輸面の困難性等があり、現在では非常に困難であるが、邦人移住者によって導入されたピメンタ、ジュートを主幹作物としての農業開発は大いに可能性がある。

（二）　欧米人はアマゾン地域の酷暑に労働することは不向きであり、また現地在住者は資本、教育、技術がなく、開発は困難であるが、日本人移住者なら熱帯地域にも適応しており開発することが出来る。

（三）　上記の理由により、日本人移住五千家族の導入を許可して頂きたい。

当時、第二次世界大戦が終了したとは言え、平和条約は締結されておらず、敵国の立場にあったが、バルガス大統領は辻小太郎の申し出を受理し、アマゾン開発計画書を作成して至急移植民院に提出するよう要請して、次の　訪問先であるマナオス市に向かった。

辻小太郎は直ちに計画書を作成し、自費を持ってエリアス・ピント同伴の上リオ・デ・ジャネイロに向かい、移植民院に計画書を提出したが、非常に有意義な計画書であるとして受理され、若干修正の上これを大統領に手渡され、議会に提出し審議の結果承認された。

一九五二年辻小太郎は上京してブラジル移植民院との間に邦人移住者五千家族導入契約に署名した。この移住者導入契約は、当時日伯両国がまだ平和条約は締結されておらず、敵国人として取り扱われている時期に行われたことから考えると、邦人移住史に残る大きな功績であると言えるだろう。

・戦後邦人移住の開始

邦人移住者五千家族の導入許可を得た辻小太郎は、早速上塚司を通じてこの件を外務省に報告した。当時、日本国内は数百万人の外地引き揚げ者を抱え、彼らに与える職場もなく、また食料も少なく、その対策に困りきっていた時にこの朗報があったので、辻小太郎を日本に招待して移住に関する打ち合わせを行うと共に、全国主要都市をまわり、アマゾン移住に関する講演を行った。そして、日本は国交が回復していなかったため、辻小太郎を現地引き受け者に任命して、受入に関する費用は日本政府が負担することになった。

一九五二年十二月、十四家族五十四名がアマゾン中流地域に到着したが、辻商会の従業員のみでは引き受け業務が順調に行われないため、辻小太郎は神戸高商の先輩である、当時東洋綿花のサンパウロの支配人であった江村良造に呼び掛け、両者の出資金をもってアマゾニア経済開発株式会社を創立してベレーン市ガスバルヴィアナ街に本店を置き、辻小太郎が社長に、江村良三が副社長に就任した。また、移住者の世話人として、高拓関係者の越智栄、高村正寿、東久一、上森六園、小谷祐次、谷正一、藤田猛、鈴木五郎、藤島正徳、原田行郎、石里条

吉等が入社し、また、前田光世コンセッソンに入植した山田義雄移住団より大岳二山本栄一等が参加した。これら世話人は各移住地に駐在して、営農指導、通訳、営農資金の取り扱い、病人の世話等行ったが、日本における募集要項が現地に到着してみると、ブラジルの予算関係で要項通り実施されず、移住者の契約違反による苦情とブラジルの満々たる政策の板挟みとなり、非常に苦労をした。

・入植地の選定と入植

邦人移住者の入植候補地は、この広大なるアマゾン地域にはどこにても入植可能であるが、問題は入植に必要なる各種施設、道路建設等に多額の費用を要し、この費用を入植者に課することは出来ない。連邦直轄移住地に対する必要経費はすでに五千家族導入契約時に移植民院と決定済みであるが、各州直轄地の入植に対しては未定であり、このため、辻小太郎は各州知事及び直轄地知事を訪問して、邦人移住者による農業開発の必要性を説明して次の入植地に対する導入契約を行った。

(注)　アメリカ、フォード自動車会社が巨額の資本を投じて自社に使用するゴムを確保するために、一九二六年に造成したゴム園に、約四百万本を植え付けた。しかし、ゴム採液量が少なく、経営は赤字となり、ブラジル政府に安価で売却し、政府は
これを北伯農事試験場の管轄下に置いた。一九五四～一九五五年に至り前記移住地には邦人移住者の受入が不可能になったので、辻小太郎は移植民院と交渉し、このゴム園に仮入植し数年後本人の希望地に転

住、独立営農の目的で交渉した結果、許可され、ゴム液採取の日雇い労働者として入植することになったのである。後、一部政治家の反対により、契約は無効になり、移住者はモンテ・アレグレ、グアマ、ベレーン近郊また一部は南伯地域に転住した。

・計画的移住地　（直轄地）　の崩壊

直轄移住地の多くは多数邦人移住者を受け入れる土地が少なく、現地人入植者によって伐採され尽くしていたり、低湿地地域は強酸性で農耕に不適当であり、道路が悪く出荷不便であり、また消費地が遠く販売に不利であり、その上マラリア等により大部分の邦人移住者はマナオス近郊やベレーン近郊に転住していった。

・高等拓殖学校卒業生移住者名簿

第一回生　秋山桃水、有田忠夫、荒木衛門、飯田嘉平、
泉桂治、岩村茂木、上木正治郎、大石隆人
大平茂登吉、大森克己、小山松喜、御園福衛、
金子亥三、鹿野勇、岸田好明、木田謙一、
木村一則、木村光、工藤講一、国宗淳、熊谷忠、
栗崎一正、佐竹基、佐藤信市、佐藤弥門、
佐藤行夫、椎名勲、庄司和雄、庄司二郎、
武田善郎、田中正夫、中島敏三、橋本俊次、
日高正治、千葉彦洋、馬場三郎、林健一、
原田順平、藤島正徳、星野広美、松本哲哉、

溝口利太郎、矢野武雄、山本一郎、山本紀雄、
吉村明、吉村利夫、渡辺祐郎、（四十八人）
第二回生　有田豊二郎、有吉一義、出水不可止、伊藤秀光、
上田正見、内田照彦、江口洋夫、大河原宣夫、
大野綾夫、岡木博、尾崎龍夫、小野田正次、
尾山万馬、数馬角平、加藤清勝、城戸糺、
栗田吉行、黒田隆、小林増美、斉藤俊太郎、
杉村倫、鈴木憲司、芹沢正芳、副島利彦、
高世虎雄、高橋亥年生、高橋健二、滝沢正夫
滝田吉一、竹添長生、田辺博、田山泉、
辻川栄太郎、堤順次、戸上保一、床間武四郎、
夏秋季晴、西栄健二郎、西川利夫、根本七郎、
野々山政人、野村弘、橋本四郎、日浦弾吉、
東久一、平田三次、藤沢秀彦、藤島利親、
星原貞治、三浦虎彦、光岡陸郎、南政、宮川哲二、
宮島靖彦、山川正夫、山口諭、山口紀元、
吉沢利八、吉田泰正、渡辺藤二、（六十名）
第三回生　青木正司、井川　誠、池上欣二、石原義雄、
石原義人、井田　太、板倉　博、井上末雄、
井山武彦、上原章、上森六園、大竹　昇、岡芳郎、
岡山則政、長内保、尾崎章、斉藤従之、小野三郎、小野七郎、加藤
繁、金田誉吉、神山果三、河野宗輔、木島茂、黒川　均、小海半治、
古賀邦次、小谷裕次、金野　至、坂本光彦、佐々木一哲、笹倉武夫、

佐藤四郎、佐藤正文、里見義夫、城間宏忠、新保宗雄、杉山哲弥、竹内暁、鈴木五郎、高橋義雄、高野文雄、高橋金策、田中一彦、田中誠一、田中貞介、谷正一、綱島芳男、民谷賢司、徳田源爾、内藤茂三郎、中井憲明、中村健夫、成田俊興、西村武蔵、土師郁郎、畑原稜、畑原優、八田公重、林田又雄、原田行郎、藤田猛、前原三郎、前山　嶺、松井忠正、蒲田六郎、三東活人、森進一郎、山口昌、横田輿一郎、横山光男、吉田正三郎、吉永精、（七十三名）

第四回生　秋山三雄、井原只郎、大友達眼、木村宗一、坂本太郎、清水義弘、千葉守、二条豊基、

安部支、有井繁弥、石黒条吉、

今村泰三、大川博、大久保巖、

岡村徹、沖沢初男、荻野正美、加藤楽、小坂井浄治、斉藤四郎、坂本孝、佐瀬仁、茂木弥五郎、清水耕治、武井信元、立松幹雄、玉井豊幸、戸口恒治、永谷信次郎、中根敏造、長谷川信次郎、畠中実、馬場康二、原荘太郎、半田二郎、平石定吉、松沢正行、

松原和夫、丸岡京、宮地茂、村尾宗義、

薬師寺光雄、安井宇宙、山崎太郎、横田信男、　若林政雄、渡辺正治、（四十七名）

第五回生　井上進、井上時任、今井栄三、内海要造、

笠松新吉、金沢七郎、清原堅一、古関達雄、

佐久間岡策、澤高志、高橋房雄、田中長次、　玉川文夫、内藤菊次郎、原田公三、福井義寛、　柳井正至、山田弘紀、（十八名）

第六回生　石田真紀、荻野源太郎、小田具紀、川上顕二、
小松政夫、佐脇忠、清水博、鈴木四郎、高島将元
高橋忠治、中島忠之、成田大助、村上一郎、　諸岡
次男、塩見商玄、（十五名）

第七回生　今井正彦、上田尭、小野八郎、東海林善之進、丸岡東、
（五名）

州・直轄地名	移住地	入植年	入植家族
リオ・ブランコ直轄地	コロネルモッタ（タイアーノ）	１９５５	１１
		１９６１	８
グァポレー直轄地	トレーゼ・デ・セテンブロ	１９５４	２９
アクレ直轄地	キナリー	１９５３	１３
アマパー直轄地	マタピ	１９５３	２１
	ファゼンジーニョ	１９５４	５
	コザスニ	１９５９	１３
マラニョン州	ロザリオ	１９６１	１９
	ムルアイ	１９６２	１０
パラー州	モンテアレグレ	１９５３	６７
	ベルテーラ、フォードランヂア＊注	１９５４	１２２
	グァマ米作移住地	１９５５～５７	１２５
アマゾナス州	ベラビスタ（旧マナカプルー）	１９５３～５５	１２３
	エフィジェニオ・サーレス	１９５８	４７
その他	トメアスー、ベレーン（呼び寄せ）		
	マナオス近郊		

我が思い出

パリンチンス市　猪股　正
（アマゾニア産業従業員　家族移住者）

一九三四年、私は父母と弟三人で一番寒い北の島、樺太から、一番暑い南の国ブラジルのアマゾンへ家族移民としてきたのです。来た年には入植できず、翌年の伐採が始まる前に、サンタルジア模範植民地に入植したのです。父と子は毎日、テルサードとマシャードを持って、あの大アマゾンの原生処女林に挑んだのです。本当にあの当時を思い出すと小英雄であったような気持ちになります。

これが我々移民の第一歩でありましょう。

二町歩の山切りが終わった頃に、会社の頼みで父はマウエスのアバカシー河周辺の林相を調査しに行くことになり、父は出る前に私にこう言いました。「俺はいつ帰るか分からない。お前が責任を持って山焼き、寄せ焼き、米の植え付けを全部やれ。」と言われたのです。本当に数え年十五歳の少年が一人で出来る仕事でしょうか。私は仕事を始める前にいろいろなことを考えてみました。そしてそれを実行することにしたのです。

私は、最初に一年前に入植した高拓四回生の人たちのところへ行き、山焼きのことをお願いしましたら、皆さんは快く引き受けてくださったので本当に安心しました。山焼きの数日前に私は椰子の木の皮を取り、何本もの松明を作り、その日の来るのを待ちました。山焼き

の日に四人が来たので、皆に松明を渡し、私も皆と一緒になって火を付け始めたのです。時々木の枝や切り株に足を取られてひっくり返りながらも、あまり人々に遅れず最後までやりました。もし遅れていたら醜いことになったでしょう。そして、今来た方を見ると火の海でした。翌日、焼け跡を見回りましたが本当に良く焼けており、寄せ焼きは簡単に終わることが分かり安心しました。

ちょうどその頃若者が一人来て仕事が欲しいと言うので雇いました。一緒に寄せ焼きを始めたのですが、若者は寄せ焼きのやり方を知っていたので本当に助かりました。午前中二人は邪魔になる枝やその他の木を切り、午後からは切った木を寄せ集め、五時過ぎから火を付け始めて、終わって家に帰り着くのは七時か八時頃になりました。

植え付けの時に、また高拓四回生のところへ行きお願いしたら、Tさんが来て教えてくださったのです。あまり難しいことではなかったので、すぐに覚えて自分一人で最後まで植え付けをやり続けました。

稲が少し伸びて前の方が見えなくなったので、木の切り株に上り四方を見回したら、青々とした稲は風に吹かれ、波のようにうねりくねっておりました。本当に美しいなと思ったことを思い出します。その時、「これが自分のやった仕事のうちの一つだ。これからも益々身を入れてやろう。」と思ったのですが。

また、自分の分からないことは、人に聞き教えてもらいながらやれば、自分でも出来ると自信がついたのです。

その後、父が帰りましたが、ことが少し変わりました。収穫が終わり、私たちは毎日毎日荷車で米袋をサンタルジアの事務所まで運んだ

ものです。収穫は父の思っていた以上のものであったようです。あの頃、私は何も分かりませんでしたが、父の様子を見て私は心から「あ良かった、助かった。」と思いました。

一九三七年一月、私は植民地を捨て、会社に入ったのです。

戦争の始まるまで五年間、私には本当に良き時代であったのです。

〔執筆者略歴〕

猪股正　（いのまたただし）

一九二一年、北海道に生まれる。

一九三四年、アマゾニア産業従業員家族移住者としてパリンチンス、サンタルジア植民地に家族5人にて入植。一九九八年逝去。

■戦後ジュート移民の歴史――■

羽田　重吉

・移住の再開と募集

一九五二年十二月、戦時中閉鎖されていたブラジル移住が再開された。その当時はまだ、日本、ブラジル両国間では、移住協定はできていなかったが、我々の大先輩である高拓生といわれる方々が戦前からアマゾンに渡ってアマゾンの開拓に従事し、苦闘の末、従来アマゾン流域では栽培不可能とされていたジュートの栽培を可能にせしめた。と言うよりも、アマゾンにはジュートはあったのだが、在来種であり

背が伸びず、五十センチ位で止まり花・実がつき、使い物にならないものであった。

そこでインドから新ジュート種を取り寄せ、いろいろ試行錯誤しながら栽培し、四メートルにも伸びるジュートの栽培に成功したのである。ジュートというのは、ブラジルの主産物であるコーヒーの袋の原料になるもので、インドの方から毎年大量に輸入していたものがアマゾンでできるようになったため、その伯国の産業に大きく貢献した功績が当国政府に高く評価され、ジュート栽培に携る者に限り移住が許され、急遽日本で募集された。それが五十二年の十二月のことであった。十八歳以上五十歳未満の男女三名家族、文武両道、高校卒業等、難しい条件が要求され、全国から選ばれたのがたった十八家族五十四名であった。現地での条件については、移住者には入植地に於いて、植民地となる土地その他援助恩典はなく、入植者は現地でジュート栽培を営んでいる邦人の家庭に配耕されて二年間の契約で雇用される、期限終了後は自由、以上であった。

その頃、日本では次から次へと海外から引揚げ者が入り、食糧事情がよくなく物資も不足しており、非常に混乱していた時代であったため、この募集に対しわんさと応募があり、何十家族という競争率であった。私も復員して間もない頃で、終戦の痛手から脱却できず、ごたごたしている日本がどうも自分の意思に合わないため、いつか海外に出て、広々とした所でのんびり農場をやりたいと思っていた矢先であった。移住できれば後は何とかなるだろうとの簡単な考えで、何の躊躇もなく家族に相談もせずにすぐ応募した。非常に難関であったた

め、入れないだろうと思い半ば諦めていたところ、何の間違いか、一家族選考に入ったので、大学入試にでも受かったか、宝くじにでも当たったような気持ちで喜んだ。

十二月に選考が決まり、十二月中には出航ということで非常に忙しく、色々、財産の整理や渡航の準備など早急に取りまとめて出た訳である。

・斡旋所に入所と船出

選考された移住者は、神戸の移住斡旋所に入所し、出国の手続き等、必要な事項を教えられ、ここで一週間余り過ごした後、神戸港に向かった。出港に際しては、埠頭には数千人の見送入がごった返し、各自が五色のテープを投げ交し、別れの声が交錯し、興奮した空気に包まれた中、警察予備隊の奏でる「蛍の光」に送られながら船は岸壁を離れた。私は、戦時中に幾度か故国を離れた経験があったが、そのような華やかな出港は初めてであった。また、これが祖国を見る最後であり、もうこの地を見ることはないだろうと思うと、胸が熱くなり、男ながらに涙がこみ上げてきた。

移住斡旋所では、所定の手続きを行った後、「貴殿等は戦後第一回の移住者であり、それゆえテストケース移住であるため、貴殿方の定着如何が今後の移住に大きな影響を及ぼすことになるのだから、そのことを肝に命じていかなることがあってもがんばるように」ときつい訓示を受けた。

私たちが乗船した船は、戦後新造進水した「さんとす丸」と称す一

万トン級の立派な貨客船で、その処女航海に乗ったのである。他の移住で来た人達は蚕だな式の船に乗って来たが、私たちはその船の二等船客として扱われて各自に船室を供され、食事等も背広姿でサロン内でとり、身分不相応な待遇であった。

神戸を発つと、間もなく一九五三年の新年を船上に迎え、餅つき、その他の新年の行事が行われ、意義深い新年を過ごした。

航路はアフリカ経由の西廻りで、航海途中は各国の主要港に寄港し、貨物の積み下ろしを行い、最初に寄港したシンガポール港では私たち移住者にも上陸許可が出た。シンガポールは戦時中鉄砲を持って歩いた所であったため興味深く見学した。その後、アフリカの数ヵ所の港に寄港し、そのほとんどに上陸を許可されたため、アフリカ見物をしながらの航海であった。長途の旅で、途中嵐に遭い船酔いなどしたが、処女航海であったためか航海中は多彩な行事が行われ、比較的楽しい船旅であった。

・入植先は生命の危険があるところ

船は最後の寄港地、ケープタウン港に寄港し、ここでも上陸が許可されて街を見物した後、いよいよ待望のブラジルに向かった。神戸を発って四十五日の長い船旅を終えて、一九五三年二月十一日朝、キリストの像に迎えられてリオの港に入港した。

港には、戦時中航行が途絶えていた日本船が戦後初めて入ったことを聞きつけ、サンパウロ方面から新聞報道陣をはじめ、一般の在留邦人がわんさと押しかけて来て、船内はごった返した。

そして、久し振りに日本から来た同胞に会い、珍しいのか懐かしそうに話し合っているカップルが至る所に見られた。日本の話をするのが楽しみだそうで、戦時中や戦後の日本の状況を話したり、こちらの状況などを話し合う等、楽しい風景が見られた。また船の中には売店があり、その売店で日本食を買ったりする人もいた。そんな情景の中で、私たちがアマゾンに入植することを聞き、あんな所に入植するなんて気の毒だわとか、かわいそうにとかの囁きがあり、その上、翌日のある邦字新聞には、我社ではアマゾン入植者取材のため生命の危険を冒して記者を同行せしむる、と大きく書かれていた。これを見た私たちは、夜、直ちに緊急家長会議をし、新聞記事の件で「記者の生命に危険がある所に私たちが入植しょうとしているが、もしそれが真実なら、私たちは今のうちに入植拒否しよう」との不穏な空気が漂い、その真偽を確認するために代表者をリオに派遣し、現地受入責任者に会って談判することに決まり、朝を待った。ところが、翌朝早々リオから現地受入責任者及び、輸送監督、毎日新聞の記者、それに大使館の書記官がぞろぞろやって来たので、例の件について質疑したところ、「貴殿等は何を呆けたことを言っているのだ、入植地の拠点であるパリンチンスは近代的で大きな文化都市で、立派な政府がすべて管理している。現今社会に必要なすべての施設が完備されている立派な街で、貴殿等の先輩が大成功して貴殿等を待っている」と一喝され、這々の呈で引き下がらずを得なかった。そんなやりとりがあった後、入植について詳細な指示があった。

移住者は長い間世話になった「さんとす丸」に別れを告げ下船し

た。

リオまでは快適な日本船だったが、リオから現地まではブラジル船になるので、その船が来るまでの船待ちのため、リオ港内に在るイリヤ・デ・フロレス、日本語に訳すと「花の島」、と呼ばれる移民収容所に入った。収容所は、昔は汚くて有名だったらしいが、私たちが入った時は設備の整った居心地のよい施設で、ブラジル第一歩の印象としては申し分なかった。偶然にも、その収容所では、移住に失敗して帰国するイタリア移民の一団と居合わせたが、憔悴して身なりのよくない彼等と今着いたばかりの私たちが比較され、これが敗戦した日本移民だから、日本はブラジルでも優秀な移民としてこの国に貢献していると称賛され優遇を受けた。

ちょうどカーニバルの時期で、島では踊りで非常に賑やかであった。移民の中に柔道有段者がいたこともあり、新来の日本人だから皆柔道をするのだろうと勘違いされ、模範試合を所望されたので、朝までそれを披露し目伯親善に努めた。

ここで一週間余過ごした後、カンボスサーレスと呼ばれるロイドブラジル社の大きな海洋汽船に乗船した。この船も貨物船で、途中で荷物の積み下ろしをしながら航海したので、マナオスに着くまで二十日も要した。船がアマゾン河に入ってからは、ベレーン、オビドス、サンタレン、パリンチンス、イタコアチアラ、マナオスと次から次へと寄港し、その度に移住者は一、二家族ずつ下船した。我々は、移住協定前の移民なので植民地がなく、戦前の移住者の所に一、二家族ずつ世話になることになっていた。アマゾン移住地には、私たちを引受け

てくれる人がたくさんいたため、それらの人が入植している地の港に着く度に下船する。その中の大半がパリンチンスで下船した。港には大勢の邦人が出迎えていて、爆発が起きたのかとびっくりするくらいパパンと爆竹を打ち上げるなど大歓迎だった。私もここで下船したので、引受者（パトロン）　門氏の夫人が出迎えてくれた。しかし門氏の農場はパリンチンスから遠い上流にあると言ったので、その夜はここで一泊し、翌朝早くに門氏所有のボンボン機船でパリンチンスを出て、現地へと遡った。アマゾン河はちょうど大増水の真最中とかで、向こう岸の見えない海のような海原と、濁流が渦巻いている景観は雄大と言うよりも恐ろしく感じた。

　その激流の中を、船速の遅い小さなボンボン船は、流れに逆らわないように河の岸辺を蛇行する。増水中であるため、浮遊物が河一杯にどんどん流れて来る。中には流れに抉り取られた一町歩位もある土地が沈んで流れており、その木が流れて来るのだが、その中に蛇が住んでいたりする。それらの危険を避けながらボンボンと遡航していった訳である。しかし、ボンボン船であるため、行けども行けどもなかなか目的地に着かない。

非常に暑いので、そのうちに咽が渇き、飲水はどこかと尋ねたところ、飲水は河水を飲むのですと言われて絶句した。いくら何でも泥水を飲むことはできないが、我慢できなくなり、飲まない訳にも行かず、毒薬でも飲む思いで目を閉じてごくんと飲んだ。これがアマゾンに入って初めて飲んだ飲水で、その時の気持ちは今でも忘れられない。それが今では、アマゾン河の水は甘くて美味いなどと言えるぐら

いである。

パリンチンスを発って七時間程遡航した地点に、川幅百メートル程の支流があり、その支流をさらに五百メートル程入ったところで、「着きました」と言われたが、辺りを見渡しても水ばかりで、農場みたいな空地等それらしいものは何もなかった。

何かの聞き違いではないだろうかと思い、農場はどこですかと聞き直したら、やはりここですと指を差され、そこで日本を発つ前に抱いていた夢から覚めたのである。大きな農場で、その中にパトロン（雇い主）の大邸宅があると思っていたものが、何もない。増水で河が溢れてピタピタと低い陸地に流れ込んでいる川辺の水の中に、裸足でパンツ一つの丸裸の男性がポツンと立っているのである。その後方にパーリア（椰子の葉）葺きの建物がピタピタと水に浸って建っており、今見れば立派な家に見えるかもしれないが、日本から来たばかりだったため、日本の炭焼き小屋位にしか思えなかった。その遥か後方には、ジャングルを切り開いて耕地にしたと思われる明るく開けた場所があったが、その辺二倍にも既に濁流が満々としており、その水中には焼け残った枯れ木が所々に立っていた。

なんだかポカンとして夢から覚めたようで、もう声が出なかったのである。しかし、とにかく来たのだから早く下船して挨拶しなければならないと思ったが、パトロンとは初対面なので、一応日本を出る時新調した一張羅の背広を着て待機した。その服装ではぬかるみになった地上に下船できないので、急いで靴を脱ぎ、膝上までズボンをまくり上げ、裸足で下船したが、まくり上げた衣服にまでビチャビチャ

入ってしまい、全くその時は地獄に来てしまったと思ったほどである。裸のパトロンに挨拶をしたら、「門です、ごくろうでした」と挨拶があり屋内に招き入れられた。川辺にあったバラック建てが住家であり、屋内は二つに仕切られていて、片方は寝室らしく一メートル半程の高い床、他の方は土間となっていた。その土間にも水が入り始めていて、空箱を並べて床代わりにして、其の上に机を置いてあり、そこで今後仕事のことなどいろいろ話しがあったが、そんなことは一つも耳に入らず、とんでもない所へ来てしまったという思いで頭が一杯だった。夕暮れになると蚊の群集がぷうんぷうんと音をたててやって来て、顔や手足ところ構わずチクリとやるので、それを追い払うのに大忙しで参った。挙句には喋っている口の中にまで入り込んできて、噛んでしまった。

裸のパトロンの体には沢山蚊がとまっているので、「蚊がとまっていますよ」と言ったら、「蚊なんぞにかまっていたらアマゾンには住めませんよ」としゃあしゃあとしている。

とにかく仕事が遅れてジュートが水に潜ってしまい、それだから明日一目だけ荷物の整理を行い、明後日から早速仕事に就くよう指示され、これがまたショックであった。私たちのために用意したと言う住家に案内されたが、その住家はパトロンの住家から百メートル程離れたところにあり、屋根から壁、窓、戸、すべてパーリアでできており、釘は一本も使わずに全部シッポという山の蔓で縛ってあり、山小屋のような、それはそれで珍しい建物で、こう言ったら叱られるかもしれないが、戦後の日本でもこんな粗末な建物は見たことがなかった。

この住家内には真ん中にパーリアの仕切りがあるだけで何もないのだが、一方には高い板張りの床があり、他の一方は土間となっていた。その土間にも水が入り始めて、じめじめしているので、歩く所だけ板が渡してあった。私たちの中にはソルティロ（独身）のものも、家族を連れて来たものもいたが、その床の方でカザード（既婚者）もソルティロもなく雑魚寝した。

それでも、蚊帳を持って来ていたのでそれを張り、その中で過ごした。その夜はこの家で入植第一夜を明かしたが、「とんでもない所に来てしまった、今後どうなるだろう」など、いろいろな不安で頭がいっぱいになり一睡もできなかった。

入植地がそのような状態なのは、他に配耕なった人達の所も同様で、ある入植地などでは、荷物も開かずに、乗ってきた船が引き返すのに再び乗って他方に退耕するなど騒然となった。

・第一次移民崩れる

第一陣ということで、私たちの動静を取材するために、毎日新聞から記者一名、また、息子が移住するのだが、その移住（入植）先がどんな所であるのか調べて欲しいと言う、岡山の資産家から依頼された社会党の代議士一名、その他外務省の役人一名、計三名が神戸を出る船の中から私たちと行動を共にしていたので、船の中の様子などを逐一詳細に日本に知らせていたのである。それが、入植先が前記のようだったので、直ちに日本に報道され、日本では「第一次移住崩れる」と大きな見出しで報じられた。その新聞の切抜き同封で、現地人

の住んでいる所に住めないことはないはずであり、軽挙な行動は慎むようになどと留守家族からやかましく言ってくるので、進退極まるとは正しくこのことかと思った程である。私等はどのようにすべきか判断に迷った。私は野戦を大分歩き回った経験があるので少しくらいのことでは驚かないが、まだ若い女房に、こんな所に来てしまったと泣かれ困ったが、先輩が戦前から来てがんばって来た所に住めないと言うのもいけない、また、日本を出る時に、がんばってこいとか、しっかりやれ、と喧しく言われ、華々しく船出をし、神戸では厳重に訓示を受け、それでだめでした、と簡単に退耕する訳にはいかず、来てしまったのだからしばらく様子を見ようということで居残ったのである。

・動物たちと同居

そうして、早く仕事に掛かるようにと言われるので仕事に掛かったが、水の中の生活がまた大変なのである。アマゾン河は、増水期になると水がどんどん増えるので、毎日四、五センチずつ増えていくのだが、大増水だったその年は、バンガローの床にピタピタ水が入って来るので水浸しになるのである。そのため、住家の床を上げねばならなかったのだが、シツポ（蔓）で縛ってあるため、これは良いものだと思った。釘だと大変だが、シッポなので簡単に上げられるのだ。この辺りで水は止まるだろうと予想し、三十センチ位上げると、またピチヤピチヤし始め、また上げる。それを繰り返しているうちにとうとう二メートル以上の高い床になったのである。床下はごうごうと川が

流れているため家から一歩も出られず、トイレも洗濯も炊事も家に居ながらするのである。何でも軒下でできて便利で、しかもこんな水洗便所はないと冗談を言ったりもした。だが、時々炊事場で魚等を料理するので、料理屑や残飯を漁りに、大きなプラケ（電気鰻）やピラニアがのろのろとやって来て、女房たちが悲鳴を上げたりした。そういう時、「またやって来た」なんて包丁などを用意して置くのだが、「包丁は電気鰻だったらいかん」などと言う。そんなことがしょっちゅうあった。いくらかたってから飲めなかった水が飲めるようになり、ポッチという素焼きの瓶に濁流を入れ、泥を沈殿させてから飲むので、朝早く起きてその水を汲むのが私の仕事になった。

また水が増えて、いよいよ陸地が無くなると、犬、猫、鶏をはじめ陸地の動物すべてが、人間の住んでいる住家に集まって同居することになった。ある時は女房が行李の蓋を開けたら蛇が出て来て悲鳴を上げたこと、また昼寝していて屋根裏に目をやったところ、パーリアの間を蛇が鼠を追いかけてのろのろしていたこと。また夕暮れ時、部屋の中にあるパーリアの仕切り戸の裏に靴下のような黒いものが落ちていたので、それを女房が拾おうとしたら、大きな毒蜘味が出て来て驚いて腰を抜かしたこと。ある夜半、鶏の悲鳴が聞こえるので、また来たなーと懐中電灯片手に行って見たらビール缶大のスクリジュー（大蛇）が鶏を銜えて呑み込むところだった。スクリジューは大きい割には人間を襲わないのでテルサードで一刀両断に打ち切ったことなど。もっと吃驚したことは、まだハイハイをしてい二歳の幼児だった長男の添寝をしていたら、屋外の渡し板の上に洗濯物を干していた女房が

何か流れていると大きな声で叫ぶのに目を覚まし、見てみると長男がおらず、慌てて開き戸から外を見ると眠っている間はいはいして水中に落ちたらしく、十メートル位先をどんどん流れていくのを死に物狂いで掴んで助け青くなったこと、その他、正直なところ生きた心地がしなかったと言っても過言ではない。ほとんど毎日のように悲鳴を上げて驚くことがあって何もなかった目には一目が終ると、今日も一目寿命が延びたと胸をなで下ろした。

・ピンガの缶を水面に浮かせて飲む

入植三日目から与えられた第一番の仕事は、増水が早くて収穫が遅れたと言われている三、四メートルに伸びたジュートが、穂先五十センチ程出して水に没しているのを早く刈り取ってくれということだった。それがまた大変で、水深三メートル位ある所に潜って、根元から息の続く限り刈り取るのだった。一回や二回なら未だ面白いが、これを一日中繰り返していると、いくら赤道直下のアマゾンでも寒くなって震えるので、ピンガ缶を流れないように何かに縛り付けて水面に浮かせて置き、寒くなったらチビリチビリ飲んで体を温めて、また潜るのである。

毎日この仕事を続けていると、泥水なので目が霞んで来て体がだるくなり、夜も安眠できず不健康になったため、命が助かるか心配した位である。

しかし、これは、その年が大水であったため、なおさら酷かったのであり、普通の年ならばそれ程水はないものである。ジュートという

ものは、乾期で増水期に入る前に土地を整理し種を蒔き、水が増える従ってジュートが生育し、ちょうど水位が膝位になった時に刈り取り、そこに沈めるのが普通のやり方である。長い間同じ場所に住んでいると、今年はどの辺りまで水が増えるということが大体勘で分るようになり、どの辺りに種を蒔いたら一番良いかを決めるのである。その勘が外れると、ジュートが生育しきる前に水がきて、水に浸してしまうことになる。また、生育したのにまだ水が来ないということにもなり、こうなると、全長四メートルのジュートを約五十センチに束ねたもの、一把で約四十キロあるものを水の在る所まで担いで行き浸けなくてはならず、しかも、熱帯地なので裸で作業をし、刈りたてのぬるぬるした地面を歩くのは大変な重労働であった。あまりの苦しさに、パトロンに、「そこら辺に寝ている牛に引かせることができないのか」と言ったところ、「アマゾンの牛は仕事をしません」とあっさり言われ、では「牛が寝ていて人間が働く訳ですか」と不平を言ったりした。うまくすれば、前に述べたような酷い目に遭わなくてすむのだが、時々予想が外れ、そのような過酷な仕事をしなくてはならないことが度々あった。また、収穫はほとんど水に浸かってやる仕事であるため、作業着等は乾く暇もなく腐ってくるというような、不衛生さであった。

それらの作業を行うのにトラクターを使えば、と思ったが、一輪車もないような所なので、トラクターどころではない。しかし、過酷な労働に耐えかねた私たちは、面積だけを広げようとするパトロンに機械農業を進言したが、「機械に替わるような現地人がたくさんいるの

だから、機械など必要ない」とのことだった。

ジュートの間の草を取るのも、また辛い労働であり、ジュートの植わっている水の中に潜り込み、ジュート畑の草をテルサードで取るのである。草刈鎌等がないので、草取り、ペイシ（魚）料理、野良仕事、山切等、すべてテルサードで行うのである。

入植当初一番困ったことが食料である。日本から来たばかりで、現地食に慣れておらず、ペイシはアマゾンだから豊富にあるのだが泥臭くてなかなか食べられず、野菜がないのに特に困った。土地が水没しているので何もなく、パトロンが私たちのために保存してくれていた一日一切れの南瓜と、ラッタ（缶）に植えた葱三本が一日の野菜であった。勿論パン屋が在る訳でもなく、メルカード（市場）が在る訳もない。米は陸稲の一番ポロポロしたものであるし、コーヒーとボラッシャという塩味のついたビスケットだけだった。本当に何もなかったが、砂糖があまり豊富ではない国から来たせいか甘いコーヒーだけよく飲んだ。食料がないため本当に悲しくなった。パトロンが明日は仕事頑張ってもらわなくてはならないので弁当を持って来ると言ったので楽しみにしていたら、ボドーという鎧を着たようなグロテスクなペイシの生きたのを紐で尻尾を縛りぶらぶらと下げ、それとファリーニヤの入った空き缶を持って来るのである。昼飯の時間になると、そのペイシを引き上げて焼き、美味いと言って私たちにくれるのだが、とても食べることはできなかった。

そのようなことで、十八家族来たうち日本へ帰ってしまったのも何家族かあったが、住めば都で私たちは残った。と言うよりも、逃げよ

うとしているうちに、このような気分ものんきで良いし、ペイシも美味いと思うようになり、これもいいものではないか、というような気持ちがほんのり出始め、もう少し様子を見てからといっているうちに逃げ遅れてしまったようなものである。三十四歳の時に来たが既に八十一歳を迎えた私である。

今では、アマゾンの苦労をした移住者などと言われ、恥ずかしくてどうにもならないものだが、その当時の心境は貴重なものである。コーヒーの大農園で働くのだと夢見てきたが、夢はどこへ行ったのか。住めば都で、「緑の地獄が緑の天国へと変わった」と仕方なく言っているそんな現在である。

その後私たちが困ったのは、植民地をもたず、パトロンとの二年間の契約が過ぎた後、ほとんどの移住者がサンパウロ方面に散らばってしまったことである。大半は日本に戻った。現在、西部アマゾン日伯協会に勤務している辻田氏のお父さんとも一緒であった。その他アレンケーに一家族いるようなもので、居残ったのは私一人になってしまった。

契約が終わり自由になった時、私も南伯へ行くつもりでいたが、パリンチンスはマナオスの下流なので、ここを一度出たらアマゾナス州の州都であるマナオスを見ないでしまうと思い、一度だけ見てみようとマナオスに来た。それは立派な町で、ポルトガル語が不自由であるにもかかわらず町を見学しようと市場へ行くと、野菜が非常に高く、また少なかった。そこで、ここで野菜売りをしたら良いのではと思った時、ちょうどそこでアマゾンの草分けと言われている三輪さんとい

う方とお会いし、お願いすると、野菜の作り方から販売方法まで教えてくれるというので、喜んでここで野菜作りを始めた。しかし、植民地がなく、友達もあまりおらず、自分一人で現地人の中を放浪しながら過ごしてきた。健康には自身があったつもりが、とうとう現地のアマレロンという病気にかかり、まわりは現地人ばかりで言葉も分らないため困りきったこともあった。その時、やはり日本人は日本人同士で一つの植民地のある所でお互いに助け合って生きていくことが絶対必要だ、とつくづく感じたのである。

最初は不便であっても次第に発展し、やがては町になり、町から都市になるという植民地が理想たが、アマゾンの田舎、特にバルゼア地帯は、地形の関係で、そこに集落を作るという所ではない。あくまでも一人である。そのため、子供が学習する年齢になっても、学校がなく、教育を受けさせることができなかった。現在では学校もできているそうだが、増水期には水の中にぽつんと浮かんでしまい、そういう所であるため先生としていく人もいない。学校は建ててもらったが、開店休業という形で、使用されず今でも残っているそうである。

ジュートも当時は日本人が作ったもので、華々しく日本人をはじめ現地人も多くの人々が栽培し、ここの産業に貢献したが、その後化学製品の進歩により、それに押されてジュートの需要が少なくなり、値段が安く採算が合わなくなったことや、不便な田舎に住む人が少なくなり、社会が発展すると同時に人間の生活様式も変わり、日本人の中でもジュートを作る人が年々減り、現在では現地人でもジュート生産者は極まれである。

このような状態であったため、アマゾンに来た沢山の移住者は苦労をしているが、ジュート、大水の年というものを経験した者はあまりいないと思う。

〔執筆者略歴〕

羽田重吉　（はだじゅうきち）

一九一八年、新潟県に生まれる。

一九五三年、戦後第一回移民（ジュート移民）としてアマゾナス州ウルクリツーバ郡パラナー・デ・コンプリードの南政耕地に入植。ジュート栽培に従事した後、一九五五年、マナオス市対岸カレーロ郡に転住し、野菜栽培に従事。一九五七年、ソリモンエス上流ジャノウカ地区において農場造成のため再転住した後、一九五九年にマナオス市に移り、商店経営の傍ら日伯協会会長など日系人社会活動に携り、現在に至る。

■マナオス～イタコアチアラ街道道路工事――■

松田　和夫

・マナオス～イタコアチアラ道路計画の歴史

まずこの道路の歴史について調べて見ると、前世紀の終わり頃アマゾナス州出身の技師トルクアット・ハビエル・モンテイロ・タパジョ

ス氏が、州都マナオスとアマゾン河中流地帯にある都市イタコアチアラ間を結ぶ鉄道の建設を考え、現地を調べたのが始まりであり、その結果をこの技師が亡くなる少し前にペンをとって当時の州知事であったフィレト・ピーレス・フエヘイラ氏に「植民と移民」という題で報告書を渡された。その中でこの技師はアマゾン河流域の低湿地地帯から、アマゾナス州の奥地地帯にある高台地地帯に移民を送り込んで開発することを最初に提案し、この書物はアマゾナス州の公式記録所に納められているが、その時代には一般には発表されなかった。技師トルクアット・タパジョス氏は他のアマゾナス州の人たちと共に、この鉄道建設により高台地帯を征服してアマゾナス州を大発展させる大夢を見ていたのであった。

ところで初めの路線はどのようにして決められていったかを調べると、一八九九年、時の州知事ハマーリョ・ジユニオール大佐の命令により、州都マナオスよりイタコアチアラへ、それからアマゾン河の少し下流に位置するパリンチンスへ、アマゾンの大ジャングルの中を通って電話線を引くための小道を作れという契約が、セバスチアーノ・ンヨゼ・ディニス氏とアマゾナス州政府の間に結ばれ、一八九九年十一月二十六日付のアマゾナス州公報第一七二八号で発令され、これが現在マナオス～イタコチアラ道路（ＡＭ〇一〇号）の基本線になった。この小道は一九〇一年七月九日にやっと完成した。それから十八年後の一九一九年、まだ大学生だったドルネーラス・カマラ氏がブラジル北東部の乾燥地帯で苦しむ人達をアマゾナス州へ連れて来て助けよと発言したことが公式に一般の人達に発表され、マナオス～イ

タコアチアラ道路が必要であると一般に認められるようになった。

それからまた、年月が経ってからの一九二六年六月十四日にエフィジェニオ・フエヘイラ・サーレス氏がアマゾナス州知事であったときに、アマゾナス州議会にこの道路建設についてメッセージが送られたが、そのころの小道の全長は三百三キロメートルで、二メートル幅であり、労働者が百三十三日かかって開いた。その沿線には天然のゴム林やコパイーバと呼ばれる油状の樹液がとれる木、沢山の種類の立派な木材等があることも知られていたが、エフィジェニオ・フェヘイラ・サーレス州知事は一九二九年、彼の最後の州政府の年に州議会にメッセージを送り、これまでにいろいろ開かれた小道は路線決定上それぞれの意味があり結構だが、結論としてアマゾナス州都マナオスからロライマ州都のリオブランコ（現在はボアビスタと呼ばれる）へ向ける道路の三十五キロメートル地点から分かれ、アレイショとパラケクアラの湖へ向かい、それから既に開かれている電話路線とペドロ・デニスが開いた小道などを利用して、マナオス～イタコアチアラ道路線を技術的並びに経済的な見地から決定すると発表した。そして一九三〇年にドルバウ・ポルト氏がアマゾナス州知事になったときに、ブラジル国中全体に新しい政治制度が植え付けられ、革命が起き、また、新しい政治方法に変更され、ブラジル人全般的によくなることを期待されたが、特に交通や通信問題の解決については政治から遠ざかって行き、一九三〇年から一九四〇年の十年間は政府関係の情報にはこれらの問題についてあまり話されないようになり、従って、アマゾナス州においてもマナオス～イタコアチアラ道路の建設のこと

は忘れられた。

一九三二年にジェトゥリオ・バルガス大統領がアマゾナス州を訪問したときに、イタコアチアラよりルイザ・メンデス・デ・パスコンセロス・ジアスという学校の先生が先頭に立ち、皆がサインをしたマナオス～イタコアチアラ道路の建設についての嘆願書を持って来、マナオスにおいてバルガス大統領に直接手渡し、この道路がアマゾナス州の発展にとって如何に重要なものであるかを伝え、連邦政府の緊急問題として取り上げるようにとお願いしたが、その話だけにとどまった。

またそれから八年後の一九四〇年にマリオ・イピランガ・モンティロ教授は農業雑誌第三六号でこの問題がアマゾナス州では相変わらずのんびりしていて解決しないことをひどく嘆いて州政府に訴えたが、残念なことに一九四〇年から一九五二年の間相変わらず道路問題は進行せず中止のままであった。

一九五三年の自然現象により、アマゾン河の本流はもとより沢山の支流もかつてなかった大洪水に遭い、この河の流域の低湿地帯や湖地帯は短い期間に水に埋もれてしまい、作っていた農作物、特にアマゾナス州にとって重要作物であったジュート麻は、その大部分を失った。その他、流域のあちこちに飼われていた牛を高台地へ移すだけの時間も場所もなく、多数の牛が死に、大損害となった。

ここで少しアマゾンの雨について述べると、アマゾンは常夏と言われるのだが、雨は毎年十二月頃からよく降りだし、翌年の六月頃に少なくなるまで約半年間続く。その後乾燥期になり雨は降らなくなるが、河の水面は六月の末に最高水位になり、その後徐々に減水して十

一月の初めには最低水位になる。その水位の差は平年では十二メートル位であるが、これはアマゾン河では日常茶飯事で、大洪水とは言わない。一九五三年には水位の差が十六メートルにもなりアマゾン河の低湿地帯に住む人達は思いがけない苦しみに遭ったと共に、それから水が引くまでの間高台地に逃げ込んで行かなければならなかった。

そこでアマゾナス州においては、州都のマナオスやその下流にあるイタコアチアラが、アマゾナス州の政治、経済、社会面において最も重要なる街であり、その奥に永遠に眠る様にある高台地帯を通って結ぶ道路の建設は、先に述べたようにトルクアット・タパジョス技師の鉄道建設の大夢であり、また、その他にも州の発展の為や、再び一九五三年の大洪水で低地帯に住む人達が悩んだ様な苦しみを起こさない為に、エフジェニオ・サーレス州知事や、多くのアマゾナスの人たちが道路建設の必要性を叫んだ事が思い出され、その実現を早めるべき事の必要性が又認められたのだった。

・道路建設の予算

ところで、道路建設には、多額の費用が必要になるが、その費用をどのようにして都合するかが政治の大問題になる訳であった。

アマゾンでは前世紀末から今二十世紀の始め頃までは、ゴムの大景気時代でありアマゾナス州の経済は裕福であったため、イギリス人の技師たちがマナオスの都市計画をし、上下水道、電気、市内電車やメインストリートを造り、一万トン級の外航船が年中何時でも横付け出来るマナオス港の浮桟橋を建設したが、このゴム景気は終わり、

ジュート麻の景気が出たがインドやパキスタンから出るジュート麻に世界市場で押されてしまい長続きせず、アマゾナス州の経済は非常に苦しくなっていた。

幸いにブラジル国中全体で道路の建設が必要になり、エウリコ・ガスパー・ドゥトラ（一九四六年～一九五一年）政府の終わり頃に、国中で消費されるガソリンやその他の燃料の消費税が基礎になって各州や郡の道路予算が連邦政府から出る様になった。アマゾナス州には道路公団がすでに出来ており、この公団が年々道路予算の分け前を受け取っていたがマナオス～イタコアチアラ道路の建設にはあまり熱が入っていなかった。

一九五四年に、これまで永年の間政権をとっていた政党派の候補者を破ってアマゾナス州知事になったプリーニョ・ラーモス・コエリョ氏は、こんなことではいけないと考えて道路公団組織を変更し、アマゾナス州政府直属のアマゾナス州道路を作り始めた。そしてマナオス～イタコアチアラ道路の建設に熱を入れ、パラー州のある請負会社と契約して仕事を始めさせた。

・私のアマゾン移住までの経緯

さて、ここで題目にある一日本人アマゾン移民とマナオス～イタコアチアラ道路がどの様な関係にあったかを明らかにしなければならない。

私、松田和夫は一九二七年（昭和二年）一月一日に松田金松の三男として、愛知県知多郡西浦町刈屋、現在の愛知県常滑市刈屋町で生ま

れ、一九四五年　（昭和二十年）、大東亜戦争が終戦になる前に名古屋工業専門学校土木科、現在の名古屋工業大学に入学し、一九四八年（昭和二十三年）同校、同科を卒業し、その後ある請負会社、それからまもなくある私鉄会社に一ヵ年ほど勤たが会社から任命されず、どうも面白くなく三度目に職先を変えて名古屋市役所の水道局拡張課へ一九四九年（昭和二十四年）　六月から勤めた。

その当時の日本は終戦直後の時代で日本経済は非常に苦しく、社会は大変に混雑しており、日本国は米軍に占領され、米軍が命令する通りに日本の政治は行われなければならなかった。

役所内では、当時の課長は名工専の先輩であり私の伯父の後輩であったので、非常に親切に指導してくれ、課内の人達ともすぐに顔見知りになり、その中でも毎日机を並べて最も親しく働いたのは西尾武喜氏（後に名古屋市水道局長、名古屋市助役、その後三度名古屋市長になられた方）　であった。市役所に勤めだした当時は、臨時の職員であったが四年後に名古屋市役所水道局の技術吏員に任命された。

一九五三年（昭和二十八年）　の春、市役所の医者の紹介で名大の医者に蓄膿症の手術を受け、名大病院の大部屋に入院中、よく私のベッドの前を通る女の人がいた。最初は別に気にも留めなかったが、あまりにもしばしば通るので気をつけてよく見てみると、十九年前、小学校２年生のときの担任教師であり、お互いにすぐ分かり、奇遇にびっくりした。同じ大部屋の角に、胃の大手術をされた先生のお姉さんが入院されており、そのお見舞いのためによく病院に来られるとの事で、「四日市の住所を教えるので、病院の退院後、役所のひまな時に

遊びに来て下さい、なつかしい昔話でも致しましょう」と言われ、ある日曜日に先生のお宅を訪ねた。そのときに、先生から、ブラジルのアマゾンに弟が住んでおり大牧場主になっているとの話を聞き、「どうですか、アマゾンに行って見ませんか、アマゾンに行けばすぐに金持ちになれますよ」とのうまい話を聞かされ、少しびっくりしたが、後でよく考えて返事をすると答え、その日は別れた。

そこで役所内で最も親しい西尾氏に、他人には内緒で意見を聞いたところ、アマゾン行きの決定は君の自由だが、ちょっと面目そうな話だねと言われた。その当時、私は西尾氏と共に水道局のある上水道鉄管工事現場に配属されており、鉄管のつなぎ目に溶かした鉛を流し込んでつなぐことや、地盤が悪い所には厚い板を囲んで両側の土崩れを防ぎ、そして立て込み内を排水して基礎地盤を作り、鉄管を敷設するところを毎日見ていた。

下宿に帰ってから一人で役所勤めの将来を考えたのだが、役所内には終戦後外地から帰られた元職員たちもおり、上の方は一杯であり何時になったら私に順番が来ることかと思うと心寂しくなった。それで先生から聞いた話を信用し、アマゾン行きを一人で決め、先生のお宅を訪た。実は、そのとき私は役所内の試験を通って技術吏員に任命されたばかりで、自分でも「惜しいなあ」とは思ったがアマゾン行きの決心を先生に話した。

しかし、どの様な手続きをとったらアマゾンへ行けるか考えがつかず、先生が、今外務省がブラジル移民を募集中で外務次官は上塚代議士であり、この代議士は元アマゾン高等拓殖学校の元校長先生で、私

の弟もその学校を卒業してアマゾンへ行ったので、上塚外務次官をお尋ねして、お願いして見ようと言われた。上塚外務次官は、現在一人で移民としてアマゾンへは送れないが、家族移民(家族内に十八歳以上の者が二人以上いること)ならアマゾンに住んでいる私の元教え子の所へ行ける様に特別の便宜を図りましょうとのことだった。そして今、外務省ではブラジル移民計画としてアマゾン河口のパラー州州都ベレン市郊外と、マラジョー島と言う所へ、胡椒か野菜栽培を目的に移民を送る計画と、マットグロッソ州のドラード地区へ移民を送る計画があるがという訳で、その移民計画に入れてもらうために、まず構成家族を作ることになり、すでにアマゾンに移住している人の義兄に当たる人がアマゾン移住を希望しており、ブラジル政府より永住査証を取得する目的で家族の構成をブラジル政府が認める形に作るため、この人と養子縁組をし、三重県のある病院の看護婦だった人もアマゾンへ行きたいとのことで戸籍上私の妻となってもらい、移民手続きの書類を作成し、外務省のブラジル移民計画の中に入れてもらう許可が下りた。

・ブラジル到着

一九五三年十二月二十五日、クリスマスの日に神戸港を移民船アフリカ丸に乗船し、名古屋港を経て横浜港を十二月二十八日に出帆、祖国日本とお別れした。

三十四日後の一九五四年二月一日、ブラジル国のベレン港に到着した。船は埠頭に接岸出来ず、十キロぐらい沖合に停船し、十一家族が

はしけにてベレン港に上陸し、私達一家族だけがアマゾン河をブラジルの商船で一週間ほどのぼり、アマゾナス州のバレリニヤ郡の田舎［先生の弟は一九三四年（昭和九年）入植］に夜到着した。

この商船は商用を済ませるとすぐ上流に向けて行ってしまい、そこには電気もなく、私たちは先生の弟であるH氏の家に通され、石油ランプの明かりの下でH氏に到着の挨拶をした。

私たちの三人の部屋は別棟の中に準備してあり、大変な長旅で疲れておられることでしょうから休んで下さいとのことで、それぞれ石油ランプを一つずつもらって部屋に入り、体を休めようと考えたが、頭の中に色々なことが浮かんで来て、とても寝付かれなかった。

そして翌朝、明るくなると同時に部屋を出て、いったいどんな所だろうかと見回すと、他の二人も同じ様に考えたらしく、お互いに顔を見合わせたがその瞬間には何も言葉は出なかった。と言うのは昨夜、私たちが商船から下りたときはかなりの人達がいたのに、今朝になって見ると家の近くにはたった一軒ヤシ葺きの家が見えるだけで、当たりは全く静かであり、あの人達はどこに住んでいるのであろうかと不思議に思った。日本で名古屋の大都会に住み慣れていた者にとっては、すぐにえらい所に来たものだと考えさせられた。私の先生のお話では、H氏は大牧場主であるとのことだったが、家の周囲には牧草らしき草はあったが牛は一頭も見えず、夕方に牛が集められる柵の中を見ても一頭もおらず、おかしいと思ったが、後でH氏から聞いて午たちはすでに柵から出て遠くにある新しい牧草を食べに行った後なので一頭も牛がいない訳が分かった。

その時期、アマゾン地帯では年中雨が降る時期で家の前の川べりの水面を日々注意して見ていると水位がぐんぐん上がって来て家の軒先にまで近づいて来、日本では想像出来なかったことばかりでびっくりした。

私たちが最初にした仕事は、朝早くコーヒーと塩味だけのビスコイットの朝食を済ませた後、大きなカヌーにH氏と私たち二人と数人の使用人（現地人）が乗り、ジュート麻の畑に行き、ジュート麻をかまで刈り取って直径二十センチ位の束にして縛り、畑の中の低地で河水がたっまっているところにその束を積み上げ、その四方に長い棒を立て、この束が水に浸かったときに浮かび上がって河水に流されないようにその上に横棒をのせ、その棒を縦棒に縛り付けることだった。それを十数日間水につけておくと、麻の表皮は柔らかくなって来る。その柔らかくなった皮と繊維を水中に潜って引き上げ、その近くに浮かべてある大きな木材の上にのせ、たたいたりして柔らかくなった皮の部分をはぎ取り、水にたたきつけたりして洗い繊維だけにして家の周りに作ってある柵にかけて乾燥させ、それを五十キロ位の梱包にして月に一度ぐらい家の前を通る商船に売るのだった。

アマゾン河の水が増水して来ると岸の土が水の力で削られ、その土が河の水に流され、日本の河の様に澄んだ水ではなく濁った泥水になった。ジュータ麻の刈り入れ時の人夫たちはのどが渇くとその泥水を飲むが、私たちも他に飲み水がないのでその水を飲んだ。

ジュート麻の収穫時には陸地はほとんど水没し、アリが麻に登って丸くなって野球のボール位の大きさになるが、それを切り倒すと私た

ちの体に登ってきて刺し、このアリの名前が「火のアリ」と言われるくらい刺された後が非常に痛かったのだが、当時はまだ日本から持って来た大夢は覚めず、元気を出して仕事にがんばったものだった。移住するために便宜上妻になり一緒に来た人の仕事は、この家の女中仕事や炊事だった。日本にいたときの約束どおりこちらについたらすぐに別れるとのことだったので、それぞれ日本の家に連絡して離縁の手続きをし、私も養子先より戻って松田姓に戻るように依頼した。

こちらに着いて半年位経過すると到着直後の張り切った気持ちは段々と弱くなり、ポルトガル語も少しは理解出来る様になった。あるブラジル人から、一九五三年、私共が入植する前の大洪水でH氏は大損害を受け、私たちがベレンの港から乗って来た商船の会社に沢山の借金があることを聞かされ、私たち三人が日本で聞いた話と現地での実生活とは大変違っており、えらい所に来たものだと三人でこっそり話しあった。その後H氏の義兄に当たる人はとうとう辛抱しきれず、（この人は名古屋で小学校の先生をしていた）彼の伯父宛に手紙を書いて実状を訴えたのだった。この伯父という人は当時の外務大臣だった岡崎氏と高等学校時代の同級生だったそうであり、直接大臣に「実は私の甥がアマゾンの田舎にだまされて送り込まれ、とんだ苦労をしている」と話され、外務大臣の命令で帰国の特別許可を出すとの通知を受け、ある日河船に乗って行ってしまった。

そうすると残った私たち二人も心細くなり、寂しくなり、まもなく看護婦さんも「日本を出る前に聞いた話はこんなのではありませんでした」と言い、私も日本に帰ると河船に乗ってベレンへ行ってしまっ

た。

それからも毎日泥水を飲みながら、名古屋にいたとき飲んでいた木曽川のきれいでおいしい水を思い出していた。それまでの一ヵ年間に二度もアメーバー赤痢にかかり、幸いに日本人のベテランの医者がいる医院で手当をしてもらい一命を助けられたが、一時は非常に悲しい思いをした。日本を出るときに私の先生からお金は持って行かなくてもいいとのことを聞いていたので、私の手元にはたった一つの五円玉があっただけで、その他には日本で勉強したときの本類と市役所をやめる時にもらったお金で買った百科事典と現代小説文集だけだった。

しかしながら、今更残念に思っても仕方がないし、男としておめおめ日本に逃げかえるのは恥ずかしい話だと悩んでいたとき、時のバレリニヤ郡長が私の入植した所に来て、私に、おまえは日本で何をしていたのか尋ね、私に代わって先生の弟のH氏がこの日本人は土木技術者だったと言ったところ、郡長は今一度私の顔を見つつ大笑いして日本の技術者がジュート麻の刈り取りをしているのかとあきれ、マナオスへ行ったらおまえの適職がきっとあるだろうと言われた。しかし、その当時河船に支払う船代さえなかった。それからしばらくして、その話をある日本人にしたところ、私の所で少し働いたら、マナオス行きの船賃ぐらい都合すると言われたので、その日本人の所で半年ほど働いてマナオスまでの船賃を貯め、一九五五年八月にマナオスへ職探しに出かけた。

・マナオスへ

初めて見るマナオスの街は、かつてゴム景気時代にイギリス人の技術者たちが都市計画をして造っただけあり、大田舎から来た者には実に立派な大都会に見えた。

の大洪水の後にマナオス市の住民が急激に増加し、広がったために、道路を作ることが必要であり、アマゾンの一九五三年郊外に街が一九五四年の選挙で当選した新しい州知事はマナオス、イタコアチアラ間の道路建設が長年の夢であるが、自分を当選させてくれたマナオス市民に対するお礼の意味からも、市内の道路網の整備が最も急を要すと考えていた。すぐにも道路の拡張工事や新たな道路の造成に取りかからなければならない状態であったが、アマゾナス州の経済状態がすぐに工事を始めることを許さなかった。

　そのような時期に私はマナオスの街に職探しに来、ある日職を探しながら街を歩いているときに日本人の青年に出会い、話をしたところ、この青年はベラビスタ移住地　（マナオス市の対岸に位置する移住地で、日本人の集団移住地であった）　に入植したが、面白くないのでサンパウロに行きたいと思いマナオスに出て来たと言い、とりあえず私の下宿屋の女主人が顔が広いから相談してみたら良い職が見つかるかも知れないと言うので、早速そこに連れて行ってもらい話をしたところ、州知事の、秘書官長と親しいから電話をしてあげると言われ、早速二日後に州知事の官邸に来たら知事にあわせてあげるとのことになった。びっくりし、うまく仕事が見つかれば良いがと宿に帰ってからも心配だった。私が泊っている木賃宿の主人は歯医者だったが、その人から州の道路局へ行って職を頼んでみたらと言われていた

ので、事前に辞書を持ち、少しばかり話せる英語とポルトガル語を混ぜて道路局長に就職の件をお願いしていたのである。

・アマゾナス州道路局へ就職

州知事の秘書官長に指定された日の午後、早めに州知事の官邸を訪ね、立派な部屋に通され、しばらく待っていてくれと言われたので待っていると、その後すぐに何人かの人たちがこの部屋に入って来て、それぞれの椅子に腰掛け、私はと言うとおどおどしてなんと州知事にお願いしたら良いかと大変心配しながら部屋の隅の椅子に腰掛けていた。しばらくして部屋の奥のドアから、一人の背が低く痩せて度の強いめがねを掛けた人が入ってくると、部屋にいた人たちは皆立ち上がったので私も立ち上がったが、まさかこの人が州知事であるとは思わなかった。しかし、他の人たちの様子を見ると、この人が州知事であることがすぐに分かり、最後に私の番になったとき緊張したためにすぐには言葉が出なかったが、知事のほうから手を伸ばされ、私に如何ですかと言われ、見ると同時に「ああ分かった君のことは道路局長より聞いて知っているが働きたいか」と言われ私はハイと返事をしただけだった。州知事はこれから道路工事の現場を視察に行くが君も良かったら一緒に行くかと言われ、私はまたハイとだけ返事をした。この部屋の横側のドアから外へ出た所にオースチンの中古の乗用車が停まっており、さあこれで行こうと車のドアを開け、私に乗りなさいと言われ、自分はさっさと運転席に座ると、もう一人カメラを持った人も乗り込んで来て州知事、自らの運転で工事現場へ向かった。

後でこの中古のオースチンは州知事の自家用車で、もう一人この車に乗り込んだ人は新聞記者で、工事のレポートを新聞に載せるために工事現場へ行ったのだった。工事現場は官邸から近い所にあり、深い谷を埋め立てて新しい道路を造り始めていたが、まだ工事を始めたばかりだった。そして州知事の車が現場に着くと、沢山の市民が車の側によって来て、プリーニョ、プリーニョと叫ぶ中を現場主任がその人たちをかき分けて州知事に挨拶をしに来た。州知事は現場主任に、この日本人は土木技術者で働きたいと言っているので、試験的につかってみよと命令し、その翌日一九五五年（昭和三十年）十月一日から私はアマゾナス州道路局に勤め始めた。

当時のアマゾナス州道路局

私は一日本アマゾン移民で、ブラジルのアマゾナス州政府に勤めるために来たのではなかったし、外国人であり日本の技術者であること

がブラジルで通用する証拠は何もなく、当時マナオスには日本の在外公館すらなく、私を雇ってくれたプリニオ・ラーモス・コエーリョ州知事に永久にそのありがたさを感謝すると共に、日本の技術者であることを仕事の上で示そうと決心した。

ところでこの現場の主任は技術者ではなく、技術的なことは何も知らなかったので、私は谷底の地盤検査をし、排水管ほどくらいの大きさのものが必要か、地図でこの谷底に流れ込む最大水量をマナオスの最大雨量を調べて計算し、盛土の高さにより排水管の直径の大きさ、本数などを現場主任に話し、準備をするように言った。現場主任は州知事に排水管の準備を話したところ、知事は昔イギリス人技師が使い残した上水道用の直径一、一メートルの鉄管が沢山河辺に放ってあるからそれを使用せよとの命令をされ、それを使用するのはもったいないと思ったが、まず谷底に厚板で立て込みの幅と長さをしたて、その中を排水し、わり石を敷き、その上に砂利を敷き、厚さ二十センチのコンクリートを打ち込んで地盤工事を造成し、その上に例の鉄管を二列に並べた。

話はそれるが、名古屋市役所の水道局の鉄管工事現場で働いていたので、毎日見ていた鉄管工事は頭に残っており、鉄管のつなぎ目に厚い布で作ったバンドを掛け、それを締め付けるためにバンドの終わりに小さなボルトがつけてあるので、それをバンドの先につけてある穴に通してネジを．締め付けて行き、ここに溶かした鉛を流し込んで管をつなげて行くのを思い出し、州知事が現場視察に来たときにやって見せたところ、知事は昔イギリス人の技師が鉛を溶かして鉄管をつな

げたと言う話を聞いたことがあったが、今初めてそれを見たと喜ばれ、すぐこの日本人を州の道路局の技師補として六ヵ月の労働契約をせよと命令し、私は契約書にサインをした。

その後盛土も高くなり工事も完成に近づくと、州知事の反対党派の連中が今に見ていろアマゾン河が増水し、大雨が降れば盛土はすぐ崩れ落ちるぞ、州知事は無駄金を使っていると新聞で悪口を言っていることを知り、それでは今一度日本の土木技術者としての能力を見せようと考え、盛土が崩れないように土羽面をよく突き固め、五十センチ間隔に芝を埋め込ませ、木で作った串で盛土に止めて滑り落ちないようにし、本来ならセメントで側溝を作るところを時間がなかったので板で側溝を作り、道路面に落ちる雨水を集めると共に、その水を盛土の一番低いところから下に落ちるように板で溝を作った。その後、大雨が降ったが盛土は少しも崩れず、その度に芝は広がって根づいて行き、反対党の面々も次第に黙っていった。

そのようにして他の所も工事を進め、マナオスの中心から郊外に行くのにも大回りをする必要がなくなり、これらの道路は新道路と呼ばれバスも走るようになり、マナオスの市民から喜ばれ、州知事の信用と人気はますます上がっていった。

・マナオス～イタコアチアラ道路工事

そうして私がアマゾナス州道路局に勤めだしてから一ヵ年の月日が経ち、その間マナオス市内の道路の拡張工事をして過ごしたが、一九五五年よりイタコアチアラ市からマナオスに向かって道路建設をしか

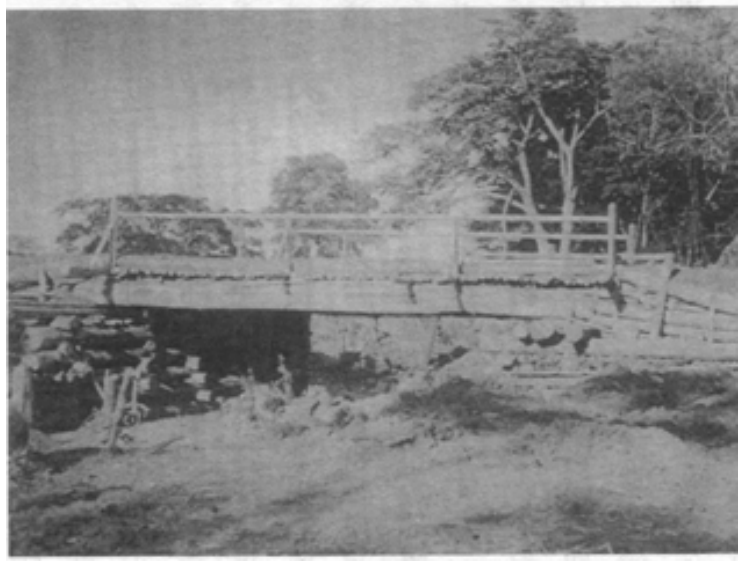
けていたパラー州の或る請負会社が、わずかの工事をしただけで一九五六年に破産してしまい、アマゾナス州道路局との契約を破棄してしまった。そこでプリニオ・コエリョ州知事はマナオス～イタコアチアラ間の道路工事はどうしても継続して行われなければならないと決定し、州道路局の直営工事として行えということになり、州知事の指令で私は一九五六年十一月早々、土木機械を積んだ船に大勢の職員をつれてイタコアチアラ市に向かった。

私に任された仕事は道路予定地の測量、排水管の敷設、大小さまざまな川に木材で仮設の橋を作ることで、すぐに現場主任になる責任技師を送るからとの事であった。私たちがイタコアチアラに着き、船から土木機械を降ろすのを見て、イタコアチアラ市民は今度こそ本当に道路を建設するだろうと大歓迎をした。

早速連れて行った測量隊員と共に測量を開始したが、街をはずれると間もなくアニンガー地帯と呼ばれる湿地帯になり、測量隊の人足たちは顔を見合わせてこの湿地帯には大きなヒル、ワニ、水蛇や電気ウナギ等がいると言って入りたがらなかったので、ようしそれなら私がまず先頭に立って湿地帯に飛び込んでやれと一本の棒を杖として飛び込んだ。少し遅れて測量隊の面々も渋々入り込んで来た訳であったが、私たちが大戦中に受けた教育を思えばこんなことぐらい何でもなかった。

この湿地帯をテープで測り、その延長距離を知り、土木工事班が埋め立て工事をするときにその埋め立て幅を示すために二列に長い棒を二十メートルおきに設置し、その棒に盛土高を示すための赤く塗った木

片を釘で打ち付けて目印にした。この湿地帯は千六百メートルあり、その向こうに普通の土地が続いていた。前に工事を請け負った会社の技師が置いていった道路の予定図を再検当し、私自身がトランジットを覗き、測量隊員を使って二十メートル毎に道路の中心線に小さな杭を打ち込ませ、その中心点に小釘を打って行く仕事が道路の平面測量であり、いくらかの距離が進むと各点の高さを測量する。この仕事でレベルという測量器械を使うが、全て私が覗き、野帳に記帳してゆき、後ほどそろばんを使って各点の高さを計算する縦断測量を行った。



また各点の土地は右側と左側では中心点と比較してどの様に傾斜しているかを測るのが道路の横断測量で、私たちが作って

いる道路幅は十メートルなので、特に傾斜のきつい土地や高い盛土を必要としている場所以外は道路の基礎幅を二十五メートル、二メートル毎にその地点の高さを測り計算して、道路の横断図を一ミリのグラフ用紙に縮尺百分の一にして書き込めば、一ミリは現地では十センチになるので、これによりその地点の盛土幅、又は切土幅が簡単に分かる訳である。私がこのような仕事をやって見せたら、ブラジル人の技師は現場にはあまり出てこなく事務所にいることが多いのでこの様な仕事はしないが、日本の技術者は違うと隊員から信用を受けるようになった。

それから間もなく現場の責任者である技師が着任したが、当時の道路局長出身大学の後輩で、私は三十才なっていたが彼は大学卒業早々

であり私より年下で、今行っている仕事を説明したが特別な指令はなかった。とにかく私が必要な物は何でも都合するから遠慮なく言ってくれとのことで、私は現場責任者としての彼を尊敬したのだった。その後道路工事も進み、イタコアチアラ側よりの最初の川に着いたが、土木工事用の重機械類を通過させるために仮橋を架けなければならないようになり、現場責任者にその橋の件について相談したのだが、彼からは技術的な指示は何もなく、日本にいたときは橋を架けたことは一度もなかったので、本などを見てこれらの機械を通過させるにはどのぐらいの太さの木材を何本切り出せば良いかを考えた。この川はイタコアチアラの街から約二、五キロの所にあり、素早く仕事を済ませるにはこの川岸に飯場を作らなければと考え、現場責任者に相談し、大きなテント、食器類を用意してもらい料理人を雇い全員で飯場住まいを始めた。

その後、日曜祭日なしで働き、まず近くの原始林より必要な木材を探し出し、斧で切り倒し、ワイヤーを掛けてブルドーザーで橋を架ける所まで引き出し、その間に労働者たちに両岸の土を掘り出させて、橋の台になる場所を材木で積み上げて作り、それから橋の長さの十二メートルの長材を橋台にのせ、三本を一組にして所々をワイヤーでしっかりとくくり、各組の中心線との間隔が一メートルを越えないようにして、その上に横幅一杯の細い木を並べ、ヤシの葉を敷き並べて土を盛り上げて真ん中に雨水がたまらないように少し傾斜をつけ、最後に簡単な手すりをつけて仕上げた。この橋が出来たときには道路の土工をしていた機械隊が、あの千六百メートルのアニンガー地帯の盛

土を終えて来ていたので、早速二十八トンの重量があるブルドーザーに橋を通過させたが、橋桁はびくともせず、もっと重量のあるモータースクレバーを通過させてもなんともなく、責任者としての私もやっと安心した。

以後、何ヵ所もの川を同じようにして工事を進めた。ある日私を州の道路局に雇ってくれたプリーニョ・ラーモス・コエリョ州知事が道路局長をともなって道路現場の視察に来られ、私共のキャンプに入るや否や水を一杯くれないかと言われ、私たちが飲んでいる水は小川の水を素焼きの壷に入れてあるだけで、濾過もしてなかったが、州知事は君たちが毎日飲んでいる水ならどうして飲めないことがあろうかと言われ、工事の進行状態に大変満足したようだった。

・エフィジエニオ・サーレス移住地内道路建設

一九五七年の始めにはマナオス側から数えて二回目のウルブ河の渡河地点（イタコアチアラから二十キロ）迄来たとき、マナオスから道路局員は全員マナオスに帰れとの命令が来て吃驚した。このウルブ河の対岸からマナオスへ向けての道路工事は或る請負会社に委託したとのことだった。マナオスに帰ると今度はマナオス側からの工事が非常に遅れているので、マナオスより三十七キロの地点から州の直営工事としてすぐ行えとの局長命令で、直ちにその地点に拠点のキャンプを作り工事を始めた。

これは後ほどになって分かったことだが、州知事はベレンにおかれていた日本国総領事館との話し合いにより、マナオス～イタコアチア

ラ道路の三十八キロから五十キロ地点の沿線に日本移民を入植させることになっていたのだった。この移住地が現在のエフジェニオ・サーレス移住地である。それでこの間の道路建設を急げとのことだった。私たちのグループは何時でも最前線にキャンプを作り仕事をしていたが、イタコアチ　アラでのときの様に橋を架ける必要はなく、道路が通る所の地形が高い所と低　い所があり、土工工事の切土と盛土量を出来るだけ小さくして、道路工事の進行を早めるのが主目的であった。

四十六キロ付近の地点に道路規定の許す範囲ないで、最小の曲線半径で道路の曲がり角度をとった所があり、後ほど一度事故があり、その事故を起こした運転手が道路局の職員で道路局のジープを運転して

いたため、この曲線部がマツダカーブと呼ばれる様になった。私としては事故を起こさせるつもりであのカーブを作った訳ではなく、地形と、道路の進行を早めるために許容限度一杯のカーブが出来たのである。

局長から私たちが命令されて三十七キロ地点からイタコアチアラへ向かい、道路工事を始めてから間もなくして、或る請負会社が責任を持って工事を行うことになり、道路局の機械類と局員全員がこの会社に引き渡されることになり、おかしな話だとは思ったが月々の収入は変わりがなく、役所とこの会社との間にどの様な契約を交わしたか気にする者は誰もいなかった。

この会社は益々道路建設の速度を速めて、州政府が予定した通り一九五八年に日本人移民が入植するまでに工事は終わった。

一九五九年に州知事が替わったが道路工事のほうは何ら変わりなく進められ、舗装工事も引き続き行われた。

・ブラジル帰化、そして道路局技師へ

一九六二年、私がアマゾナス州の道路局に勤め始めて七年目に当たり、その間二人の州知事に私の仕事を認めてもらい、私のアマゾンに於ける人生の道は開けつつあると感じてブラジルに帰化した。役所の資格は相変わらず技師補であり、何時も工事の最先端に出されて働いていたが、その機会に州知事や州の高官に日本の技術者の実力を示すことが出来た。

親しくなった代議士や上院議員は、私が役所の技師補であるのは不公平だ、ブラジルの技術者協会へ技師の資格をもらえるよう許可願いを申請しなさいと言い、技術者協会アマゾン地域の支部がベレーン市にあったので、必要な書類を持ってベレンへ行き、支部長に申請書を提出したところ、支部では私の様に帰化ブラジル人で外国の学校の卒業者には技師の資格を与えて協会に加入させることは出来ないので、申請書はリオデジャネイロの本部へ回すからとのことであった。その話を或る代議士にしたところ、それでは私がリオデジャネイロの本部に行って解決して来て上げましょうと私に便宜を図ってくれた。しばらくたってからその代議士より技術者協会本部の会議で私の申請が許可されたという会議の結果のコピーを渡され、それを当時の道路局長の所へ持って行ったところ、局長は私が技師補であることをかねがね気にしていたが何とも出来なっかたと言い、州知事に見せて許可を受けすぐに技師にしようと言われ、知事よりアマゾナス州道路局の技師に任命してくれた。

一九六三年、再びプリーニョ・ラーモス・コエリョ氏が州知事に就任

し、私は道路局の一番新しい検査官としてウマイタの請負現場などを飛行機で飛び回っていた。

一九六四年三月三十一日の午前零時を期してブラジル全国に軍事革命が起き、陸軍大将であった人が大統領に就任し、議会は全て閉鎖され、各州へは大統領の任命による知事が着任したのだが、アマゾナス州知事には、アマゾナス州出身の学者の大学教授アートウ・セーザー・フエヘイラ・レイス氏が就任した。軍人の大統領はこれまでの腐敗政治の責任者たちをきつく取り締まらせると言われ、軍の高級将校が各州への調査団の団長として派遣され、アマゾナス州にも陸軍少佐が団長になった調査団が派遣された。これらの調査団は大統領令により調査のための全ての権限を与えられており、その事務所に道路局局長室の裏の会議室が当てられ、アートウ・ヘイス州知事は就任早々に新しい道路局長をを任命し全ての道路に関する請負工事の中止を命令した。

道路局は中止された道路工事を受け取らなければならず、その受け取りに三人の技師が任命され、私がその長に指名された。早速マナオス～イタコアチアラ道路とウマイタ～ラブレア道路を請負会社から受け取ったが、ウマイタ市に行った時マラリアにかかり、マナオスへ帰ってからポルトガル病院に入院した。特別手当を受けながら、熱の下がったときは病院で仕事をした。

調査団の団長である少佐は、道路局がアマゾナス州では不正事件の中心であるとにらみ、昼夜調査にかかり、道路局の古い技師から順番に調査団から呼び出し、不正の証拠がありとされた技師たちは無条件

で職場から追放された。私も仕事中調査団から呼び出しを受けたが、道路局では一番新しい技師であり、何ら不正なことには関係していなかったので無事に済んだ。このことで道路局の技師数はほんの僅かに減ってしまい、新しい知事が任命した道路局長は心労のあまり病気になり辞任してしまった。そして次の局長はアマゾナス州出身の技師だったが、電気科出身のイボ・アマゾナスと言う人だった。

・マナオス～イタコアチアラ道路の開通

ある日、州知事は新聞記者を州知事官邸に集め、一九六五年九月五日のアマゾナス州制定記念日にマナオス～イタコアチアラ道路を開通させると発表した。その夜、イボ局長は私の自宅を訪ねて来て「明日の新開を見れば分かると思うが、今日州知事が新聞記者にこのような発表をした。私は州知事の信用を得てこの職に就いたが、出身が電気科で道路工事については何も分からない。君の他には信用出来る技師がいないので是非主任技師になって工事を行って欲しい。」と頼まれた。私にとってはあまりにもありがたい話であったが、この道路建設は、考えれば世紀に渡って話される道路であり、残された部分はマナオス側からもイタコアチアラ側からも最も遠い地帯で、何かにつけて工事には不便であるアマゾンの大ジャングルのとある所等と瞬間的に頭に浮かんだ。それと共に私にとっては絶好の日本技術者としての実力を見せる機会を神様から与えられたとも考えて、それではこれまでの経験を生かしてやらせて戴きますと局長に返事をした。局長は非常に喜んでそれでは君と僕が一緒になってこれから工事に体当たりで行

こうと言い、堅く握手をしてその夜は別れた。

明くる日の新聞はアートル・レイス州知事は大統領の信用を得るためにとんでもないことを発表した、頭が狂っているのに相違ない等と書き立てた。

早速局長と共にマナオス側とイタコアチアラ側の両方から道路の突貫工事を行うための人員をどの様にするか、工事を進行させるためにはもう一台二十八トン級のブルドーザーが必要であり、それを買うための入札手続きの許可と、工事進行を容易にするためのマナオス～イタコアチアラ道路工事建設特別委員会を道路局内に設置する許可を州知事にもらって欲しいと局長に話し、すぐに裁可をもらった。

私はすでに局長より道路建設課長に任命されていたが、この特別委員会の委員長にも任命され、この道路建設責任技師に正式に就いた。この時道路はマナオス側から百十五キロ、イタコアチアラ側からは八十四キロまで車が走れるようになっていたが、開通するためには全長二百八十六キロのうち真ん中の八十七キロがまだ出来てなかった。それで最初に労働者に原始林を斧で五十メートル幅で伐採させ、その中の十メートル幅は道路幅になるので伐根作業をさせていたが、ある日労働者の不注意でツタが上方で絡まっている大木を切り倒し、自分が倒そうと思っている方向と反対の方向に倒れその大木の下敷きになる事故が起きた。

数日後に州知事が工事現場を視察され、現場の最先端まで行き、その付近で働く労働者を集め励ましの演説を始めたとき、道路局の古参の技師で局長の信用がなくて他の部署に回されていた人が、私

をねたんで聞こえよがしに「今に見とれ松田の計画して行っている工事は予定の通りには施工出来ず州知事は怒って松田の首をちょんぎってあの枯れ木の先につり下げるとウルブ（はげたか）がその首を突っつきに来るだろう」と嘲笑した。私は残念でたまらなかったが、ここで喧嘩をしてもしょうがない、今に見ていろと、現場の労働者共々、益々がんばって働いたのだった。

工事はどんどん進み、ある日現場の視察に行った夜、キャンプ地でたき火を囲んで夕食のシュハスコをとっているとき、ブルドーザー担当の主任が、お天気が良ければ明日、六月二十九日、サンペドロの宗教祭日の日、イタコアチアラ側から道路予定地を整地しているブルドーザーとマナオス側から来るブルドーザーが出会うのではないかと私に言った。二十九日は朝から良い天気で、それを楽しみに待っていたのだが、やっと午後二時過ぎにイタコアチアラ側からブルドーザーが黒い煙を吐いて来るのを、切り株の上に乗って見つけたときの感激は今でも忘れない。その夜はそのまま現場に泊まり込み、よくやってくれたと現場の労働者たちを励ました。

翌日は朝遅くなってマナオス市に帰り着き、それから出勤し、局長に昨日やっとマナオス側とイタコァチアラ側とから道路予定地を開削しているブルドーザーが行き会ったと報告したら、大変うれしい話だ、そのことを知っていたら私も一緒に行きたかったと言われた。私は局長に、この話はすぐ発表しないで下さい、すぐにもっと良いニュースが発表出来ますからと頼んだ。

一九六五年七月のある日、マナオス側とイタコアチアラ側の土木機械

の主任とブルドーザーの運転手が、泥だらけのジープで私の家を訪ねて来て、道路全線車で通り抜けられる様になったと報告してくれた。それでは早速そのことを局長に報告に行こうと道路局に行ったら、局長は子供みたいに躍り上がって喜び、すぐ州知事に報告に行こうと言われた。州知事はすぐに現場の人たちに会いたいと言われ、一人一人に握手され、みんなの労をねぎらった。翌日の新聞には、マナオスからイタコアチアラまで車で行けるようになったと現場員たちが泥だらけのジープで州知事に報告に来たと報じたが、一部の新聞ではこの道路は十数年も前から計画されていたのに、革命政権後わずか一年三ヵ月で出来るはずがない、アートル知事は全くの芝居話にのせられているのだと、この話を全然信用していなかった。その新聞を読んだ知事は、州知事の代理として書記官長に州知事のメッセージをイタコチアラ市の市長に手渡せと知事公用車を出発させた。私も道路局を代表して書記官長と同じ車でお供をし、新聞記者も同行した。

イアタコチアラ市迄には百メートルくらいの河を二回渡らなければならず、橋がないので箱形の渡し船に車を乗せ、両岸に渡したワイヤーロープを手でたぐって渡り、イタコアチアラ市に着き州知事のメッセージを市長に手渡した。その翌日の新聞は道路が開通したことを大々的に書き、悪口を書いた新聞も訂正記事を載せ、これらの新聞を読んだ人達はこのニュースを信用した。

九月五日に開通式が行われマナオス、イタコアチアラ間二百八十六キロが未舗装ではあったが公式に開通した。

その後私は州知事の命令で道路局の技師長に任命され、契約技師か

ら正式に雇用された技師となり局長代理の地位に就いた。

マナオスに最初の日本国領事館が出来、初代領事の福島氏の援助があって、アマゾナス州に推薦されたブラジル人土木技師として、一九六八年に東京で二ヶ月間、他の六カ国代表の技師たちと共に橋梁工学の研修を受けることが出来た。また、イボ道路局長より、ブラジル技術者協会に永久登録されるためにアマゾナス国立大学土木科の最終学年の五年生として勉強に行けと言われ、一ヵ年間大学生として勉強した。このときの土木科長の教授やもう二人の教授は道路局時代の朋輩であり、もう一人は道路局で私の助手をしていた人で、アマゾナス国立大学土木科の第一回の卒業生と共に一九七〇年土木課程を修了した。

このとき私が持っていた名古屋工業専門学校土木科の卒業証書の裏面に、アマゾナス国立大学土木課程を修了した土木技師であることを認めると書かれ、大学総長のサインと大学の印鑑を押してもらった。これでやっと正式にブラジル技術者協会に登録することが出来、全ての書類にサインして技術者登録者番号を付帯することが出来る様になった。

マナオス～イタコアチアラの道路は請負会社により全線が舗装されたが、一部新しい路線となり、全体で二十キロ程距離が短くなった。途中の河にはコンクリート製の橋梁が架けられ、船便だと下りで十時間以上かかったのが三時間で行けるようになり、アマゾナス州の主要道路としてアマゾナスの経済、社会的な発展に貢献している。またこの道路の沿線にはエフジェニオ、サーレス移住地（日本人集団移住地）があり、バルジョア（低湿地）農業しか知らなかったアマゾナス人にテーラフィルメ（高台地）農業を行って見せたことは公私共に認められている。

最後に一言私事を言わせて戴くと、一日本人移住者としてアマゾンに来た者が、この様にアマゾナス州道路局に三十二年勤め、今は退職してリオデジャネイロのコパカバーナに住まいを求め、ここで私の人生を終わるべく覚悟しているところである。

一九九九年は西部アマゾン日本人移住七十周年になるとのことで私の様にアマゾン移民落第生にマナオス～イタコアチアラ道路について書くよう指名してくれた編纂委員長に心から感謝申し上げ、ここにペンを置く。

一九九八年六月三十日

〔執筆者略歴〕

松田和夫　（まつだかずお）

愛知県出身。

一九五三年、戦後第一回移民（ジュート移民）としてアマゾナス州パリンチンス郡に入植。その後、マナオス市に転住しアマゾナス州道路局に就職。マナオス～イタコアチアラ道路工事に従事するなど様々な功績を残した後、リオ・デ・ンャネイロ市へ移り、現在に至る。

■戦後各移住地の記録――■

アマゾナス州　ベラビスタ移住地

中村弥寿平

現在のベラビスタ移住地は、マナオス市の前面を流れるネグロ河の対岸に位置するイランドゥーバ郡カカオ。ペレイラ港を起点として、マナカプルー郡に至る州道七〇号線の三キロ地点から二十一キロ地点までと、その州道十三キロ地点よりカルデロン　（ソリモンエス河に面した旧農務局試験農場）　に至る十キロの支線沿線に点在した二十六家族の日本人移住者によって形成されている。このベラビスタ移住地は最初の日本人移住者が入植した当時、すでに連邦政府により運営される内国民（東北伯のブラジル人）向けの移住地として、す

でに十六年間の歴史があった。

当時ベラビスタ移住地は二つの異なった地区に分割して設置されており、その二つの地区の間には陸路による連絡路はなく水路によってのみ連絡されていた。その本部は、ソリモンエス河（アマゾン河本流）左岸のベラビスタ地区に設置されており、マナオスより水路約百キロの距離にあった。この本部所在地には入植者向けにレンガ作りの住宅、小学校、教会、製材所、鉄工所、発電所、診療所等の施設があり、この地区には新規末日本人移住者をまとめて入植させる耕地の余裕はなかった。

本部以外の日本人入植地として上げられた地区は、マナオス市の対岸（リオネグロ河）八キロを渡った所にあるカカオペレイラ港を起点としたカカオペレイラ地区、アグアフリア地区、アリアウ地区、カルデロン地区で、この地域は本部の置かれたベラビスタ地区と異なり、何ら見るべき施設もなく、カカオペレイラ地区に八軒のレンガ造りの入植者用住宅があるだけで、アグアフリア地区を通ってカルデロン地区までやっとトラックが通れる道が切り開かれているだけであった。

このように何の施設もないために内国民の移住者にも嫌われ、入植者用住宅のあるカカオペレイラ地区に八家族の内国民移住者がいるのみで、あとはまだ全然切り開かれたことのない原始林があるのみであった。

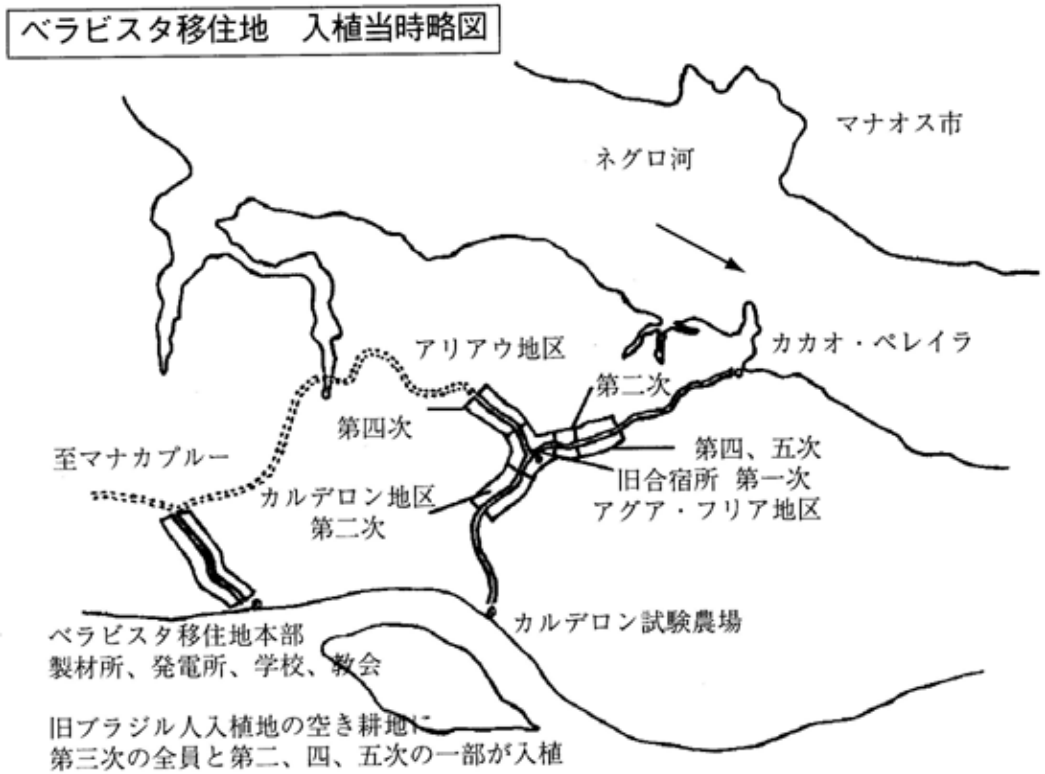
・日本人移住の歴史

一九五三（昭和二十八）年九月十二日、第一次入植者二十三世帯がアグアフリア地区に作られた合宿所に到着した。入植者用の耕地はすでに移住地当局によって移住地内の道路沿いに、間口六百メートル、奥行き六百メートル（三十六ヘクタール）の土地が設定され、その土地の四ヘクタール（縦横二百メートル）分の原始林が、すでに伐採され、入植者の到着を待って耕地の割り当てをするばかりになっていた。

各入植者はくじ引きによって、アグアフリア地区、カルデロン地区、アリアウ地区に分かれて配耕されることになった。耕地の分配が終わると、耕地に移る前に伐採された原始林の山焼きをしなければ住

現在のベラビスタ移住地（1999年 中野氏撮影）

宅を造ることも出来ず、各入植者は合宿所より毎日徒歩にて自分の耕地に山焼き、その後の寄焼きの作業に通い、耕地の一隅にバラックを作って合宿所より自分の耕地に移っていった。



一九五四（昭和二十九）年六月十日に第二次入植者三十八世帯が到着したが、この時始めて本部のあるベラビスタ地区に十家族の入植者があった。これは前もって入植者が決められていたのではなく、ベレーン港よりマナオス（ベラビスタ移住地）に向かう川船の上で希望者を募ったところ、本部が近く、設備（移住地当局の事務室、支配人官

舎、職員官舎、商店、教会、医務室、製材所、発電施設、入植者住宅等）の整った地区なので希望者が多く抽選にて入植者を選定したものだった。

アグアフリア地区の合宿所に着いた残りの二十人世帯の入植者は、到着した時、まだ割り当て耕地が伐採作業中だったために、割り当てがあったものの自分の耕地に移ることも出来ず、伐採終了を合宿所にて待ち、その後それぞれの耕地にに入植した。中には伐採を自分たちで行い、伐採費や山焼き経費を受けとる入植者もあった。ちなみに移住地当局が支払う伐採費は一ヘクタール当たり八百クルゼイロス、山焼き費は一ヘクタール当たり五百クルゼイロスであった。その後、山焼きをするまでに最低三ヵ月間の伐木の乾燥期間を必要とし、その間住宅の建設やその周りの整地などを行った。

この二十八家族の入植者たちは合宿所のあったアグアフリア地区よりカカオペレイラへの耕地に入植した者が多かったが、第一次入植者に親戚や知人がいた入植者は、その近くの耕地を選んで入植した。

一方移住地当局の本部のあるベラビスタ地区に入植した人々は、内国移民の退去した耕地に再配置されたので、古いレンガ造りの入植者用の住宅があり、その周囲には先住者の植えた果樹類やコーヒーの木があり一応環境的には良く感じられたが、耕地は先住者が種々の作物を植付けた後の地味の衰えた耕地で、大部分はサッペ（茅）の一面に生い茂った何にも植付け出来ない耕地であった。ベラビスタ地区の耕地面積はアグアフリア地区の面積より少々小さく、約三十ヘクタール（間口二百メートル、奥行き千五百メートル）であった。

一九五四（昭和二十九）年七月六日、第三次入植者七家族、三十六名が到着したが、この移住者たちは全員本部のあるベラビスタ地区に入植した。第二次が入植して一ヶ月後であり、移住地の状態は前の移住者の時と同じであった。

同年九月四日、第四次入植者三十家族百八十三名が到着、ベラビスタ地区に十八家族、アリアウ地区に十二家族入植した。

1953年9月 第一次移民カカオ・ベレイラ港到着（井上氏所蔵）

ベラビスタ地区入植者は船着き場において各耕地の配分が行われた。抽選にて各自の耕地が割り振られたのはいつもの通りであった。住宅はヤシ葺きのバラック立てのもので、旧入植者（伯国人）用住宅と

して建てられたレンガ造りトタン葺きのものは、うまく抽選にて空耕地が当たれば入れたが、ほとんどの人達は地味がやせていて伯国人が入植しなかった耕地や、ブラジル人の移住者の耕地よりさらに奥の耕地に配耕された。

第四次の入植者の中に野菜養鶏専業の移住者が四家族入っており、この四家族はアマゾン河沿いの低湿地地帯に入植したが、他の十四家族はすでに使用された耕地に入植し、一面の茅の原になった荒れ地をトラクターで耕転した土地で、作物を植付けてもすぐ茅に負けてしまうような土地であった。

アリアウ地区に入植した人達は、ベラビスタ地区とはちがい全然住宅などは造られておらず、ただ原始林を伐採しただけの耕地で、その上伐採時期が遅れて伐木が良く乾燥する期間がなく、山焼きしても良く焼けないのではないかと言われており、陸稲を植付けても良い収穫があるかどうか疑問視されていた。

同年十一月十二日、第五次入植者二十七家族百六十六名が到着、ベラビスタ地区に九家族、アリアウ地区に十人家族入植した。ベラビスタ地区はまだ耕地の伐採も済んでおらず、現地人が伐採している最中であったが、すでに乾期は終わっており、山焼きをするとしても雨期に山焼きなど出来るはずもなく、作物の植付けが出来ない状態であった。アリアウ地区に入植した人達は四ヘクタール伐採された耕地が用意されており、山焼き後すぐに住宅を造って各耕地に移る用意が出来ていたが、やはり伐採の時期が遅れていたので伐木が乾燥しないうちに雨期に入ってしまい、山焼きが出来ず今後の作物の植付けが心配さ

れていた。大体この地域では、原始林の伐採は六月いっぱいに終わらせて、伐採した木を七月から十月の間乾燥させ、十一月上旬の雨期にはいる前のお天気の良い日を選んで(年によって雨期に入るのが早くなったり遅れたりする)　火をつけて山焼きをするのが習わしとなっていた。

　このように第二次から第五次の移住者が一九五四年の六月から十一月の五ヶ月間に続々と到着したが、受入側の移住地当局はブラジル方式でのんきに受け入れ準備をする状態だったので、日本から移住して来る人達は、現地に着けばきちんと受入支度が出来ていると思って来たものの何も準備されていず、裸で原始林の真中に放り出された状態であった。

1954年 ベラビスタ本部奥地入植用耕地伐採（井上氏所蔵）

・当時の移住地側の指導、援助の状態

移住地当局のランゼル支配人は、日本人移住者受入準備として、ベラビスタ地区で移住地当局に勤めていた高拓三回生藤田猛氏を指導員として起用し、アグアフリア地区、アリアウ地区、カルデロン地区等の日本人入植予定地の測量や伐採等の準備をさせ、マナオスの請負業者を使って移住者の合宿所の建設をさせていた。また日本側の責任者として海外移住連合会マナオス支所長として、高拓生の教官としてアマゾンに移住し、パレンチンスに居住していた高村正寿氏が着任した。

アグアフリア地区に設置されるはずの合宿所は、第一次移住者到着一ヶ月前の八月になっても貯水タンクが出来上がったのみで建物は何も出来てない状態であったので、高村氏は移住地支配人と相談し、早急にヤシ葺き、板壁のバラック立てに変更し、各家族当たり縦三メートル、横五メートルの小部屋を二十三家族分作り、急遽間に合わせた様な状態であった。

耕地は測量も済み、各耕地四ヘクタールの原始林が請負人足により伐採され、移住者の到着後山焼きをすれば良い様に準備されてあった。

第一次の移住者には合宿所にて下記の資材が支給された。

一、住宅建設材　パーリヤ（屋根葺用ヤシの葉）、板（床板、壁板）釘。

二、農具　テルサード（山刀）、マッシャード（斧）、エンシャーダ（鍬）。

三、生活費　到着後一週間分の食料。

四、種苗　　種もみ。

但し、これが全て行われたのは第一回の入植者のみで、回が重なるにつれて徐々に資材が配布されなくなり、現地の支配人に談判しても埒があかなくなって来た。また、日本側の援助はただ渡航費の貸付のみであった。

・入植地に於ける営農状況

すでに入植していたブラジルの内国民移住者の農業形態は、いわゆる焼き畑農業で、原始林を伐採し、乾燥させて火をつけ焼き畑をし、その後焼け残った大木のまわりにその他の焼け残りの雑木を集めて再度火をつけて寄せ焼きをし、その寄せ焼きをした後地に陸稲、マンジョカ等の主要短期作物を植付け、その中に永年作物を植付けた。

現地人の中には永年作物を植え付けないで収穫後再生林にして又焼き畑をして再度短期作物を植え付ける者もおり、特に現地人は一番収穫量の多いマンジョカの栽培を好んだ。

・日本人入植者に対する営農指導

戦前の移住者である高拓生がバイショ・アマゾナス（アマゾン河中流地帯）において経験した農法を基に指導したが、基本的には現地人が行っている農法と何ら変わることがなかった。

山焼き後に上記の主要短期作物を植え、その中にグァラナ、カスターニャ、ゴム、コーヒー等の長期作物を植付けるという指導方法であった。

・移住地の変遷とその内情

日本人の移住者にとって主作物はやはり米であり、マンジョカは動物の飼料にしか見えず、又食べでもうまいとは思えず、その上マンジョカ粉の作成方法も分からなかった。特にリオネグロ河対岸のアグアフリア、アリアウ、各地区の移住地にはブラジル人の入植者がおらず、マンジョカ苗の入手が困難であった。

第一次の入植者（二十三家族、百三十九名）は全員山焼きをした耕地に一九五三年十一月から翌一九五四年の一月にかけて陸稲を播種したが、この頃になると入植者の携行資金が無くなり始め、移住前に日本で聞いた話と現地での状態との食い違いが問題になり、移住地に不穏な空気が漂い始めた。

入植者と当時日本人移住者の責任者であった高村支所長がいろいろ相談し、アマゾニア銀行より植付けた陸稲の収穫費という形で短期融資を受け、それによって生活資金を得ようということになった。ちなみに第一次移住者の携行資金は大体一家族十コントス（一万クルゼイロス）で少ない人は三コントス（三千クルゼイロス）であった。当時の換金レートは一米ドルが三十六クルゼイロスで、移住地での一ヶ月、一家族当たりの生活費は一コントスから二コントスであった。

しかし稲作の生育が不良であることが銀行側に分かり、貸し出しは一時見送られ、銀行の調査官が派遣されて来たが、移住地の支配人、高村支所長などにより説得を受け、やっと一家族当たり四ヘクタール

の稲作に対して十八コントスの一ヶ年間の短期融資を受けることが出来た。

一九五四年の四月に米の収穫も終わったが、予想通り米の収穫は良くなく、稲の生育が良かった移住者でも一ヘクタール当たりモミで十俵、精米すると六俵（五十キロ入）、稲の生育が悪かった移住者は一ヘクタール当たりモミで三俵という収量で、全収量を返済に当てたとしても、収量の多かった人で、借入金の七十三パーセント、一番少なかった人では借入金の十七パーセント弱の収入しか得られなかった。このような状態で、収穫した米を全て返済に当てても融資を全額返済出来ず、さしあたってこれからの生活のメドもたたない状態になり、移住者の間にさらに大きな動揺がみられるようになった。

1954年2月 入植者合宿所前にて
（左より花輪氏、中上氏、吉田氏 井上氏所蔵）

そこで移住地支配人、海協連マナオス高村支所長、移住者代表が銀行側と交渉し、米作の後作としてゴムを植付け、その間作として短期作物を植付けるための融資を行い、前の短期融資の貸付金を天引き返済する、という条件で新しい融資を行うことを銀行側に納得させた。

その詳細は

＊ゴム植付け費　（四ヘクタール当たり）　百八十万クルゼイロス

＊ゴム園内間作費(四ヘクタール当たり　八十万クルゼイロス

計　二百六十万クルゼイロス

但し返済は七年据え置き、残りの三年で均等返済、利率は年五パーセントということであった。

この融資は稲作の短期融資を受けた分を天引きされたので実際に手にしたのは間作費の八千クルゼイロスと稲作の収穫物であり、稲作の成績の良かった者はゴムを植付けるのにそれほど困難を感じなかったが、稲作の成績の悪い者には少ない資金でゴムを植付けねばならず後に色々な問題を生むことになった。

一九五四年六月、第二次の移住者が入植した時には第一回分、第二回分と分割して融資は出ていたので　（銀行の長期融資は一度に全額が支払われることはなく、植付け手順に従って何回かに分割されて銀行より支払われた)、移住地の不穏な空気は収まっていた。

以上の融資は第一次の移住者にだけ貸し出され、第二次移住者以降には融資されなかった。

ベラビスタの本部のある地域に入植した第二次移住者はアリアウ地区とは距離的に隔たりがあり、又ベラビスタ地区最初の入植者であっ

たために、移住地の環境はそれほどひどく感じられなかったようであるが、アグアフリア地区に入った入植者は、合宿所に着くと同時に先着の移住者の現状を見開きして不安な気持ちを隠せなかった。

第二次の入植者が入ったアリアウ地区は耕地の伐採が適当な時期に行われたので山焼きが良く出来、それらの耕地は陸稲の良い収穫が見込まれた。

その一方ベラビスタ地区の移住者は先住の伯国人入植者の入った耕地の後に配耕されたので稲作は良い収穫が見込まれず、伯国人の入植者より苗の入手がよりたやすく、移住地内で現金化し易いマンジョカを植付ける移住者が出てきた。

引き続き第三次（七家族、三十六名）、第四次（三十家族、百八十三名）、第五次（二十七家族、百六十六名）と六月から十一月の間に後続の移住者がどんどん到着し、到着順がが遅くなるに従って耕地の伐採が間に合わなかったり、山焼きが時期的に遅れて、火をつけても良く原始林が焼けず、陸稲の収穫がほとんど見込めない状態であった。

・その後の入植者の動向

一九五五（昭和三十）年の初頭になると、稲作の収穫不良、耕地内の交通の不便、携行資金の枯渇等の悪条件と、第二次移住者の同船者にトメアスー移住地に行く人達がいて、トメアスーの胡椒景気の話を聞いていたこと、又トメアスー移住地から視察者がベラビスタ移住地を訪問し、その時にトメアスーの景気の良い話をしたので、移住者

が自分でトメアスーに視察に行き、トメアスーでパトロンを探し、家族の旅費や今までの借金を返済するためのお金を借りて帰って来た人がいたりし、一九五五年の末までにはベラビスタ本部のある地区では四家族を残して他の人達は全てベレーン、南伯方面に移動してしまった。

アリアウ地区でも事情はそんなに変わらず、計八十一家族入植して残ったのは二十四家族のみで、残った人達の大部分は経済的に動くにも動けない人達だった。

その後換金作物として交通の不便な移住地ではマンジョカが有利であることを知り、苗を先住の伯国人より購入して植付けを始めた。

カカオ地区はリオネグロ河岸に近く運搬の便が良かったので、マナオスで販売する野菜栽培を始め、港までリヤカー、一輪車、馬車等を利用して運び、リオネグロ河七キロを手漕ぎカヌーで渡り、マナオス側の河岸にある野菜の卸市場で販売を始めた。携行資金を使い果たした移住者はバルジョア地帯で野菜栽培（ほとんどの野菜は無肥料、無農薬で作れた）を行い資金作りをした。

このごろロンドニア州のボルトベーリョ市近郊のトレゼ・デ・セッテンプロ移住地よりバルジョアでの野菜つくりをめざして数家族の人たちが転住して来た。バルジョア（アマゾン河岸の低湿地）の野菜作りは、河の水が減水するにつれてたねや苗を植えて行くので、植付けた作物がみんな同時期に市場に出ることになり、その為価格が安くなり、少数の人達を除いて大儲けした移住者はいなかったが、種床、苗床を水上に棚を組んで作り他の人たちが苗つくりをしている間に植付

けを終えて人より早く生産物を出荷して、高い価格で販売するなど、日本人らしいきめ細かさを出して儲けた人たちもいた。

ネグロ河対岸の日本人移住地の大きな問題点は生産物の運搬で、重たくて単価の安い物を作るとそれを運ぶだけで販売価格より高くついて採算のあわないことになり、生産物の選定も重要なことであった。

この年、より良い土地を求めて四家族の人達がリモン湖（位置的には移住地の奥に当たるが陸上での交通路はなく、一度ネグロ河に出て船で迂回する）のテーラプレッタ（腐植土を多く含む里色の土壌地帯）へ野菜栽培のために移動した。

一九五六（昭和三十一）年、移住者はそれぞれ落ち着きを見せたが、ベラビスタ地区（本部のある地区）の残留者四家族から二家族がマナオスへ出て新しい仕事を始めた。

アリアウ地区はマナオス市場で販売するマンジョカ粉の製造、カカオ地区では野菜の出荷により商売人に知れ渡りそれなりに販売面では苦労が減ったが、相変わらず交通面で生産物の運搬に苦労していた。

また胡椒栽培もトメアスー移住地より五百本持ち込んだ苗が成木になりつつあり、移住地内で苗作りが始まり、又他の方法で苗の入手を計り、栽培面積も徐々に増加して来た。グァラナも最初に植付けた分が、少量ではあるが収穫が始まり、米はほとんど自家消費のためにだけ作られた。

一九五七（昭和三十二）年、交通の便は相変わらず悪く、移住地当局のトラックは旧型で整備が悪いため故障が多く、週一回の定期便が月一回になることもあり、雨期になれば力がないのと、道の整備が行わ

れないために滑って急坂を登ることが出来ず、荷物を一度トラックより下ろし、坂の上までトラックを押し上げ、人力にて荷物を担ぎ坂を登り、トラックの上に再び積む様な状態で、雨期の間は出荷が出来ずほとんど自給自足に近い生活を余儀なくされた。

ただ例外として港に近いカカオペレイラ地区の移住者は野菜を植付け、毎日の様に現金収入が得られるため、奥地に入った移住者に比べて余裕のある生活が出来、そのために奥地に入った移住者がカカオペレイラ地区のブラジル人耕地を購入して移るというケースも出てきた。

この頃日本から移住地視察の人が時々こられる様になり、一九五八（昭和三十三）年交通の便を図るため、海協連よりトヨタの中古のトラックと焼き玉エンジンが付いた四トン積みの船（ＳＯＬ号）が貸与された。船は、カカオペレイラ港近辺に日本人移住者が誰も住んでいないため（一番近い移住者の耕地でも港より三キロのところであった）、海協連マナオス支所長の高村氏がマナオスで商売をしている移住地出身の日本人に運営を委託し、トラックは移住地の日本人会（この運営を行う為再編された）が運営を行うことに決まった。

これらの貸与物件により一時的には移住地の交通の便が良くなった様に見えたが、根本的な道路の補修作業が行われていないために、雨期になれば交通事情は前と何ら変わりなかった。

その上、トラックが移住地に着いた時にすでに中古であり、日本製であるため故障すると部品の入手が困難で運行に難を来たし、移住地当局に運営を委ね修理を依頼したが、すぐに部品の入手困難で運行不能

の事態に立ち入った。その後、引き続いて海協連の貸与物件としてトラクター、精米機精米機用エンジンが到着した。

移住者の営農状態も次第に良くなり、マナオスの農務局の倉庫に眠っていた三台の小型トラクターを購入する者も出てきた。これらのトラクターは土地を耕すのではなく、荷物の運搬用に使用され、雨期の悪路で生産物の出荷、生活必需品の運搬に威力を発揮した。

1954年入植当時の移住地内道路（井上氏所蔵）

精米機の到着は、今まで自家消費する米を臼で精米したり、大量の場合はベラビスタの本部まで運搬して精米をしていたのが移住地の中で精米出来きるようになり、非常に便利になった。

この年、マナオス市郊外のエフジェニオ・サーレス移住地へ入植した日本人移住者の家長が移住地を見学に来た。

一九五九（昭和三十四）年、益々胡椒の栽培が盛んになるが、資金が不足して（銀行融資は、前のゴム融資を未返済の人がいたりして新

規の貸し出しは望めなかった）　自家労力で植付けをする以外に方法はなく、植付け本数は多い人で五百本ぐらいであった。

海協連より貸与されたモートル船　（ＳＯＬ号）　は、管理を依頼していたマナオスの商人よりカカオ・ペレイラ地区の野菜を出荷している日本人グループに管理を移管し、週三回の定期運行、奥地のアリアウ、カルデロン、アグアフリア各地区の移住者がその日に合わせて生産物を出荷出来るようになった。

トヨタのトラックは部品が入手出来ず結局一年も動かないで放置され、そのかわり海協連の貸与物件であるトラクターと、移住地当局から日本人に貸し出されたトラクターが牽引車をつけてフルに活動をし、移住者の足代わりとして活躍した。

十月二十一日、マナオスにおいて西部アマゾン日本人入植三十周年記念祭が挙行され、ベラビスタ移住地日本人会として参加した。

暮れも押し詰まった十二月、移住地内の道路の補修とカカオ・ペレイラ港を起点として八十七キロ離れたマナカブルー郡の郡庁所在地まで道路を開設するための土木機械が到着した。

一九六〇　（昭和三十五）年、移住地内の道路の補修工事は続けられ、道路の拡張、谷の埋め立て、急坂の切り通し、埋め立て工事などによって移住者泣かせの坂は徐々にきえていった。

営農面では胡椒栽培面積も増加し、グァラナや短期作物のファリーニャ　（マンジョカ粉）、炭素類等の販売により収入も増え始め移住者もようやく一息つける感じになった。

一九六一（昭和三十六）年移住地内の道路工事が二十二キロ地点まで

完了した。道路は未舗装であったが幅員は十メートル路肩が三メートルあり、以前からの道路と比べると雲泥のさであったが、交通手段は相変わらず移住地当局のぼろトラック一台とトラクターだけであった。

一九六二（昭和三十七）年、海協連貸与物件としてシボレー製のトラック（五十九年型）が到着した。それを機に活動を中止していた日本人会が貸与物件のトラックの運営、管理を行うため再発足した。

ベラビスタ移住地最後の集団移住者たち十四家族が、十月二十二日長崎県より到着した。入植したのはアリアウ地区より道路の両側に沿って奥地に向かい間口二百五十メートル奥行き一キロの二十五ヘクタールの耕地であり、これらの耕地はマナオス駐在の海協連の職員により、測量、伐採などはすでに済ませてあった。

新しい移住者は二十二キロ地点に造られた共有地の奥にある、小川のそばに立てられた合宿所に一時滞在し、抽選で各自の耕地が割当てられ、協同で一度に全耕地の山焼きを行い、その後に各自の耕地に入植した。

山焼きのあと寄せ焼きを行い、最初に植付けたのは陸稲であったがマンジョカ栽培が現金収入に適していることが日本で教えられ、ファリーニヤ（マンジョカ粉）を作るためにマンジョカ薯の粉砕器を日本より持って来ていた。

稲の刈り取り後すぐにマンジョカの植付けを行い、その中に胡椒用の支柱を立てて胡椒の植付けを行い、以前の移住者の失敗を繰り替えさないように指導された。

この頃には本部のあったベラビスタ地区には一九五四年に入植した一家族だけが残っていたが、ロンドニア州ボルトベーリョ市近郊のトレゼ・デ・セテンブロ移住地よりの転住者が一家族入植した。

一九六三（昭和三十人）年、胡椒栽培が進むにつれて確実な収入源となり、移住者も将来に希望がもてる様になった。

九月十四日ベラビスタ移住地入植十周年記念祭が行われ、行事として農産品評会、野球大会、演芸会が催された。シボレー車故障の為運行を停止した。

一九六四（昭和三十九）年、胡椒の植付け本数の増加による収入が増加し、今まで閉ざされていたブラジル銀行の農業融資が、マンジョカ植付けの短期融資として再開される様になり移住者の経営状態が良くなり始めた。この頃より移住地内で陸稲の植付けが少なくなり、売り上げ単価がより高い作物が植え付けされる様になり精米所が閉鎖された。

一九六五（昭和四十）年、ベラビスタ農業会定期総会により新しい役員が選出された。

ベラビスタ農業会により養鶏を始める計画を立て、会員全員ではなく希望者のみを対象としてマナオスの商人の斡旋により市中商業銀行へヒナと飼料購入の短期融資（二ヵ年）の申請を行った。

十二月ベラビスタ農業会の事務連絡用に中古のジープ（五十七年型）を購入した。

一九六六（昭和四十一）年、一月、海外移住事業団に対してカカオペレイラ、マナオス間の生産物を運搬するためのモートル船（六トン

積み）の船舶購入融資を申し込んだ。それと同時にシボレートラックの修理を開始した。

四月、ベラビスタ農業会が発展解消して任意団体ベラビスタ農業協同組合発足。市中銀行より融資（各自の相互保証による）の貸し出しは順調に行われ、各組合員は最高三百羽、最低五十羽の産卵鶏を導入した。ヒナはサンパウロより空輸し、飼料は融資を斡旋した商人から仕入れた。

船舶購入融資も海外移住事業団より受けることが出来、ＣＡＣＡＵＩ号（ディーゼルエンジン十二馬力、六トン積）を購入した。トラックも修理完了し運行を開始した。海協連よりの貸与されたモートル船ＳＯＬ号は老朽化が激しくカカオ号の就航を待って廃船処分された。

この年胡椒の価格が下落したが、鶏糞を利用した野菜栽培で儲けて小型の新車貨物車を購入する移住者も出てきた。

一九六七（昭和四十二）年、移住者の経営は順調に発展し、養鶏により現金収入が増加し、その上鶏糞を利用して胡椒、野菜、果樹の栽培が増加した。任意組合もマナオス市に倉庫兼販売所を設置し、トラックと運搬船は生産物の販売、養鶏飼料の運搬の為フル運転された。

二月二十八日、マナオス市近郊地帯がゾーナ、フランカ（フリーゾーン）に指定された。

十一月に一部の移住者がペルー国プカルパ市近郊に胡椒栽培の為転住した（胡椒の植付け融資、耕地の無料割り当て、重機械による伐根、整地作業等の優遇政策が受けられた）。

ベラビスタ移住地より四世帯と独身男性三名、エ・サーレス移住地

より四世帯の人達が転住した。

マナオス郊外のブラジル大財閥の耕地（現在のカショエイラ・グランジ移住地）が売りに出され、ベラビスタ移住地より五世帯の者が耕地を購入転住した。

その時本部のあったベラビスタ地区に最後まで残っていた一家族が上記の耕地に転出し、残りのもう一家族もマナオスで商売をするために転出、本部地区に日本人移住者は一家族も残っていなくなった。

十二月マナカプルー市迄道路が開通した。移住地を貫き未舗装で延長八十七キロであった。

一九六八（昭和四十三）年、ゾーナ・フランカによる観光客の増加等によってマナオスの農産物の消費が増え、移住地が経済的に潤い移住者の経済状態は飛躍的に向上した。

マナカプルーまで道路が開通したのにつれてバス便が運行される様になりマナオス迄の交通の便も良くなり、教育面においてもカカオ・ペレイラ港の近くにマナオス市が経営する小学校が開校され、移住者子弟の教育問題も非常に良くなった。

一九六九（昭和四十四）年、移住地は順調に発展し、分家により家族数が増え、営農も鶏卵が一時的に安くなることを除けば順調に発展した。

十二月、マナオスにおいてアマゾン日本人移住四十周年記念祭が行われた。

一九七〇（昭和四十五）年、養鶏は益々発展し、産卵数が急激に増えたため（ベラビスタ移住地だけではなくエ・サーレス移住地でも養

鶏が行われていた)、毎年減水期に魚が大量にとれ価格が非常に安くなる時期に、卵の販売価格が下落し、その上販売量が激減し卵の滞貨が出来、生産原価を割って販売する事態に立ち入った。これは毎年起こる現象で約二ヶ月位続き、そのために卵の生産原価を下げる努力がなされたが、飼料をサンパウロから購入しなければならないため色々な制約があり、問題をあとに残すことになった。

尚、この年、海協連より貸与されたトラックが老朽化し修理不能の状態になり、組合にて中古のフォード製のトラック（一九六六年型）を購入した。一九七一（昭和四十六）年、今まで任意の協同組合で事業を行って来たが、マナオス市にて生産物を正規に販売するためには法定組合に改編する必要が生じた。最初は日本人だけの協同組合を設立する予定であったが、ベラビスタ移住地はＩＮＣＲＡ（農地改革院）の管轄下にある連邦植民地であるため、日本人だけの農協を作ることは許されず、全会員のうち日本人半数、伯国人半数でしか設立の許可が降りなかった。ブラジル人の大部分は養鶏を行ったことがない者ばかりで、アマゾナス州銀行より農業融資の斡旋、養鶏の指導等大変な仕事であった。日本人移住者の中で経済的に優位な人達はブラジル人と一緒に組合を作ることに反対し、自分たちでトラックと河を渡るための船を購入し、別組織を作って出荷物の運搬を行った。

一九七二（昭和四十七）年、例年に比べて魚の大漁が続き、九月から翌年の二月迄卵の価格が下落し、その上販売量が激減しマナオスの販売所に卵の滞貨がおきた。ストックのきかない生物であり、投げ売りをしても滞貨は減らず、日本人は鶏糞を利用しての野菜、果樹、胡

椴、グァラナ等の作付けをしていたので、卵価の下落にも耐えられたが、ブラジル人はそれに耐えられず、不安が一挙に爆発し理事会は総辞職し、ＩＮＣＲＡ（農地改革院）の指導下に新理事会が運営を引き継いた。

マナカプルー～カカオペレイラ間の交通量が飛躍的に増え始め、九月にカカオペレイラ、マナオス間のフェリーボートが就航した。運行は州政府の道路局の管轄でトラック三台と乗用車五台しか積めない小さなフェリーであったがカカオペレイラの港で荷物の積み替えをせずに、そのまま車でマナオスへ渡ることが出来る様になり農産物の出荷に大変便利になった。

一九七三（昭和四十八）年、ＩＮＣＲＡの経済学士が農協の責任者となり組合の運営を引き継いでいたが、農協は運営を続けることが出来ず解散した。農協の運搬用機械として任意組合が貸し出していたトラックと船は、再び任意のベラビスタ農協へ返還された。任意組合は再び、個人で運搬車輌を購入出来ない移住者が利用出来るように、出荷便を運営することにし、海協連の融資で買った船はフェリーが就航したことと、運用益で融資の返済は完了していたので販売して精算した。

入植者が裕福になり個人で自動車を購入することがそれほど経済的に難しいことでなくなり、その上フェリーが就航したことにより個人で生産物の販売を行うことが簡単に出来ることになったので組合の必要性が減少した。別組織を作った日本人移住者も船を協同で持つ必要がなくなり販売して精算したが、トラックは養鶏飼料の購入

等、まだ一人で持つよりは協同で持った方が有利と考えてそのまま協同運営を維持した。移住地には日本人が協同で持っているトラックは二台であったが、個人でトラックを購入する移住者が出てきて計三台のトラックがあるようになった。

移住地を代表し、経済活動をしない団体が必要になったためにベラビスタ移住地自治会が作られた。

1973年9月 移住地入植20周年式典（中村氏所蔵）

入植20周年記念運動会（中村氏所蔵）

九月十二日ベラビスタ移住地日本人入植二十周年記念祭がアリアウ中央小学校の運動場で挙行された。（記念式典、運動会、演芸会等）一九七四（昭和四十九）年、十月三十日ＩＮＣＲＡ（農地改革院）より移住地内の入植者に地券の交付が行われた。土地の価格は（裸地一ヘクタールが五十クルゼイロス）。地券の交付によりＩＮＣＲＡによる移住地の管理は終わり、入植者各自が独自に生産物の運搬手段、生産

物等の選択実行することになった。実際この後ＩＮＣＲＡは移住地事務所を引き払い、全ての面で入植者に対する援助、保護はなくなり、それらの仕事はマナオス郡に引き渡された。

一九七五（昭和五十）年、自治会の事務所及び日本人移住者の集会場として、ベラビスタ自治会館の建設が計画された。資金は海外移住事業団の五十パーセント助成金、残りは現地側で調達する。そのためにベラビスタ自治会内に会館建設委員会が設立され、建物の設計の依頼、施工業者の選定、不足する資金の募金活動等を行った。会館敷地は藤田猛氏が耕地を六ヘクタール寄付され、九月十日工事開始され、建築資材収集担当として永井勝弘氏に大変お世話になった。

1975年5月 自治会会館棟上式（中村氏所蔵）

・近年の沿革

一九七六年　四月四日自治会館の上棟式、五月二十七日竣工式を行う。

一九七七年　会館建設工事が終了したので建設委員会は解散した。委員会会計は清算後自治会会計に編入された。

一九七八年　四月二十日、天理教音成忠孝氏より寄付を受け、自家用発電機とアンプ一式を購入。

四月二十九日、春の叙勲でベラビスタ移住地より二名の叙勲者が出る。（勲六等単光旭日章＝藤由猛氏、矢野健一氏）

六月十三日、皇太子殿下（平成天皇陛下）マナオスを訪問される。

十二月十七日、マナカプルーまで八十七キロのアスファルト舗装工事完了。

十二月二十一日、ベラビスタ自治会を法人登録する。法人名は（和名）旭文化協会、（ポ語名）Associcao Cultural Sol Nascente.

一九七九年　二月、国際協力事業団助成により自治会の日本語学校用として探井戸の掘削及び水中ポンプと黒板の購入助成を受ける。

十一月十一日、西部アマゾン日本人入植五十周年祭典挙行、ベラビスタ自治会として参加協力する。

一九八〇年　七月、国際協力事業団より移住地内農道整備、耕地の整地、抜根作業用として、ブルドーザー、アタッチメント一

式、ブル運搬用トレーラーの助成が決まり八月ブルドーザーが到着した。トレーラーはサンパウロより陸路運搬された為二ヶ月ほど遅れて着いた。ブルドーザーを運営するための委員会が設置された。委員長・自治会長、委員・友田時広、中村弥寿平、大谷広行、野地忠雄。

1978年頃 カカオ・ペレイラ、バルサ発着場（中村氏所蔵）

一九八一年　二月ブルドーザーとトレーラー車庫の建設を開始し六月竣工。

六月、南米銀行の融資を受け、有機肥料の購入、ブル用の燃料を運搬するための中古ダンプカー（一九七六年型）を購入した。

南米銀行より融資を受け、移住地治安用の無線

電話を設置、八月資材購入、九月一日マナオス
市内の電話回線を購入し、自治会館に電話が通ることになった。

自治会の事務連絡及び自治会員の緊急用に供するため、中古のコンビ車（一九七六年型）を購入。

一九八二年　十月十二日、浩宮殿下マナオス訪問、空港まで多くの移住者が出迎えに行った。

八月二十九日、自治会の敷地の中に野球場を造り、その球場開きが行われた。

十一月三日この年の秋の叙勲に辻福重氏が勲六等単光旭日章を受賞された。

一九八三年　移住地の電化工事が始まった。

道路沿いの幹線工事は州政府の負担で行ってくれるが、各耕地への引き込み電線、トランス、電柱、避雷器具等は個人負担となるため、市中銀行より融資を受ける交渉を始めた。

前年度の選挙により、ベラビスタ移住地はマナオス郡より分割され、イランドゥーバ郡となり、初代の郡長が選出され、郡長が自治会に挨拶に来た。

九月十三日、入植三十周年記念祭典が行われた。

移住地電化の式典も会わせて行われたため、州知事、州の高官、在マナオス日本国総領事等、来賓多数来席の上に記念の式典が行われた。

この日迄に行われた電化工事は全日本人移住者の耕地に行われたのでなく、マナカプルー側から自治会会館までの耕地（十三耕地）に施

工されただけでアリアウの一部、カルデロン、カカオペレイラ等日本人全耕地に電気がつくまでにあと一ヵ年待たなければならなかった。前に購入したコンビ車が古くなり故障ばかりしているので、新たに中古のコンビ車を購入した。

1983年9月 入植30周年記念祭（中村氏所蔵）

一九八四年

八月十八日、移住地内の全日本人入植者の耕地に電気の引き込み工事が終了し点灯視賀会が自治会会館にて行われた。

九月二十四日会館の改装工事が開始された。ブルドーザーの故障と雨期に入って作業が出来ないため六ヶ月間休業し、その間に修理済のエンジンと故障したエンジンを交換した。

十二月二十九日、金子力太氏の叙勲（勲六等瑞宝章）祝いをかねた忘年会が行こなわれた。

一九八五年

自治会役員の任期を西部アマゾン日伯協会の役員任期に合わせて二ヵ年とすることを定期総会にて決定した。

電化されたので移住地内の生活は街で生活するのと変わりがなくなり、生活環境は非常に良くなった。

自治会館管理人の住宅十二月に建設完了

一九八六年

二月二十八日デノミナソンが行われた。零が三桁少なくなり呼称はクルザード（ＣＺ$）となった。インフレがひどく、農業全般が不振でブルドーザーの仕事が減り、運転手はそのまま常雇いとするが助手は仕事がある時だけ臨時を雇うことにする。

会館建設委員会、電化資金運営委員会は解散するが、清算後の残高は電化基金として南米銀行に定期預金として存続する。

宍戸良雄氏春の叙勲で勲六等瑞宝章を受ける。

一九八九年

一月十五日デノミナソン、零を三桁とる。呼称はノーボクルザード（ＮＺ$）、インフレ益々ひどくなる。

一九九〇年

ブルドーザー運営委員会勘定の廃止、電化基金など全ての勘定を自治会通常勘定に吸収し会計の単純化を計る。

三月十九日、デノミナソン。零を三桁とるクルゼイロス（Ｃｒ$）と

呼ばれた。

十一月、農道整備、再生林抜根作業用のパーメカニコ（ロールホーダー）の助成をＪＩＣＡより受ける。

一九九二年

ブルドーザーの老朽化がひどく、営業収入より修理代金が上回り、道路の補修工事はパーメカニコにて出来るので、良い買い手があればブル運搬用のトレーラー共に売却することに理事会にて決定。

インフレにより地域の経済状態が悪くなり、移住地内の治安状態が悪化し日本人移住者の耕地も強盗や泥棒の被害が出始めた。

一九九三年

七月三十一日デノミナソン（通貨名：ＣＲＵＺＥＩＲＯ　ＲＥＡＬ）とし零を三桁当とる。

ベラビスタ移住地入植四十周年記念祭を行う。

自治会の臨時総会においてブルドーザーとトレーラーの売却が決定されたが景気が悪いため、良い値段が付くまで待って売却をすることと、移住地内に新しい作物の導入を考えることを決定。

一九九四年

春の叙勲で岡留久氏勲六等瑞宝章を受ける

通貨改定（一ＵＲＶ＝ＣＲ＄二、七五〇）にて一ＵＲＶ＝一ＲＥＡＬ（七月一日付け）。

十一月十九日ブルドーザーとトレーラーを売却する。販売価格ＵＳ＄八六、七〇〇

一九九五年

七月十九日、カッサンバ（ダンプカー）の売却と代替車の購入について臨時総会がひらかれた。

カッサンバは一九七六年型で修理して使用するには古すぎ、仕事も少なくなっており、売却して、マイクロバス（十人乗り）に買い換えることに決定。

一九九六年

定期総会（二月十日開催）にて、新理事会が選出された。

一九九五年

高インフレは収まったが、通貨のレートがドルに対して高く設定されているために農産物は輸入価格が安くなり、農業は以前に比べて利益が減少し、農業従事者は高インフレ時代より経営は難しくなった。

現在の移住地で一番の問題は後継者で、高学歴の子弟は移住地に帰って農業に従事するのを嫌がり、アマゾンは土壌、環境問題等農業に向いていないこともあわせてこれからの移住地に将来を考える時の大きな障害となると思われる。

一九九八年

二月、定期総会で新理事会が選出される。

入植者名簿

・第一次二十三家族（あふりか丸、一九五三年九月二十三日入植）

氏名	出身地	備考
仁平次郎	青森	トメアスーへ転出、姪夫婦の武野辰治、カツ夫妻ベラビスタに残留するも、一九六七年カショエイラ・グランジ移住
近江達治	宮城	トメアスーへ転出。
小林仁治	宮城	ベレーンへ転出。
小茄子川力雄	宮城	マナオスへ転出後、死去。家族マナオス在住。
木幡巌	宮城	マナオスへ転出後、死去。家族マナオス在住。
武田吉実	山形	サンパウロへ転出。
野地竹治	福島	死去、長男忠雄相続、在ベラビスタ
大原勝ヱ	福島	カショエイラ・グランジへ転出後、死去。家族マナオス在住。構成家族、木幡友信マナオス在住。
渡辺実	福島	

サンパウロへ転出、妻マリと義父理喜衛夫妻ベラビスタに残留、理喜衛死去後、マリと義父妻いしペルー、リマ市へ転出。

渋谷良一　千葉　トメアスーに転出。

宍戸進　神奈川

家長進離縁。一九六四年ペルー国プカルパに転出、義父良雄、家長としてベラビスタ在留。死去後、良雄長男、宏光相続、在ベラビスタ。

山田栄一　山梨　トメアスーへ転出。

花輪克　山梨　トメアスーへ転出。

増田正三郎　愛知　サンパウロへ転出

矢部豊吉　京都

サンパウロへ転出後、死去。家族在サンパウロ。

喜納字志　福岡

マナカプルー転出後死去、長男正人相続。

野口巳之吉　福岡

家長夫妻日本に帰国、次男富士夫バルジョア地帯にて商業、三男マナオス在住。

山田元信　熊本　トメアスーへ転出。

井上正吾　熊本

マナオスへ転出後死亡、家族マナオス

在住。

吉田一憲　熊本

マナオスへ転出後死亡、家族マナオス在住。

辻　正義　熊本

死亡、家族マナオス在住。

高橋　力　　大分　　サンパウロへ転出。

音成次男　　大分

トメアスーへ転出、後サンパウロへ移動、次男忠孝マナオズ在住。

・第二次三十八家族（あめりか丸、一九五四年六月十日入植）

大平幸太郎　　北海道　　サンパウロへ転出。

大平武男　北海道　レシーフェへ転出。

黒沢勝馬　北海道　トメアスーへ転出。

古館熊吉　岩手　サンパウロへ転出。

渡辺勝身　福島　ベレーンへ転出。

梅村惣逸　宮城　トメアスーへ転出。

木幡正　宮城　ベレーンへ転出。

後藤賢司　宮城　トメアスーへ転出。

石沢　力　山形

マナオス郊外へ転出後死亡、次男力男相続、カショエイラ・グランジ在住。

矢作　清　山形

サンパウロへ転出。

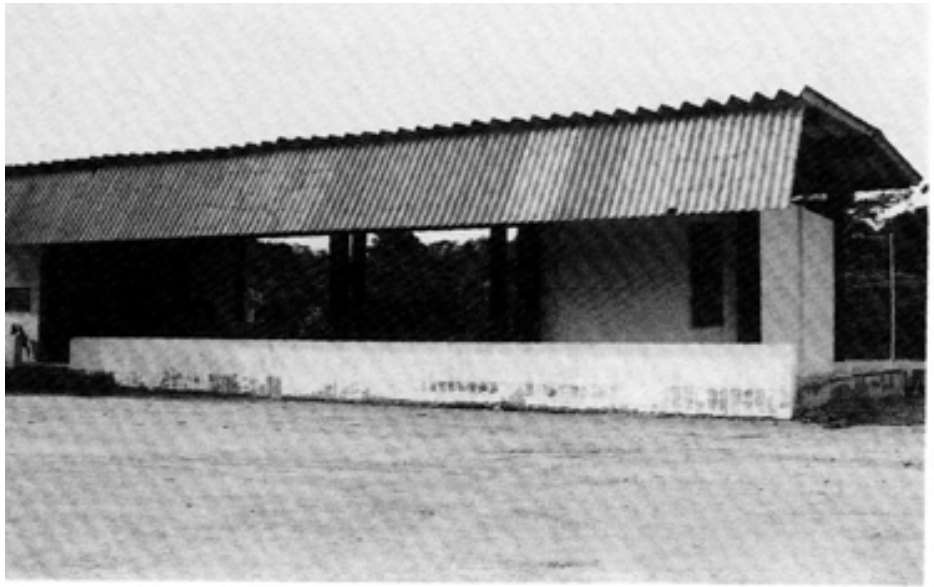
須賀義太郎　群馬　サンパウロへ転出。

代　正也　埼玉　ベレーンへ転出。

土屋政一　山梨　トメアスーへ転出。

佐藤義信　東京　トメアスーへ転出。
山田功治　神奈川　ベレーンへ転出。
山田敏雄　神奈川　サンパウロへ転出。
天野　守　愛知　サンパウロへ転出。
高谷善一　兵庫　死亡、三男和治相続、ベラビスタ在住。
末益清広　山口
サンパウロ転出後死亡、四女栄マナオス在住。
武田義春　山口　ベレーンへ転出。
岡　留久　香川　ベラビスタ在住　長男一雄マナオス在住。義弟神田久彦マナオス在住。
金子益貴　愛媛　レシーフェへ転出。
佐藤時義　熊本　パラナへ転出。
橋口安兵衛　熊本　死亡、長女和代相続、ベラビスタ在住。
詫摩誠治　熊本　ベレーンへ転出。
辻　福重　熊本　ベラビスタ在住。
桑原国夫　熊本　サンパウロへ転出。
森　保　熊本　サンパウロへ転出。
石崎為之　熊本　サンパウロへ転出。
府内弥平　熊本　パラナへ転出。
永田良助　熊本
マナオスへ転出後死亡、夫人マナオス在住。
村井秀男　熊本　サンパウロへ転出。
保科吉次郎　鹿児島　サンパウロへ転出。

山本俊光　鹿児島　トメアスーへ転出。
樫村道雄　大分
マナオスへ転出後死亡、次女節子ベレーン在住。
松雄喜作　長崎　サンパウロへ転出。
権藤国善　福岡　サンパウロへ転出。
金子力太　福岡　死亡、次男恒雄相続、ベラビスタ在住。



ベラビスタ移住地自治会会館（1999年 中野氏撮影）

・第三次七家族（あふりか丸、一九五四年七月六日入植）
佐久間久正　北海道　トメアスーへ転出。
一条吉松　北海道　サンパウロへ転出。

気仙一郎　青森　サンパウロへ転出。
熊谷英次郎　宮崎　サンパウロへ転出。
佐藤　清　宮崎　トメアスーへ転出。
稲垣新吾　兵庫　サンパウロへ転出。
添田千賀雄　福岡　サンパウロへ転出。

・第四次三十家族（ぶらじる丸、一九五四年九月四日入植）

三浦　健一　北海道　ピアウイ州テレジーナ市へ転出。
茂古沼専一　北海道　トメアスーへ転出。
茂古沼邦一　北海道　トメアスーへ転出。
伊藤誠四郎　秋田　サンパウロへ転出。
熊谷　透　宮城　トメアスーへ転出。
寺瀬俊次　福島　サンパウロへ転出。
五島喜助　福島　トメアスーへ転出。
南保由松　神奈川　レシーフェへ転出。
野村富治　愛知　サンパウロへ転出。
橋本俊男　山口　トメアスーへ転出。
亀岡定夫　愛媛　レシーフェへ転出。
仲村金作　福岡　トメアスーへ転出。
垣下一由　熊本　サンパウロへ転出。
光武静雄　佐賀　パラナへ転出。
矢野健一　熊本
隠居、ロベルト・ケンジ・オオイワ相続、在ベラビスタ。

松井励　熊本
トメアスーへ転出、その後サンパウロへ転出。
寺野義勝　熊本　在マナオス。
安部久喜　熊本　トメアスーへ転出。
鶴田藤助　熊本　トメアスーへ転出。
那賀利則　大分　ベレーンへ転出。
浜砂進　宮崎　サンパウロへ転出。
天田勝助　神奈川　ベレーンへ転出。
河村　寿　山口　トメアスーへ転出。
右山堅雄　福岡　ベレーンへ転出。
右山　昭　佐賀　ベレーンへ転出。
生井竹治　千葉　トメアスーへ転出。
黄地政二　岐阜　トメアスーへ転出。
三分一武穂　山口　サンパウロへ転出。
工藤市蔵　大分　サンパウロへ転出。

・第五次二十七家族（アメリカ丸一九五四年十一月十二日）
秋元佐太郎　青森　サンパウロへ転出。
三浦勇一　青森
レシーフェへ転出、その後サンパウロへ。
今野信一郎　茨城　ベレーンへ転出。
鍋島保寿　福島　在マナオス。
渡辺利司　岡山　サンパウロへ転出。

大谷良三　富山　マナオスに転出、後に死亡。
門　正一　岡山　マナオスに転出、後に死亡。
門　大三　岡山　サンパウロに転出。
西木広司　福岡　マナオス在住。
野上又一　香川　トメアスーへ転出。
樫原敏夫　福岡　サンパウロに転出。
出田　務　熊本　マナオスに転出、後に死亡。
中崎数馬　熊本
タイアーノに転出後カショエイラ・グランジに戻り在住。
垣下勝行　熊本　サンパウロに転出。
長井一男　熊本　トメアスーに転出。
生野芳光　熊本　マナオス在住。
友田時雄　熊本　死亡、長男時広相続、ベラビスタ在住。
上田政一　熊本　サンパウロに転出。
山口一雄　熊本　サンパウロに転出。
辻　保　長崎　トメアスーに転出。
辻　定　長崎　ベレーンに転出。
小牧二夫　鹿児島　サンパウロに転出。
瀬戸　茂　福島　ベレーンに転出。
中谷清作　石川
死亡、長男裕相続、カショエイラ・グランジ在住。
上田幹男　高知　サンパウロに転出。
宮西新次　熊本　サンパウロに転出。

藤本　操　　岡山　　カショエイラ・グランジ在住。

移住地内カルデロン道路　念願の舗装開通（1999年 中野氏撮影）

・第六次十四家族（ぶらじる丸一九六二年十月二十日）

高橋勇作　長崎　死亡、三男裕志相続、ベラビスタ在住。

伊地知定夫　長崎　ペルー国プカルパへ転出。

白井千勝　長崎　マナオスへ転出、後に帰国。

江崎繁一　長崎　マナオスへ転出、後に帰国。

西　義光　長崎　死亡、長男幸男相続、現在訪日中。

宮崎数馬　長崎　死亡、家族在マナオス。

永田満夫　長崎　死亡、次男敏男相続、ベラビスタ在住。

梶山武士　長崎　サンパウロへ転出。

蒔本国男　長崎　死亡、三男茂樹相続、ベラビスタ在住。
清水忠彦　長崎　本人帰国、家族在マナオス。
金子虎男　長崎　死亡、長男啓二相続、ベラビスタ在住。
平田真市　長崎　死亡、五男富夫相続、ベラビスタ在住。
川島唯雄　長崎　死亡、長男博知相続、ベラビスタ在住。
橋本　博　長崎　死亡、長男博美相続、ベラビスタ在住。

・その他の入植者

藤田　猛　富山
一九三三年四月十二日、もんてびでお丸にて移住。高拓生。一九五四年六月十日、ベラビスタに転入。死亡。

鈴木五朗　栃木
一九三三年四月十二日、もんてびでお丸にて移住。高拓生。一九六二年七月二十日、ベラビスタ転入。後にマナオスへ転出。死亡。

畑原　勝　長崎
一九五四年五月二十八日、あふりか丸にてロンドニア州ポルトベーリョに移住。一九五八年、カルデロンのバルジョアに転入。後ベラビスタに移動。死亡。家族在日本。

大沢武丸　岐阜
一九五四年十二月二十一日、ぶらじる丸にてベルデーラへ移住。ロライマ州タイアーノを経て、一九六一年十二月、ベラビスタ移住地転入。マナオス在住。

梅崎雄象　大分

一九五四年九月二十五日、あめりか丸にてモンテアレグレに入植。一九六五年十月、ベラビスタに転入。マナオスに転住後、死亡。

大竹隆雄　岐阜

一九五九年四月二日、さんとす丸にてサンパウロに移住。一九七〇年、ベラビスタ移住地に転入。

府内清太　熊本

一九五四年五月二十八日、あふりか丸にてボルトベーリョ市郊外に入植。一九七七年十二月、ベラビスタに転住。

引き続き在住。

坂本藤吉　青森

一九六〇年八月四日、ぶらじる丸にてトメアスーに移住。一九八一年七月十日、ベラビスタに転入。カショエイラ・グランジ在住。

大岩邦夫　熊本

一九六〇年十二月二十八日、あめりか丸にて単身移住。矢野健一呼び寄せ。

ベラビスタ在住。

石原正義　熊本

一九六〇年十二月二十八日、あめりか丸にて単身移住。矢野健一呼び寄せ。

ベラビスタ在住。

中村弥寿平　東京

一九六一年二月四日、さんとす丸にて単身移住。矢部豊吉呼び寄せ。

マナオス在住。

平田茂康　長崎

一九六二年十一月二十九日、あるぜんちな丸にて移住。父、平田真市の呼び寄せ。死亡。

永井勝弘　愛媛

一九六七年六月二十九日、あるぜんちな丸にて移住。北伯雇用青年第二期生。

一九六八年一月、ベラビスタ転入。マナオス在住。

出口国義　熊本

一九六一年十二月、あふりか丸にてボルトベーリョ市郊外に入植。一九六二年、ベラビスタに転入。後に、帰国。

前田隆蔵　沖縄

一九七七年、バリグ機でサンパウロに移住。一九八〇年十月、ベラビスタに転入。後に、サンパウロへ転出。

武田要一　宮城

一九五四年五月二十八日、あふりか丸にてボルトベーリョ市郊外に移住。一九六二年、ベラビスタに転入。マナオス在住。

神庭正明　鳥取

一九八二年三月、飛行機にてベラビスタに移住。中村弥寿平呼び寄せ。

・分家、独立者

武野辰治　秋田

一九五三年七月渡航の仁平次郎の構成家族として夫婦で入植。一九五

三年十一月独立。その後マナオスへ転出。死亡。

渡辺正雄　福島

一九五三年七月渡航の渡辺実の構成家族として入植。一九五九年、野地竹治三女光子と結婚独立。後にペルー国プカルパへ転出。

宍戸宏次　宮城

一九五三年七月渡航の宍戸良雄の次男。

一九六七年、ペルー国プカルパへ転出。

宍戸秀安　宮城

一九五三年七月渡航の宍戸良雄の三男。

吉田一憲の妹、育代と結婚独立。後に　カショエイラ・グランジへ転出。

辻　信義　熊本

一九五三年七月渡航の兄正義の構成家族。一九五九年、喜納宇志の次女、達子と結婚独立。後にカショエイラ・グランジに転出。

渡辺　進　神奈川

一九五三年七月、構成家族。一九六一年九月、野地久子と結婚独立。

一九六七年、ペルー国プカルパへ転出。

木幡　栄　宮城

一九五四年六月移住の兄、正の構成家族、一九五五年宍戸良雄長女、伴江と結婚独立。後にマナオスへ転出。

大谷尚視　富山

一九五四年九月移住の兄、良三の構成家族。一九五五年、母、弟と独立。後に武田要一次女、みつ子と結婚。マナオスに転出。

西木和栄　福岡

一九五四年移住の兄、広司の構成家族。

一九六一年、カルデロン地区に再移住独立。後にタイアーノの片桐義一の次女、利子と結婚。ベラビスタ在住。

大谷広行　富山

一九五四年移住の兄、良三の構成家族、大原勝ヱ三女、三枝子と結婚独立。ベラビスタ在住。

永田　実　長崎

一九六二年、父満夫と移住。大谷良三次女、真由美と結婚。独立。

高橋健治　長崎

一九六二年、父勇作と移住。アネッチと結婚。独立。

・現在の入植者（耕地）とその位置

住所	氏名	備考
ROD. Am070. Km3 左	西　幸男	不在地主
Km3 右	金子恒雄	
Km3. 5 右	府内清太	
KM4 左	橋口和代	
KM4 右	友田時広	
KM6 右	高谷和治	支線にて４Ｋｍ奥
KM10 左	坂本五三男	不在地主
KM16 左	野地忠雄	
旧道に沿って０. 5KM 入る		

KM16.5左　永田　実

KM17左　ベラビスタ自治会会館

KM17右　永井勝弘　不在地主

KM18右　永田敏男

KM18左　中村弥寿平不在地主

KM19左　平田富夫

KM19右　橋本博美

KM19.5右　川島博知

KM20右　岡　留久

KM20左　金子啓二

KM20.5左　蒔本繁樹

KM21左　高橋裕司

13KM地点より支線カルデロン道路

Am070Est.Caldeira

KM2右　宍戸宏光

KM4右　西木和栄

KM5右　大谷広行

KM6左　辻　福重

KM8右　大竹隆雄

KM10右　ロベルト・ケンジ・オオイワ

Lago　de　Caldeiran大岩邦夫

Rod. Am70-SerraBaixo　　出田洋次

出田邦孝

〔執筆者略歴〕

中村弥寿平（なかむらやすへい）

一九三八年、愛知県に生まれる。

一九六一年三月、東京農業大を卒業後、呼寄せ移民としてベラビスタ移住地に入植。長年にわたりベラビスタ移住地自治会の会計理事をするとともに、青年会誌「線拓」の編集に携る。一九七六年、家族と共にマナオス市に移り、現在に至る。

ロンドニア州

トレーゼ・デ・セテンプロ移住地

村山　惟元

ロンドニア州の州都ポルト・ベーリョ市近郊に位置し、南緯八度、西経六十三度の熱帯降雨林地帯に位置し、気候は雨期が十一月から四

月、乾期が五月から十月というように大別される。

年間を通して平均最高気温は三十六度、平均最低気温は二十一度で、年間平均降雨量は二二九二ミリである。

一九五四年の入植当時のポルト・ベーリョ市の人口は約一万五千人ほどであったが、現在は約四十万人に達する大都市になっている。

交通便も、アマゾン河口のベレーン市から約二千キロも遡る河舟と、週一回のローカル航空便があっただけだが、一九六〇年から一九七〇年にかけて国道三六四号ポルト・ベーリョ、クイアバ間千五百キロの建設、国道三一九号ポルト・ベーリョ、マナオス間九百キロが建設され、ブラジル国内の北と南を結ぶ中継地となり、発展することとなった。

トレーゼ・デ・セテンプロ移住地は、一九四一年ブラジル政府がグアポレ連邦直轄州を命名した日が九月十三日（トレーゼ・デ・セテンプロ）であり、州の記念日であったことから、入植当時の州知事がその記念日を移住地名に命名したのである。そして一九八一年一月四日、グアポレ直轄州は自治州に昇格し、ロンドニア州となった。

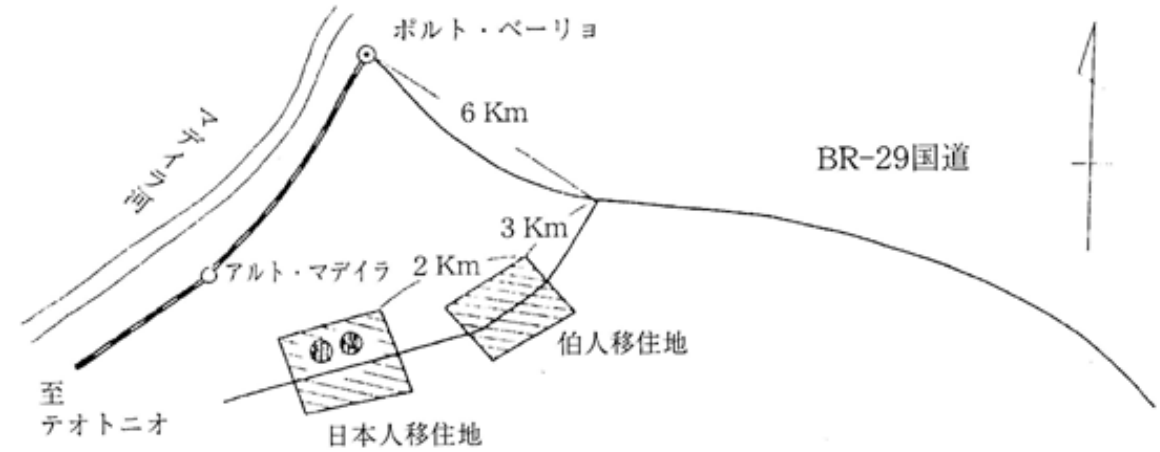
一九五四年七月、当時のグアポレ連邦直轄州ポルト・ベーリョ市近郊のバテ・エスタカ地区に二十九家族百八十名がゴム栽培を目的とした自営農として入植した。通称グアポレ移民である。その後、一九六一年六月、移住者の呼寄移民として二家族が入植し、さらに一九六二年六月にアクレ州キナリー移住地から一家族が転耕入植し、移住家族数は三十二家族となった。

・移住者名簿

一九五四年入植の二九家族

氏名	年齢	家族数	出身地
山口宣行	三十一	四	熊本

移住地略図



移住地概要（昭和５６年度版）国際協力事業団より

府内清太	二十六	五	熊本
木田一男	三十	七	熊本
豊田敏次	二十五	五	熊本
田中初行	四十	七	熊本
松崎恵市	三十六	六	熊本
服部重五郎	四十四	八	東京
古川四郎	四十七	五	長崎
小田島広治	三十二	六	北海道
西田慶太郎	四十九	六	京都
松野浩生	三十九	八	大分
栗山信二	四十一	八	東京
大泉三男	四十	七	福島
池田昌治	二十三	四	福島
岡部鶴吉	四十二	七	熊本
門脇勝治	三十三	五	山形
橋本一男	二十六	六	長崎
武田要一	三十六	八	宮城
丸　五郎	四十九	六	千葉
北川利一	四十六	八	熊本
田辺信道	三十四	七	東京
吉野　剛	四十九	六	大分
黒田重人	三十一	七	熊本
高木正敏	三十六	六	熊本

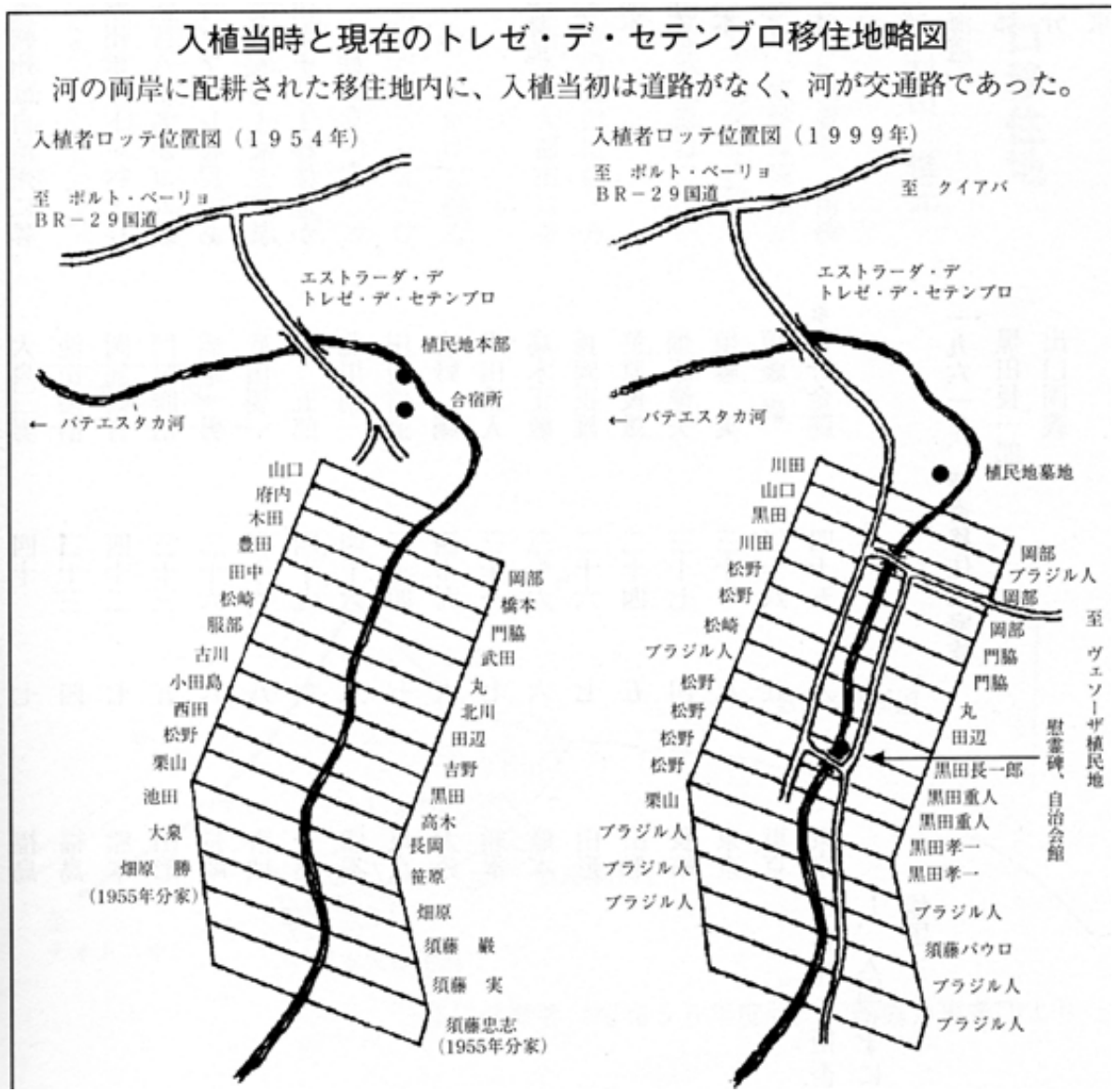
長岡正雄　二十六　七　山形
笹原俊雄　二十四　五　山形
畑原健夫　三十七　四　長崎
須藤　実　三十　八　東京
須藤巌　二十八　五　東京
＊佐野金蔵　四十五　六　東京は移住を拒否し、入国せずに帰国

一九六一年、呼寄移住二家族　黒田長一郎　出口国義

一九六三年、転耕入植　川田敏之

現在のボルト・ベーリョ、マデイラ河（1999年 村山氏撮影）

一九五四年、大阪商船のあふりか丸で神戸港を出港、横浜港へ寄港し、六月二日に横浜港を出港した。太平洋を横断し、ロスアンゼレスに寄港、パナマ運河を経由し、大西洋のクリストバルに寄港。七月七日、ベレーン沖に到着した。船内でブラジル入国手続きをして、翌七月八日、アマゾン河運行船のリオ・タパジョス号に乗り換えてアマゾン河を遡り、最大の支流マディラ河のポルト・ベーリョ港へ向かっ



た。

リオ・タパジョス号の食事は、ブラジル独特の肉と豆のごった煮（フェイジョアーダ）だったので、なかなか馴れず、朝食用のビスケットを食べ、コーヒーに砂糖をたくさん入れて飲んだ。途中、船の原料の薪を積んだり、食料用の午が同船しているので、餌の草刈をしたりして、七月二十二日、目的地のポルト・ベーリョ市に着いた。日本を出て、実に五十五日間の船旅であった。

目的地に着いたが、移住地の受け入れ準備は何もできていなかったので、二日後の七月二十四日、全員上陸し、ポルト・ベーリョ市から二十キロ地点の新築のライ病院を仮宿舎として入所した。

移住地は、幹線道路六キロ地点から農道に入り、五キロの地点であったが、原始林だったので伐採の下刈り作業から仕事をはじめた。慣れない原始林の仕事に大変苦労した。移住地の入り口に木造の合宿所が建設され、そこへ移転してから本格的な共同作業が始まり、二戸あたり四町歩の伐採も終わって、九月七日、二十九家族分百二十町歩の山焼きを行った。

山焼き後、配耕地の測量があり、各自耕地内に屋根も壁も椰子の葉で作った仮小屋を建て、ようやく開拓の仕事に着手したのである。

初年度は自給自足の体制で、全耕地陸稲を播き付け、トウモロコシ、マンジョッカも混栽し小規模の野菜も作ったが、移住契約であるゴム栽培のため奥地まで天然ゴムの種子採集へ行き、苗床を作って播種した。

耕地の山焼き（村山氏所蔵）

当時のポルト・ベーリョ氏（村山氏所蔵）

食料品の購入と、農産物の出荷のため、週一回政府のトラックを利用したが、その他の日は、生産物を担いだり、一輪手押し車に荷を乗せて午前二時頃から暗く悪い道十一キロを歩いてポルト・ベーリョの市場へ運ぶ生活が続いた。

主作物であるゴムは各耕地四町歩ないし八町歩植え付けたが成長が悪いのに加え、乾燥期に野火で焼けたことと、採算性が悪いことから四年位で放置された。

日本人移住者が作る野菜等はよく売れたが、所詮一万五千人しかいない市場では、やがて生産過剰気味となり、移住契約期間の四年間を過ぎてから、暗雲の移住地よりベレーン、マナオス、そして南伯への退耕者が出た。移住地はグァラナ、カカオ、ピメンタ、ミカン等の栽培と、養鶏、牧畜が取り入れられ、多角化の営農に取り組んだ。

一九六〇年から七〇年にかけて、国道の建設工事が始まり錫鉱石の採掘も始まって、ボルト・ベーリョ市の人口が増加したので、野菜や卵の需要が大幅に増えて移住者の生産物は百パーセント同市で消費するようになり、経済的に安定した移住地となって一九七七年移住地内が電化され、一九八一年には電話も架設された。

一九七四年に入植二十周年を記念して、トレーゼ・デ・セテンプロ日本人会館を建設し、一九九四年にはこの会館の正面に、入植四十周年を記念して黒御影石でできた「グアポレ移民の碑」を建てた。このグアポレ移民の碑には「アマゾン開拓の雄大な志を立て、原始林に挑みし勇気ある人々の功績を称え、ここに入植者の尊名を記す。子弟一同」とあり、移住者家長夫妻二人組の尊名が刻まれてあり、同時に「忘

れ得ぬ開拓の友あり、トレーゼはゴムの花咲く心のふるさと」の詩が刻まれている。

移住者の名が記されているグアポレ移民の碑

入植当初、州知事が移住地を視察（村山氏所蔵）

一九七〇年代に国道三六四号ポルト・ベーリョ、クイアバ間が開通してから、ポルト・ベーリョは発展したが、一九八〇年頃からサンパウロ方面より安くて大量の野菜や卵が入り始めたので、移住地生産の野菜や卵の値段が下がり営農に支障をきたしたので、商業に転業した人もあり、現在移住地で農業を営むのは九家族である。

この時期、開通した国道沿線に国内移住者が入植し、日系人も、パラナ州、サンパウロ州から転耕してジーパラナ、アリケメス地区に入植した。アリケメスには日系人が百四十九家族入植し、カカオ、コーヒー、米、トウモロコシ等の栽培を行ったが、主作物のカカオに病気が入り将来性に不安を生じたので、後続の入植者はなく、転住者が相次ぎ、日本への出稼ぎ者も多かったため二十家族くらいに激減し、一九九一年には同地域の日本人会も消滅した。しかし、現在は出稼ぎの帰国者もおり、二、三世を中心として公務員、牧畜業、商業、農業、林業等多方面に活躍しており、一九九九年西部アマゾン日伯協会が調査した時は、七十二家族が居住していた。

日本人会の組織には、トレーゼ・デ・セテンブロ自治会ほか、ポルト・ベーリョ市内に二世会があり、ポルト・ベーリョ市内には移住地からの転出者と、パラナ州、サンパウロ州から転住した二世を合わせて日系人が約九十家族居住している。

〔執筆者略歴〕

村山惟元（むらやまこれもと）

一九三二年、熊本県に生まれる。

一九五四年、ロンドニア州ポルト・ベーリョ市郊外トレーゼ・デ・セテンブロ移住地に計画移住、自営農の家族構成員として入植。一九五八年、日本海外協会連合会ベレーン支部職員としてアマゾナス州エフィジユニオ・サーレス移住地に駐在。一九六三年アクレ州キナリー移住地へ転勤した後、一九六五年退職、マナオスへ移り在マナオス日本国総領事館へ勤務。一九九八年、

総領事館退職後、日伯協会会長になり、現在に至る。

移住地内小学校（旧移住者合宿所）

入植当時の移住地の様子

ピメンタの栽培

野菜畑

ゴムの台木の消毒

移住者達　　（村山氏所蔵）

1974年 入植20周年記念式典

1994年 入植40周年記念式典

ロライマ州クイアーノ移住地

三木　祥弘

・ロライマ州概況

ロライマ州（リオブランコ直轄州）は一九四三年、大統領令によって、アマゾナス州の国境に接する一部をさいて直轄地とした。面積二十五万平方キロメートル、当時の人口はわずか一万五千人であり、一平方キロ当たりの人口密度が〇、〇六人とブラジル国内でもっとも人口密度の希薄な地域であった。ギアナ高地に位置し、そこの自然条件はアマゾン地域では特異な存在である。

ロライマ州の地理的位置付けとしては、北緯五度十六分十五秒から南緯一度二十七分にかけて、西経五十八度五十八分三十秒から同六十四度三十九分三十秒の広がりを持ち、ブラジルの最北端の北半球に位置し、英領ギアナ及びヴェネズエラ国に接しているためブラジル連邦政府としては重要な州である。州都ボアビスタ市は、現在二十万人以上の人口を有し、州全体としては約三十万人の人口である。

ロライマ州はアマゾン地域に含まれるが、ヴェネズエラ国境付近には千メートル以上の山岳地帯で、温帯性気候に属し、土地肥沃で広大な自然牧場（草原）と、その中に点在する森林島の景観は、アマゾンという概念からすれば遠くかけ隔たるものである。この森林島の土壌はアマゾン地域随一であり、俗にテーラロッシャ地層（ブラジル最良の土質）に恵まれ、農作物の生育は成

績優秀でアマゾン地方の収穫量とは問題にならない程、多収穫である。また、鉱山資源も豊富に埋蔵されている。

更に、雨期と乾期が他のアマゾン地帯とちょうど反対の時期になっているのもロライマ州の特色である。雨期は四月に始まり、乾期は九月から翌年三月である。リオブランコが州を南北に流れリオ・ネグロに注いでいる。乾期の最中は川水の減少が甚だしく、船の航行が中断され、マナオスからの船便はカラカライ市までとなる。

アマゾナス州都マナオスからボアビスタまで航空路の他、水路千六百八十一キロが唯一の交通路であったが、マナオス～ボアビスタ～ヴェネズエラ国境間の九八七、七キロの陸路が開通した。ＢＲ一七四号線で、マナオスを起点とＬＢＶ．八（Ｂはブラジル、Ｖはヴェネズエラ、国境標石八番）まで一九七七年に開通したが、最近になってアマゾナス州内のインジオ部落付近の道路舗装が完了し、ヴェネズエラまでのハイウェイが完成した。また、ボアビスタから英領ギアナのＢＲ四〇一号線も舗装道路となり、リオブランコ河に架設された橋は全長千七百メートルと聞く。陸路の開発により、ボアビスタは他国との交通の要所として重要な位置に存在している。

ロライマ州の気候は変化に富み、牧畜に最適の大草原が広がった天然の牧場地帯である。ヴェネズエラ国境付近には標高二千八百六十五メートルのロライマ山がそびえ、その山麓地帯は温帯気候を呈し地味肥沃で温帯果樹や馬鈴薯がよく出来、その昔、英国人がこの山麓地帯でこれらを栽培し、生産物を英領ギアナの首都ジョージタウンへ送ったという記録もある。

リオブランコ直轄州政府は首都ボアビスタに野菜、果物等を供給する目的で日本人移住者の導入を図った。一九五五年九月、パラー州ベルテーラ・ゴム園強制退去時に二家族（佃氏、江田氏、十五名）を直接市の郊外メッセンジャーナ地区へ入植させ、野菜栽培に従事させた。

現在のボアビスタ市（1999年 中野氏撮影）

現在では、ボアビスタ市への野菜栽培入植者は分家独立した者を含めて二十数家族が在住している。特に市の郊外にアマゾナス州から転住して、手広く養鶏業に従事する辻氏、ヴェネズエラ国境十一キロ海抜六百五十メートルのサーマンと言う入植地で、キャベツ、カリフラ

ワー、トマト等を栽培する外館氏がいる。外館氏は開発青年としてブラジルでの任期を終え、ロライマ州へ再移住した。ボアビスタ市から北東にパッサロン植民地がある。ここにも、加藤氏がパラー州のサンタイザベルから転住し農業に従事している。

一九八八年十月五日、ロライマが連邦直轄州から独立、第二十六番目の州となった。州政府が開発に力を入れ、将来は北部ブラジルの表玄関になるであろう。

・タイアーノ移住地概況

リオブランコ直轄州の首都ボアビスタ市から西北九十キロ、タイアーノ地区内の大草原の中に点在する森林島の一つ、標高二百～三百

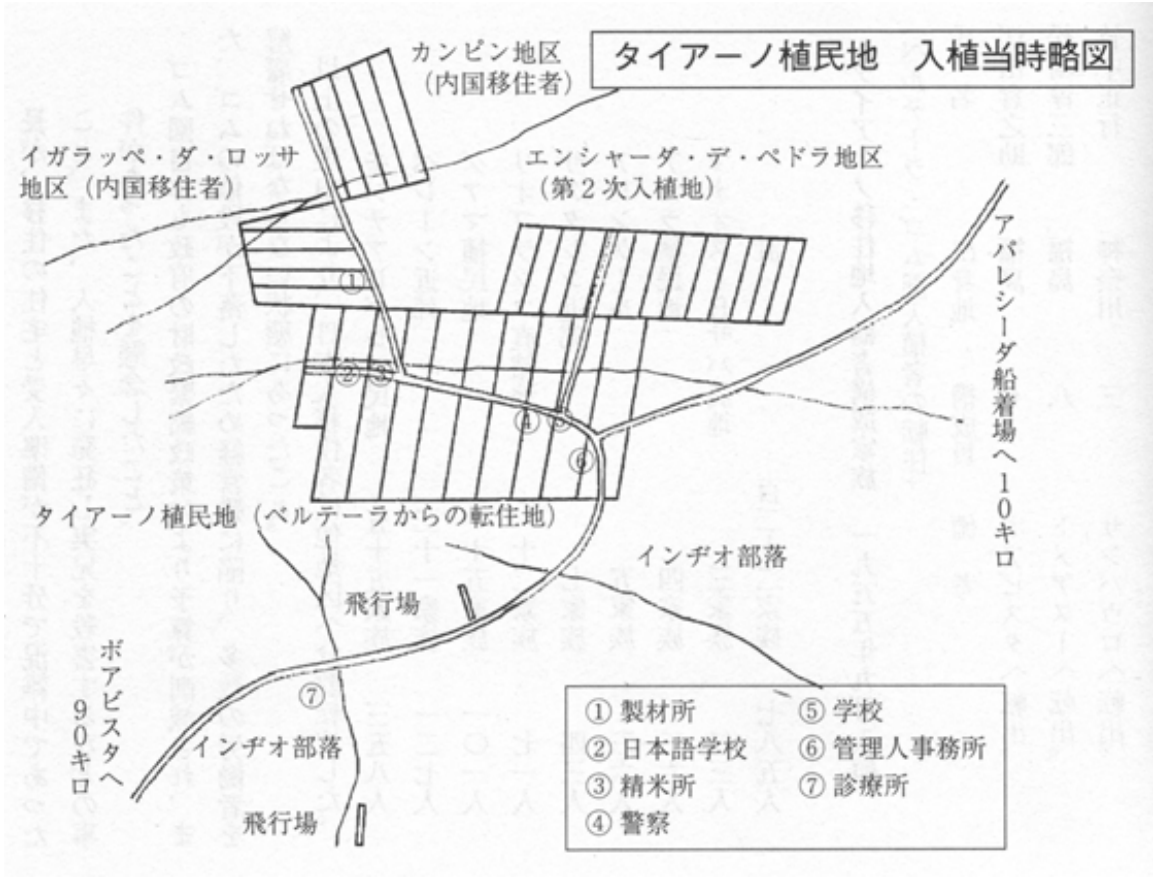
メートル前後の丘陵地帯に、ボアビスタ市へ農産物供給増のために開設された植民地である。植民地の正式名称は、リオブランコ直轄州タイアーノ郡コロネル・モッタ農業植民地である。

一九五五年九月、パラー州ベルデーラ・ゴム園移住者の強制撤去に伴い、九家族六十五名の邦人が転住し農業に従事した。

その後、一九六一年六月に第二次移住者九家族と単身呼び寄せ一名が入植した。カフェ、胡椒、熱帯果樹等の永年作物の他、陸稲、トウモロコシ、マンジョッカ、マカシェイラ、及び小規模の家畜の飼育、鶏、豚、家鴨等、入植者の経営規模は二～三ヘクタールであった。土地肥沃のため予想以上の収量で、ボアビスタ市場は日本人移住者の農産物で過剰気味となった。しかし、雨期になると道路の状態が悪くなり、ボアビスタへ買い物に出るのが十日がかりになることもあり、州一便の州政府の大型トラックで生産物を出荷し、資金の蓄積をはかり、四年の農業従事義務を終え、この植民地に見切りをつけてマナオス、ベレーン方面への転出が一九六五年頃より始まった。そして、一九七一年タイアーノで製材業を営んでいた秀島氏の退出を最後に、移住地から日本人の入植者はいなくなった。ベルテーラ移民の中でタイアーノ退出後ボアビスタに定着している家族はなく、第二次移民の中でもタイアーノを退去後ボアビスタに定着したのは二家族（秀島氏、土井氏）だけである。後に第二次移民の家族一名（中村篤徳氏）がタイアーノへ戻り、原住民のインジオ娘と結婚し、現在インジオ保護区内で農業に従事している。

三十年振りに所用でタイアーノを訪問する機会に恵まれた三木氏

は、感慨無量だった。三十年の移住地の山々は変わらないが、道路は整備され電化は進み、山の中には至る所に文明の利器が充満し、日本人の入植当時の面影は遠い昔へ過ぎ去っていた。



・ベルテーラ・ゴム園雇用移民とは

アメリカのフォード自動車会社が開設し、現在は北伯農事研究所の管轄になっているこのゴム園で、雇用労働者として一年～二年就労

後、他の植民地へ転住することになっていた。一九五四年十二月アフリカ丸でフォードランジアに六家族二十七名が入植したのを始めとして、翌年四月から三回に分けてベルテーラ・ゴム園に百家族、フォードランジアに十六家族、計百二十二家族が入植したが、一九五五年九月に全員強制退去し再移住することになった。その理由としては次のことがあげられる。

（一）　ゴム園雇用移住者は北伯農事研究所所長と、アマゾン経済開発会社の辻小太郎との話し合いで、移植民院の許可のもとに入植させたが、所長は主務官庁の農業省には計らなかった。事実このことを知った農務省は移植民院に対し、ゴム園に日本人移住者を雇用することは国内労働者を圧迫するものであると抗議し、所長に対して直ちに日本人移住者を解雇するように通達した。

（二）　一九五五年（昭和三十年）一月、第一回ベルテーラ入植者が到着早々、たまたま同地を訪問した移植民院技術部長が、移住の住宅と受入準備が不十分で混雑中であったこと、また、入植早々に発狂し実兄を殺害するなどの事件があったことを懸念したこと。

　ゴム園自体も政府の財政緊縮政策により予算が削減され、また、ゴムの値段が下落したため経営難に陥り、多数の労働者を解雇せねばならない状態にあったこと。

　以上の理由により、日本人移住者は他地区へ分散転住した。

モンテアレグレ植民地　　五十五家族　三五八人
ベレーン近郊　　二十一家族　一二七人
グアマ植民地　　十五家族　一〇一人

リオブランコ直轄地　十二家族　七一人
サンタレン近郊　七家族　四三人
アレンケール　五家族　三六人
アカラ植民地　四家族　二六人
マナオスＩＢサバ農地　三家族　二三人
計　百二十二家族　七八五人

・タイアーノ移住地入植者構成家族一九五五年九月入植
（ベルデーラ・ゴム園入植者の転住）

氏　名	出身地	構成員	備　考
江田倉之助	福島	七	ボアビスタへ転出。
松崎淳三郎	福島	八	トメアスーへ転出。
竹中正行	神奈川	三	サンパウロへ転出。
三木一夫	兵庫	五	マナオスへ転出、死亡。
大沢泰治	岐阜	七	マナオスへ転出、死亡。
佃　善三郎	大阪	六	ボアビスタへ転出、死亡。
西村輝雄	山口	七	ベレーンへ転出。
村尾光治	山口	六	サンパウロへ転出。
銅網康男	島根	八	ベレーンへ転出。

ベラビスタ移住地より、中崎一馬、小牧二夫の二家族が同時に転入植。

・第二次タイアーノ移住地入植者構成家族

一九六一年六月　あめりか丸

氏　名	出身地	構成員	備　考
高尾嘉平	佐賀	六	カスタニャールへ転出。
片桐義一	佐賀	六	ベレーン市内へ転出。
秀島幸男	佐賀	七	ボアビスタへ転出、死亡。
田代染吉	佐賀	六	カスタニャールへ転出。
松下博	佐賀	四	マナオスへ転出。
田代治夫	佐賀	六	マナオスへ転出、死亡。
土井堅三郎	佐賀	七	ボアビスタへ転出、死亡。
中村多一	佐賀	五	ベレーン郊外ベンフィカへ転出、死亡。
木村芳利	佐賀	五	マナオスへ転出、死亡。
三木久子	兵庫	一	マナオスへ転出。三木祥弘妻呼び寄せ。

エフィジェニオ・サーレス移住地

三木　祥弘

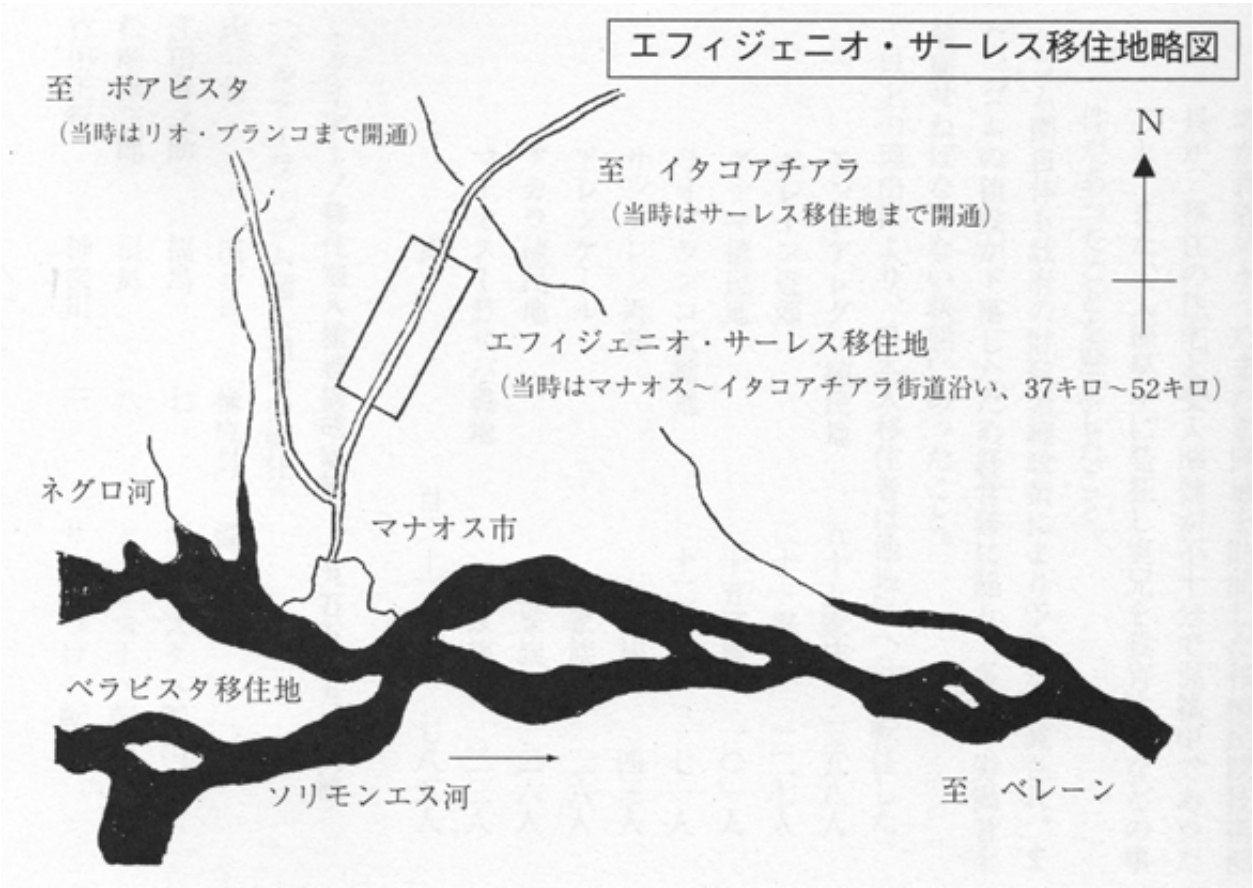
・エフィジエニオ・サーレス移住地概況

戦後のアマゾン移民は、上塚、辻の両氏が経営するアマゾン開発株式会社が所有する五千家族導入枠を日本政府が譲り受け、一九五三年（昭和二十八年）二月にジュート栽培契約移民としてアマゾン中流のパリンチンス近郊の日本人が栽培するジュート園に入植した。

海外協会連合会マナオス事務所長高村正春氏とアマゾナス州知事プリニオ氏との協議によれば、ベラビスタ連邦植民地へ日本人移住者が入植を始めたのは一九五三年後期からであるが、同移住地は道路の立地条件が悪く、雨期には交通が途絶えるとのことであった。高村氏は州政府がカカオ・ペレイラ～マナカプルー道路を開設するとの噂を聞き、嘆願書と写真を添えてプリニオ知事に提出、移住地内の道路の修理をお願いした。その返事を開くために再度知事を訪問し、返事を求めたところ「ベラビスタ植民地は連邦政府のもので、州が手を出すわけにはいかない。しかし、君たちの嘆願書は連邦移植民院に送っているので、植民地の支配人とよく相談をしてみよ。」とのことであった。別れ際に知事は、「州植民地への日本人移民を連れてこい。」と言われた。それから五年、エフィジエニオ・サーレス移住地が実現したのである。

入植条件は、アマゾナス州政府と日本政府との契約であり、ベレー

ン総領事館福岡章総領事が署名。入植条件の中で一九五八年から一九六〇年までの三年間に最低百八十家族を導入しなければならないことになっていた。



日本人入植地は、マナオス～イタコアチアラ道路の四十キロ地点から先を地区割りとの州政府からの指示があった。マナオスから四十キロ地点までは内国移民がすでに入植しており、問題が起こるとのこと

であった。

一九五八年九月マナオス郊外植民地（当時は正式な植民地の名称がなかった）に日本人移民出発の確報に接し、あるぜんちな丸に乗船、ベレーン港でチャーター船に乗り換えマナオスに上陸。一九五八年十一月十日、十七家族百十七人が現地に第一次移住者として入植した。続いて一九五九年九月三十日に第二次入植者六家族が入植。一九六〇年八月十日には第三次入植者十五家族、一九六一年八月十日には第四次入植者十七家族と、四年間にわたって五十四家族がマナオス近郊のエフィジェニオ・サーレス移住地に入植した。その後、青年の結婚による分家独立、他地区からの転住者を含めて一九八〇年代には八十五家族の一大日系移住地を形成した時期もあったが、国外への転出、日本帰国、マナオス市への転出が相次ぎ、現在は三十五家族となっている。この内二十二家族が農協に属している。

一九五八年十二月二十九日、総領第二一〇号、財団法人日本海外協会連合会支部長古田純三氏によって、ベレーン総領事館福岡総領事宛の公文におき、マナオス郊外植民地は「エフィジェニオ・サーレス植民地」と正式に命名された。

後年になって、この移住地は、海外協会連合会が所管する移住地の中で最も優秀な移住地の一つであると言われたが、第一次入植者の苦労は並大抵のものではなかった。マナオス市から四十キロ離れた陸の孤島にも等しい生活であった。道路は未完成、交通機関としての車両はなく、週一回の州農務局のトラック便が生産物の搬出と食料品の購入便で配車されたものの、配車すると約束しても期日を間違えたり、

植民地に来なかったりと不定期であった。

一九五九年に農業協同組合を結成し、生産物の販売、食料品の購入、地域社会の諸活動を開始した。マナオス農業組合と呼称する任意組合であった。一九六四年五月、ブラジル国の法律に準じた法定農業協同組合と認可され、エフィジユニオ・サーレス農業協同組合が組織された。現在までに農協存亡の危機はあったと聞くが、少数組合員ながら組合員の経済活動を支えている。

入植当時から一般活動として青年会活動が活発であった。敬老慰安演芸会、運動会、文芸活動その他の活動は青年会が中心となり、企画実施した。特に当時の州知事の招聘で、アマゾナス劇場で開催された青年会の会員による演芸公演は、マナオス市民から大好評で賞賛され、今も昔の語りぐさとして話題になっている。

入植一年を過ぎた頃には政府の生活補助金もなくなり、永年作の胡椒の植え付けの傍ら野菜栽培を手がけ、徐々に生産も向上したため、州農務局と協議し野菜類の販売許可をとり、アマゾナス劇場側の道路で販売を開始した。当時のマナオス市には、大根、キュウリ、白菜その他はなかったが、ある程度の野菜の知識を持ったポルトガル人が移住者の生産した新鮮な野菜を買い始め、それらの野菜が次第に普及した。当移住地は陸路四十キロに位置し、マナオス市という大きな市場が控えていたので、その地の利から順調に伸びていった。

一九五八年から一九六一年まで四回にわたって日本人移住者が入植したが、一九六二年に第五次入植が確定していたが、第四次入植地より更に奥地へと引き続き入植させるには、地形的に高低差が激しく、ア

マゾナス州政府は方針を変え、当時のアマゾナス州知事ジュペルト・メストリーニョ知事と協議した結果、マナカブルー道路沿線に入植した。

1959年 第一次移住者、東竜次氏の家建て（村山氏所蔵）

永年作としてのピメンタ・ド・レイーノも順調に生育し、一九六二年より収穫に入り、毎年収穫量は増加した。最盛期には約二百トンに達し、北米、欧州へ輸出していたが、一九七三年頃より根腐れ病の蔓延により生産量も減少、これに加えてピメンタ価格の下落と、新種のピメンタもなく一九七七年でピメンタ栽培に終止符を打った。

マナオスが自由貿易地域として認可され、工業団地が造成されマナオス市の人口は増加の一途をたどり、移住地の農業形態も新鮮農産物の

生産へと移行した。ピメンタ栽培に必要な有機肥料を鶏糞から補っていたため、小羽数養鶏が暫時増羽され、移住地の農業形態は産卵鶏を主体とした養鶏と熱帯果樹（ラランジャ、マモン、マラクジャ等）の栽培が移住者の経済を支えている。

第一次移住者の伐採現場（村山氏所蔵）

第二次移住者 長谷川昭氏の野菜畑（村山氏所蔵）

移住地の飼育羽数は四十万羽に達しているが、南伯産鶏卵がマナオス市場に入荷、地元の産業を脅かしている。現在、鶏卵と共にこれから

のエフィジェニオ・サーレス移住地農業を支える生産物として、プーニャ椰子の栽培、パルミットの生産に力を入れている。

一九九八年十一月入植四十周年記念日を迎え、アマゾナス州知事代理をはじめ日系企業の各代表、地元商店代表、移住者によって盛大な入植記念祭が開催された。移住者は一致団結し、自治会、農協を中心に営農の拡張、また子弟の教育に取り組んでいる。

1961年 第三次移住者 ベラビスタ移住地訪問
辻福重氏よりピメンタ植付講習を受ける
（村山氏所蔵）

第三次移住者 マカシエラの苗取り
（村山氏所蔵）

４９キロ地点の道路工事

生産物の格付、出荷（村山氏所蔵）

移住地を取り巻く現状は、昔日の感がありマナオス～コロニア間にはバスが一日十往復以上運行し、移住地は無限の可能性　と共に発展の道を辿るものである。

入植者名簿

第一次十七家族　（あるぜんちな丸、一九五八年十一月十日入植）

氏　名	出身地	備　考
佐藤義一	青森	一九三二年、サンパウロに移住、一旦帰国後、サーレスへ再渡航。死去後、三男五郎が相続。在サーレス
山田二郎	青森	一九六六年、マナオスへ転出
伊藤勝男	宮城	サンパウロへ転出後、再びマナオスへ転住。長男孝男が相続、在サーレス
斉藤清吉	宮城	サンパウロへ転出後、死去。長男清正、帰国
東　竜次	石川	死去、次男信行相続。在サーレス
錦戸理平	石川	マナオスへ転出
宮本竹一	石川	死去、長男倫克相続、在サーレス
山本福江	岡山	一九六〇年十月、サンパウロへ転出
真次正一	福岡	一九六五年、マナオスへ転出後、死去。長男照幸相続
立山　勉	福岡	

一九六三年パラナ州ポンタ・グロッサに転出後、帰国

江藤　保　福岡　一九六〇年、死去。次男育也相続、在サーレス

江藤てらし　福岡　在サーレス、四男茂相続

大塚芳金　福岡　死去後、家族はマナオスへ転出

宮崎繁年　福岡　死去後、家族はマナオスへ転出

武田達視　鹿児島

死去後、家族はマナオス、サンパウロなどへ転出。

野沢幸助　鹿児島　在サーレス、次男孝志相続

木場繁志　鹿児島

一九六八年、死去。長男逸雄相続。在　サーレス

移住地内合宿所（村山氏所蔵）

・第二次六家族　（ぶらじる九、一九五九年九月三十日入植）

橋本　勝　福島　一九六五年三月、サンパウロへ転出

長谷川浩悟　新潟　一九六八年九月、ヴェネズエラへ転出

長谷川昭　新潟

一九六六年七月、家長死亡後、一九六八年十一月、ペルーへ転出

渋谷金男　新潟

一九六二年八月、長男奨の妻としてりい子を呼び寄せ、カショエイラ・グランジに転出

安田　実　神奈川

一九六九年、マナオスへ転出

大塚宗次郎　福岡

一九六四年六月、父死亡。マナオスへ転出

・第三次十五家族　（ぶらじる丸、一九六〇年八月十日入植）

高野達弥　北海道

家長、三男、四男はマナオスへ転出。

長男、次男は在サーレス

渡辺茂雄　新潟

一九六八年十二月、サンパウロ州へ転出

笹川惣次郎　新潟

一九七七年、ペルーへ転出

長谷川　進　新潟

一九六八年九月、ヴェネズエラへ転出

酒井清治　新潟
マナオスへ転出
岡本春雄　石川
一九七〇年七月、マナオスへ転出後、死去
中山　弘　石川
在サーレス。一九六四年十月、弟八郎、分家独立サンパウロへ転出
新谷久吉　石川　一九七〇年、マナオスへ転出
室谷貞二　石川　死去、長男捷男相続。在サーレス
多原　勇　石川　在サーレス、次男正則相続
浅井外次　石川　在サーレス、長男正男相続
村本由恵　石川　死亡。家族はマナオスへ転出
森辻政一　石川
一九六三年、マナオス転出後、サンパウロ転住を経て一九六八年、帰国
桃井喚一　石川
一九六一年十二月、桃井勇一を呼び寄せ、一九六六年十一月、リオ・グランデ・ド・スール州へ転出
石場武雄　福岡
一九七八年、死去。家族はマナオスへ　転出

・第四次十七家族（ぶらじる丸、一九六一年八月十日入植）
坂本善太郎　青森
一九六二年八月、弟忠光及び父母を呼び寄せ。在サーレス

鎌田　功　青森
死亡。家族はマナオスへ転出
柿本彰司　青森
一九七六年一月、マナオスへ転出後、死去
木村昭二　青森
一九六三年六月、カルデロン上流へ転出後、トメアスーに転住
山中一雄　石川
一九七〇年九月、死去。家族は一九七〇年十一月帰国
亀崎義人　長崎　帰国
羽座間繁一　長崎　マナオスへ転出
二ノ方勝美　長崎　マナオスへ転出
藤井勝義　長崎　一九七五年、マナオスへ転出後、死去
宮永今朝市　長崎
一九六八年二月、ペルー、プカルパへ転出
飯盛　明　長崎
一九六三年十月、信幸夫妻、陣川義治夫妻を呼び寄せ。現在それぞれマナオスに転出。陣川夫妻はマウエスに転出
飯盛義雄　長崎　一九六二年六月、帰国
亀崎満義　長崎　在サーレス
亀崎房雄　長崎　死去
山口秀次　長崎
一九六六年九月、死去。家族は一九六七年十月、ペルー、プカルパへ転出

岩本広治　長崎　マナオスへ転出
大久保悟　長崎
一九七七年三月、死去。家族は一九七九年、マナオスへ転出
・その他の入植家族
高野欣弥　北海道
一九六〇年八月入植。高野連弥の長男、分家独立。在サーレス
高野伸弥　北海道一九六〇年八月入植。高野達弥の次男、
分家独立。在サーレス
開山政男　宮城　一九五八年十一月入植。斉藤清吉の妻
の弟、一九六四年分家独立。一九六九
年八月、マナオスへ転出後、帰国
藤井藤紀　福岡　一九五八年十一月入植。大塚芳金の構
成家族。一九六五年八月、分家独立、
エ・サーレスへ転出
野沢清一　鹿児島一九五八年入植、　幸助より分家独立。
矢野信幸　熊本　一九五四年八月、ベラビスタへ入植。
一九五九年九月転入、在サーレス
山形　稔　青森　一九六〇年三月入植。佐藤義一が呼び
寄せ。一九六四年分家独立、在サーレ　ス
中山八郎　石川　一九六〇年八月入植。中山弘の弟、一九六九年十
月、分家独立、サンパウロへ転出
貞弘貞男　石川　一九六〇年九月入植。錦戸理平が呼び
寄せ。一九六四年、分家独立。一九六

九年マナオスへ転出

石沢　力　山形　ベラビスタ第二次移民。一九六一年四月転入、二十七キロ地点に入植後、一九七二年、カショエイラ・グランジに転出。一九七三年死去。次男力雄在マナオス

石沢秀雄　山形　一九六一年四月、ベラビスタ植民地から転入、石沢力から分家独立。在サーレス

西脇竜男　青森　一九六二年十月入植。坂本善太郎が呼び寄せ。一九六四年三月、分家独立、一九七九年、マナオス転出

松隈平介　福岡　一九六六年、大塚宗次郎の構成家族より独立、在サーレス

三木孝美　兵庫　一九六六年十一月、タイアーノより転入後、マナオスに転出

原田誠　福岡　一九六七年、石場武雄より独立、一九七六年九月、マナオスへ転出後、死去

三木祥弘　兵庫　一九六七年五月、タイアーノより転入。在サーレス

大場健一郎　東京　一九六八年、日本より直接入植。一九七一年マナオス転出後死去

辻田三千子　奈良　一九六八年、イタコアチアラより転入後、一九七五年十一月、マナオスへ転

出（戦後ジュート移民）

飯盛直幸　長崎　一九六八年、兄義雄の構成家族より独立後、死去。家族はマナオスへ転出

野沢重夫　鹿児島一九六八年、兄幸助の構成家族より独立、マナオスへ転出

堀川正雄　神奈川　一九六八年、技術移民としてサンパウロ、モトラジオに入り、一九六九年十一月、農業を志して当移住地に転住。

その後帰国

里野悦次　福岡　一九七〇年八月、江藤ソキの構成家族より独立。在サーレス

西健二郎　鹿児島　一九七〇年八月、アマパ州、カンポ・ベルデより転入後、マナオスへ転出

斉川一良　青森　一九七二年一月、トメアスーより転入後、マナオスへ転出。現在訪日中

清水矩夫　石川　一九七二年十月、錦戸理平の構成家族より独立。在サーレス

佐藤陸奥雄　青森　一九七三年、佐藤義一の構成家族より独立。在サーレス

江藤英明　福岡　一九七三年、母ソキの構成家族より独立。在サーレス

土師郁郎　東京　一九七六年三月、マナオスより転入後、死去。家族は再びマナオスへ転出　（高

拓三回生、戦前移住者）

畑原穣　長崎　一九七六年三月、イタコアチアラより転入後、死去。家族はマナオスへ転出

（高拓三回生、戦前移住者）

坂本　明　青森　一九七七年、養父善太郎の構成家族より独立。在サーレス

坂本　豊　青森　一九七七年、父善太郎の構成家族より独立。在サーレス

真次文明　福岡　一九七五年、真次正一家族より分家独立。州道九十キロ在住。

移住地相撲大会、左から佐藤、橋本、藤井、橋本、高野の各氏
（村山氏所蔵）

・現在の入植家族とその位置（一九九九年四月現在）

住所	氏名
Rodovia km. 17	三木祥弘
AM010 km. 19	高野欣弥
Km. 19	高野富弥
Km. 20	石沢秀雄
Km. 27 入る	江藤幸一
Km. 27	岩本逸雄
KM. 32	松隈平介
Km. 33	飯盛嘉代子
Km. 33	清水矩夫
Km. 33	矢野信行
Km. 34 入る	伊藤孝男

移住地野球大会（村山氏所蔵）

Km. 34	宮本倫克
km. 34	東信之
km. 34	山形稔
Km. 35 人る	佐藤五郎
km. 36	真次照幸
km. 36	江藤英明
km. 36	江藤育也
km. 37	江藤茂
km. 37	木場逸雄
km. 37	浅井正男
km. 37	エフィジェニオ・サーレス農協
km. 37	エフィジェニオ・サーレス自治会館
Km. 37	藤井藤紀
km. 37	野沢孝志
km. 38	佐藤陸奥雄
km. 39	里野悦次
km. 39	坂本明
km. 40	室谷克巳
km. 41	室谷捷男
km. 41	多原正則
km. 48	坂本善太郎
km. 49	亀崎満義
km. 49	坂本豊

km. 49 入る　　西脇龍次
Km. 90　　真次文明

・昭和三十三年（一九五八年）四月二日付、農林省振興局長　名、三三振局第九三五号、ブラジル国マナオス～イタコアチ　アラ地区植民地移住者募集要項

一、移住地名及び所在地

マナオス～イタコアチアラ地区州営植民地

ブラジル国アマゾナス州マナオス～イタコアチアラ街道沿

二、移住者の種類及び世帯数　自営開拓農三十世帯

三、引受機関

日本海外協会連合会アマゾン支部

四、募集方法　全国公募

五、手続書類並びに推薦期日

（一）手続書類「農業移住者募集選考及び実務講習実施要項」の定めるところによる。

（二）推薦期日県または地方協会は四月三十日までに連合会に適格者を推薦する

六、合格者の決定

日本海外協会連合会は五月十日までに決定し、直ちに県または地方協会を通じて当該世帯に合格通知を行う。

七、実務講習

五月上旬実施の予定であり、講習会場その他細部について　は迫って示す。

八、送出期日

七月二日神戸出港の「あふりか丸」で送出予定。

九、移住者の資格

（一）農業者であること

（二）開拓意欲が旺盛であること

（三）世帯の構成は一夫婦を基幹として、満十五歳以上五　十歳未満の稼働者三人以上を有すること。世帯は三　親等以内の者で構成された自然家族でなければなら　ない。

（四）世帯員はすべて身体強健かつ次の病気及び身体的欠　陥のないこと。

（イ）伝染病、（ロ）トラコーマ、（ハ）結核性疾患、

（ホ）象皮病、（ヘ）ガン、（ト）感染期にある性病、

（チ）精神病、（リ）アルコール中毒、（ヌ）麻薬嗜好症、

（ル）不具廃疾、（ヲ）慢性胃腸障害、（ワ）腺病体質、

（カ）遺伝性疾患、（ヨ）盲聾唖、

（タ）労働に支障ありと認められる身体障害

（五）思想堅実で極右、極左の思想信奉者でないこと。

（六）犯罪、その他反社会的行為をしたことのないこと。

（七）ブラジル国に永住の目的で渡航すること。

（八）再渡航者でないこと。

（九）携行資金として八万円以上用意できる世帯であるこ　と。

十、入植条件

（一）　土地

州政府から林地の分譲を受ける。各世帯毎に二十五町歩、その価格は三千七百五十クルゼイロス　（邦貨一万五千円）一年据置四年年賦償還

（二）　入植第一年の営農資金

州政府は入植第一年目の種苗、殺虫剤、必要農機具を無償支給することになっている。

（三）　入植第一年の生活資金

州政府は入植後十一ヶ月間にわたって、入植者の生活維持及び住宅建設並びに井戸掘り等の費用にあてるため、各世帯当たり毎月四千クルゼイロスの補助金を支給することに　なっている。

（四）　合宿所、その他

州政府において各世帯毎の仕切りをした合宿所及び、飲料水補給用の井戸を用意し、入植当初五日間の給食をする。

（五）　学校

州政府はポルトガル語習得を主要目的とした小学校を設置し、ブラジル人教師を配属する。

（六）　診療所

州政府は診療所を設けて無料診療を行い、必要に応じては　入院の便をはかる。

（七）　通訳

州政府は通訳一名に対し住宅を与え、毎月三千五百クルゼ　イロス

の謝礼金を支給する。

（八）　外部との連絡

州政府は入植二年間、毎週一回ずつ入植者の交通及び生産　物の運搬のためマナオスへの定期便を用意する。

（九）　輸送費

ベレーン港から植民地までの輸送費はブラジル国政府の負　担である。

十一、移住者の義務

ブラジル国の諸法規を守り、引き続き四年間は本地区内に　おいて農耕に従事すること。

十二、渡航費

日本政府は渡航費の必要額全額を融資し返済は四ヵ年据え　置き（据え置き期間中の利子は支払いを要する）、その後　人ヵ年元利均等年賦償還とする。

以上の募集要項に応募した十七家族百十七名の第一次移住者が、マナオス郊外植民地（当時、移住地の正式名称がなかった）に入植した。

エフィジェニオ・サーレス移住地概略年表

一九五八年

九・二十八　神戸移住斡旋所にて家長会議開催、謄写版、日本人形その他共同購入。

十・五　あるぜんちな丸船内に青年会発足。

十一・一　二十三時、ブラジル国ベレーン港港外に入港。

十一・三　チャーター船ＡＣＲＥ号に乗船。

十一・十二　村山現地指導員と共に役員が州知事表敬訪問。

十二・十三　山焼き開始、午前十一時半に点火。

一九五九年

一・十五　COLONIA　EFIGENIO　DE　SALESと植民地名が決定。

二・十五　海協連よりフォード六トン車の貸与、利用委員会発足。

三・二十三　在パリンチンスの神田錬蔵医師の健康診断。

四・二十六　マナオス農業協同組合（任意）創立総会。

七・十二　収穫祭、農産品評会、運動会開催。

八・二十三　青年会が本格的な活動を開始。

九・二十八　農協だよりの創刊。

九・三十　第二次移住者六家族二十九名到着。

十一・十　入植一周年記念式典開催、余興として相撲大会が行われる。

一九六〇年

一・二十七　ＲＹＯＴＡＯＹＡＭＡ小学校の落成式。

三・十六　外人登録開始。

五・二　マナオス共同倉庫に直売所開設。（ＲＵＡ１０　ＤＥ　ＪＵＬＨ０６１８）

八・十　第三次入植者十五家族九十一名到着。

一九六一年

一・十三　海協連ベレーン支部、第一回農事講習会開催。

一・二十五　トメアスーよりピメンタ栽培実地指導。

五・六　第一回敬老慰安演芸会開催。（青年会主催）

八・十　第四次入植者十六家族到着。

十一・八　石川県寄贈ジープ「石川号」到着。

一九六二年

一・十五　青年会主催、第一回成人式挙行。

二・一　マナオス農協を発展解消しエフィジェニオ・サーレス農業協同組合を創立。

五・十三　農協婦人部結成。

八・十八　婦人部、青年会共催の盆踊り大会。

九・二十二　海協連現地事務所の閉鎖。

一九六三年

十・六　農協へ生産物の出荷を拒み、横流しをしたとして、第八回臨時総会で農協組合員十名が脱退した。

十一・十　エフィジェニオ・サーレス移住地グランド開き。

一九六四年

五・三十　任意農業協同組合を、ブラジル法規に基づく登記組合に改称し、四月七日付ブラジル農務省第七七五三号登記許可証受領。

一九六五年

五・十四　海協連ＥＳ種苗園が農協に移管される。

六・七　青年会がテアトロ・アマゾナスで芸能公演。

九・三　アメリカ向け十五トンのピメンタ初輸出。

九・五　マナオス～イタコアチアラ道路の開通式。

十二・三十一　オビドール・サンパイオ小学校落成式。

一九六六年

四・十九　移住地からの申請と、州当局の計画が一致し、移住地の治安保持のため州警察が派遣された。

十・二一　ピメンタ価格下落し輸出契約にストップがかかる。

十・二十九　ピメンタ八十五トンの輸出成約なるもブラジル銀行より契約六百ＵＳドル／トン以下では輸出不可となり、申請書却下される。

一九六七年

七・九　防犯委員会の発足。

一九六八年

三・十　自治会の発足。

三・二十七　ピメンタ栽培のため、ペルー国へ三家族転住。

十一・十　入植十周年記念。

一九六九年

六・一　農協婦人部をエフィジェニオ・サーレス婦人部に改組。

一九七〇年

六・七　高村正吾氏の叙勲祝賀会をコロニアで開催。

一九七一年

五・十七　農協に肉鶏処理場が稼働。

六・十五　農協にピメンタ乾燥場が稼働。

八・五　自治会館、第一期工事落成式。

十・二十八　ランプ生活から脱出し、電力を導入するため、電力委員を選出し移住地電化委員会を開催。

十一・十四　会館第一期工事落成式、入植記念祭開催。

一九七二年

十一・八　中西陽一石川県知事夫妻来訪

一九七三年

五・三十　農協、自治会電化合同委員会

一九七四年

四・十九　移住者の家族の墓参訪日団員に六名が参加、出発

一九七五年

三・十二　移住地で運転免許取得実地試験実施、州交通局と折衝し、移住者の免許証取得

七・十八　寒波来襲、十六度を記録

十二・七　青年教育と、子弟への日本語教育を主眼とする、青年団運営の日本語学級を開設

一九七六年

六・二十　青年団主催の農産品評会開催

九・五　マナオス電力会社、日本国領事館、国際協力事業団三者の折衝により、農村電化工事が行われ、州設立記念日のこの日、電化点灯式が行われた

十二・十一　マナオス、エスコーラ・テクニコでＩＮＣＲＡ（移植民改革院）より、移住地入植者二十五名の地券交付式開催。

一九七八年

五・二十　錦戸理平氏の叙勲祝賀会。

六・二十四　皇太子夫妻歓迎会が十四キロの農務局で開催。

十一・十二　自治会事務所落成式挙行。

一九八〇年

十・二十一　青年団再建懇談会。青年団活動を目的に青年会が結成されるが、この後十年間の活動の空白がある。

一九八二年

五・一　マナオス入港の日本からの貨客船を、日本語学校生徒が見学に出向く。

九・一　婦人会員の日本船見学。

一九八三年

六・七　佐藤義一氏の叙勲祝賀会。

一九八六年

三・三十一　中学生のマナオスへの勉学のため、通学バスを国際協力事業団へ申請。

五・十八　自治会を法定団体に登記。

六・五　東龍次氏の叙勲伝達式。

一九八七年

五・二十八　宮本竹一氏の叙勲伝達式。

十・三十一　日伯主催弁論大会に日語生上位入賞。

一九八八年

六・二十一　文仁親王殿下歓迎会。

九・十七　通学バスの譲渡式。（ＪＩＣＡ、エフィジェニオ・サーレス自治会）

一九八九年

六・十三　入植三十周年誌編集委員会開催。

一九九〇年

十一・十一　岩本広治氏の叙勲祝賀会。

十二・八　青年会の再結成。

一九九一年

十二・二十八　室谷貞二氏叙勲祝賀会。

一九九二年

七二一十五　寺山テル子シニア日本語教師の授業開始。

一九九五年
五・二十四　石川県知事一行の移住地訪問。（谷本正憲知事）
六・十九　農村電話の設置完了。
一九九六年
九・九　移住地福岡県人訪問に「ハル」一行来訪。
一九九七年
八・十人　通学生の減少と、車両維持経費がかさんだことから、フォルタレーザ市へ通学バスを売却することになった。

これからの移住地農業を担う

「アマゾナス・パルミット」

エフィジェニオ・サーレス農業協同組合

エフィジェニオ・サーレス移住地では、入植当時から野菜、胡椒の栽培などを行っており、その肥料を賄うための養鶏開始から、現在の様な鶏卵生産主体に移行しているが、南伯産の鶏卵がマナオス市場に入ってくることや、卵の価格の低迷、不安定さに対して鶏に与える飼料や労働者のコストが高くなったことにより、多角経営の考えで、養鶏と共にその鶏糞を有機肥料として有効に生かすことができる新たな

事業を始めることになった。

一九九三年、そんな折、ＪＩＣＡの先進地視察研修で野沢孝志氏がエスピリト・サント州を訪れた際、マカダミア栽培を視察。その脇で潅水しながら栽培されているププーニャ椰子に目が留まり、潅水の必要ないアマゾンなら成功するのではないかと報告。新作物としてアマゾナス州政府関係官庁が力を入れていたこともあり、パルミット生産を新規農協事業として取り組むことにした。

ププーニャという種の椰子は、もともとマナオス周辺原産ではなく、原生林の中には存在しない。しかし、アマゾンの気候に適しており、以前からインヂオなどが実を採るために刺のあるププーニャ椰子を栽培していた。これまでアマゾン河下流地域でアサイ椰子からパルミットを生産していたが、原生林中に植生するアサイ椰子からの収奪農法のため環境問題が懸念され伐採が禁止になり、ちょうど政府研究所が、実を作って種子を採取するためにププーニャ椰子郁子の栽培を研究しているところだったこともあり、この椰子の栽培に取り組むには良い機会であった。

一九九三年三月、早速この椰子の栽培についての説明会に行き、ＩＮＰＡ（国立アマゾン研究所）、Ｄｒ．kaoru　Yuyama（日系人、男性）の協力により農場見学をし、翌月ＩＮＰＡ農場よりププーニャ椰子の苗を二千本受領した。その後、ｓｒ．ＩＭＡＲ農場より種子を取り寄せるなどして栽培を開始した。これまで、ブラジル人によるププーニヤ椰子の栽培はあまり思わしくなかったが、サーレスでは鶏糞肥料の利用により栽培は順調で、また、これまでの刺があるププーニヤ椰

子では収穫作業等効率が悪いうえ、パルミット自体もうぶ毛のようなものが残り見栄えが良くないため、ペルー産の刺なしププーニヤの種子を取り寄せ、栽培することにした。

栽培、収穫は順調であり、次に加工、商品化して出荷するため、一九九六年、ＥＭＢＲＡＰＡ（ブラジル農牧公社）のパルミット加工技術講習会に参加し、七月には組合で初めてのパルミット加工テストを行った。パルミットは新芽の部分、コラソン（下部）からパルミット、パーリヤ（先端部）に分けられ、これまではコラソンの硬い部分やパーリヤの部分は捨てられていたが、コラソンの硬い部分は煮る時間を長くしてサイコロ状にカットし商品化、パーリヤの部分も商品として安く出すことにした。当初、パック詰めでは保存が利かないので瓶詰めで出荷しなければとの意見もあったが、保存方法の研究、向上によりパックで出すことに決定。組合事務所の一角でパルミット加工を始めたが、生産が増えるにつれ手狭になったため、同年十二月に加工工場建設を開始した。

一九九七年三月よりＪＩＣＡ日系社会青年ボランティア綱島青年を受入れ、パルミットの加工業務を強化。翌一九九八年一月、ＩＢＡＭＡ（環境保全局）にププーニヤ椰子のパルミット加工許可取得申請、登録をし、三月にはＢＥＡ（アマゾナス州立銀行）へププーニヤ個人融資契約書の登記を行い、本格的に加工販売が始まった。

四月からは綱島青年が販売業務に加わり、販路の開拓、宣伝など様々な面で彼の貿易商社での経験やノウハウを取り入れ、販売促進に生かした。商品名は世界中で知られている「アマゾナス」に決定。Ｅ

ＸＰＯ・ＡＧＲＯ他様々なイベントへの出店参加によりパルミットを定着させるなど、販売担当者たちの広報、宣伝活動といった尽力のもと、アマゾナス州においては販売が軌道に乗ってきている。パ　ック包装が功を奏し、各スーパーマーケットでは、名前の知られた会社の瓶詰めパルミットとは別に、新鮮野菜と共に店頭に並ぶことから、売り上げも順調である。

同年八月には理事、青年など数名が、ブエノ　ス・アイレス、サンパウロへ出張。「アルゼンチン、サンパウロ出張報告書」と言うレポートをまとめ、パルミットの州外、外国への輸出の可能性や市場を調査について報告した。

また、一九九九年三月、千葉県の幕張メッセで開催された世界食品見本市ＦＯＯＤＥＸ９９にＪＥＴＲＯ日本貿易振興会の要請によりアマゾナス・パルミットを出品した。

他の地域では、政治家などを通してＳＥＢＲＡＥ（ブラジル零細・小企業支援サービス）やＥＭＢＲＡＰＡなどの援助を受けながらパルミット生産を行っているが、サーレス農協は自力でパルミットの生産、販売を確立したことにより、現在、農業大学生、テレビ局、政府研究機関関係者等よく視察に訪れている。現在、ＲＥＣＯＯＰ（農畜産協同組合救済資金）の融資を申請中で、その融資により、今後パルミットの工場を拡張する予定である。

マナオス地区の販路はすでに征したと言っても過言ではなく、次は州外、将来的には輸出も視野に入れ、現在六十日である保存期間の延長を研究し、消費者が好むようなおいしく見栄えの良いものを作り、

いかに販路を拡大していくかがこれからの課題である。

・パルミット、農協の遍歴が詳しく紹介されているサーレス農協のホームページ。

http://www.internext.com/br/cames/

エフィジェニオ・サーレス農協

移住地を支える養鶏（1999年 中野氏撮影）

ブブーニャ椰子の畑（1999年 中野氏撮影）

アクレ州キナリー移住地

村山　惟元

・アクレ州、キナリー移住地概略

ブラジル最西端、ボリビアとペルーに隣接し州都リオブランコ市の人口は約二十万人、東北伯出身の内国移民が主でゴム液採取人が多く、一九七〇年代に入りポルトベーリョからリオブランコへ国道三六四号線が開通し、南伯からの転入者が増加した。産業は牧畜の他、米、バナナの生産である。キナリー植民地建設当時、リオブランコ市は中学校、師範学校、病院、農業試験場、兵営、飛行場を備えた人口約二万人の町であり、アマゾン河口ベレーンからリオブランコまで三百トン級の船で約二十八日を要していた。当時の主要産業は、アクレ州全体で採取産業が見られるのみで、ゴム・（年間約一万トンでブラジル国内一）、カスターニャ・デ・パラ、及び獣皮であった。農業事情は、焼畑で畜力を用いず、マンジョツカ、米、トウモロコシ、豆等の一年性作物、及びコーヒー、ゴム等の永年性作物が作られていた。

アンデスおろしによる寒波の記録として一九二一年クルゼイロ・ド・スール市（アクレ第二の都市）で七、三度、リオブランコ市では一九五二年に八、八度の最低気温が記録されている。

随一の日系人はペルー下りの古野功氏で、一九二〇年にペルーからボリビアを経て、ブラジル国境の町よりアクレ河を下りリオブランコにたどり着いた後、農業に従事し一九八七年に亡くなられてい

る。氏は一九五九年日本人移住者が着くまでの四十年間、日本語を使うことが全くなかった。アクレはアマゾン地域で一番古く日本人が足跡を印した地でもある。

キナリー移住地は南緯九度五八分二二秒、西経六七度四八分四〇秒、標高百五十メートルに位置し、アクレ州都リオブランコ市の東南方十九キロ地点から始まる。比較的平坦で小川が至るところにあり、河水または井戸により用水の取得が容易な面積千五百町歩の民有地を買収して植民地が建設された。一九五九年六月に六家族四十四名、続いて八月に七家族四十七名が入植し、キナリーへ移住した十三家族中、現在二家族が農業に従事している。キナリー移住地は人口約一万二千人の町へと変貌している。

南伯方面からの日系転入者も相当数あり、一九六三年サンパウロ州アリアンサ出身の二世医師川田哲夫氏が転入、現在七十家族約三百人がそれぞれの分野で活躍している。日系人による日本・中華料理店も市内に一軒あり盛業中である。

リオブランコから西へペルーに通じる国道が完成すれば、アクレは交通の要所として益々発展すると思うが、アマゾンの自然環境破壊の声に押し流されて、この横断道路建設は中断されている。ペルー国境までのブラジル側自動車道路は通じている。

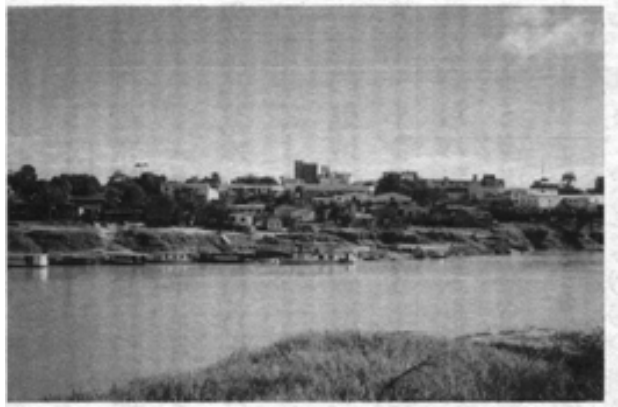
アクレ日本人会も活発な活動を続け、日本語教育に会長の小池修氏が従事されている。

入植の記録

川田　敏之

アクレ州キナリー入植地に日本からの移住者が入植したのは一九五九年六月十四日でした。

それからしばらくして八月十日に第二次が入植した。第一次、中瀬、篠木、原、坂野、川田、大水の六世帯。第二次、菊地、稲田、浜口、立石、西沢、岩中、守屋の七世帯、合計十三家族が入植した。キナリー村からアマゾナス州境のポッカ・ド・アクレ村まで通じる道路を挟んで、右に第一次、左に第二次と各戸三十町歩ずつのロッテを政府より無償で配布された。間口三百米、奥行千米の原始林だった。当初は入植地より四キロ手前のキナリー村に空屋を借りて毎日ロッテまで通い、原始林の伐採を行い一部を整地して仮住まいの



現在のリオ・ブランコ市（1999年 中村氏撮影）

移住当時のリオ・ブランコ市（村山氏所蔵）

小屋を建てて井戸を掘り、一応の生活が出来るようにして本格的に開拓の仕事に精出した。

まだ寒い三月三日の雛祭りの目、神戸を出港して四月八日にベレーンに入港。その日の食卓に赤飯が出て、皆ブラジルに来たお祝いだと思っていたら、現天皇陛下のご成婚の日であった。

どちらにせよおめでたいことだと皆で喜んだ。日本船あめりか丸を降り、いよいよブラジルの河船に乗り換えて、アマゾン川を遡って、六十日余りの船旅が続くわけである。蒸気タービン三階建ての六百トンの船は、アメリカ映画に見るミシシッピー河の船を思い出してもらえばいいだろう。日中は移住者の為の船内学校に始まり、夜はダンス会と毎日が同じことの繰り返しだった。船の燃料の薪切り、冷蔵庫がないので川沿いの牧場で生牛の買い付け、その牛に食べさせる草刈り、私たち移民とは別に同船していた、北伯地方から来た国内移民の幼児の葬式等。

彼らは一週間に一人くらいの割合で死亡していった。船足は遅々として延びず、川は雨期の増水で航行の座標になっていた小島が一夜にしてなくなることも珍しくなく、船は目標を失って、全く別の支流を一昼夜遡ったこともあった。途中の村の近くで今度は乾期に入り、船を進めることが出来なくなり、救援の船を待つ間の食料不足に、私は船員や現地人と共に上陸してマットへ狩りに行ったものであった。開発の及んでいなかったマットでは、獲物も豊富で船客にも喜ばれた。やがて来た船底の浅い救援の船で、目的地のアクレ州の州都リオブランコに向かう船内で、乗船者の六割がパラチフスに罹るという悲惨な目

にも遭ったが、目的地に上陸できたのは日本を出て約百日ぶりのことであった。

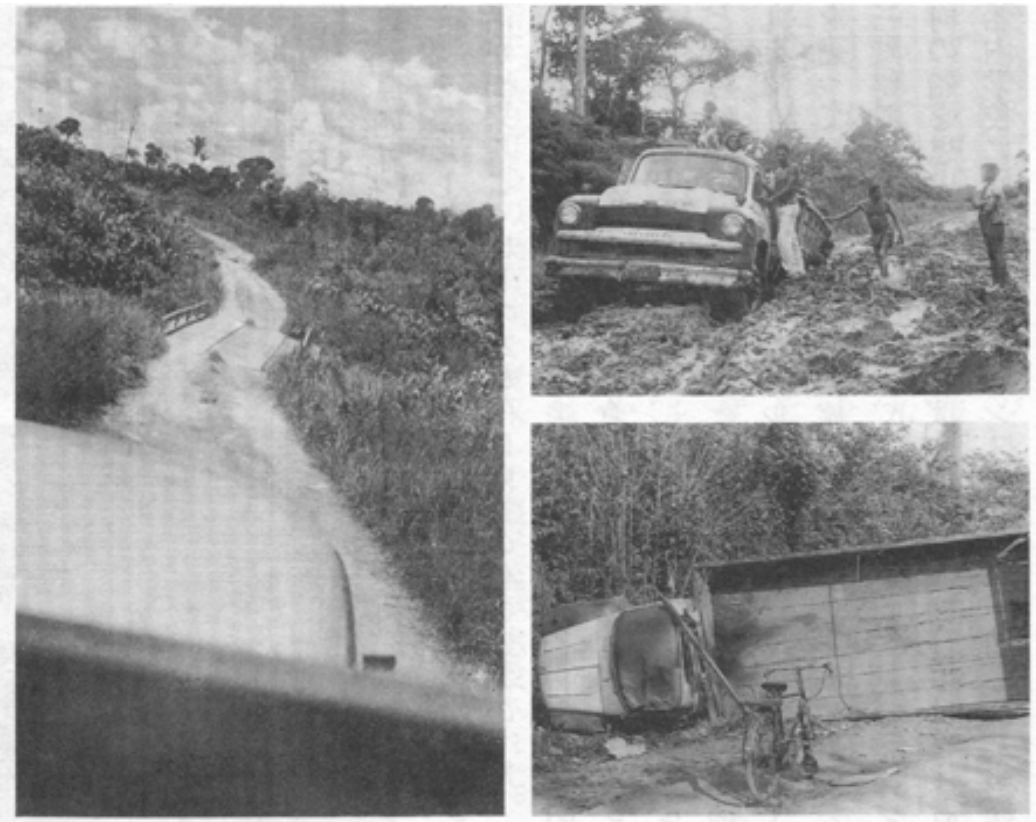
1963年 リオ・ブランコ市船着場（村山氏所蔵）

1963年 リオ・ブランコ市旧市街（村山氏所蔵）

伐採の頃の思い出は、根元がロケットの羽根の様な、大人が十人手をつないでやっと届くほどの大木を下から切ると時間がかかるので、四米位上の少し細くなった所まで櫓を組み、その上で斧を振るったことである。その大木が傾きかかったとき、大急ぎで飛び降り必死の離散。凄まじい地響きと共にぽっかり現れた大空の青さは、生涯忘れることが出来ないものである。

伐採地を外側から焼き払う段階で逃げ遅れて焼死した動物は、それはそれで私たちの貴重な食料でもあった。ピンガ（火酒）を呑みながら食べる肉の味もまた天下一品だと思ったのは、当時なるが故であろう。環境保護を考える以前の生存の原則でもあったのである。切り開いた耕地に、トウモロコシ、米、豆等を播き、次の収穫をするのだが、

その間、猿の大群に荒らされてしまったこともあった。



1963年 リオ・ブランコ市とキナリー移住地を結ぶ道路は写真のような悪路であった。
(村山氏所蔵)

入植地の苦しみの中にマラリアの発生があった。私は長崎で生まれ、少年の頃は医師を志していた思いもあり、サンパウロの日系医師グループとの交流を手がかりにその指導を受け、コロニアに於ける保健衛生を担当し、州政府のマラリア対策部の一員としてのほかに、一般外科、内科の治療までやるという現地ならではの努力だった。アクレ州の入植地はアマゾン地方の特色で雨期と乾期の二つの気候しかな

く、雨期に入ると車も通わず、只々雨宿りをしながら収穫物の手入れ、乾期は原始林の伐採と農産物の出荷に追われるという具合だった。今にして思えば、当時入植者一同環境の悪い所でよくがんばったと思う。

その後、入植地は、余りのマラリア、雨期の交通止め等で一戸二戸と脱耕が始まり、サンパウロ、ベレーン、マナオス等に移転し、現在の古い入植者は三戸のみとなったが、反対にサンパウロ、パラナ州より日系の移住者が入植して、現在リオブランコ市及びキナリー入植地には多数の日系人が在住している。

・入植者名簿

氏　名	出身地	構成員	入植年月	備　考
原　淳二	徳島	九	一九五九、六	
大水照夫	長崎	八	一九五九、六	サンパウロへ転出
川田敏之	長崎	八	一九五九、六	一九六三、トレーゼ・デ・セテンブロに転出
坂野　譲	神奈川	六	一九五九、六	サンパウロ経由、帰国
中瀬泰三	兵庫	六	一九五九、六	キナリー町へ転出
藤木福松	大阪	六	一九五九、六	一九六五、八、ベレーン経由サンタカタリーナ州ラーモス植民地へ転出
菊地信一郎	神奈川	九	一九五九、八	長男信男、次女玲子、四男達夫、一九六四、四、ＢＲ―

一四国道実験農家として入植

岩中藤光　佐賀　五　一九五九、八　帰国

立石忠治　長崎　六　一九五九、八

西沢正治　長崎　七　一九五九、八

浜口　寛　熊本　八　一九五九、八

福田正弘　佐賀　一九五九、八

守屋　謙　広島　六　一九五九、八　リオブランコへ転出

・昭和三十三年（一九五八年）五月六日、農林省振興局第一一四二号、ブラジル国アクレ直轄州キナリー地区移住者募集要項

一、所在地

ブラジル国アクレ直轄州リオブランコ郡キナリー

二、移住者の種類及び世帯数

自営開拓農十世帯（本年度下半期に約二十五世帯募集の予定）

三、引受機関

日本海外協会連合会アマゾン支部

四、募集方法

福岡、佐賀、長崎、熊本各県公募

五、手続書類並びに推薦期日

（一）手続書類「農業移住者募集選考及び実務講習実施要項」の定めるところによる。

（二）推薦期日　地方協会は五月二十日までに連　合会に適格者を推薦する

六、合格者の決定

日本海外協会連合会は五月二十五日までに決定　し、直ちに地方協会を通じて当該世帯に合格通　知を行う。

七、実務講習

六月上旬実施の予定であり、講習会場その他細　部については迫って示す。

八、送出期日

七月二日神戸出港の「あふりか丸」で送出予定。

九、移住者の資格

（一）農業者であること

（二）開拓意欲が旺盛であること

（三）世帯の構成は一夫婦を基幹として、満十五　歳以上五十歳未満の稼働者三人以上を有す　ること。世帯は三親等以内の者で構成され　た自然家族でなければならない。

（四）世帯員はすべて身体強健かつ次の病気及び　身体的欠陥のないこと。

（イ）伝染病、（ロ）トラコーマ、（ハ）結核性疾患、（ニ）象皮病、（ヘ）ガン、（ト）感染期にある性病、（チ）精神病、（リ）アルコール中毒、（ヌ）麻薬嗜好症、（ル）不具廃疾、（ヲ）慢性胃腸障害、（ワ）腺病体質、（カ）遺伝性疾患、（ヨ）盲聾唖、（タ）労働に支障ありと認められる身体障害

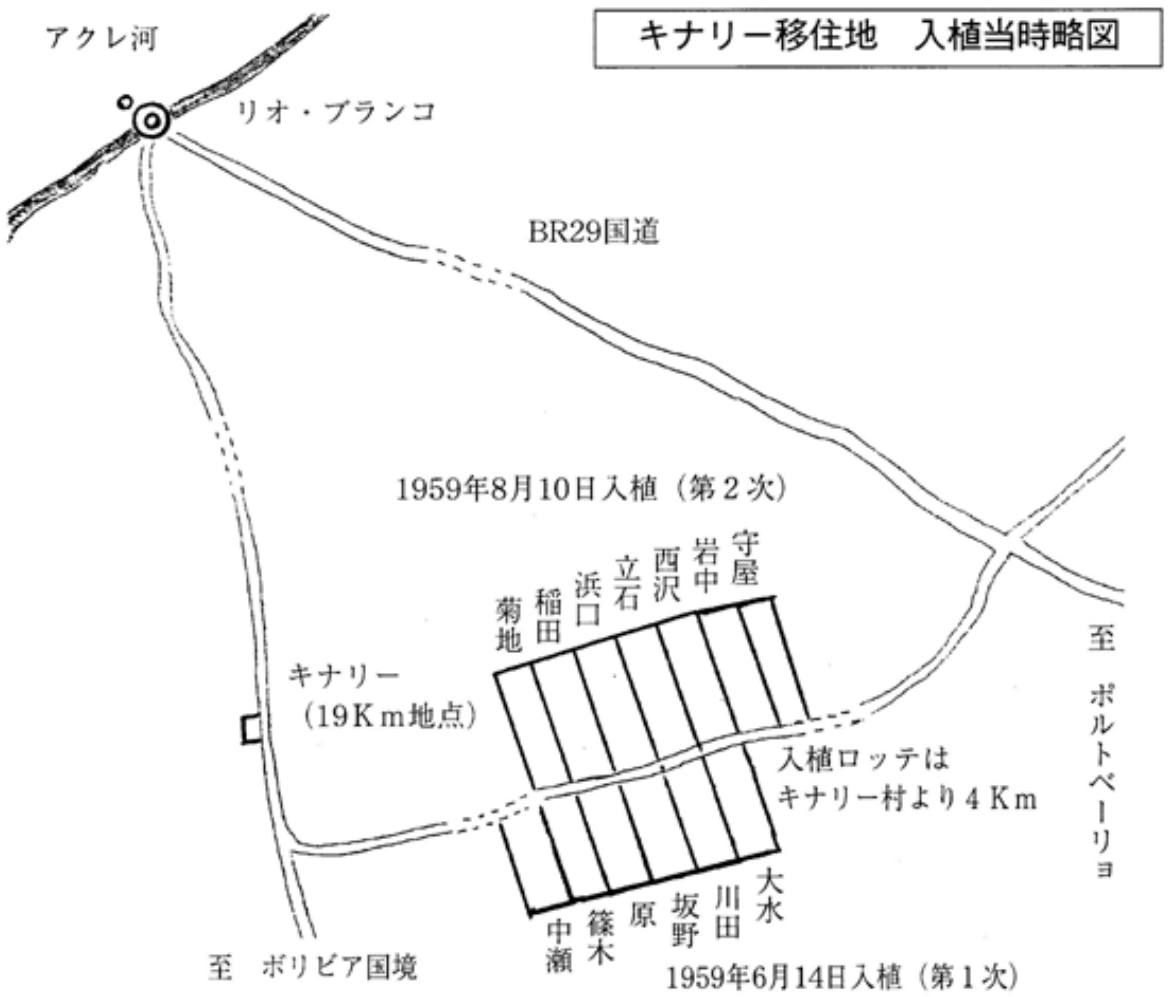
（五）思想堅実で極右、極左の思想信奉者でないこと。
（六）犯罪、その他反社会的行為をしたことのないこと。
（七）ブラジル国に永住の目的で渡航すること。
（八）再渡航者でないこと。
（九）携行資金として十二万円以上用意できる世帯であること。

十、入植条件
（一）州は一世帯あたり三十町歩の土地の仮地権証を支附し、更に三カ年同地区内で生産に従事した者には無償で本地権証を支附する。
（二）州は生活資金として各世帯に対し毎月千七百クルゼイロスを八ケ月間支給する。
（三）州は住宅（広間、台所、寝室、約十三坪）をあらかじめ建設する。
（四）州は割当地の中、四町歩を伐採し、地均し等の準備をしておく。
（五）州は州都リオブランコに達する道路十九キロは八月の乾燥期に整備する。又、生産物輸送のため、最初の一カ年は週二回政府所属のトラックを首都との往復に無償使用せしめる。

十一、移住者の義務
ブラジル国の諸法規を守り、原則として最小限四年間植民地管理者の指導の下に営農に従事し、その期間に十町歩以上の植え付けをすること。

十二、渡航費

ベレーン港までの渡航費全額を日本政府が貸与する。償還条件は四カ年据え置き（据え置き期間中の利子は支払うこと）、その後八ヵ年年元利均等年賦償還とする。ベレーン港から入植地までは州の負担で輸送する。



〔執筆者略歴〕

川田敏之（かわだとしゆき）一九三〇年、長崎県に生まれる。一九五九年六月、アクレ州キナリー移住地に入植。一九六三年、トレーゼ・デ・セテンブロへ転住後、マナオス市に移転。アマゾナス日系商工会議所会頭などを務め、現在に至る。

現在のキナリー村（1999年　中村氏撮影）

入植当時の移住地での暮らし（1963年　村山氏所蔵）

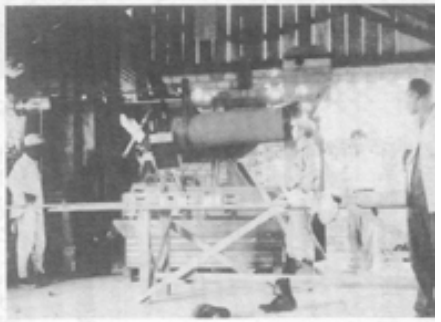
1963年のキナリー村

佐々木氏の農場

原氏住宅

佐々木氏住宅

マンジョカ畑で　浜口氏、原氏



精米所

キャプション（上段左から右へ）

1963年のキナリー村　　佐々木氏の農場

原氏住宅　　佐々木氏住宅

マンジョカ畑で　浜口氏、原氏

精米所

アマゾナス州

カショエイラ・グランジ移住地

高木正敏
出田　務

・任意移住地の開設

マナオス市中心地より八キロの地点。創設当時は、中心地から五キロのところより原生林、または再生林地帯で用材、薪を搬出するためのトラックがどうにか通る道路らしき道が通じていた。当然、自家用車はジープ以外通れないところであった。

一九六七年ブラジリアに於いて、北伯開発を行うとの目的でマナオス市が自由貿易地域に指定された。産業として、これと言った工場もなかったマナオス市に一大工業団地が創設されるとのニュースは大きな話題を呼び、二ヵ所所にあった移住地の人たちやマナオス市内にて小商をしていた人たちの中でも大きな話題であった。

当時、ベラビスタ移住地よりマナオス市内に出てモト・インポルタドーラ、日本船舶エンジン（ダイア）の代理店の社員として働いていた門正一氏を通じて社長夫人の所有する土地を売ってもよいとの承諾を得て、門氏は有志数人で近郊農業の希望者に呼びかけた。

当時集まった者は十一名。（敬称略）

門　正一、羽田重吉、安井　眞、藤本　操、辻　信義、大原　勝工、中谷清作、高木正敏、武野辰治、出口国義、渋谷金男

一九六七年六月十八日、十一名の名義により登記所にて正式に売買

の手続きを完了した。（地券書面積三、〇八九、八九七平方メートル）

・耕地の配分

地形としては、中央に小川が流れ、また南西に向かって流れる川が境界線になっている。中央の小川で線を引き、一耕地の間口を百十四メートルとして十一耕地を割り当て抽選にて各人に振り分けた。残る約半分の土地は今後日本人の希望者に売買し、その売上金を道路外の施設費として活用する約束で、同じく百十四メートルの間口の耕地十八区画を用意した。

十一名の耕地割り当てを終え、前途を視す目的で、一九六七年十二月十八日、中央にあたる中谷氏の耕地にて第二代マナオス領事館領事中川忠氏他、関係者として農務長官、多数の日本人の参加のもと入植祭が執り行われた。この日、中川領事、農務長官により記念植樹がなされた。

現在のカショエイラ・グランジ移住地（1999年 中野氏撮影）

・道路整備工事

エフィジェニオ・サーレスやベラビスタなどの移住地から、当時五百コントで土地を購入し、自主的に転入植してきた任意植民地であり、日本の移住事業と何ら関わりがなかったことから、まず日本政府、伯国側にしても何一つ援助はなく、当時の入植者としても強い要求を求めなかった。ただし、道路工事に要する予算である各地より集まった希望者五家族に土地を販売した代金は、当時としてはかなりの金額であった。この一部は十一名に対し配当もされていた。重機械のトラクターを入れ、延長約二千五百メートルの道路が完成した。二カ所の小川に架かる橋が、大雨の時通行不能になる他は、この道幅のある道路に入植者一同満足し、日毎の家業に精を出した。どこからの援助も望めないことを知った入植者は、まず市内に通じる二千五百メートルの道路を自ら管理するためには責任者が必要とのことで、道路委員会が発足した。

地域内道路に関し、補修工事の予算を計上して取り組んできた。

・地券不備発覚

現地の耕地割を見学に訪れる人の数は日増しに増え、三十六耕地は数年間にしてすべて販売された。各自の所有地となると、予想もしなかった大問題が発覚した。本地券面積三、〇八九、八九七を三十六耕地に配分した十一名の代表者に対し、分割登記を要請するため代表者数人で登記所に出向き願い出たところ、本地券面積と、これに添付さ

れている（所有者を示した地図）面積に約八十町歩（ヘクタール）の誤差があることが発覚。

古い地券書は、正確な測量などをしておらず、書類上だけのものであったため、あちらこちらで二重登記が起こっており、登記官は八十町歩の面積は州有地であろうと言い、州知事の認可を要するとのことであった。

1967年 門植民地の入植祭（羽田氏所蔵）

これまで三十六名の土地所有者で近郊農業として生産物を出荷し、経済的にも富を得てコロニアとして発展してきたが、地券整備が出来ないため様々な難問題が起き、特に銀行融資等も対象にならず、約十五年間に亘ってこの地券整備をするために四代の州知事に嘆願要請を続けてきた。

この頃、植民地開設者の門氏と孝橋氏が殺されるという痛ましい事件も起こった。この事件は謎に包まれたままで、どのようにして起こったのか知る人はいない。

この間、地券整備に対する経費もすべて土地所有者が支払ったが、一九八五年、親日家であったジュベルト州知事により、旧本地券（不備）から新本地券が三十六名の土地所有者に対し手交わされた。

キリスト教神父による入植記念植樹
（羽田氏所蔵）

植民地内唯一のトラック。物資の運搬に活躍した。

原生林を開いた後の中谷氏（羽田氏所蔵）

・植民地内唯一のトラック。物資の運搬に活躍した。

・原生林を開いた後の中谷氏（羽田氏所蔵）

・本地券交付式

この日、コロニアとしては約十五年間の難問題解決の悲願達成にあたり、天幕張りの会場、農産物展示会、来賓者特別席、各地域からの招待客約三百名の出席のもと本地券交付式が行われ、この後、州知事、市長、来賓の伯国人を交えて盛大に盆踊り大会が催され、夜更けまで続いた。また、農産物展示品は来賓者に全品土産物として渡され好評であった。

・コロニア内の諸施設

ジュベルト州知事との約束事であった道路問題は地券交付と同時期に解決されはじめ、不便であった行き止まり道路が市内に通じ迂回路が出来上がり、市内中心地まで二十分で行けるようになった。これにより、小児の通学や生産物の搬出等が容易になり、入植者は生産に励んだ。施設としては、日伯協会所有のスポーツ目的の運動場、併設された老人クラブ「憩いの園」、自然博物館（橋本捷治館長）、カントリークラブに併設されたゴルフ場（マナオスに唯一）、全日制ジョゼフィーナ小、中学校（中田智之牧師）、天理教協会（音成忠考代表）、アマゾンオルキジア（五町歩）、日本文化振興会運営の日本人学校、養魚場（出田農場、約三町歩の敷地内で二万匹養魚中）、モト・ホンダ・ダ・アマゾニア社所有地（約五十町歩、自然林保護目的）。また、一九七九年アマゾン移住五十周年祭の年に、移住地内に西部アマゾン日伯協会会館を建設する計画もあったが、地券がなく、その当時地券が出る見込みが立たなかったので、計画を断念したという経緯もある。

コロニア居住者は養鶏、果樹、野菜等の栽培をし、都市近郊であったので組合を組織しなくても野菜の生産、出荷が何とか出来、他地域と異なる日系人の集団地として発展してきた。

1985年地券交付式
式に出席したメストリーニョ州知

高木夫人指導のもと盆踊りを踊るメストリーニョ州知事
(羽田氏所蔵)

・今後の展望

現在、植民地内では蘭栽培、レタスの水耕栽培、養鶏が行われている他、野菜の生産が続けられている。

マナオス市の発展拡大により、周囲は住宅地に取り囲まれている。これまで近郊農業目的で成果をあげてきた移住地であるが、住宅地として変わりゆく日まであと何年だろうかとの見通しの中、営農意欲が段々と薄れ、特に近年の農産物価格の下落、生産コストの上昇もあり、近郊農業が姿を消しつつある。残念ながら植民地としては衰退の

道を歩んでいるが、市内に近く、また拡大し続けるマナオス市の状況を考えると、時代の流れとして仕方なく感じられる。

移住地内の近郊農業風景（高木氏撮影）

・自然環境に恵まれた地域

マナオス市より直線で八キロの地点でありながら、二本の小川は水量に恵まれ、冷たく実に清らかな水であった。当初入植者は約十年間

ほどはこの水が飲料水として使用でき、また、潅水用水とも利用水源が近く、小型エンジンで潅水が可能であった。原生林が面積の半分は残され、このおかげで市内と比べものにならない涼しさで実に住み良い地域であったが、近年周囲が住宅街と変わり、小川の水は汚染され農産物の潅水用にも利用不可能となってしまった。

・カショエイラ・グランジ自主植民地沿革史

一九六七年　六月十八日、十一人名義により登記所にて名義変更（地券面積三、〇八九、八九七M）

十二月十八日、中川忠第二代在マナオス領事、州代表他多数の日本人の参加を得て中谷清作氏耕地にて入植祭が催され、中川領事、州代表者により記念植樹が行われた。

一九七二年　植民地の名称については意見がまとまらず、難問題が多く、串田領事他事業団支所長にも心配をかけてきたが、西領事のご配慮により自治会が発足し、一応安定した諸計画が進行した。

一九七三年　当時、地主としては約二十家族となるも地権書問題でもめ事が多く、数回にわたり解決方針の懇談会を行う。八月二十四日、パラグアイ大統領就任式典に参加帰途、マナオス市を来訪された海外移住家族会連合会田中龍雄会長が、問題の多い植民地三耕地を視察される。

十一月三日、外務省移住部長、在マナオス西領事及び賀茂事業団支所長当地を訪問。本地券等について調査のため。

一九七七年　一九七六年、エフィジユニオ・サーレス移住地では日本国領事館及び事業団からの援助により農相電化が実現したが、当植民地はこの対象にならず、必要に迫られた当コロニアとしては、一丸となってマナオス電力会社（CEM）と祈衝、偶然、顔見知りの所長が来訪され、農村電化として電力導入が一銭の負担なくこの年度に完了。電化農業により、他にはない電力湛水の営農に変わる。

一九七九年　アマゾン移住五十周年記念事業の中で、日伯会館建設候補地として現在の日伯協会所有地の購入（所有者出田務、三町歩三百クルゼイロ）市及び州の協力を得て整地工事完了。この一角に先没者百二十四柱の霊を祭るため、当時厚生大臣であられた岡山県出身の橋本龍太郎氏の揮毫により慰霊碑を建立。

一九八三年　二月二十四日、移住地内で門正一氏、孝橋常男氏殺人事件発生。未解決。

一九八四年　カントリークラブ発足。（プールその他、各種施設が完了）

一九八五年　本地券受領。願望の地券交付はジュベルト州知事及びア

マゾニーノ市長がコロニア内で手交わすとのことで、目伯運動場に会場を急設、農産物展示会、盆踊り大会を催し無事終了。（地券受領者三十六地主）

一九八六年　全額コロニア負担により電話導入。

一九八八年　アマゾン自然科学博物館落成（館長橋本捷治）。秋篠宮マナオスご来訪に基づき、コロニア内に約千二百メートルのアスファルト道路完了。自然科学博物館ご視察と慰霊碑献花を賜る。

一九九〇年　二月五日、全日制ジョゼフィーナ小中学校開校（責任者中田智之牧師）日系人、ブラジル人を対象に全日制で運営されている。現在生徒数九十九名（中学まで）。計画は大学まで。日本人学校移転開校。現在生徒数四十二名。

一九九四年九月、天理教教会落成。落成と同時に日本語学校を開設。

・移住地名の変遷

門氏を通じて土地を購入、取得し開かれた自主植民地であることから、誰からともなくこの移住地を「門植民地」と呼び始めたが、若い人の名前を地名にするのはふさわしくないと言う意見から、入植者で話し合い、「あかつき村」という呼称に変更。しかし、この呼称は正式な地名ではなかったため、事業団の管轄に入ってから元々の地名で

あった「カショエイラ・グランジ植民地」が正式に使われるようになった。

・現在のカショエイラ・グランジ土地地券所有者

阿部則夫、坂本五三男、高木正敏、中崎一馬、橋本捷治、石沢力雄、酒井清一、武野貞男、中谷　裕、橋本義博、出田ひさえ、音成忠孝、宍戸秀安、辻　信義、鍋島　正、羽田重吉、渋谷　奨、辻　一夫、鍋島保寿、藤本　操、安井恵美子、吉田孝安、村上輝夫、武田要一、武田商会、アマゾン・オルキジア社、モト・ホンダ社、ジョゼフィーナ・デ・メーロ校、西部アマゾン日伯協会

・カショエイラ・グランジ移住地、土地購入者

氏　名	備　考
阿部則夫	ポルトベーリョより転住。
石沢勝太郎	ベラビスタ第二次入植、エフィジェニオ・サーレスへ転住後再転住。現在、ソリモンエス流域へ転出。土地はモト・ホンダ社へ売却。
出田　務	ベラビスタ第五次入植、死亡。
岩本広治	エフィジェニオ・サーレス第四次入植、マナオス在住。土地のみ購入。
江崎繁一	ベラビスタ第六次入植。帰国。
大原勝工	ベラビスタ第一次入植、死亡。

岡村　猛　バイショ・アマゾナスより転住。土地のみ購入。

門　正一　ベラビスタ第五次入植、死亡。

木庭　貢　在マナオス、木庭商会。土地のみ購入。

孝橋常男　ベルテーラ入植、イベサバへ転住後再転住、死亡。

坂本籐吉　ベラビスタへ転住。

宍戸秀安　ベラビスタ第一次入植。

渋谷　奨　エフィジェニオ・サーレス第二次入植。

高木正敏　ポルトベーリョより転住。

武田輿洋　エフィジェニオ・サーレス第一次入植。土地のみ購入。

武野辰治　ベラビスタ第一次入植、仁平家族より独立。死亡。

辻一夫　ベラビスタ第二次入植、辻福重より独立、ボアビスタ在住。土地のみ購入。

辻　信義　ベラビスタ第一次入植。

出口国義　ポルトベーリョより転住、ベレーンへ転出。帰国。

中崎一馬　ベラビスタ第五次入植、タイアーノより転住。

中谷清作　ベラビスタ第五次入植。死亡。

鍋島保寿　ベラビスタ第五次入植。

橋本　博　ベラビスタ第六次入植。死亡。

羽田重吉　第一次ジュート移民、マナオス在住。

藤本　操　ベラビスタ第五次入植。

松浦信治　バイショ・アマゾナス入植。マナオス在住。土地のみ購入。ジョゼフィーナ・デ・メーロ校へ売却。

村上輝夫　ボルトベーリョより転住。マナオス在住。

安井　真　安井宇宙（兄）の呼び寄せ、海協連職員退職後入植、死亡。

吉田一憲　ベラビスタ第一次入植。死亡。

井上正吾　ベラビスタ第一次入植。死亡。長男充が土地所有、マナオス在住。

石沢　力　ベラビスタ第二次入植。死亡。

山崎四郎　コチア青年として来伯。後に、マナオスに転住。建設用の砂を採取するため一町歩購入。ロンドニア州へ転出した後、BR一七四沿いに再転住。

移住地内のアセロラ畑（高木氏撮影）

〔執筆者略歴〕

高木正敏（たかぎまさとし）一九一七年、熊本県に生まれる。

一九五四年、ロンドニア州ポルト・ベーリョ市郊外トレーゼ・デ・セテンブロ移住地に計画移住、四年の契約を終えた後、一九五八年、マナオスに転出し、メルカードで働いた後、一九六七年、カショエイラ・グランジ自主植民地開設時に入植、現在に至る。

出田　務（いでたつとむ）一九二五年、熊本県に生まれる。

一九五四年十一月、ベラビスタ移住地第四次農業移民として入植。翌年十一月、リオ・ネグロ河畔に転住した後、一九六七年、カショエイラ・グランジ移住地開設とともに、同移住地へ再転住。日伯協会会長を務めた後、七〇周年記念誌編纂委員長となるが、一九九八年十一月、病気のため逝去。

■技術、花嫁、近親呼び寄せ移住、開発青年の動静―■

梅津あや子

一、アマゾン地域への技術移住者の動静

第二次世界大戦後のブラジル連邦共和国への技術移住者は、一九五三年にリオ・デ・ジャネイロ州のガスパリアン紡績工場へ十六名の技術移住者が移住したのが始まりで、その後、一九八一年九月ブラジル政府の移住政策の変更により、政府間レベルでの技術移住は一旦中止した。

その後、一九八五年、再度ブラジル政府の移住政策の変更により、ブラジル在住日本人工業技術移住者によって結成されている「工業移住者協会」が技術移住者導入業務の代行機関として伯国政府より認められて再開し、細々ながらも工業移住者のルートはつながって今日に至り、二千人以上の技術移住者が政府間レベルの政策移住者として、戦後伯国へ移住したのである。

一九九九年十月二十日付けのサンパウロ新聞によれば、一九六一年に工業技術移住が始まってから三十八年間の工業技術移住者の数は千六百人を数えるとあるが、いずれの数を採るにしても、伯国への工業技術移住者の数は農業技術移住者に比較して微々たるものであった。

現在までの、アマゾナス州への直接の工業技術移住者は一九七七年六月十日にセレージャ・エレトロニクス社の呼び寄せで消防設備士と

して移住した橋本捷治氏、一九八二年にモト・ホンダ株式会社へ就職した石井雄二氏の二人だけではないかと思われる。

・伯国への形態別日系移住者の推移

年度	農業	技術	商業他	指名呼寄せ
1952～1959		16，191	251 44	14，124
1960～1969	8，309	1，365 41	8，406	
1970～1979		1，564	1，377 41	628
1980	67	58	7	56
1981	80	32	4	45
1982	13	16	0	32
1983	58	5	0	21
1984	44	0	1	15
1985	19	0	4	22
1986	31	0	0	20
1987	23	0	0	17
1988	25	1	0	0

アマゾナス州の工業技術移住者は、最初からアマゾンを目指したのではなく、移住の段階では、サンパウロ州内にある企業への技術移住という形で伯国へ入り、人生のプランを自ら変更、もしくは勤務していた会社内での転勤によってアマゾナス州へたどり着いたという者がほ

とんどであった。従って一九七七年六月十日に直接マナオスへ入った橋本氏以前から数人の技術移住者がマナオス市に居住していたのである。

・伯国への形態別日系移住者の推移

年度	農業	技術	商業他	指名呼寄せ
1952～1959	16,191	251	44	14,124
1960～1969	8,309	1,365	41	8,406
1970～1979	1,564	1,377	41	628
1980	67	58	7	56
1981	80	32	4	45
1982	13	16	0	32
1983	58	5	0	21
1984	44	0	1	15
1985	19	0	4	22
1986	31	0	0	20
1987	23	0	0	17
1988	25	1	0	0

一九五七年マナオス市はアマゾン開発のため自由貿易港として法制化され、工業団地造成がスタートし、日本の優良企業が進出し操業を始めた。一九八二年マナオス市に於いて、工業技術移住者の親睦団体「なかま」の会―マナオス支部―が山下明会長体制で発足した当時は、会員数二十三名を数えたのである。その後、一九九一年のコロール大統領政権の汚職リコールによる経済界の大不況によって引き起こさ

れた企業のリストラ旋風で、転勤でサンパウロから移り住んでいたが失業し、やむおえずマナオスをあとにした技術移住者や、企業内での転勤で、数年マナオスに居住し、再転勤でサンパウロに引き上げた技術移住者が数名存在したのである。

マナオス在住の技術移住者の大部分が移住後、独立、または勤務していた会社以外の所からの引き抜きや、自己の意志、社会的状況の変化により、数回転職を経験しているが、石井氏の場合、唯一転職経験を持たない技術移住者で、八十二年に移住して以来、モト・ホンダ社でサラリーマンとして、日本在住時とほぼ同じパターンの日常生活を送っており、起伏の少ない人生を過ごしているのは例外中の例外である。

一九六八年から七三年にかけて、国内総生産指数の上昇率が十一パーセント、ブラジル経済の奇跡と言われた時期、アマゾナス州も第三期興隆期を迎えたが、その黄金時代、ある一時期長期出張などで、半年以上一年以内マナオス市に継続して滞在し、現在は他州に居住したり、日本へ引き揚げてしまった技術移住者を含めても、戦後アマゾナス州に居住した技術移住者は三十人程度で、現在もマナオス市に居住しているのは六人にすぎない。

・マナオス在住工業技術移住者名簿（1998年11月現在）

・マナオス在住工業技術移住者名簿（１９９８年１１月現在）

氏名	生年月日	渡伯	マナオス転居	渡伯形態 移住名目	現職
山下　明	1939.7.5	1963.5.14	1969.6	さくら丸 金型成型技師	鉄工会社 オーナー 農場経営
佐藤栄三	1946.7.24	1971.10.15	1975.4.28	ブラジル丸 電気機器調整工	レストラン 経営
橋本捷治	1945.4.3	1977.6.10	1977.6.10	飛行機 消防設備士	博物館館長 オーナー
久保　勝	1944.12.26	1969.12.12	1980.4	さんとす丸 電子工学ｴﾝｼﾞﾆｱ	鉄工所経営
石井雄二	1954.8.25	1982.4.24	1982.4.24	飛行機 品質管理技術者	会社員
梅津　久	1948.10.25	1973.7.5	1984.8.14	飛行機移住第１便 電子工学技術者	会社員

・山下明氏の場合

マナオスに現住する技術移住者の中で、記録に残っている限りの、アマゾナス州へ最初に居住した、山下明氏の場合をとりあげて見る

と、以下の通りである。

一九三九年七月五日　　神奈川県横浜市生まれ

一九六三年五月十四日　　さくら丸にて渡伯

サンパウロのセルマールというフランス系の会社の呼び寄せだが、実際はリオのベロルメ造船会社へ入社した。

一九五九年自分の志望する大学の受験に失敗した山下さんは、横浜市神奈川区の実家を出て寺に下宿し、大学受験浪人生活を始めた。

(以下、本人談)

本来自分らしく生きるとは、人間らしく生きるとはと模索し続けていたのだが、下宿先の、寺の住職の影響で、大学に入学してもどうもその答えは見つかりそうにない、いっそ大学受験などやめようと決意するに至った。実家からの、「家に戻って家業である鉄工会社経営を手伝え」と言うのを退け、さらに下宿先の寺を出て、それから四、五年間正規の就職はせず、アルバイトなどで食いつなぎながら、あちらこちらと日本各地を、いわゆる放浪の旅を続けた。その間様々な人との出会いをかさね、六十年代当時最盛期だった学生運動の青同盟の闘志と知り合ったり、宗教団体の創価学会の青年部の人と知り合ったりしたが、納得のいく答えにぶつかることはなく、自分が日本の社会機構の中に組み込まれて生きていくのに適さない人間であるという思いはますます募っていった。

自分らしく人間らしく生きるためには、どこからどう手をつけたらよいものか、どうしたらよいものか考え続けていた一九六三年の初頭のある日、山手線の電車に乗ってぼんやりと車内の吊り広告を見てい

たら、当時の海外移住事業団がブラジルへの技術移住者を募集している公告が目にとまったので、そのまま新宿で山手線を下車し、移住事業団の事務所を訪ねた。四月に出発する船の人員を募集しているので申込書を出すよう指導され、申込書を書いて出すと、すんなり渡伯が決まった。

三月末に横浜の移住センターに入り、秦野の職業訓練校に二日間のみ行っただけで、一九六三年四月二日に日本を出発し、五月十四日にサントス港に到着した。ブラジル到着後、呼び寄せてくれたセルマール社には自分に適した職種がないことが分かり、リオ・デ・ジャネイロにあるベロルメ造船会社に就職し、そこで足かけ五年を過ごした。ベロルメ社在社中は、給料がいい上、様々な特典があり、家賃は当時の水準で言っても破格と言えるほど安く、生活にあまりお金がかからなかったため、かなりの額の貯金を貯めることが出来た。金銭的には恵まれた生活であったが、精神的にはぬるま湯につかっているようで一抹の満たされない物があった。

そんな五年目のある日、ブラジリアにて共同経営で会社を設立しないかとの話がありブラジリアに移り住んだが、種々の事情で会社設立が実現せず、ベロルメ社在社中に貯めた資金も底をつき、かと言って妻は日系二世、二人の息子は全くのブラジル人として育てていたので、家族の将来のことを考えると日本に引き揚げる訳にもいかず、食べるにも事欠くほど困っていたところ、当時のある国会議員の紹介でアマゾナス州にあるシデラマ社宛の紹介状を携え、一九六九年六月家族をブラジリアに残し、一人でマナオスに向けて出発した。マナオス

に着くまでの船中で、リオにいたときの同僚がマナオスにて造船所をやっているという話を聞き、自分はマナオスに仕事を探しに行く途中であることを話したら、マナオス下船後すぐに、その人がやっているエスタナベ造船会社から迎えの車が来て、担当者の「いつから仕事をするか」と言う一言で入社が決まり、その後一九七二年にペトロ・ブラス社がエスタナベ社を買収するまで勤務した。

一九七三年四月二十五日にインコトーキョー鉄工作会社を設立し経営していたが、一九九五年二月にアンドレ、リカルドの二人の息子にインコトーキョーの経営を任せ、妻セリーナ和子の希望もあって、より人間らしい人生、自分らしい人生を求め続けてリオ・プレット・ダ・エヴア郡に耕地を購入し、現在妻セリーナ和子と共に、日本にいたら決してすることが出来なかったであろう、本物の大自然に親しむ人生を送っている。（一九九八年九月）

・かつて一年以上マナオスに居住したことのある技術移住者名簿

（期間が短かすぎ、調査が不十分であるが、判明した限りを記載）

氏　名	備　考
倉石典明	メタルフィーノに勤務していたが日本へ転勤。
五木田尊久	一九六九年十月渡伯。一九八四～九一年までヤマハ・モトール・ダ・アマゾニア社在勤中、マナオス在住。企業内転勤でサンパウロへ。現在ヤマハ・モトール・ド・ブラジル社勤務。
財津　久	一九七〇年四月あるぜんちな丸で渡伯。一九八四、

三、三十～一九九四、三、三、マナオス在住。サンパウロへ移転。自営業。

野原三郎　一九六九年六月渡伯。八十五年～八十八年の間ヤマハ・モトール・ダ・アマゾニア社在勤中、マナオス居住。企業内転勤でサンパウロへ。現在ヤマハ・モトール・ド・ブラジル社勤務。

堀川正雄　一九六八年モトラジオ。一九八五年～一九八八年日伯勤務。一九八八年リオからサンパウロへ転居後、日本へ帰国。

後藤　パナソニック、メンテナンス会社経営、一九八〇年代中期頃マナオス在住。その後日本へ帰国、現在別府在住。

野田宗弘　一九八〇年代マナオス在住。塗装工。ホンダを退職し九〇年ヤマハに入社、九一年退職後、九三年頃日本へ出稼ぎに行き、現在も日本在住。

小松たけし　一九八八年からヤマハ・モトール・ダ・アマゾニア勤務、マナオス在住。九十一年サンパウロ移転、その後ヤマハを退職して日本へ出稼ぎに行き、現在も日本在住。

石森　勉　さくら丸。山下明氏と同船者、近況不明。

坂野義信　ホビエル大和創立当時マナオス在住。ホビエル大和社は一九九八年年末頃、サンパウロへ撤退。

高瀬屋利充　ホビエル大和創立当時マナオス在住。ホビエル大和社は一九九八年年末頃、サンパウロへ撤退。日本へ帰国。

二、高拓生関係花嫁呼び寄せ

花嫁リストを列記するにとどめる。

高拓生氏名	花嫁氏名	備考
越智　栄	恒子	一九八一年死亡。
佐藤行夫	ますよ	
南　政	富子	
野村　弘	和枝	
山口　論	敏子	一九一四年（大正三年）三月三十日。一九三四年、ぶえのすあいれす丸。
新保宗雄	むつえ	
土師郁郎	美恵	
畑原　穣	起予子	
小野三郎	保代	
森　進一郎	キヌ子	
伊原只郎	清子	
安井宇宙	信子	

三、高拓生以外の花嫁呼び寄せ移住者

花嫁移住者の中でも、呼び寄せ者が農業移住者の場合は氏名を列記するにとどめる。

・花嫁呼び寄せ移住者リスト

花嫁氏名	呼寄者氏名	備考
三輪文子	三輪　勇	
吉留正子	吉留憲政	マナオス在住、旧姓山崎。
為沢佳子	為沢義美	旧姓斉藤、日本へ帰国。
岡田すみこ	薬師寺光雄	一九五九～六〇年頃渡伯、後に岡田秀臣と結婚。
中ノ目たい	中ノ目正明	一九六〇年渡伯。ウルカラで牧場経営。
三木久子	三木祥弘	一九六一年七月九日あめりか丸。ロライマ州タイアーノ移住地入植。現在はエフィジェニオ・サーレス移住地在住。
渋谷リイ子	渋谷　奨	一九六二年九月渡伯、カショエイラ・グランジ移住地在住。
丸山つね	種子田秀雄	一九四一年生、拓大卒、一九七〇年五月さくら丸でサントス着。丸山芳次と結婚。ウリクリツーバで牧場経営。
橋本美代子	橋本捷治	一九五二年四月二十八日生、一九八一年十一月一日渡伯。
木場孝子	木場孝一	一九八二年十二月十九日渡伯、マナオス市内在住。小南みよ先生の主宰する海外女子研修センター出身者。
川島悦子	川島博友	一九八八年渡伯、ベラビスタ移住地在住。小南みよ先生の主宰する海外女子研修センター出身者。

・橋本捷治氏夫人美代子さんの場合

アマゾナス州に現住する技術移住者が呼び寄せた、唯一の花嫁移住者である。

一九五三年四月二十八日　栃木県宇都宮市生まれ

一九八一年十一月一日　飛行機にて渡伯。

御主人の橋本捷治氏は、移住以前に南米のジャングル、特にアマゾンのジャングルで昆虫採集をし、子供の頃から夢見ていたアマゾンの動物昆虫博物館建設実現のために、移住を志した人である。移住名目は技術移住である。

橋本捷治氏は、一九四五年四月三日群馬県太田市で生まれた。

小学生の頃切手収集ブームが起こり、ブラジルからお父さん宛に来た葉書にはられていた、切手の動物や花を見て、ブラジルへ来る夢を抱いた。一九七〇年十月二十九日あるぜんちな丸で初渡航、十二月十八日ラプラタ川河口の、アルゼンチン最大の港ブエノスアイレスに入港上陸、そこからバスでアンデス山脈を越えて各地で昆虫採集をしながら、一年後の一九七一年暮れサンパウロ着、バスでベレーンを経マナオスに入った。南米の旅は四万キロ、地球を一周する位の距離に及んだ。一九七二年六月に一旦帰国し、一九七五年再渡伯し、マナオスを拠点にして、動、植物、昆虫採集活動を続けた。一九七七年六月十日に移住し、永住権取得、一九八五年博物館建設に着手、一九八八年に完成するまでに数回、博物館建設資金調達のため日本に帰国、ある帰

国の折りお互いの友人同士から紹介されて、宇都宮出身の美代子さんと知り合い、一九八一年帰国し結婚した。

美代子さんは「移住してからの苦労?·えーと?」と考える。もちろん苦労がない訳はないが、農業移住者の花嫁呼び寄せ移住者が、それこそコンクールに出したい位の、誰の目にもはっきりと分かる苦労をしているのと違い、技術移住者の花嫁は生命の存続の危機にさらされるような苦労はなかった。苦労があったとしても、それは日本に住んでいても、もしくは世界中どこに住んでいてもする苦労、ということであろう。

四、近親呼び寄せ移住者

・近親呼び寄せ移住者リスト

移住者氏名	呼寄者氏名	出身	備考
黒田長一郎	黒田重大	福岡	一九六一、六渡航。一九六一、八、トレゼ・デ・セテンブロ入植。
出口国義	府内清太	熊本	一九六一、六渡航。一九六一、八、トレゼ・デ・セテンブロ入植。一九六二十二、ベラビスタへ転住、日本へ帰国。
吉田貞雄	武野辰次	青森	一九六三、九、ベラビスタ入植。
飯盛信幸	飯盛　明	長崎	一九六一、八、エフィジェニオ・サーレス入植、サンパウロへ転出。

陣川義治　飯盛　明　長崎　一九六一、八、エフィジェニオ・サーレス入植、マウエスへ転住。

貞弘貞男　錦戸理平　石川　一九六〇、九、エフィジェニオ・サーレス入植、マナオス市在住。

慶子

英子

西脇竜男　坂本善太郎　青森　一九六二、十、エフィジェニオ・サーレス入植。

坂本忠光　坂本善太郎　青森　一九六二、八、エフィジェニオ・サーレス入植、交通事故死。

山形　稔　佐藤義一　青森　一九六〇、三、エフィジェニオ・サーレス入植。

桃井勇一　桃井喚一　石川　一九六一、十二、エフィジェニオ・サーレス入植、後リオ・グランデ・ド・スールへ転出。藤井史郎

辻田熊市　奈良　一九五三年九月二日着。あめりか丸にてマナオス着。

辻田富美子　辻田熊市　奈良　一九五三年九月二日着。あめりか丸にてマナオス着。ベレーン着は八月十五日頃。

茂子

富巳男

三千子

・近親呼び寄せ辻田三千子さんの場合

辻田三千子さんは、一九四三年十二月二十二日朝鮮、釜山で生まれた。一九四四年八月ころ、辻田さんが一歳にならないうちに第二次世界大戦の影響で、一家で日本へ引き揚げたが、当時の日本は戦争混乱の時代で、国内で生活していた者にとってはもちろん、引揚者にとっても非常に厳しい生活環境であった。

七人家族の辻田家は、この厳しい状況を打開しようと伯国への移住を計画、お父さんの熊市さんと上の男の子一人、女の子一人は、戦後の第一次移民船でジュッタ移民として移住した。

なぜお父さんと上の男の子一人、女の子一人だけが先に移住したのかは、移住当時九歳と小さかった三千子さん以外の家族が亡くなってしまった今となっては、はっきりしないが、辻田家の事情ではなく、このときの同船者の家族構成を見てみると、どうも当時のジュッタ移住基準が、家長と二人の労働能力を持つ者という基準ではなかったかと思われる。お母さんとお兄さんお姉さん、当時九歳の三千子さんの四人は一九五三年九月二日に、お父さん熊市さんの呼び寄せ移民として到着し、お父さんの待つイタピランガ郡に入植した。

十五歳頃イタコアチアラ郡のリオ・ウルブへ家族で移転し十七歳までそこで過ごした。十七歳のとき、ペトロ・ブラスの技師として赴任してきたドイツ系のオラフ氏と巡り合い結婚し、ベレーン市に足かけ六年居住した。

一九六六年初頭、二十二歳のとき長男出産のため大事をとって早めに

里帰り、飛行機での旅行であったが、旅行の無理がたたったのかマラリヤにかかり体調をくずしてしまい、四月四日、七ケ月の早産で長男のアルフレッドさんを出産した。

お父さんとお母さんは産婦の枕元でランプの灯りを頼りに、婦人雑誌を読み研究しながら孫のへその緒を切った。新生児は未熟児のため、自分の体温を保つことも出来なかったので、リットル瓶にお湯を入れ湯たんぽ代わりにしたが、子どものほうがリットル瓶より小さくみえたそうである。

長男出産のその年一九六六年十二月二十五日、御主人のオラフ氏は、出張先のペルーからの帰途、乗っていたアビアンカ航空会社の飛行機がアンデス山中に墜落し、その事故で死亡した。

実家に帰り移住地での生活が始まったが、この間お父さん、お兄さん、お姉さんと次々と肉親を亡くし、家計の支え手となる。

六十九年七月、息子さんが三歳のとき、エフィジェニオ・サーレス移住地の農業協同組合に事務員として就職のため、エフィジェニオ・サーレス移住地に転居し、七十五年初頭まで約五年半農協に事務員として勤務した。

七十五年二月、息子さんの教育のことを考え、移住地をあとにする決心をする。二月に日系企業のサンヨー社に採用され、マナオス市内へ転居した。お母さんと長男のアルフレッドさん、お姉さんの死後引き取って育てていた遺児がお嫁に行くまで四人家族の生活が続いた。

サンヨー社勤務時代、一九七九年七月二十二日に、赴任していた社長の夫人が到着した歓迎会のため社員三十人位でアマゾンクルーズに

出掛け、船は新しかったのだが、モーターを回転させたあと船外へ水を出すための装置が作動していなっかたので、トロピカルホテル沖で浸水沈没してしまった。

当時は船に無線があるわけもなく、駐在員の柳原氏と二人で救助を求めて夕方四時頃から泳ぎはじめ、夜中の十二時頃サンジョルジにある沿岸警備隊の基地のある砂浜に泳ぎ着き、軍隊の人たちに助けあげられた。その頃、河に残された人達がバナナの輸送船に救助されていたことをトロピカルホテルに連れていかれて初めて知ったそうである。サンヨー社には九四年八月まで足かけ二十年間勤めて退職し、九五年当時、日伯協会が建設中であった老人ホームに老人ケアの職員が必要となるということで、九五年六月に日伯協会に採用され、九五年九月から十一月まで三ケ月間日本へJICAの日系人移住者技術研修制度で研修に行き、日伯協会の職員として今日に至る。

五、開発青年（日系社会青年ボランティア）

開発青年制度は日伯間の移住政策の変化により、一九八六年に体験移住の目的で誕生したものであり、一九九七年に日系社会青年ボランティアと名称変更し、目的も移住の下見、実体験的なものから日系社会の発展の援護に切り替わり、期間も従来の三年間から二年間へと短縮し、農業でも永住権取得権利はなくなっている。

氏名　　活動経歴

平野貞二　一九八七年二月～一九九〇年二月（開発青年二回生）。西部アマゾン日伯協会日本語学校　日本語教師として三カ年勤務。

井田　繁　一九八八年～一九九一年（開発青年三回生）。トレゼ・デ・セテンブロ日伯協会日本語学校　日本語教師として三カ年勤務。

村瀬るり子　一九九〇年三月～一九九三年三月（開発青年五回生）。西部アマゾン日伯協会マナオス日伯診療所看護婦として三カ年勤務。

中別府万里子　一九九〇年三月～一九九三年三月（開発青年五回生）。ポリネス教会まなみ幼稚園で幼児教育に携わり、三カ年勤務。

沢田八重子　一九九三年三月～一九九六年三月（開発青年八回生）。西部アマゾン日伯協会マナオス目伯診療所看護婦として三カ年勤務。

中野宗雄　一九九三年三月～一九九六年三月（開発青年八回生）。ATSアマゾン・トラベルサービスに三カ年勤務。帰国後、再渡伯し、現在モト・ホンダ社に勤務。

松村朋枝　一九九六年三月～一九九九年三月（開発青年十一回生）。西部アマゾン日伯協会日本語学校日本語教師として三カ年勤務。一九九七年五月より、教師不在のため一九八六年暮れから閉校されていたベラビスタ移住地自治会日本語学校を再興し、週一回土曜日に出張授業を開始し、九十八年十月まで勤務した。

綱島　孝　一九九七年三月～二〇〇〇年三月（青年ボランティア十二回生）。エフィジェニオ・サーレス農業協同組合事務職員として勤務中。

中野敦彦　一九九九年四月二〇〇一年四月（青年ボランティア十四回生）。西部アマゾン日伯協会事務職員として勤務中。

六、日系社会シニア・ボランティア

寺山照子　一九九二年七月～一九九四年七月。西部アマゾン日伯協会日本語専門家。

西野義男　一九九八年七月～二〇〇〇年二月。西部アマゾン日伯協会冒本譜指導教師。病気のため任期短縮。

〔執筆者略歴〕

梅津あや子（うめつあやこ）

一九四九年、岩手県に生まれる。

一九七三年七月、飛行機移住第一便で技術者の夫と共にサンパウロへ移住。一九八四年、マナオスに転住し、一九九四年より西部アマゾン日伯協会日本語学校講師として勤務。現在に至る。

■マナオスにおける日本語教育―■

西部アマゾン日伯協会　日本語学校の沿革

三木　祥弘

・学校名　西部アマゾン日伯協会日本語学校
Escola de Lingua Japonesa da Associacao Nipo-Brasileirada Amazonia Ocidental

・所在地　Rua Terezina 95, Adrianopolis, Manaus, Amazonas, Brasil
Cep 69057-070 Tel (092) 234-7185／Fax (092) 232-3694

・沿革史

一九七二年頃　カショエイラ・グランジ移住地内にて個人的な日本語教育が日系子弟に実施されていた。その後、マナオス日伯文化協会にて「マナオス日語学級」として日本語教育がなされる。

一九八〇年　日本人移住五十周年記念事業として日伯会館が建設され、日語学級は工事期間中一時休校となる。同年八月、日伯協会マナオス支部の運営により日語学級の授業を再開し、非日系ブラジル人子弟、二世、三世の混血児対象の特別クラスが編成される。日語学級には百五十名以上もの生徒が在学する盛況さであった。

一九八七年　西部アマゾン日伯協会マナオス支部が運営する「マナオス日語学級」の経営母体が日伯協会に移管される。国際交流基金の助

成もあって教師研修や日本語学習成績優秀者の日本研修制度がもうけられ、夜間部に活気がわいた。

一九八九年　国際協力事業団の助成により、西部アマゾン地域日本人移住六十周年記念事業として、鉄筋煉瓦二階建ての校舎が完成した。

一九九四年　一九九三年までは過土曜日のみの授業であったが、本年より日本語学校と成人対象の日本語講座を一体化して昼夜開講制とし、昼間部過二回（水、土曜）、夜間部は週三回（月、水、土曜）授業として現在に至る。

・日本語教師の変遷（西部アマゾン日伯協会日本語学校）

一九八〇年　出田ひさえ、丸岡すみ子、大場　智子、野沢みつ子

一九八一年　小茄子川力雄、丸岡すみ子、大場　智子、野沢みつ子、為沢　佳子

一九八二年　小茄子川力雄、丸岡すみ子、為沢　佳子、後藤博子、松崎　尚子、柿本　ソメ

一九八三年　後藤　博子、丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、坂本満津子、山田芙美江

一九八四年　小茄子川力雄、丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、坂本満津子、山田芙美江、清藤　慶子

一九八五年　丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、山田芙美江、清藤　慶子、宮腰　陽子、鈴木ナナ江、蕉木　節子

一九八六年　丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、山田芙美江、宮腰　陽子、鈴木ナナ江、蕉木　節子、藤井　将視

一九八七年　丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、山田芙美江、宮腰　陽子、鈴木ナナ江、蕉木　節子、平野　貞二（開発青年）

一九八八年　丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、山田芙美江、宮腰　陽子、鈴木ナナ江、蕉木　節子、木幡あや子、鈴木七末子、平野　貞二（開発青年）

一九八九年　丸岡すみ子、松崎　尚子、柿本　ソメ、山田芙美江、宮腰　陽子、鈴木ナナ江、蕉木　節子、木幡あや子、鈴木七末子、平野　貞二（開発青年）

一九九〇年　丸岡すみ子、山田芙美江、宮腰　陽子、鈴木ナナ江、蕉木　節子、木幡あや子、錦戸　健、半田律子、五木田洋子、野沢美香

一九九一年　丸岡すみ子、鈴木ナナ江、木幡あや子、錦戸　健、野沢美香、音成　博子、三宅　竜子、舟崎　逸子

一九九二年　丸岡すみ子、宮本ナナ江、木幡あや子、錦戸　健、野沢美香、音成　博子、半田　律子、米倉美喜子、中別府万里子（開発青年）

一九九三年　丸岡すみ子、宮本ナナ江、木幡あや子、錦戸　健、野沢美香、音成　博子、半田　律子、米倉美喜子

一九九四～一九九五年　錦戸　健、半田　律子、柿本　ソメ、柿本充江、三木　祥弘、梅津あや子、小森田利恵子、錦戸みどり、村田あけみ、生野　リカ、南　恵子

一九九六～一九九七年　錦戸　健、半田　律子、柿本　ソメ、柿本充江、三木　祥弘、梅津あや子、小森田利恵子、錦戸みどり、村田あけみ、沢内　則子、松村　朋枝（開発青年）

一九九八年　錦戸　健、半田　律子、梅津あや子、小森田利恵子、沢内　則子、モリ　則子、松村　朋枝（開発青年）、西野　義男（日系社会シニアボランティア）

・運営母体

西部アマゾン日伯協会理事会

・教師構成（一九九九年度）

錦戸　健　教育部長、昼、夜間部担当
梅津あや子　昼、夜間部担当
半田律子　夜間部担当
小森田利恵子　夜間部担当
モリ則子　昼間部担当
西野義男　JICA 日系社会シニアボランティア、昼、夜間部担当
沢内則子　昼間部担当ボランティア（総領事館領事夫人）

・入学年齢

六歳～十五歳（昼間部）、及び十六歳以上成人クラス（夜間部）

・授業期間、及び授業時間

昼間部　二月初旬～六月下旬、八月上旬～十二月上旬。水曜日、八時～十一時、十四時～十六時。土曜日、十四時～十七時。
夜間部　二月初旬～六月下旬、八月上旬～十二月上旬、月、水曜日、十八時半～二十時。土曜日　十四時～十六時。

・年間行事

昼間部

一月　入学申込み受付
二月　前期始業
五月　母の日行事
七月　休暇
八月上旬　後期始業
九月頃　弁論大会
十二月上旬　終業式

夜間部

一月　入学申込み受付
二月　一学年期始業
六月下旬　一学年期終了
七月　休暇
七月下旬　入学申込み受付
八月上旬　新規及び二学年期始業
九月頃　弁論大会
十二月上旬　終業式

・運営方針及び教育目標

日本語教育を通じてブラジル国並びに国際社会で友好親善に貢献で

きる有能な人材の育成と日本語能力の向上に努めると共に、教授法や教材の開発並びに研究と研鑽を計る。

教育目標として昼間部は進取、協調、強健と調和のとれた人間性の追求。夜間部は会話力の充実による学問の習得に主眼を置く。

・教育環境

西部アマゾン日伯協会はマナオス市中心部アドリアーノポリス地区に所在し、周辺には邸宅、看護大学、小中学校、病院があり教育環境としては恵まれている。

日本語教育を取り巻く環境として、西部アマゾン日伯協会日本語学校ほか、市内にはねむの木学園（天理教）、ジョゼフィーナ・デ・メーロ小学校（日本語指導あり）、マナオス日本人学校文化コース（日系子弟十五歳まで）があり、この他、エフィジェニオ・サーレス移住地自治会が経営するエフィジェニオ・サーレス日本語学校、ベラビスタ移住地自治会経営のベラビスタ日本語学校がある。

エフイジェニオ・サーレス日本語学校の沿革

木場　克子

・学校名エフィジェニオ・サーレス日本語学校
Escola Japones de Efigenio de Sales
・所在地

Associacao Comunitaria Nipo Brasileira Efigenio de Sales
Rodovia Am010-km40, Manaus, AM CEP69000

・沿革史

一九七五年十二月　当時の青年団（木場逸雄団長）が日本語学校設立
一九七六年二月　日本で教職を営んでいた三木祥弘氏が初代教師として着任し、日本語教育が始まった。
一九七八年　教師不在のため、一時休校。
一九七九年　この年から、小学校教師木場克子先生が後任の日本語教師が見つかるまで授業を行うことにより、学校再開。
一九八一年　学校の在籍者が四十八名となる。
一九九四年八月　一九九五年六月まで、ＪＩＣＡ派遣日本語教師の寺山テル子先生を受け入れる。

・運営母体

エフィジェニオ・サーレス自治会

・教師構成

木場克子一名で授業を行っている。

・日本語学校生い立ちからの変遷の記録

エフィジェニオ・サーレス日本語学校は、アマゾナス州州都マナオス市より北へ走る州道一〇号線の四十一キロ地点を中心とする、エフィジェニオ・サーレス移住地に所在する自治会館二階に設置されている。当移住地は一九五八年十一月の第一次入植から今年で四十一年

になる。入植当時は、入植者一同熱帯地の原生林の中で発生する風土病と戦いながらの生活で、大変苦労した。

入植から十数年後、生活が少し安定してきたとき、その当時の青年たちはそれぞれ子供の親となり、子供の教育を考えなければならない年齢に達していた。ブラジルの教育は国の制度に従って運営されるので心配はいらない。しかし、子供たちは二、三世であり、両親が日系人であるならば身体上は立派な日本人である。いくら自分がブラジル生まれのブラジル人だと主張しても、非日系人から見ると完全に日本人なのである。親たちは自分の祖国の文化を消滅させたくないだろう。従って、かわいい我が子であるならば、誰しも自分の故郷のある日本の文化を伝承したいだろう。エフィジユニオ・サーレスの子供たちは日本語で育ってきた（一九八〇年代半ばまで）。それ故、普通の生活の中でも日本の文化を身につけさせられる。しかし学校での学習の中で習得される文化は格別であるだろう。その様な事を思った当時の青年団（木場逸雄団長）のメンバーは、日本語学校設立を考えた。そして一九七五年十二月、エフィジェニオ・サーレス日本語学校が誕生した。翌年二月、日本で教職を営んでいた三木祥弘氏（現自治会長）が初代教師として着任し、エフィジェニオ・サーレスの日本語教育が始まった。日本での経験を生かしての教育は学童にとって最適であったが、氏は当時農協の組合長をしていたこともあり、惜しくも二年後に退任し、後任として青年団の役員をしていた堀川氏が、その後日本から当農協に実習生として来ていた江川青年が、それぞれ三ケ月から五ケ月間担当し退任。そして日本語学校は教師なしの為休校。翌年ブ

ラジル語学校の新学期が始まっても日本語学校は休校。生徒たちは私が担当しているブラジル語市立小学校の生徒でもあり、私自身子供の頃から日本語教育に興味があったので、後任の先生が見つかるまで自ら日本語教師をすることとなった。

私は幼い頃から日本語学校に緑があった。サンパウロに住んでいたとき、父が開校した日本語学校に通うのが何より楽しく、学習に遊びに一生懸命であった。私が十三歳になったとき、大和魂の持ち主であった父が、日本の教育を受けさせなければ現地人同様になるおそれがあるとの考えから、日本へ一時帰国し、私たち兄弟姉妹七名を五年間日本で学ばせてくれた。そのおかげで学業のみでなく人間的にも、日本人の考え方や、心を得ることが出来た。数多くの忘れられない良い思い出が山積みにされていることは言うまでもない。移住地の子供たちも、日本語を通して少しでも多くの幸せをつかめたら、と思っている。

以下、開校からこれまでの教師の動きを記す。

一九七六年～一九七八年　三木祥弘
一九七八年　堀川、江川（実習生）
一九七九年～一九八七年　木場克子
一九八〇年　錦戸理平（三ケ月間、上級生を担当）
一九八二年　木場孝子（三ケ月間、下級生を担当）
一九八七年～一九九〇年　三木敏江（下級生を担当）
一九九〇年～一九九二年　木場千恵美（下級生を担当）
一九九一年～一九九四年三月　室谷春江（会話組を担当）

一九九二年～一九九三年　佐藤絵利加（下級生を担当）
一九九四年四月～一九九六年五月　室谷喜久江（会話組を担当）
一九九四年八月～一九九五年六月　寺山テル子（JICA 派遣日本語教師）
一九九五年三月～一九九七年八月　岩本邦広（下級生を担当）

私は一九八七年から一九九六年三月まで上級生のみの担当だったが、一九九七年八月から再び私のみになった。上記のように教師の異動が多いのは、教師が日本語学校の上級生であり、ブラジルの大学生であったためである。それぞれ学業終了後は研修、留学、就職、また訪日をしたり、研修後も再び学部の研究生として在籍するなど日本語教師を専任することが不可能であった。

本校創立二十三年、振り返って見ると学習面、行動面、体育面等本当に多くの懐かしい思い出が脳裏に浮かぶ。当校はラジオ体操で始まり、国語の学習、唱歌、ソフトボールなどのスポーツでその日の授業を終わらせていた。時にはグランドの草取り、会館の大掃除をし、小さな子でも誰一人不平をもらすことなく一生懸命がんばった。

その後西部アマゾン日伯協会主催のマナオス弁論大会にも出場し、多くのトロフィーを獲得。最近では全伯スピーチコンテストにも参加できるようになった。

その他、ソフトボール、サッカー、バレーボール等のイベントに移住地を代表して参加している。

結果として、この三つの面をしめくくると、理解力、表現力、自主

性、責任感、奉仕性、忍耐力等がいろんな催し物の中で表現されている様に思われる。私は教職に就いて三十三年になった。受け持ちの子供たちが育っていくのを見るのはこの上なく楽しいものである。その反面、教師をすればするほど教えることの難しさ、教育という仕事の重要さを痛感する。最近は入学してくる生徒たちの中で日本語の会話力のない子が多くなってきているので、そのことをもっと深く感じさせられる。

私が長い間教育という職に携わってこられたのは、生徒をかわいいと思い、少しでも分かる授業を、楽しい学校生活を営めることを目指して夢中になってきたところである。各団体、及び父兄の方々の暖かい支援のお陰だと心より有り難く感謝している次第である。

最後に、志のある人には、ぜひ良き教師になってほしいものである。これから年の功と言うが、若い人のために何か役立つことがあればと思っている。

〔執筆者略歴〕木場　佐藤　克子・テレーザ（こばさとうかつこてれーざ）

一九四〇年、サンパウロに生まれる。戦後、日本（青森県）に帰国、五年間滞在の後、一九五八年、エフィジェニオ・サーレス第一次移住者として入植。一九六六年三月、移住地のオビドール・サンパイオ小学校教員に任命される。現在、当小学校校長となり、教育業務に携っている。

ベラビスタ移住地日本語学校の沿革

中村弥寿平

・学校名　ベラビスタ日本語学校

・所在地　Rodvia070（Manoel Urbano）km17, Iranduba, Am.

・沿革史

一九五四年下半期　各地区（カルデロン、カカオ。ペレイラ、アグアフリア、アリアウ）の篤志家の自宅にて、辻拓子（ツジセキコ）氏（カルデロン地区）、出田ひさえ氏（アリアウ地区）等が移住者の子弟に日本語を教えていたが、その後耕地を捨てて他の州へ移動する者が多く、子弟の数が急激に減少し何時のまにか立ち消えになった。

一九五九年　日本語学級として生徒を集めたのは、藤田猛氏の伯父に当たる藤田勝治氏がサンパウロより移住地を訪問されたとき、藤田宅の近所の児童を集めて日本語を教えたのが始まりであった。しかしながら六ケ月後にサンパウロに帰られたため自然に消滅した。

一九六二年　再び藤田勝治氏がサンパウロより移住地に来られ、日本語学級を開かれたが、前回と同じく六ケ月後にサンパウロに帰られると自然に消滅した。

一九七六年六月　自治会館が建設され、日本語教育の話が出始め、週一回土曜日に日本語学校として再開された。最初の教師として臨時に中村弥寿平がなり、生徒数は十四名であった。

一九八〇年初頭　ＪＩＣＡの日本語教師本邦研修に行っていた小茄子川力雄氏が帰ってこられ、小茄子川先生の元で日本語学校が続けられ

た。生徒数は平均して十五名内外で、教師一名で学力の違う生徒を教えなければならず、大変な苦労であった。生徒数は常時十四名から十八名以内であまり生徒数に増減はなかった。小茄子川先生はこの後引き続き日本語教師を続けた。

一九八三年　日本から坂本藤吉氏の娘さんが来られ、日本語学校の先生としてお手伝いさせて下さいとのことで、この年から坂本満津子先生と二名で授業を行うことになった。

教師が二名になったことで初級組と少し上級の組に分けて授業が出来るようになり、生徒の覚え方も良くなったように感じられた。

一九八四年、八五年　引き続き教師二名で授業が行われたが、坂本満津子先生が日本に帰られることになったのと小茄子川先生も家庭の事情で一九八五年度末にて二人の先生が辞められることになった。

一九八六年　藤田猛氏が引き続き日本語学校の先生として授業を行ったが、ブラジルの学校へ行くために年長の生徒がマナオス市に出て行ったため、生徒数の減少を来しこの年末を持ってベラビスタ移住地の日本語学校を閉鎖した。

一九九四年頃　数名から日本語学校を再開してほしいとの要望があったが、教師が見つからなかったことと、生徒数が少くなく運営が赤字になることにより、三名の生徒が週二回、通学に二時間以上かけて移住地よりマナオスの西部アマゾン日本語学校に通った。

一九九六年　ＪＩＣＡ日系社会青年ボランティアの松村朋枝青年が着任したので、移住地自治会より松村青年ボランティアと西部アマゾン日伯協会にお願いして、一九九七年よりベラビスタ移住地の自治会館

にて日本語学校を週一回土曜日に開校することが出来るようになった。

一九九八年七月　ＪＩＣＡ西野シニアボランティアが西部アマゾン日伯協会に着任。松村青年ボランティアが本年度に任期終了、帰国のため、十月より西野シニアボランティアが交代し、ベラビスタ日本語学校の教師を引継ぎ現在に至っている。

・運営母体　ベラビスタ自治会

・教師構成

一九九九年現在、西野義雄ＪＩＣＡシニアボランティア一名で授業を行っている。

・授業期間及び授業時間

毎週土曜日、八時三〇分から十時三〇分

日本語学校「ねむの木学園」の沿革

音成　博子

・学校名

日本語学校「ねむの木学園」NEMUNOKIGAKUEN

・所在地

Estrada Belem1670-A.Colonia Cachoeira Grande, Manaus,Amazonas Cep69060-000 Tel (092) 644-4112／Fax (092)

・沿革史

一九九五年　二月四日、天理教マナオス布教所の付属建物提供と運営の全面協力を得て、教師、丸岡すみ子、米倉美喜子、木幡あや子、野沢美香（当時）、松崎尚子、音成博子の六名の「会話を中心とした授業」をという熱い思いと父兄、生徒七十四名の思いとで始まった。年間行事には「雛祭り」、「端午の節句」、「七夕祭」、また「お話を読む会」なども折り込み、運動会等を行うことによって四技能を養った。授業の進め方、教材の設定、副教材の制作、カリキュラムの作成、あるいは諸問題の解決には毎回授業（土曜日のみ）終了時に教師会を開き、教師を中心にその努力を惜しまなかった。

一九九六年　教師二名がやむなく日本へ出稼ぎに行ったため、四名で六十二名の生徒を指導。二教師が時間をずらして二クラスを受け持った。

一九九七年　丸岡、野沢両教師が日本人学校勤務の傍ら授業を行い、米倉教師が病気治療のため退職と、教師不足になったが、ブラジル人教師ベゼーハ氏の協力を得て、教師四名、生徒五十五名で行った。この年より、日系人学習者が減少、また非日系人の学習定着率の減少が目立ち、授業のあり方の変化をせざるを得なくなった。

一九九八年　教師も一変し、日系人一名、混血一名、非日系人一名の計三名となり生徒も非日系人が圧倒的に多くなった。人数も減少し、四十七名となった。

一九九九年　教師一名、アシスタント二名で「聞く、話す」、「書く、読む」の授業を区別し、能率的かつ効率的な授業を生徒三十名に行っている。

・運営母体

天理教マナオス布教所

・教師構成

一九九九年現在、音成博子一名により授業を行っている。

・授業時間

毎週一回、土曜日、一四時から十七時

・年間行事

学校全体の行事としては、九月のマナオス弁論大会、お話し大会出場、十二月の学習発表会（日本人学校）参加。

・運営方針、教育目的

日系移住地の日本語学校と違い、まったく日本語に接していない非日系ブラジル人の生徒が多いという性格上、過一回の授業ではなかなか日本語能力の習得が難しいが、日本語を学習することを通して日本文化に触れ、日本文化の理解を助けることを目的としている。

〔執筆者略歴〕

音成博子（おとなりひろこ）

一九四九年、大分県に生まれる。

一九七四年、サンパウロに移住し、一九七六年マナオス市に転住。天

理教マナオス布教所運営のかたわら、ねむの木学園をひらき、日本語教育に携わっている。

マナオス日本人学校の沿革

神田　久彦

・学校名

マナオス日本人学校

Associacao Civil de Divulgacao Cultural Japonesa de Manaus（現地名称）

・所在地

Estrada Jaity Chaves S/N.Colonia Cachoeira Grande,bairro de Parque 10 de Novembro,Manaus,Amazonas,Brasil

Tel (092) 644-2188／Fax (092) 644-3491

E-mail:ass-japao@amazonet.com.br

Homepage:http://www2.amazonet.com.br/ass-japao

・学校のステイタス

ブラジル政府公認民事団体

ブラジルの法律は、ブラジル国内に居住する児童生徒に対して、外国語による教育を実施することを原則として禁止している。マナオス

日本人学校は、日本政府文部省からは正式に学校として認可されているが、ブラジル政府からは学校として認められておらず、ブラジル政府公認民事団体としての「マナオス日本文化振興会」が行う日伯文化交流活動の一環という形態をとっている。

・沿革史

一九七九年十月、マナオス進出企業各社による日本人学校設立に関する第一回会合二月、マナオス全日制日本人学校設立準備委員会発足

一九八〇年四月、マナオス日本人子弟教育振興会設立。

十月、補修校幼児部を開校。

十二月、補修校開校式を挙行、この日（十二月二十日）を開校記念日とする。

一九八一年四月、「マナオス日本人子弟教育振興会」を「マナオス日本文化振興会」と改称。加藤校長着任、正式認可校として補修校の授業を開始。

一九八二年四月、昭和五十七年度派遣教員　島教諭着任。

五月、全日制日本人学校設立申請書再提出。

一九八三年　四月、日本大学校正式認可。

派遣教員四名（清藤校長、丸山・巻田・宮田教諭）着任。マナオス日本人学校第一回入学式。

九月、ピアノ購入、加藤補修校校長離任、松浦教諭着任。

十月、運動場造成（一周七十メートル）三月、第一回卒業証書授与式、島教諭離任。

一九八四年四月、派遣教員二名（水口・森村教諭）着任。

五月、三教室増築工事完了、落成式挙行。

十二月、第四回開校記念式典挙行、校歌、校章制定

一九八五年五月、全国県議団学校訪問。

九月、校門からの進入路、バス車庫、ジャングルジム工事完了。

三月、清藤校長、丸山・巻田・宮田教諭離任

一九八六年四月、派遣教員四名（島田校長、瀬戸・大熊・高橋教諭）着任。

三月、水口・森村教諭離任、松浦・山田・森村講師離任

一九八七年四月、派遣教員三名（鈴木・山野・石井教諭）着任、瀬戸・大熊・イウーダ島袋講師着任。

七月、校舎周辺小グランド整備、バレーボールコート造成。

十月、新校舎建設委員会発足一月、マナオスカルタ大会（毎年一回実施）

一九八八年五月、「マナオス日本人学校新校舎建設計画書」外務省に提出。新校舎建設政府補助金申請書提出。

七月、昭和六十三年度文部省海外子女教育施設研究指定校に指定（平成二年度まで三年間）九月、マナオス日本人学校新校舎建設起工式、土地造成着手。派遣教員橋本教諭着任。

三月、島田校長、瀬戸・大熊・高橋教諭離任、瀬戸・大熊講師離任

一九八九年四月、派遣教員四名（篠原校長、藤原・中野・三浦教諭）着任。橋本講師着任。五月、国際学校ＡＣＬＩＡ校と交流（受入、訪問各二度）。

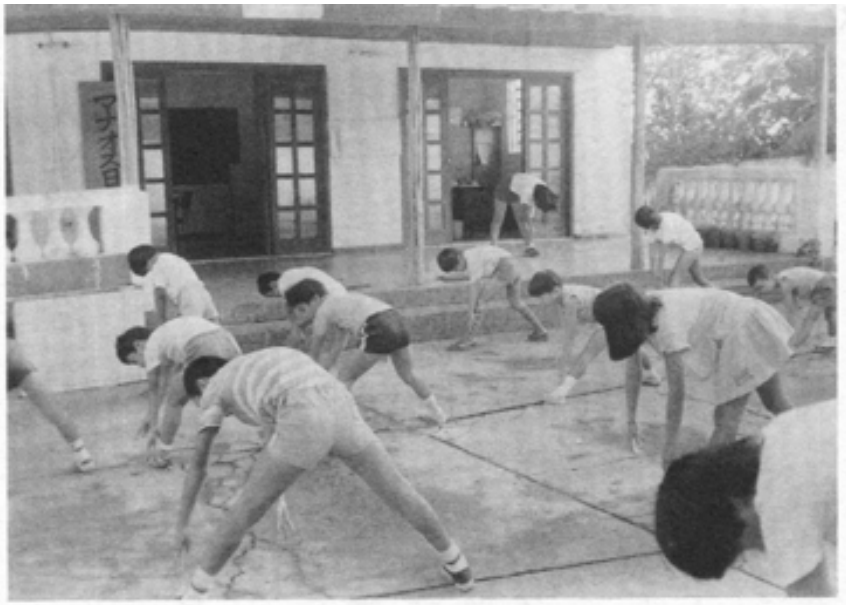
六月、　現地校COLEGIO　NOSSA　SENHORA　AUXILIADORA校）訪問。

十一月、橋本講師退職

十二月、新校舎工事完了

一九九九年二月、新校舎移転

三月、新校舎落成式、鈴木・山野・石井教諭離任



ポンタネグラ校での体育の授業風景（1986年　日本人学校所蔵）

ポンタネグラ校での体育の授業風景（1986年　日本人学校所蔵）

一九九〇年四月、派遣教員三名（舟崎・福島・三栖教諭）着任。

五月、水泳記録会（毎年一回実施）

十月、Ｉ・Ｅ・Ａ・校訪問。

三月、派遣教員橋本教諭離任

一九九一年四月、派遣教員藤塚教諭着任。

十一月、ACLIA校と交流、運動会参加、合同授業。アマゾナス大学音楽発表会参加、楽器演奏、コーラス発表会。

三月、篠原校長、藤原・中野・三浦教諭離任

一九九二年四月、派遣教員三名（金武校長、桂川・末木教諭）着任、末木講師着任。

十一月、ACLIA校来校、収穫祭

十二月、開校十周年記念式典、植樹、餅つき、祝賀会三月、舟崎・福島三栖教諭離任

一九九三年四月、派遣教員（河野・渡辺・伊藤教諭）着任。日本文化コース開講式

十二月、新スクールバス到着（日本船舶振興会　寄贈）

三月、藤塚教諭離任

一九九四年十月、第二十四回在伯在外教育施設合同研修会（マナオス）

三月、金武校長、桂川・末木教諭離任

一九九五年四月、派遣教員二名（鞠子校長、高木教諭）着任。

三月、渡辺・伊藤教諭離任

一九九六年四月、派遣教員三名（瀬戸・村松・中島教諭）着任。

一月、書初集会（毎年一回実施）

三月、河野・中島教諭離任

一九九七年四月、派遣教員二名（細田・中教諭）着任。

五月、ジョゼフィーナ校との第一回交流学習（以後毎年実施）三月、鞠子校長、高木・瀬戸教諭離任

一九九八年四月、派遣教員四名（中川校長、金子・佐藤・松野教諭）着任。

七月、ミニ弁論大会

三月、村松教諭離任

一九九九年四月、派遣教員（大金教諭）着任。

移転前のポンタネグラ校全景（1990年　日本人学校所蔵）

現在の日本人学校
（カショエイラ・グランジ　移転直後の写真
1990年日本人学校所蔵）

・運営母体

マナオス日本文化振興会（現地名称は学校の名前と同じ）

・職員構成（平成十一年現在）

校長　中川信壽

教諭　中　里絵子（小二担任）

同　佐藤之保（小三担任）

同　金子明夫（小四担任）

同　細田正央（小五、六担任）

同　大金　斉（中二　二担任）

同　松野文則

講師　丸岡すみ子（日本文化コース担任）

同　宍戸美香（日本文化コース副担任）

同　ホベルト・トンプソン（英会話）

職員　神田久彦（事務員）

同　山田勇夫（スクールバス運転手）

用務員　オズーマ・メンデス・ネービス・フィーリョ

同　マリーア・セリーア・メンデス・ブラーガ

・授業形態

年間基本授業目数を二百五日（三十八週）とし、教科授業日数を年間三十五週、行事・欠時数を三週程度、その他道徳、学活、クラブを年間三十五週で計算する。

児童生徒の在校時間は七時五〇分～十六時を基本とし、一単位時間

は小、中学部共に四十五分とする。

・主な年間行事

四月　着任式、入学式、開講式、PTA 総会

六月　運動会

七月　修学旅行、遠足

九月　体験学習

十一月　学習発表会

一月　書初集会

二月　全日一日入学、水泳記録会

三月　卒業式、終了式、離任式

・運営方針及び、教育目標

（一）　日本国憲法、教育基本法、学校教育法等の精神に則り、日本国内における義務教育に相当する教育を行う。

（二）　在外日本人学校の特性を生かし、豊かな国際感覚を身につけた児童生徒の育成に努める。

（三）　小規模・小人数の特色を生かし、個別指導の徹底を図り、個性・能力の伸長に努める。

（四）　父母、関係者と連携を密にし、児童生徒が健康で安全な学校生活が出来るよう施設設備の整備、充実に努める。

（五）　在外日本人学校教師としての使命を自覚し、研修を深め、専門性の向上に努める。

教育目標としては、「個性を伸ばし、豊かな人間性・国際感覚を身

につけた、心身ともたくましい児童生徒」を育成することであり、目指す児童生徒像は、「自ら進んで学び取る子供」「礼儀正しく、思いやりのある子供」「心と体を鍛える子供」である。

・年度別入学、卒業生徒数

・日本文化コースの運営

・年度別入学、卒業生徒数

	小学部		中学部		日本文化コース	
年度	入学	卒業	入学	卒業	入講	終了
昭和56	2					
57	8					
58	3	1				
59	5	4	1	4		
60	6	3	4	4		
61	7	3	3	1		
62	7	4	3	1		
63	1	4	4			
平成元	5	2	4			
2	4	4	3			
3	2	2	3			
4	2	1	1	1		
5	4				14	
6	2				17	2
7	4	2			11	1
8	3	1	3		10	3
9	4		1		12	
10	7	4	1	1	15	6
11			2		5	

日本語運用能力の向上、日本文化や日本の学校生活についての理解、情操豊かな人間の育成、行事や日常生活から相互理解と協力の尊さを学ばせることを目的に開講。国語、技能教科（音楽、図工、体育）を低・中学年（一～四年）、高学年・中学部（五年～中学三年）に分かれて合同授業で実施。

〔執筆者略歴〕

神田久彦（かんだひさひこ）

一九二七年、香川県に生まれる。

一九五四年六月、ベラビスタ移住地第二次農業移民として入植。

一九五五年、マナオス市に転住し、中央市場にて青果物販売に従事の後、一九六六年、マナオス日本人会に勤務。一九八二年よりマナオス日本文化振興会事務局（マナオス日本人学校）に勤務し、現在に至る。

■マナオス進出日系企業の変遷―■

アマゾナス日系商工会議所

一九五七年～六九年

・ZFM全体の動き

一九五七年六月六日付法令第三一七三号によりジュセリーノ・クビチェック大統領はマナオスを自由商業地区に指定、十年後の一九六七年二月二十八日にカステロ・ブランコ大統領は大統領令第二八八号によりマナオスを自由港に指定し工業、商業、農業にわたる現地の事業に三十年間の期限で税制恩典を供与し一万平方キロメートルの広大なフリーゾーン（以下ＺＦＭ）が誕生した。このＺＦＭとはZona Franca de Manausの頭文字を取ったもので、マナオス・フリーゾーンを意味し、アマゾン地域の開発と国家保安の確立を目的としたものであり、輸出入の自由化及び特別税制恩典を与え、商、工、農業誘致の誘致で現地産品の競争力をつけることが使命とされる。

一九六七年八月二十八日付で発令された大統領令第六一二四四号でＺＦＭの地域と税制恩典の詳細と運営母体であるマナオス・フリーゾーン監督庁（以下スフラマ）の設立が制定され、一九六八年八月十五日付の大統領令第三五六号によりスフラマが包括する地域はアマゾナス州だけではなく、アクレ、ロンドニア、ロライマと四州にわたり、その面積はブラジル全国土の四分の一でその総称を「西部アマゾン」とする。

・法律関係の動き

連邦大統領令第二八八号（一九六七年二月二十八日）マナオス・フリーゾーン（以下ＺＦＭ）税制恩典制度を制定。

連邦大統領令第参四〇号（一九六七年十二月二十二日）・・・酒、タバコ、香水、武器、あるいは自動車などの輸入制限が施行。

市法第二十七号（一九六七年三月十七日）、ＩＳＳ税の免除。

連邦大統領令第七五六号（一九六九年八月十一日）、ＳＵＤＡＭによる恩典。

一九七〇年

Sharp do Brasil 社の前身であるCimpro 社がSharp Corporationとの電卓の輸入販売契約を機に従来のＣｉｍｐｒｏからＳｈａｒｐEquipamentos Eletronicos Ltdaに社名変更して正式に発足した。

一九七一年

Sharp Equipamentos Eletronicos社はマナオスに正式にSharp do Brasil社を開設、これに併せてシャープ株式会社はシャープ駐在員事務所をマナオスに開設した。

一九七二年

Sharp do Brasil社はマナオス自由貿易監督庁（以下スフラマ）から認可を得て、この年の五月マナオスでブラジル初の電卓生産を三十九名の従業員によって開始した。この工場の落成式には当時の共和国

副大統領Almirante Augusto Rademacker氏が列席された。当時はまだ工業団地内に工場がなく、旧市街地の倉庫を改修し工場としていた。日本のＧＥＮＥＲＡＬ社（現富士通ゼネラル）から技術供与を受け、サンパウロのＧＥＮＴＥＫ社が、マナオスでもＧＥＮＥＲＡＬ・ＴＥＫＮＩＣＡというブランドの電卓生産を開始した。

Imp. e Exp. New Tokio社が設立され、野菜、果実栽培を営んでいる日本人移住者のための農薬販売を始めた。

一九七三年

Sanyo da Amazonia社の前身であるプリアセル電子工業株式会社がペレイラ・ロペス・イベーザ社、丸紅商事、三洋株式会社の合弁会社として設立され、カラーテレビの生産が開始された。進出してきた日系企業をアテンドするために富士銀行と提携のある南米銀行が三月からマナオス支店を開設した。

一九七四年

ブラジルへの日本進出企業は最高の百三十二件を記録し、第一回日伯経済合同委員会が開催され、アマゾン・アルミ、紙パルプ、セラード開発などの大型プロジェクトも打ち出された。

Sharp do Brasil社が工業団地に新工場（現第一工場）を建設、この工場での最初の生産はブラジルカラー放送方式に準じたＰＡＬ－Ｍ方式の二十型カラーテレビで、国産のカラーテレビが市場へ送り出された。

ワールドカップサッカーの年であり、これに併せてカラーテレビの販売に向けた積極的な販促活動が展開された。

一九七五年

Sanyo da Amazonia社ががテープレコーダー、ステレオシステムの生産を開始し、Sharp do Brasil社は昨年の二十型カラーテレビに次いで、十六型カラーテレビを発売した。マナオスで初めてのチューナー付ステレオセットの生産も開始され、ステレオ第一号が誕生した。

五月に設立したM.T.I.Exp.e Rep社は、松下電器貿易（株）のコミッションエージェントとしてスタート、輸入商品の卸販売も始めた。一月、ＫＩＢＡ　＆ CIA社はセアザ（中央卸売市場）で、日系初の野菜、果物の卸売を始めた。Imp.e Exp.New Tokio社はベレンの永大産業の合板販売を始め、ZFMで製造されるTVキャビネットにも大いに使用された。

六月、アグリアス工商企画社がアマゾンに進出した。

一九七六年

Moto　Honda da Amazonia社は十一月四日に創立、十一月十四日から生産を開始。当初はＣＧ一二五という一二五ccモデルで従業員二百七十六名からスタートした。

一月、日系初の薬品販売業でTakeda Comercio社の前身である武田

兄弟商会がマナオスに開業した。

四月、アグリアス工商企画社は、ピラルク、ピラニアの剥製の輸出を始めた。

一九七七年

九月、テレビ、音響製品会社のSemp社に日本の東芝が資本参加をし、日伯合弁会社Semp Toshiba Amazonia社が設立された。

七月、Moto Hondada Amazonia社は昨年の機種モデルCG一二五のニューモデルを発表した。

一九七八年

一月Semp Toshiba社より東芝ブランドのカラーテレビがラインオフした。

七月Moto Honda da Amazonia社はCG一二五-TURUNA機種を発表した。

Construtora Shimizu do Brasil社の二名のエンジニアがHonda Componentes da Amazonia社の工場建設のためにマナオスに来た。

二月二十八日、Amazon Travel Service社が開設され当時日本航空北伯販売総代理店として出発した。

アグリアス工商企画社製作の2.4メートルのピラルク剥製がマナオスを訪問された皇太子殿下に日系コロニアより献上された。

一九七九年

Sanyo da Amazonia 社がZFMで初めて電子レンジ生産を開始した。

Sharp do Brasil社は七四年に建てたテレビの基板組立て第一工場のすぐ隣に基板専用工場（CAPE）を建設した。

Moto Honda da Amazonia 社はMOHOVI 社を買収し、時計業界ではOrient Relogios da Amazonia 社が七月に設立され、また飲食業界では日本食のRestaurante Suzuranが五月に開店した。マナオス地域の日系企業を中心に運送、火災、車両などの保険業務をアテンドするために、七月に南米安田保険株式会社が、九月に日本の東京海上火災保険会社九十パーセントと明治生命保険会社九パーセントの出資によるAmerica Latina Cia de Seguros社がマナオスに支店を開設した。十月にマナオス進出日本企業による日本人学校設立に関する第一回の会合が開かれた。

一九八〇年

Sharp do Brasil 社は先の二十型、十六型のカラーテレビに続き、ボタンに軽くタッチするだけで選局が可能な画期的な十四型の新製品を生産開始した。

Moto Honda da Amazonia 社は四月にニューモデルCB 四〇〇を発表、この年からアルゼンチン市場への輸出を開始し、品質向上、生産性改善を狙い、全社的なQC サークル活動が始まった。

Orient Relogios da Amazonia 社は一月よりオートマチック時計のCHABLON の組立てを開始した。

Construtora Shimizu do Brasil 社はマナオスのアドリアノーポ

リス地区に仮事務所を開設した。

Imp. e Exp. New Tokio社はこの年から日本よ一食料品と書籍輸入を開始した。

十二月二十日にポンタネグラのモト・ホンダ社の社員クラブを校舎としてマナオス日本人学校補習校が開校した。

一九八一年

Springer National da Amazonia社はスプリンジャー社と合弁契約締結をしてマナオスへ参入、テレビ、オーディオの生産を開始した。

Sharp do Brasil社が十二月にブラジルの業界で初めてのビデオテープレコーダー(VTR)の生産を開始した。

Moto Hondada Amazonia社はCicro Norte社の買収に成功、二月には前年政府が打ち出したアルコール車奨励政策に対応した一二五ccオートバイのアルコール機種を発表した。オートバイのショックアブソーバーの国内安定供給を目的にShowa do Brasil社がMoto Honda da Amazonia社四十パーセントの出資を得てマナオスに進出した。日系時計業界からもSeiko Industrial da Amazonia社がマナオスに進出した。

四月にマナオス日本人学校補習校が正式に認可され、日本の文部省より派遣教員が着任した。

一九八二年

浩宮親王殿下が（現皇太子）マナオスをご訪問され、Moto Hondada Amazonia 社などをご見学された。

Sharp do Brasil社は工業団地に新たな工場を建設、本格的なテレビ生産工場として稼動させ十四型、二十型のテレビの本格生産が開始した。又、テレビの基幹部品であるフライトバックトランスの自社生産も開始された。

Douglas Mitsumi Eletronica社が一月からコイル、コンデンサー、リモコンなど電子部品の製造販売を開始した。

Showa do Brasil社が組立て工程の生産を開始し、初年度約十五万台のオートバイ用ショックアブソーバーが生産され、Moto Honda da Amazonia 社に納入された。

Metalfino da Amazonia社はアルミダイガスト部品を製造している日本の㈱METTS 社最初の海外工場として五月にマナオスに設立された。

Seiko Indl. da Amazonia 社が五月ブラジル国内組立て時計第一回の出荷を行ない六月には時計の内部にあるメカムーブメン組立ても開始した。

Brasciti Ind. Com. Relogios da AM 杜が側付け、バンド付けのみのマナオス組立てを開始した。

Construtora Shimizu do Brasil 社がマナオスの建設業界の草分けとして進出した。

三井海上火災保険会社と共栄海上火災保険会社が十パーセント出資した現地会社 Concordia 保険会社がマナオスに進出した。

Amazon Travel Service社が常駐者を設置した。

一九八三年

Sanyo da Amazonia社の前身であるプリアセル電子工業株式会社はペレイラ・ロペス・イペーザ社がレフリパール社に買収されたことにより、社名をプリアセル電子工業クリマックス三洋(株)と変更した。

S.M.K. da Amazonia社は三月にマナオスでのリモコン生産をするために工場を設立した。

Moto Honda da Amazonia社は四月にHDA-HDBのコミッション契約を完了、十月には輸入DISTの買収に成功した。

Showa do Brasil社は四月、現地材料部品の購入事務所として、サンパウロにShowa Ind. e Com. Ltdaを設立した。

Seiko Indl. da Amazonia社はアナログクォーツのムーブメント組立てとケーシングを開始した。

Brasciti Ind. Com. Relogios da AM社もSeiko Indl. da Amazonia社につづいてムーブメントの組立てを開始する。

Takeda Comercio社は五月にロンドニア州のポルト・ベーリョに支店を開設した。

一九八四年

Sony da Amazonia社が十月十七日に創立、オーディオ機器の生産を開始した。当初はシステムステレオ生産からスタートした。プリアセル電子工業クリマックス三洋(株)はレフリパール社との合弁契約

を解消し三洋が多数株主となって経営権を取得したことから社名をSanyo da Amazonia S.A. に変更した。

S.M.K.da Amazonia社は八月よりリモコンの生産を開始した。当初の生産は五万個であった。

Moto Honda da Amazonia社はこの年イギリス、ドイツに向けて初めて輸出を開始し、三月には第三者へのオートバイ用部品の販売をも開始した。

Metalfino da Amazonia社は一九八四年十一月にに工場を完成し、設備装置も完了する。

Toko da Amazonia社はオーディオやビデオ用の電子部品生産を八月から開始する。

一九八五年

Springer National da Amazonia社は電子レンジのマナオスでの生産を開始し、また、技術面ではプリント基板への部品の挿入を機械で自動的に行う方法を稼動させて効率改善を図った。

Sony da Amazoniaは基板組み立て工場としてSony Componentes社を同工業団地内に設立した。同時にテープレコーダー、ラジカセ、レコードプレーヤー、ベータマックス方式のビデオテープレコーダーのマナオスでの生産を開始した。

Sanyo da Amazonia社もビデオテープレコーダーの生産を開始した。

Sharp do Brasil社はユニット組立てによる複写機の生産をマナオスで開始した。

Moto Honda da Amazonia社が同年五月に百パーセント出資による部品会社Honda Componentes da Amazonia社を設立した。

YamahaMotor da Amazonia社がMoto Honda da Amazonia社に次いで日系二輪企業二番手で十月マナオスへ進出した。

Seiko Indl.da Amazonia社はプラスチックケース使用の腕時計、SPEEDOの販売を開始した。

Construtora Shimizu do Brasil社は現在の事務所に移転した。

工場建物建設に伴う電気工事（電圧、受電、低圧）、配管工事、空調工事をするボビエルヤマト設備工業がマナオスに支店を開設した。

Kiba& Cia社は、サンパウロの商品買付けのため、事務所（現本店）を開設した。一月、エフィジェニオ・サーレス地区に養鶏用の飼料工場が完成した。

一九八六年

Springer National da Amazonia社がビデオテープレコーダーのマナオスでの生産を開始した。

Sharp do Brasil社はブラジルで業界初のビデオカメラのユニット組立て生産を開始した。

Murata da Amazonia Ind.e Com社が四月に電子部品製造販売会社として登録創立され、十月には工業団地内に工場建設を着工、翌年十二月に落成した。

Tojo da Amazonia社は三月車載オーディオの製造を開始した。

Yamaha Motor da Amazonia社は四月工場完成と共にプレス溶接、

塗装組立て機械加工保全等の一連の工程を設置完了した。

Seiko Indl. da Amazonia社はブラジル国内初めてのソーラー電池式デジタル腕時計（LORUS）を発表した。

現Casa Romaの前身、メルカジーニョ・ローマがカンポス・エリーゼオス地区に野菜・果物の小売店を開業した。

日本食レストラン都は、十二月に現在のオーナーに代替わりした。

アマゾンナチュリスト協会はアマゾン自然の観察、保護を目的としてアマゾナス自然科学博物館設立の工事を着工した。

Para Amazona Turismo社が九月国内外航空券販売の観光エージェントとして設立された。

一九八七年

Sony da Amazonia社がレシーバーの生産を開始した。

Murata da Amazonia Ind. e COm社が昨年より建設を進めていた新工場の落成式が十二月に行なわれた。

FGL da Amazonia Eletronica Ind. e Com. 社が日本の富士通ゼネラルの海外工場として二月に設立された。

Moto Honda da Amazonia社はこの年ポルトガルとフランスに一二五ccオートバイの輸出を始め、九月にはマナオス工場累計生産百万台を生産開始以来約十年で達成している。

Yamaha Motor da Amazonia社は鋳造ラボラトリー及び第一ビニールハウスの設置を行った。

Brasciti Ind. Com. Relogios da AM社はイオンプレーティング（イ

オン蒸着方式）の従来と違う全く新しいメッキ方式を導入した。現在のレストラン都が一月にオープンする。

日用品から食料品まで取り扱うミニマートlrmaos Tsujiを開店する。メルカジーニョ・ローマが取扱い商品を広げ、百二十平方メートルから千六百平方メートルのスーパーマーケットへの拡張工事を開始する。

一九八八年

Sony da Amazonia社がポータブルCDプレイヤーの生産を開始した。

Sharp do Brasil社はマナオスでの電子レンジの生産を始めた。

Murata da Amazonia lnd.e Com.は工場落成に続き本年一月よテレビ、オーディオ用セラミックフィルター及びセラミック消磁素子、セラミック発振子、ボリュームなどの製品の生産を開始へ、三月にはこれら商品が初出荷された。

Moto Honda da Amazonia社はマナオスで初めて大型バイク750ccを一月に発表、また、四月には小型150cc クラス二種を発表する。

Metalfino da Amazonia社は工場を拡張した。

Minolta Copiadora do Amazonas 社が十月に白黒普通紙複写機製造のためにマナオスに進出した。

Seiko lndl.da Amazonia社は生産の増強のために現工場の増設を決定した。

Takeda Comercio社は四月にアクレ州のリオ・ブランコ市に支店を

開設した。エフィジェニオ・サーレス農業協同組合は一月にマナオス市内総販売所をDarcy Vargas大通り完成し、鶏卵の卸販売並びに小売をするようになった。

スーパーCasa Romaがアパレシーダ店を開店した。

六月十五日ブラジル日本移民八十周年を記念してアマゾン自然博物館オープン、第一号ゲストに礼宮殿下（現秋篠宮殿下）をお迎えした。

一九八九年

Sony da Amazonia社が八ミリビデオカメラの生産を開始した。

Minolta Copiadora do Amazonas社三月に同工場で複写機の組立てオペレーションを開始した。

Omron Componentes Eletro-Eletronicos.da Amazonia社がマナオスでの操業を開始しており、光電スイッチ形E3S（十九バージョン）の商品が取り扱われている。

Rohm Amazonia Eletronica社が五月に設立され、八月よりセラミック・コンデンサー製造を開始する。

Moto Honda da Amazonia社は、オートバイ生産の一層の品質向上を図るべく新たに品質道場を開校し、社員への教育のレベルアップを推し進めＣＫＤ方式でナイジェリアに向けて一二五ｃｃバイクの輸出も始めた。Brasciti Ind.Com.Relogios da AM社は従来輸入に頼っていた腕時計用のバンド製造に着手するようになった。

Takeda Comercio社、ベレンにも支店を開設した。

一二月Para Amazoans Turismo社はアマゾナス劇場横の通りの現住

所に店舗を購入し、チケット販売だけでなくホテル、車の手配、旅客受入れ業務などの旅行エージェント会社としての業務も行う。

一九九〇年

Sony da Amazonia社は九、二十一、二十五、二十九インチのカラーテレビの生産を開始した。

Sharp do Brasil社はマナオスで初めて投射型の液晶プロジェクター、及びファックシミリ機の生産を開始した。

Moto Honda da Amazonia社は七月にニューモデル〝サハラ〟を発表した。

Yamaha Motor da Amazonia社は事務棟の建設を完了した。

Metalfino da Amazonia社は新しく食堂を建設した。

Fuji Photo Film da Amazonia社がマナオスに工場開設のため、スフラマの認可を取得した。

スーパー Casa Roma がアパレシーダ店を閉店した。

三月に、プール、体育館、図書室、音楽室、理科室などの施設を完備したマナオス日本人学校の新校舎落成式が催された。

一九九一年

Springer National da Amazonia社はSpringer Panasonic da Amazonia S.Aと社名を変更した。

Sony da Amazonia社がウォークマンの生産を開始した。

FGL da Amazonia Eletronica lnd.e Com社がGENTEK社の委託生産

の電卓を自社生産に切り換えた。

Moto Honda da Amazonia社はナイジェリア向けに一二五ccバイク完成車の輸出を開始する。

Yamaha Motor da Amazonia社は、小型ボート用の船外機の製造を四月に開始し、九月には第二ビニールハウスの設置を完了した。

Brasciti Ind.Com.Relogios da Amazonia社が八十九年に始めたバンド製造を中止した。

一九九二年

Sony da Amazonia社はシステムステレオの輸出を開始した。

Sanyo da Amazonia杜はマナオスでの一体型エアコンの生産を開始した。

FGL da Amazonia Eletronica Ind.e Com.社が電子レジスター及びテラーズマシンも自社生産への切り替えを行った。

Moto Honda da Amazonia社は同社百パーセント出資でHonda Tecnologia de Amazonia社を設立、またこの年、コロンビアに一二五ccバイクをCKD方式で輸出し始め、九月には一〇〇cc小型バイク「ドリーム」を発表、四輪車の輸入も開始している。

Yamaha Motor da Amazonia社が二月からマナオスでのウォーター・ヴィークル（水上バイク）製造を開始した。

Seiko Indl.da Amazonia社は電池の要らないブラジル初のソーラー電池、アナログ式腕時計の生産を開始した。

Brasciti Ind.Com.Relogios da Amazonia社はマナオスでのムー

ブメントの組立てを中止し、その代替を輸入に切り替えた。

Imp.e Exp.New Tokio社はマナオスでのラン栽培の可否を確かめるべく試験的に栽培を始めた。

Kiba&Cia社、バウビーナ支店を閉店した。

Grupo Romaは食品工業部門でCasa Roma Industria de Alimentos社を設立、二千四百平方メートルの工場でマナオスで初めてサンドイッチ用食パンやロールパンの大量生産を始め、またスーパーマーケット部門では面積二千二百平方メートルの全自動化された明るく清潔なスーパーCasa Romaボレバウド支店を五月に開店し、マナオス庶民に新鮮な野菜、果物、食肉始め日本食品の提供を図った。

一九九三年

Springer Panasonic da Amazonia社が世界戦略としてPanasonic da Amazonia社と社名を変更する。

Sanyo da Amzonia社は家庭用コードレス電話機の生産を開始した。

Sony Componentes社はTV、ビデオ、音響機器などの基板を生産する新工場を十月八日に開設した。又、CDプレーヤーの輸出も開始した。

Murata da Amazonia Ind.e Com社は九月にいち早く日本の公定審査機関であるRCJによってISO九〇〇二の認証取得を果たした。

Rohm Amazonia Eletronica社はこの年より電子部品販売を行う。

Moto Honda da Amazonia社が小型発電機の内作を三月に開始した。

Yamaha Motor da Amazonia杜はこの年ホイールの組立てを開始すると共に鋳造及び機械加工の工程の閉鎖に踏み切った。

Mitsucar Industria da Amazonia社は、PIC-UPL一二〇〇の組立てを月産八十台で始めた。

Noritsu da Amazonia Industria e Comercio社がNoritsu do Brasilの子会社として九月に設立され、写真用現像機械の生産でマナオスに進出した。

Fuji Photo Film da Amazonia社がマナオスへ進出工場の移転も行ない、写真用印画紙、フィルムの生産及び出荷を開始した。

Imp.e Exp.New Tokio社はこの年の中旬、アマゾンでのランを国内外市場に出すために、アマゾン・オルキージア杜を設立した。

Casa Roma Industria de Alimentos社は「FRUNAT」商標のアイスクリーム、トロピカルジュース用冷凍果肉の製造を始めた。

一九九四年

Sharp do Brazil社は家庭で簡単にパン等が焼けるオーブントースターを発売した。

Moto Honda da Amazonia社は九月、一一五ccオートバイTODAYのモデルチェンジを行ない、ニューモデルCG一一五「TITAN」の発売に踏み切った。

Denso Industrial da Amazonia社がクリチバのDenso do Brasil社の子会社としてマナオスへ進出してきた。

Metalfino da Amazonia社は工場を拡張して総務部を作った。

Seiko Indl.da Amazonia社は発電機能内蔵腕時計の新製品KINETICのマナオスでの組立て、販売を開始した。

Noritsu da Amazonia Ind.e Com社がミニラボ（迅速写真処理機器）の製造を三月に開始し、五月にマナオスでの生産第一号機を完成、出荷した。

Fuji Photo Film da Amazonia社のプロジェクトがSICに認可されミニラボ（写真現像機）の生産開始に伴い、工業団地以外に工場を移転、本社の移転も併せて行なわれた。

Takeda Comercio社は八月にフォルタレーザ市に支店を開設した。

Amazon Orquidea社のデンファレ種のランがサンパウロの市場向けに初出荷された。

Tai Engenharia e Construcoes社が九月、マナオスに設立した。

Miura Corretora de Seguros社が保険サービスのブローカとしてマナオスで開業した。

Casa Roma Industria de Alimentos社は商標「BROTHAR」で多種多様のパンの製造販売を始めた。

一九九五年

Panasonic da Amazonia社が一月にISO九〇〇二の認証取得し、電子レンジが初めてペルーへ輸出された。

Sony da Amazonia社がISO九〇〇二の認証を取得、この年，ソニー株式会社の大賀典雄会長は、日本ブラジル修好百周年記念事

業の一環として専用機を自ら操縦しマナオスに来訪、アマゾナス劇場でサンパウロ・フィル ハーモニー・オーケストラの演奏に見事なタクトさばきを披露した。

Sharp do Brasil社もISO九〇〇二の認証取得に成功、ブラジル中北部で初めて測定機用校正機関の校正業務の認証も取得し、多様化するマナオス工業団地内などの測定機校正サービスを開始し好評を得ている。

センプ東芝社がモニター・テレビを発表した。

Yamaha Motor da Amazonia社は二月にマナウスのオートバイ、船舶用エンジンメーカーとして初めてのISO九〇〇二認証取得に成功し、FRPの加工工程も設置し加工をはじめた。

Moto Hondada Amazonia社がマナオスでYAMAHA社に次いで四月、ISO九〇〇二認証を取得した。

この他、Showa do Brasil社、Fuji Photo Film da Amazonia社と多くの企業がISO九〇〇二認証を取得した。

六月にMitsui O.S.K.Lines Agencia Maritima社は日本の三井OSKラインのブラジル二番目の事務所として開設された。

Kiba&Cia社はビスコンデ街に第二支店を開設し、創立二十周年祝った。

Tai Engenharia e Construcoes社はMoto Honda da Amazonia社の保全倉庫、Showa do Brasil社の保全建物、Sony Componentes社の食堂を建設、またアマゾナス劇場横のサンセバスチャン広場の修復工事も手がけた。

エフイジェニオ・サーレス農業協同組合で五月から鶏卵共同選卵選別が始まった。

Casa Roma Industria de Alimentos社は十月にマナオスで初めて自家製パネトネを発売した。

一九九六年

Panasonic da Amazonia社がテレビをアルゼンチンへ輸出を開始した。

Sharp do Brasil社が液晶付きビデオカメラ〝ビューカム〟の生産を開始、またVTRは累計生産二百万台を達成し、電子レンジ生産も累計生産百万台を達成した。

Sony da Amazonia社は車載オーディオの生産を開始し、Sony Plasticos da Amazonia社はプスラチック部品の生産を開始した。又、十七インチのカラーモニターテレビの生産も開始した。

JVC社はグラジエンテ社との合弁販売会社、JVC do Brasil Ltda.を設立し、グラジエンテ社（マナオス工場）にてJVC技術指導の元、オーディオ、TV、ビデオカムコーダーの委託生産を開始した。

FGL da Amazonia Eletronica Ind.e Com社は工場が手狭になったため、現住所に工場を移転した。

Fujitsu da Amazonia社はFujitsu do Brasil Ltda.の子会社として、大型コンピューター、メインフレーム製造で二月にマナオスに進出した。

プラスチック部品成形の昭和プラスチック社がマナオスに進出し、

五月にShowpla Brasil社を設立した。

Moto Honda da Amazonia社はブラジルで操業してから二十五年となり、六月には二百万台生産を達成、XLR一二五機種のオートバイを発売した。

三菱のトラックを組立てていたMitsucar Industria da Amazonia社は、この年マナオスでの生産を打ち切った。

Noritsu da Amazonia Ind. e Com社が九月生産機種三機種を新たに立ち上げた。

Tai Eng. e Construcoes社は、Sony da Amazonia社のコンピュータールーム、Metalfino da Amazonia社の工場拡張工事、Showa do Brasil社の鋳造工場と第二食堂の工事を手がけた。

Mitsui O.S.K. Lines Agencia Maritima社は現住所に移転した。

一九八二年からマナオスに開設されたコンコルジア保険会社は、日本の三井海上火災と共栄海上火災の日本資本により運営されることになった。

一九九七年

四月十七日Showpla Brasil社は南米で最初の工場を第二工業団地にオープンした。機械設備は日本の最新技術を導入し、材料の調達から成形品の完成まですべてコンピューター制御による一貫生産体制をしき、テレビ外観部品の生産でスタート、後日ビデオ外観部品、アッセンブリー、二輪車樹脂部品などの成形も始めた。

Nissin Brake do Brasil社が四月に二輪のブレーキ製造で進出した。

八月にSUFRAMAと九月にSUDAMのプロジェクト認可がおりている。

Moto Honda da Amazonia社は十一月にCB五〇〇とVT六〇〇の二種類の大型機種を販売、またサンパウロでは四輪部門が独立し、新会社を設立した。

Denso Industrial da Amazonia社は二月にカーエアコン、バス用エアコンで操業を開始し、同七月に二輪用発電機の生産を開始した。

Showa do Brasil社は三月に同敷地内に第二工場として鋳造工場を建設した。

Metalfino da Amazonia社は工場内鋳造部門を拡張し、新しい倉庫も建設した。

この年にISO九〇〇二認証をMetalfino da Amazonia社、Seiko Indl.da Amazonia社、Noritsu da Amazonia Ind.e Com社、Minolta Copiadora do Amazonia社が取得した。

Fujitsu da Amazonia社はこの年の下半期より大型コンピューターの製造を開始した。

Tai Engenharia e Construcoes社は、Moto Honda da Amazonia社の第二駐車場、ソニーコンポネンテ社の改造、Noritsu da Amazonia Ind.e Com社の新工場、Nissin Brake do Brasil社の新工場、Murata da Amazonia社の食堂建設を手がけた。

武田兄弟商会はTakeda Comercio Ltda.と社名を改名した。

Kiba&Cia社はビスコンデ第二支店を閉店し、本店での業務一本化にした。

エフィジェニオ・サーレス農業協同組合は二月アメリカ向けにプ

プーニャ椰子のパウミットの輸出を試みるが数回で中止となった。

五月に北伯アマゾン地区最古の日系旅行社として一九七八年から営業していたアマゾン・トラベル・サービス社マナオス店がＡＴＳ・ＴＵＲとして独立した。

EMK Informatica社はアマゾン地域の日系情報処理サービス部門で最初にIBMビジネス・パートナーとしての認定をIBM本社から受けた。

MIURA保険サービス社はMiura Corretora de Seguros S/C Ltda.と改名。この年の十月にISO九〇〇二の認証を受けた。

コンコルジア保険会社はこの年の七月にMitsui Marine&Kyoei Fire Seguros S.A.と社名を変更し、十二月にTakeda Corretora de Seguros S/C社が設立された。

一九九八年

Panasonic da Amazonia社がZFM全工業の中で四番目、日系企業では一番乗りで「ISO一四〇〇〇」認証を取得した。

十二月、Tojo da Amazonia社は工場閉鎖。

Moto Honda da Amazonia社は三月小回りの利き、女性にも気軽に乗れるオシャレなスクーター、BIZを全国一斉発売、十一月には環境ＩＳＯといわれているISO一四〇〇一認証を取得した。

翌一九九九年二月に、三百万台生産を達成している。

Showa do Brasil社が四十三万五千台生産を記録した。

Nissin Brake do Brasil社が二輪車用のブレーキの生産を開始し

た。

Denso lndustrial da Amazonia社は工業団地内に既存工場を購入し、一九九九年稼働をメドに移転、準備を進めている。

Noritsu da Amazonia lnd.e Com社はShowa do Brasil社の向かい側に新工場を建設し、三月に落成式を行い工場を移転した。

十一月には生産機種一機種を新たに立ち上げた。

この年ISO九〇〇一認証を取得したのは Showpla Brasil社、Murata da Amazonia社、Denso lndustrial da Amazonia社、Fujitsu da Amazonia社、FGL da Amazonia Eletronica lnd.e Com社であった。

Fuji Photo Film da Amazonia社はPRB（基礎製造工程）の認可を受け、第三棟を五千平方メートル増設、またISO一四〇〇〇認証も取得した。

Fujitsu da Amazonia社の〝ディスク・ユニット・サブシステム〟プロジェクトがスフラマより認可された。

Banco America do Sul（南米銀行）はイタリア系銀行SUDAMERIS銀行に吸収された。

Cia de Seguros America do Sul Yasuda社は南米銀行の買収に伴い、日本の安田火災は出資比率を引き下げ、社名もYasuda Seguro S.Aと変更した。

住友海上火災保険株式会社が進出、一月にＳｕｍｉｔｋａｉｊｏ Representacoesを設立した。

Tai Engenharia e Construcoes社は本社を建設した。

Casa Roma Industria de Alimentos社は製造工程のオートメ化を図り新しい設備を備え付けた。

資料・年表

【アマゾン移住の歴史　移住年表】

一六一六　アマゾン河口にベレーン市が創設されポルトガル人による植民事業が始まる。

一七五三　ポルトガルの植民業者がベレーン州グァマ河畔に

オーレン村を創設した、北太平洋上にあるポルトガル領アゾレス島より三百家族が移住途中に半分を失い百五十家族が入植した。アマゾンにおける植民地創設の最初である。

一七五六　ポルトガル植民業者の間で農園労働者が不足しへ、アフリカ黒人を奴隷として輸入後に現地インヂオと雑婚しムラトとなった。

一八七二　イギリスは先行投資を計り、アマゾン河汽船航行会社を設立。

一八七二～一九一二　ロンドニア州マデイラ～マモレ鉄道工事にペルー下りの日本人労働者が従事したが、記録はない。

一八七七～一八七八　ブラジル東北地方、殊にセアラ州の大旱魃と飢饉により東北難民が自然ゴム採集のためアマゾン奥地に移動し植民地を開設した。

一八九五　イギリスはアマゾン電信電話会社を設立。この時代にパラー州知事ホラウド・ソドレは地方産業発展のために多数のヨーロッパ人の他に日本人移住者の誘入を熱心に希望した。

八月二十一日付、パラー州土地局と「東洋移民貿易会社」の代表者と日本人移住者、三千人の誘入に関する契約が締結されたとの記録がある。この契約は日伯修好通商航海条約前であり、元来同会社は日本の会社でもなく、また契約履行のために日本国側と交渉した事実もない。

一八九八　イギリスはパラガス会社を設立。

一八九九　ペルー国に日本人の契約移住者が入国した。

一九〇二～一九〇九　イギリスはマナオス築港営業会社、パラー電鉄電灯会社、マナオス市改良会社、パラー工事会社等を設立。

一九〇五　ペルー国リマ市駐在の野田良治がペルー領アマゾン地域、タンポパッタ河流城の天然ゴム採集の日本人状態を詳細に調査し、同地方のゴム林への日本人移住の賛成意見を上申している。ペルー国下りの日本人がアマゾン地域へ第一歩を印した。

一九〇六　アメリカもベレーン州築港営業会社を設立。

一九〇七　アメリカはマデイラ～マモレ鉄道会社設立。

一九〇九　サンパウロの松下正彦がマナオスで色紙の扇、団扇、紙風船、竹トンボ等の行商をした。アマゾン奥地のゴム採集が目的だったらしい。

一九一二　笠戸丸以前からサンパウロに居住していた鈴木貞次郎はアマゾン地域を調査。

一九一五　ベレーン～ブラガンサ二百四十キロメートルの鉄道敷設のため、その沿線地帯に十数個所の移住地が建設され入植者数は数万人になったと記録にある。

　ペルー下りの山根武一がポルトベーリョに到着、野菜作りに従事し、その後マウエスに転住しグァラナ栽培に従事。

一九一五　ペルー下り玄場松一がベレーン市に転住し商業に従事。

　ペルー下りの中吉誠寿がボリビア国境のシャブリ市に居住定着。

一九一六　マナオスでコンデコマ（前田光世）と佐竹信四郎も格闘技興行する。

ペルー下り高橋庄助がベレーンに転住定着。

一九一七　ペルー下りの古野功がアクレ州リオブランコに到着し定着。

一九一八　東京に海外植民学校が創設され崎山比佐衛が校長に就任。

一九一九　駐伯特命全権公使堀口丸萬がパラー州ベレーンを視察し、アマゾン流域を視察。

一九二〇　ペルー下り川本清八がベレーンに転住し野菜栽培に従事。

一九二一　アクレ州第二の町、クルゼイロ・ド・スールでアンデスおろしのため7.3度記録。

一九二二　コンデコマ(前田光世)がブラジル国に帰化しベレーン市に定住した。

ペルー下り広繁利吉がマナオスに到着。

一九二三　パラー州知事ジオニジオ・ベンテスが駐伯特命全権大使田付七太に日本人移民の誘入を具申した。

大石小作はヨーロッパ経由でブラジルに入国し農工業を調査。

黄色人種の入国制限法案、同案賛成公開文の発表。

一九二五　ペルー下り高橋数馬がマナオスに到着し職業を転々とかえ、一九三九年対岸のカルデロンに転住し野菜栽培に従事定着。

一九二六　アメリカの自動車王フォードがパラー州サンタレンのタバジョス河畔にゴム園を創設した。

大石小作はアマゾン地域視察中に福原調査団の一員に加わり調査終了後、単独でアマゾナス州マウエス(?)にてグァラナの栽培調査をする。

一九二七　アマゾナス州政府と山西・粟津両名との間に土地のコンセッション契約調印。

一九二八　上塚司の尽力によりアマゾン地方調査隊が派遣される。

南米拓殖株式会社が設立される。

大石小作ほか七名は神戸港発さんとす丸で、リオ・デ・ジャネイロを経由して、マウエスに到着。百五町歩を開伐、これが西部アマゾン地域で日本人が開拓の斧を入れた最初である。

東京でアマゾン興業株式会社創立総会が開催される。

アマゾナス州政府との間に州有地二万五千町歩のコンセッションに関する契約を締結。

マナオス市連邦農事監督事務所に事業地本部の所在地を「サレシ」と手続きした。「サレシ」とは当時のアマゾナス州知事エフィジェニオ・サーレスの姓名であるサーレスのサレと日本語の「市」の（シ）を組み合わせたものである。

一九二九　南米拓殖株式会社がパラー州モンテ・アレグレに直轄農場を開設。

コンパニア・ニポニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジルと称する伯国会社を設立し日本人移住者の入植が始まる。

一九二九　神戸出港大阪商船もんてびでお丸で四十三家族と単身を含む百八十九名が九月二十二日午前八時半、トメアスー植民地桟橋に到着。以後一九三七年までに三百五十二家族、（二千百四名）が入植した。

パラー州知事と前田光世との土地コンセッション契約の締結。

一九三〇　アマゾン開拓青年練習生制度発足。

上塚司が国士舘高等拓殖学校を創設。

上塚司はサンパウロでアマゾン調査団を組織した。

三輪勇隊員は調査終了後マナオスに残留定住した。

調査隊一行は十月二十日アマゾナス州パリンチンス郡ビラ・バチスタに到着。　アマゾニア産業研究所本館の建設地を決定し、ビラ・バチスタ・インスチトゥート・アマゾニアと改称。

アマゾン興業株式会社マウエス移住者七家族五十名は、十月二十七日神戸出港さんとす丸でリオ・デ・ジャネイロ経由で一九三一年一月五日に現地入植。

一九三一　神戸出港リオ・デ・ジャネイロ丸で三十名のYMCAアマゾン開拓青年がパラー州モンテ・アレグレ近郊のサンタ・ローザに入植。五反田貴巳団長、平賀副団長の開拓青年団一行。

神戸出港のブエノスアイレス丸で前田コンセッションの土地に日本人が入植したが入値者は四散しブラジル人の移住地となった。

ジュートの試作、日本種、パウリスタ種、インド種共に成績不良。

国士舘高等拓殖学校第一回卒業生四十七名がパリンチンスに到着。

一九三二　国士舘高等拓殖学校第二回卒業生五十四名と一般移住者十五名がパリンチンス到着。国士館高等拓殖学校より分離して、日本高等拓殖学校と改称し　毎年卒業生を送出。崎山比佐衛校長一家一行十名が九月にマウエスに到着、海外植民学校南米分校が設立される。

一九三三　臼井牧之助により南洋種ピメンタ苗二十木をシンガポール港で購入、トメアスーに二本のみが活着した。

財団法人アマゾニア産業研究所が設立される。

アマゾナス州マウエス植民地にマウエス日本人会が組織される。

アマゾナス州パリンチンスのアンジェラ河畔に模範農業植民地が建設される。

ジュート印度種を低湿地に播種したが結果は不良であったが、岡山県人　尾山良太の耕地に二本の新品種を発見、幹高二メートル枝が出ず、三ケ月で三メートル、四ケ月で一本が順調に生育し、数十粒の種子を採取。

一九三五　ジュート新品種の種子三キロを採集。

高拓五回生十八名到着。

内閣総理大臣官邸にてアマゾニア産業株式会社の設立が決定した。

アマゾニア産業株式会社発起人会が開催され会社が成立。

一九三六　アマゾニア産業株式会社創立総会。

アマゾナス州パリンチンス登記役場にて会社設立の登記完了し取締役に上塚司、取締役支配人に辻小太郎が就任。

神戸出港ラプラタ丸で日本高等拓殖学校第六回生と一般入植者五十七名を引率して上塚団長パリンチンスのヴィラ・アマゾニアに向けて出発。

アマゾニア産業研究所で新品種のジュート種子三十キロを採集し、尾山良太へ十五キロ、中内義正に十五キロを分譲しジュート栽培を依頼。

前田光世がアマゾニア産業株式会社の取締役に就任。一九四一年ベレーン市で死亡。

一九三七　ベレーン市マルチン・ジョルジ商会へ二千七百七十キロ、七月に同商会へ六千百七十一キロのジュート製品を納入、日本人によるアマゾンにおけるジュートが世界市場に販売された最初である。

日本高等拓殖学校第七回生四名がパリンチンスに到着。第一回から第七回生まで四百十名がパリンチンスに入植。

ジュートの新品種が尾山良太の名前をとって尾山種と命名される。

一九三八　日本高等拓殖学校が閉鎖される。

六月に総計六十トンのジュートが生産される。

一九四〇　パリンチンス、ヴィラ・アマゾニア創立十周年記念に八紘会館が建設される。

アマゾン興業株式会社はアマゾニア産業株式会社に合併される。

一九四一　第二次世界大戦勃発

ヴィラ・アマゾニアの資産はアマゾナス州に接収され、アマゾナス州第一の財閥ＪＧアラウジョ商会に七百コントスで売却された。これにより、アマゾニア産業株式会社は消滅した。

崎山比佐衛は六十七才の高貴なる一生をアマゾナス州マウエスで終わる。

一九四二　一月二十八日第二次世界大戦で日伯両国間の国交断絶となり、入植者は敵国人として重圧を受ける。

一九四四　六月六日ブラジル政府は日本に宣戦布告。

一九四五　八月十四日、日本降伏。

一九四六　パラー州トメアスーで農民同志会が結成される。

一九四八　パラー州グァマ植民地水田式米作植民地計画が発表される。

一九四九　パラー州アカラ農民同志会はトメアスー植民地の一元化のためにトメアスー産業組合と改称。

一九五一　辻小太郎によるアマゾン計画移民の受入業務開始。

一九五二　アマパ直轄州マカパ郡内にマタピー植民地を開設。

一九五三　ジュート栽培の戦後家族移民十七家族五十四名がアマゾナス州パリンチンスに入植。アマゾン河大洪水の年であった。

アマゾナス州ベラビスタ植民地第一次移民

二十三家族百三十九名が入植。

アマパ直轄州マタピー植民地へ二十四家族、ファゼンジニャに五家族入植。

戦後移住者二十九家族百八十一名がパラー州トメアスーに入植。

一九五四　日本海外移住協会連合会が設立される。

アマゾナス州マナカプルー植民地（ベラビスタ移住地の旧称）へ三十八家族二百十八名が入植。

（六月）アマゾナス州マナカプルー植民地へ七家族三十六名が入植。

（七月）ロンドニア州トレゼ・デ・セテンブロ植民地へ二十九家族百八十一名が入植。（七月）アマゾン産業研究所の二十周年記念祝賀会がアマゾナス州パリンチンスで挙行。

アマゾナス州マナカプルー植民地へ三十家族百八十三名が入植。（八月）アマパー直轄州マタピー植民地へ二十一家族が入植。（八月）アマゾナス州マナカプルー植民地へ二十七家族百六十六名が入植。（十一月）アマゾナス州ヴィラ・アマゾニアのアラウジョ耕地に八家族五十名が入植（十二月）

一九五五　連邦政府移植民院は外国人コロノ（契約労働者）アマゾン地域への誘入を禁止。パラー州フォードゴム園のベルデーラ植民地とフォードランジア植民地の百二十二家族（七百八十五名）は農務省の指示で退去させられ、八ヶ所に離散した。

（モンテ・アレグレ五十五家族三百五十八名、ベレーン近郊二十一家族百二十七名、ベレーン州グァマ植民地十五家族百一名、リオブランコ直轄州十二家族七十一名、サンタレン近郊七家族四十三名、アレンケール五家族三十六名、アカラ植民地四家族二十六名、マナオスIBサバ農地三家族二十三名。）

アクレ州リオブランコ市でアンデスおろしの影響で8.8度を記録。

十一月ベルテーラゴム園より二家族十三名がリオブランコ直轄州ボアビスタ市での野菜栽培のため転住、同じくゴム園より七家族とマナカプルーより二家族の九家族、五十四名が転住した。

一九五六　日本海外移住振興会社の現地法人としてJAMIC移植民有限責任持分会社が、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ、ベレーン、ポルトアレグレ、レシーフェの都市に設置される。

一九五七　マナオス自由貿易地域として法制化される。

日本海外協会連合会アマゾン支部でモンテ・アレグレに種苗育

成園が開設される。

パラー州グァマ米作移住地へ一九五五年から一九五七年にかけて百二十五家族八百二十二名入植。

アマパー直轄州マザゴン植民地十七家族四十三名が入植。（十月）

一九五八　57,410トンのジュートが製品化される。

アマゾナス州エフィジェニオ・サーレス移住地へ十七家族百二十一名入植。

一九五九　アクレ州キナリー移住地へ四月、六家族四十四名入植。

アクレ州キナリー移住地へ六月、七家族四十七名入植。

アマゾン移住三十周年記念祭挙行。

エフィジェニオ・サーレス移住地第二次六家族三十名入植。

エフィジェニオ・サーレス農業協同組合の前身、マナオス農業協同組合を設立。

一九六〇　ポルトベーリョ～クイアバの道路工事が開始される。

エフィジェニオ・サーレス移住地第三次十五家族、九十一名入植。

VISAO誌八月号に「アマゾンで活躍する日本移民」が紹介される。

一九六一　エフィジェニオ・サーレス移住地第四次十六家族九十三名が入植。

ロライマ州タイアーノ移住地に九家族五十二名と単身一名が入植。

一九六二　ロンドニア州アリケメス市とジ・バラナ市にINCRA（内国植民農地改革院）が植民地を開設、パラナ州から日系人五十八

家族二百八十七名転入植。

一九六三　アクレ州政府の農務長官に日系二世大川潔（当時二十七才）が任命される。

マウエス入植の大川博氏の長男でビラシカバ農大卒業。アクレ州リオブランコ市で、アリアンサ出身の日系医師、川田哲夫氏がキナリー入植者に医療活動をされる。

沢田美喜のエリザベス・サンターズ・ホーム（戦争孤児院）が、パラー州トメアスーに聖ステハノ農園を取得。

高砂香料がトメアスーにアマゾン香料研究所を設置。

一九六四　胡椒油製造のため、ブラジル鐘紡化学トメアスー工場が落成。

一九六五　マナオス市に日本国領事館が開設され初代領事に福島茂吉氏が着任。

ベレーン市に移民援護協会（初代会長戸田子郎）が発足。

池田重二著「アマゾン邦人発展史」が刊行される。

マナオス日本人会発足。

一九六六　海外移住事業団が北伯雇用青年制度開始。

マナオス市郊外に日本人有志による任意植民地カショエイラグランジ植民地が造成される。

一九六七　ジュート尾山種の尾山良太がアマゾナス州名誉市民権を受領。

マナオス市が自由貿易地域として活動を開始する。

マナオス学生寮が日伯協会内に建設される。

ペルー国プカルパへピメンタ栽培のため、ベラビスタ植民地とエフィジェニオ・サーレス植民地より数家族転出。

辻小太郎、戸田義雄、中内義臣の三名にアマゾナス州パリンチンス市の名誉市民権が贈られる。

一九六九　アマゾナス日本人移住四十周年記念祭挙行。

ベレーン市にアマゾニア日伯援護協会病院落成。

トメアスー移住地に胡淑の根腐れ痛が蔓延しアマゾン地域にも侵害。

マナオス日本人会会館落成記念式典の開催。

一九七〇　ポルトベーリョ～アクレ州リオブランコ五百四十キロのBR364開通。

マナオス日本人会が発展改称したマナオス日伯文化協会が設立される。

一九七四　ベレーン市の日伯移民援護協会がアマゾニア日伯援護協会に改組。

パラー州カスタニャールでハワイマモン（パパイヤ）栽培ブームが起こり、アマゾン一帯に拡がる。

日本人無縁仏を探してブラジル全土を廻った海外移住家族会連合会の藤川辰雄専務理事が北伯に無縁仏が多いと発表。

一九七五　国際協力事業団の助成によりベラビスタ移住地会館の建設工事開始。

マナオス自由貿易地域に日本企業の進出が相次ぐ。

一九七七　ロンドニア州トレゼ・デ・セテンブロ移住地の電化。
　アマゾナス州エフィジェニオ・サーレス移住地の電化点灯。
一九七八　ブラジル日本移民七十周年式典後、皇太子夫妻（当時）は、北パラナ、サルバドール、ベレーン、マナオスを訪問され帰国。
一九七九　アクレ州キナリー入植二十周年記念祭開催。
　アクレ州の日系医師川田哲夫氏へ国際協力事業団ベレーン事務所より感謝状が授与される。
　アマゾン地域日本人移住五十周年記念式典が、ベレーン、トメアスー、マナオス、パリンチンスで盛大に挙行され、日本より慶祝使節団が来訪。
一九八〇　ロンドニア州トレゼ・デ・セテンブロ移住地入植二十五周年記念祭開催。
　マナオス日本文化協会の発展解消に伴い、西部アマゾン日伯協会が設立される。
　ロンドニア州アリケメスに内国移住者三十七家族百七十九名入植。
ロンドニア州ジ・バラナに内国移住者二十一家族百八名入植。
ブラジル連邦政府はロライマ州の植民地計画を発表。
一九八一　ロンドニア州トレゼ・デ・セテンブロ移住地に電話架設工事開始。
　マナオス領事館が総領事館に昇格。
アマゾナス州パリンチンス市で高拓生入植五十周年祭挙行。
一九八二　浩宮徳仁親王がリオ・デ・ジャネイロ到着後ブラジル各地を廻り、マナオスからメキシコ経由で帰国。

一九八三　アマゾナス州ベラビスタ移住地電化点灯式と入植三十周年記念式典開催。

一九八四　ロンドニア州アリケメスは百四十九家族の入植数を数え、ロンドニア州最大の日系移住地となる。

一九八五　国際協力事業団海外開発青年制度の発足。

マナオス・カントリークラブ創立。

一九八六　マナオスに日本企業の進出が盛んとなる。

一九八七　アマゾン地域から日本への出稼ぎが盛んになる。

アマゾナス州エフィジェニオ・サーレス農業協同組合に無線電話を導入、数年後に入植者全戸に無線電話を架設。

マナオス市にアマゾナス日系商工会議所が設立される。

一九八八　リオブランコ直轄州はロライマ州として州名を変更し州に昇格。

礼宮（現秋篠宮）マナオスご訪問。歓迎式典を日伯会館で挙行。

マナオス市内に日系人個人でアマゾン自然科学博物館が建設される。

一九八九　アマゾン日本人移住六十周年記念祭典を、トメアスー、ベレーン、マナオスで開催。

マナオス市に西部アマゾン日伯協会日本語学校モデル校が国際協力事業団の助成と地元日系人の協力により落成。六十周年記念祭と併せて式典を挙行。

一九九〇　ふるさと創生訪日団二百四十九名は十日間の日伯交流を果たし帰国。マナオスより数名参加。

一九九一　ロンドニア州アリケメス移住地、ジ・バラナ移住地より出稼ぎが続出し、日本人会は自然消滅した。

一九九三　アマゾナス州マナオス市会議員に日系二世マサミ・ミキ氏が初当選。（エフィジェニオ・サーレス移住地出身）

ロライマ州ボアビスタ市に農科大学が新設され初代学長に日系二世シンホ氏就任。パリンチンス出身。

マナオス日本人学校は就学児童の減少に伴い、地元日系人にも門戸を開放、マナオス日本人学校文化コースとして開講した。

一九九四　ロンドニア州トレゼ・デ・セテンブロ移住地入植四十周年記念祭挙行。

一九九五　第一回全伯日本語スピーチコンテストがサンパウロで開催され、マナオスより日系一名、非日系一名が参加。

日伯修好百周年記念碑をマナオス市内の一角に建設。

マナオス市議会は日本週間の条令を制定。

一九九六　第二回全伯日本語スピーチコンテストがリオ・デ・ジャンネイロで開催され、マナオスより日系、非日系各一名が参加。

西部アマゾン日伯協会老人ホーム「憩いの園」が国際協力事業団の助成と地元の協力で竣工。

一九九七　第三回全伯日本語スピーチコンテストがクリチーバで開催されマナオスより日系、非日系各一名が参加。

第二回アマゾン俳句大会が西部アマゾン日伯会館で開催される。

天皇・皇后両陛下がベレーンを公式訪問される。

アマゾナス日系商工会議所創立十周年記念祭をトロピカルホテル

広間で開催。

【マナオスの日本人組織の始まり】

一九六四年より、海協連職員高村正寿氏の提案により同氏宅において羽田重吉、門正一、村山惟元、大和田誠一郎、神田久彦、三輪勇、安井眞各氏が集まり、会合が数回にわたり開催された。そして翌一九六五年、マナオス領事館が設置され、福島初代領事着任挨拶の会場に集まった日本人により日本人会発足の気運が高まった。

同年五月、日本人会設立総会が開催され、「マナオス日本人会」が発足。会長として、高拓一回生で有識者であった中島敏三氏が就任したが、リオ・マデイラ在住であり、なかなかマナオスへ出て来られなかったという事情から、一九六六年、マナオス在住で、当時アマゾン流域の日本人宅をアウロラ号で行商してまわり、アマゾンの日本人通であった高拓一回生の佐藤行夫氏が就任した。

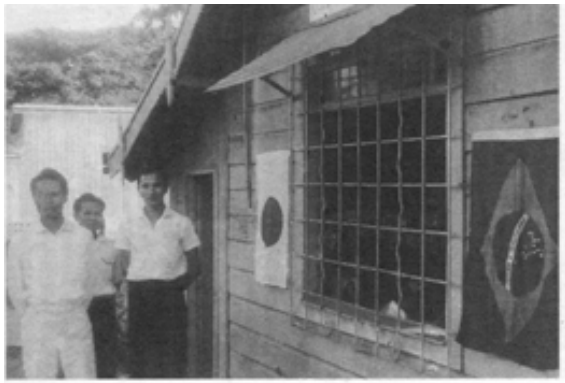
一九六九年、ナザレ教会において移住四十年祭、ミサが執り行われた。（十年前の一九五九年十月二十一日にはマナオスで入植三十周年記念祭が開催され、三日間にわたり式典、農産品評会、日本映画などの行事が行われた。）

移住四十年祭に先立つ一九六九年四月二十九日にはマナオス日本人会婦人部を結成、翌一九七〇年三月十五日には、マナオス日本人会が発展改称した「マナオス日伯文化協会」の設立総会が行われ、会とし

ての組織が固まった。

この頃より活動の場としての会館を持ちたいとの思いが強くなり、以前より海協連が所有し、遠隔地在住日本人子弟のマナオスでの勉学のため一九六七年より学生寮として使用されていた現在の日伯会館の敷地内に、壁がなく屋根だけの日本人会館の建設に着手した。同年十月四日、念願の日本人会館が落成。それまで催物を行う際に使用していた移動式のステージを内部に設置し、また、片隅に映写室を設け、三五ミリの映写機を設置。会館のこけら落としとして、第一回マナオス紅白歌合戦、及び「人妻椿」の映写会が開催された。この後長年にわたって、サンパウロ新聞社より日本映画を借り、毎週のように映写会を開催し、当時娯楽の少なかったマナオスの日本人が会館に集まるようになった。

これが会の活動、会員の集まりの始まりであり、毎年開催の紅白歌合戦とともに各家庭にテレビが普及するまで続いた。



マナオスでの日本語教育の始まり
1967年、日本人子弟への日本語教育の必要性を感じたカショエイラ・グランジ植民地の有志により、門氏宅で日本語学校を設立。

1970年に落成した日本人会館（羽田氏所蔵）

様々な催物が行われ、マナオス日本人の集合場所となった。後方には映写用の穴が見える。

一九七九年、移住五十周年記念祭の際、記念事業として新しい会館を建設。一九八〇年に「西部アマゾン日伯協会」と組織が発展改称し現在に至る。

当時の役員を調査できた範囲で記す。

マナオス日本人会

一九六五年　会長　中島敏三　高拓一回生
一九六六年　会長　佐藤行夫　高拓一回生
一九六九年　会長　高野達弥
会計　村山惟元
監事　三輪　勇　金子力太　武田興洋
事務局長　神田久彦
一九六九年　移住四十周年祭典委員長　高村正寿

マナオス日伯文化協会

一九七〇年　会長　羽田重吉
第一副会長　井上正吾
第二副会長　高木正敏
第一書記　神田久彦

第二書記　高野連弥
第一会計　武田輿洋
第二会計　出田　務
文化部長　門　正一

一九七五年　会長　井上正吾
第一副会長　羽田重吉
第二副会長　出田　務
第一会計　寺野義勝
第二会計　川田敏之
第一書記　野沢清一
第二書記　村山惟元

一九七九年　移住五十周年祭典委員長　出田　務

日本人会館で開催された紅白歌合戦（1971年　羽田氏所蔵）

【西部アマゾン日伯協会概要】

一．設立年月日　一九八〇年五月一日

マナオス日伯文化協会の発展改称に伴い、在マナオス日系人を中心にベラビスタ移住地並びにエフィジェニオ・サーレス移住地の日系人、パリンチンス日伯協会、アクレ日伯協会、ポルト・ベーリョ日系クラブ、トレーゼ・デ・セテンブロ移住地自治会、ボアビスタ日本人会、アリケメス日伯体育文化協会等の日系団体を傘下に置き、国際協力事業団の委託業務の他、教育、文化、体育の他、各地区団体との親睦を図る。

二．会員数

（一）普通会員　マナオス地区　百四十九家族（七百八十一名）、ベラビスタ地区　二十一家族（百十一名）、エ・サーレス地区　三十二家族（百五十名）

（二）特別会員　日系進出企業　二十三社（約五十名）、日本人学校派遣教員　七名

（三）団体加入

・パリンチンス日伯協会　百十家族、会長　猪俣エリゼウ

・ポルト・ベーリョ日系クラブ　六十家族、会長　岡村タケシ

・トレーゼ・デ・セテンブロ自治会　二十五家族、会長　松野克彦
・ボアビスタ日本入会　三十家族、会長　辻一夫
・アリケメス日伯体育文化協会　九十家族、会長　平間アントニオ・マサオ

三、組織

理事会はマナオス地区選出理事六名、エフィジェニオ・サーレス地区選出理事四名、ベラビスタ地区選出理事三名から構成、任期は二年間。

監事会は、マナオス、エフィジェニオ・サーレス、ベラビスタ各地区選出三名により構成、任期は二年間。

四、役員構成　（西部アマゾン日伯協会）

一九八〇～八一年度

理事会

会長　寺野義勝
副会長　佐藤義一
副会長　渋谷　奨
会計　矢野健一
第二会計　内藤ジョージ

理事　小野トビアス
理事　松浦信治
理事　泉田マリオ

監事会
岡本春雄
吉田一憲
野沢幸助
（補）鈴木五郎
（補）武野辰治
（補）錦戸理平

一九八二年度
理事会
会長　寺野義勝
副会長　出田　務
副会長　野沢幸助
副会長　藤田　猛
第一会計　中田智之
第二会計　東　龍次
援護担当　川田敏之

（補）野地忠雄
（補）岩本広治
教育担当　西木広司
（補）府内清太
（補）神田久彦
渉外担当　小野トビアス
（補）福島ヒサト
文化担当　呉　義成
（補）金子恒雄
（補）橋本　博
体育担当　松下　博
（補）山田五男
（補）音成忠孝

監事会
宮本竹一
辻　信義
小茄子川力雄

学生寮舎監
中田智之

一九八三年度

理事会

会長　東　龍次

副会長　矢野健一

副会長　川田敏之

副会長　室谷貞二

会計　矢野健一

理事　松下　博

理事　中村弥寿平

監事会

野沢幸助

藤井勝義

岡　留久

一九八四～一九八五年度

理事会

会長　東　龍次

第一副会長　矢野健一

第二副会長　中田智之

第三副会長　江藤てらし

常任　岩本広治

第一会計　中村弥寿平

第二会計　高木正敏

教育　羽田重吉
援護　出田　務
文化　呉　義成
（補）小口　茂
体育　友田時広

監事会
亀崎満義
西木広司
金子恒雄

一九八六～一九八七年度
理事会
会長　江藤てらし
第一副会長　羽田重吉
第二副会長　友田時広
第三副会長　宮本竹一
常任　羽田重吉
第一会計　中村弥寿平
第二会計　浅井外次

教育　羽田重吉
援護　川田敏之
文化　松浦信治
体育　友田時広
理事　松下　博
理事　橋田幸生
理事　辻　佳治
（八七年度）笹原俊雄

監事会
寺野義勝
三木祥弘
金子恒雄

一九八八～一九八九年度
理事会
会長　羽田重吉
第一副会長　三木祥弘
第二副会長　岡　留久
総務　出田　務
会計　中村弥寿平
第二会計　清水矩夫
教育　寺野義勝

援護　出田　務
文化　松浦信治
体育　友田時広
理事　松下　博
理事　木場逸雄
理事　宍戸秀安

監事会
西木広司
山形　稔
畑原　勝

移住六十周年祭典委員長
出田　務

一九九〇～一九九一年度
理事会
会長　江藤てらし
第一副会長　出田　務
第二副会長　三木祥弘
第三副会長　友田時広
会計　中村弥寿平
第二会計　野沢清一

援護　出田　務
文化　東　博之
体育　山田五男
理事　浅井外次
理事　橋本博美
理事　松下　博
（九一年度）藤井　治

監事会
村山惟元
西木和栄
佐藤五郎

一九九二～一九九三年度
理事会
会長　出田　務
第一副会長　三木祥弘
第二副会長　友田時広
第三副会長　松浦信治
会計　中村弥寿平
第二会計　浅井外次
教育　松浦信治

文化　東　博之
援護　久保　勝
体育　宮本倫克
理事　野沢清一
理事　大貫政治

監事会
川田敏之
江藤てらし
金子恒雄

一九九四～一九九五年度
理事会
会長　出田　務
第一副会長　三木祥弘
第二副会長　友田時広
第三副会長　松浦信治
会計　中村弥寿平
第二会計　浅井外次
教育　錦戸　健
文化　神田久彦
援護　松浦信治
体育　宮本倫克

理事　野沢清一
理事　松下　博
常任　三木祥弘

監事会
村山惟元
山形　稔
大谷広行

一九九六～一九九七年度
理事会
会長　出田　務
第一副会長　三木祥弘
第二副会長　松浦信治
第三副会長　金子恒雄
総務　三木祥弘
会計　久保　勝
第二会計　岩本逸男
教育　錦戸　健
援護　松浦信治
文化　神田久彦
体育　松下　博

議長　宮本倫克

監事会
　川田敏之
　亀崎満義
　友田時広

一九九八～一九九九年度
理事会
会長　村山惟元
第一副会長　三木祥弘
第二副会長　友田時弘
第三副会長　松下　博
総務　三木祥弘
会計　久保　勝
第二会計　清水矩夫
教育　錦戸　健
文化　神田久彦
援護　亀崎満義
体育　坂本五三男
議長　宮本倫克
理事　西木和栄

理事　宍戸宏光
理事　辻　佳治

監事会
佐藤五郎
三木孝美
永田敏雄

五．老人ホーム「憩いの園」施設

一九九六年、国際協力事業団助成金及び、地元日系企業、会員の浄財により着工。カショエイラ・グランジ移住地日伯運動場隣接地に建設される。現在入居者は皆無であるが、西部アマゾン老人クラブの集会場として活用しながら、土曜、日曜日に会員の憩いの場として開放し、また会員の申込に応じて運営中である。施設としては、玄関を入って左側に管理人室、炊事場、食堂、男女別大浴場と続き、玄関右側には畳敷きの娯楽大部屋があり、カラオケセットも用意されている。

六、慰霊碑

アマゾン入植、

カショエイラ・グ

霊碑文字は当時

当地のブラジル

憩いの園（1999年撮影　日伯協会所蔵）

に建立され、慰

によるもので、

七、協会施設

（一）日伯協会事務所

本館二階に事務所と会長室兼応接室及び付帯設備。

事務所隣はアマゾナス日系商工会議所、会計士事務所に貸事務所を賃貸。

（二）日本語学校、講座

二階建て教室十三室。一階に図書室、教員室。二階大部屋を公文式

塾に賃貸。

（三）診療所

医科診療所は一九九八年二月に閉鎖し、レントゲン機材を州政府ジュタイ郡病院へ無償譲渡した。

歯科診療所は日系歯科医二名（女性、日本語可）が診察、治療にあたっている。現在一名が国費留学で日本研修中である。

（四）会館　四百名収容、冷房完備

（五）協会アパート　本館事務所に続き、二階に2LDKの二部屋がある。

（六）貸部屋

養鶏協会、旅行会社、青年に賃貸、また管理人宿舎として使用。

（七）運動場　カショエイラ・グランジ移住地内、日本人学校に隣接。

【西部アマゾン日伯協会年表】

一九八〇年度

五・一　西部アマゾン日伯協

六・十五　塩崎、南医師によ

七・十三　臨時総会

八・四　監事長召集による

八・二十四　ＪＩＣＡマナオス

巻受領

現在の日伯協会（1999年撮影　日伯協会所蔵）

慰霊碑（1988年撮影　日伯協会所蔵）

十二・二十六　ＪＩＣＡ所有財産（学生寮）の譲渡要請文書をマナオス支所長へ提出

一九八一年度

一・二十　マナオス共同販売所の譲渡処理についてＪＩＣＡマナオス支所長より文書受領

三・二十　塩崎医師によるボアビスタ方面の巡回診療実施

五・二十二　アマゾニア日伯援護協会の健康保険制度について加入案内書受領

六・十八　第二回通常総会

六・二十七　ミス・コロニア選出、Suely Nagury Nakai 入賞

七・十六　ミス・コロニア、ベレーンへ出張

八・二十九　ブラジル国士舘大学協会より柔道、剣道、空手等の実演公開

九・二十　娯楽大会

十・十　全アマゾン野球大会

十・十九　高拓生アマゾン入植五十年祭が二十一日まで三日間にわたりパリンチンス市で行われた

十一・三十　日本語学校生徒が大阪商船パナマ丸を見学

十二・二十三　紅白歌合戦開催

一九八二年度

一・十七　成人式

二・六　マナオス日語学級開校式
二・九　学生寮入居者募集を各地区へ連絡
四・四　第三回通常総会

☆一九八二年五月より一九八四年までの記録、資料は、雨漏りによる損害、また会館改修工事の際の紛失により残っていない。

一九八五年
一・三　サンパウロ東本願寺別院　芳野　悟氏来訪
四　ポルトベーリョ文化協会　富永氏来訪
十二　マナオス支部新年会
十五　成人式　成人者十五名の他、参加二十一名出席
十六　福井総領事、藤田領事歓送迎会
二十　アマゾニア日伯援護協会二十周年記念祭（ベレーン市）
二十八　サンパウロ日伯援護協会副会長来訪
二・四　マナオス支部老人会役員会
十五　日本語教師研修会
二十　野々垣哲夫総領事歓迎会
二十四　マナオス婦人会　第三回敬老慰安演芸会
三・二　総領事館主催の造花講習会
三　マナオス日本人学校学習発表会
四・二十一　タンクレード・ネーベス大統領死去
二十六　藤田総領事、主代ＪＩＣＡマナオス支所長、松下新支

所長の歓送迎会

五・十一　エスポジソン・フロー・アーチが日伯協会、農務局、EMATEL共催で開催される

六・十九　堀川正雄氏日伯協会事務局勤務に就任

七・十四　マナオス婦人会盆踊り大会

二十五　サンパウロ、スザノ市　真言宗金剛寺住職、山田明照氏他十七名来訪され、日伯慰霊碑に参拝される

二十八　第五回ソフトボール大会開催

八・七　東会長、病気療養のため、中田副会長が会長代行となる

十七　エフィジェニオ・サーレス移住地盆踊り大会

二十三　日伯グランドの登記手続き

二十八　マナオス慈善公演、民謡の祭典がアマゾナス劇場で開催される

九・一　高村正寿氏夫人、シクさんが死去され、日伯協会葬を執行

十・五　学生寮入居者との懇談会

十二　第五回西部アマゾン日伯協会主催野球大会、エフィジェニオ・サーレス球場で開催

十八　移住家族会の訪日団員として、岩田　清氏参加訪日

二十四　自由党政令指定都市議会議員海外研修団十三名来訪

十一・十　エフィジェニオ・サーレス支部、入植記念敬老大運動会

十五　ポルトベーリョ巡回診療

十二・三　東会長復職

八　カントリークラブの開所式、

マナオス支部で紅白歌合戦

十七　トレゼ・デ・セテンブロ移住地自治会長　須藤巌氏交通事故で死去との連絡受領

一九八六年

一・二　戸田建設により診療所の建設工事開始

十五　成人式

二・二十三　日本語教師合同研修会

三・二　第七回通常総会

三十一　医療基金診療所イナグラソン

四・一　医療基金診療所の開業

男子学生寮の改装工事開始

二十九　東　龍次氏、宍戸良雄氏の叙勲

天皇誕生祝賀会が総領事館で開催される

六・二十二　マナオス日伯診療所運営資金捻出バザー開催

七・一　ブラジル松下電器KK社長　山田利郎氏来訪され一万五千クルゼッタの寄付を受領する

九　国際女子研修センター小南理事長来訪

十　北伯野球大会出場選手一行ベレーンへ出発

十三　マナオス婦人会盆踊り大会

二十一　外航船員事業団役員来訪され診療所を視察

八・三　日伯協会主催　第六回ソフトボール大会

十一　事業団よりワープロの寄贈受領

十六　エフィジェニオ・サーレス移住地盆踊り大会
三十一　高村シクさんの一周忌法要を会館で執行
九・一　総領事館国費留学試験　日本語学校教室で実施
十・五　西部アマゾン日伯協会運動場にてマナオス日本人学校運動会
十二　日伯協会主催　第六回西部アマゾン野球大会をエフィジェニオ・サーレス球場で開催
十三　ＪＩＣＡ移住者子弟研修員選考会
十四　日本語学校校舎の落成式
十一・九　エフィジェニオ・サーレス移住地入植記念運動会
十二・十四　マナオス支部　紅白歌合戦

一九八七年
一・五　大沢武丸氏　日伯協会事務局勤務
十　堀川正雄氏　日伯協会事務局一身上の都合で退職
十五　成人式
二・二十六　海外開発青年　平野貞二氏　日本語教師として着任、三年間勤務
三・二十　サンパウロ浪曲協会の浪曲の夕べ開催
四・五　第八回通常総会
六・二十八　蒲田領事、河野領事の歓送迎会
二十九　駐伯小村大使管内視察に来訪され、慰霊碑に献花
七・二　小村大使の歓迎会を日伯協会で挙行
七　西部アマゾン日本人移住六十周年記念事業の打ち合わせ会

を開催

十二　マナオス盆踊り大会

十四　西部アマゾン日本人移住六十周年祭典委員会を設立

八・六　出田ひさえ講師による造花教室が毎週土曜日に開催される

十六　マナオス支部麻雀大会

西部アマゾン日本人移住六十周年祭典委員会

九・七　中村会計理事ＪＩＣＡ中堅技術向上研修に参加訪日（六ケ月の予定）

二十九　マナオス日本人学校建設について、マナオス日本文化振興会との懇談会開催

十・五　アセローラ栽培講習会を会館で開催

十一　マナオス支部　紅白歌合戦を会館で開催

十六　東海林善之進氏　第二十次海外移住家族会訪日団員として出発（約一ケ月）

三十一　第一回マナオス日本語弁論大会

十一・十三　遠隔地巡回診療　大貫医師、羽田理事帰着

二十一　野々垣総領事歓送会を会館で開催

二十二　一九八七年度慰霊祭開催

二十五　日本都道府県議会議長会一行来訪され、慰霊碑に参拝献花

二十八　造花教室終了式を会館で開催

二十九　ベラビスタ地区の巡回診療（大貫医師）

十二・五　日本語学校教師研修会、二日間にわたり開催

二十九　業務納め

一九八八年

一・四　業務始め

十五　成人式

十六　岡田昭男総領事着任

二・六　岡田総領事歓迎会

三・十三　日伯協会グランド完成運動会

二十五　マナオス日本文化振興会とのマナオス日本大学校敷地の土地賃貸契約

四・二　日本語教師研修会

十七　第九回通常総会

二十　会館の補修工事開始

五・二　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会

皇族歓迎委員会を設立

六・二十一　文仁親王殿下（秋篠宮殿下）歓迎会を会館で開催

二十二　文仁親王殿下慰霊碑に参拝献花をされる

七・一　学生寮閉鎖　改装のために寮生保護者に通知発送

十七　一九八八年度慰霊祭執行

二十九　日本語教師研修会

八・四　JICA移住者子弟研修員選考委員会

二十七　志賀山文化使節団来訪、鉱山技術学校で公演

九・三　造花教室開講　出田ひさえ講師により毎週土曜日に開講

二十一　先進地農業研修に高野富弥君、南伯方面に出発
　学生寮の改築工事開始
二十四　第二回マナオス日本語弁論大会
二十五　マナオス支部　娯楽大会
十・二　日本人学校運動会
三　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会
七　日本語教師合同研修会　二日間
二十　JICA マナオス支所長　安本　勉氏就任
二十三　日伯協会主催ゲートボール大会を日伯グランドで開催
JICA マナオス支所長　松下、安本両氏の歓送迎会を会館で開催
十一　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会
二十六　造花教室終了式
十二・九　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会
十一　マナオス支部　紅白歌合戦開催

一九八九年
一・四　業務始め
七　天皇陛下崩御される
十五　成人式
二十　総領事公邸で日本語学校教師との懇談会及び夕食会が開催される
二・十三　羽田会長「大喪の礼」参列のため訪日、出田会長代行に就

任

二十四　昭和天皇剣葬の遥拝式を総領事館と共催で開催

三・二十九　日伯協会会議室にて総領事館主催　折り紙教室開催（二日間）

四・二　第十回通常総会

十四　日本海外協会理事長　今村忠雄氏来訪

二十二　羽田会長帰着され復職

六・十五　岡　史朗歌手のマナオス公演　六十周年記念行事として開催

七・十七　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会

十九　日本語学校増築工事懇談会

八・十五　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典慶祝使節団

福島県知事代理他三名表敬に訪問

日系人協会　長崎常務理事来訪され歓迎会開催

十七　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会

二十　津軽三味線マナオス公演（セコミス講堂）

二十一　津軽三味線公演団員との歓迎会を日伯会館で開催

二十五　日本語学校増築起工式を執行

二十八　日本語学校増築工事開始

二十九　ＪＩＣＡ移住者子弟研修員選考委員会

九・十一　日本海外協会　今村理事長六十周年祭典の調査に来訪

三十　日本語学校教師合同研修会（二日間）

十・十五　日本語学校増築棟上式を挙行
　　六十周年祭のリーファ抽選会を会館で開催
十一・八　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会
　二十二　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典を二日にわたり開催
十二・十四　海外移住家族会連合会移住者子弟技術研修生の選考筆記試験実施
　十六　第二回六十周年祭のリーファ抽選会

一九九〇年
一・四　業務始め
　七　岡田総領事帰国歓送会
二・十　海外開発青年　平野貞二氏日本語学校教師として日伯協会に着任後三カ年の業務を終了、帰国のため送別会を開催
　二十四　カントリークラブとマナオス青年会共催で二十四日から二十七日の四日間にわたりカルナバルを会館で開催。
三・十　海外開発青年看護婦　村瀬ルリ子　日伯診療所勤務として着任（三カ年）
　二十三　海外法人医療基金より新谷次長来訪され日伯診療所運営委員と懇談
四・一　峰川領事着任歓迎会を開催
五・二十　西部アマゾン日本人移住六十周年記念祭典委員会
　三十一　大貫医師　日本研修を終わり帰国

六・三　マナオス支部主催娯楽大会

七・二　ＪＩＣＡ本部監査室室長他一名来訪　日本語学校を視察

十八　中村理事　日系人本邦招聘説明会出席のためベレーン出張

二十九　加藤総領事歓迎会を会館で開催

八・六　江藤会長の訪日に伴い出田第一副会長　会長代行に就任

九・十三　海外移住家族会連合会訪日団員として小田モニカさん訪日出発

十七　大貫医師、村瀬看護婦、荒井日伯診療所運営委員　ポルトベーリョ方面へ巡回診療に出発

二十　日伯協会創立十周年記念行事懇談会

二十九　マナオス日本語弁論大会

十・五　加藤総領事の招待による弁論大会慰労昼食会が公邸で開催される

十五　海外移住家族会訪日団員　小田モニカさん帰伯

十九　友田理事　外務省中堅指導者研修に参加のため訪日

二十七　西部アマゾン日伯協会創立十周年記念野球大会をエフジェニオ・サーレス球場で開催

十一・十七　西部アマゾン日伯協会創立十周年記念慰霊祭を開催、並びに式典を開催

賀陽大便ご夫妻の歓迎会を開催

十八　西部アマゾン日伯協会創立十周年記念文化祭、リーファ抽選会を開催

二十四　ＪＩＣＡ派遣日本語指導教師　星野和雄氏来訪

一九九一年

一・四　業務始め

十九　文化講演会開催

二十七　マナオス支部主催娯楽大会

十四　山田芙美江職員退職

二十一　ＪＩＣＡマナオス支所長　安本　勉氏の送別会

二十四　第十二回通常総会

三十一　JICA マナオス支所、本日をもって閉鎖される

四・十三　ＪＩＣＡ派遣　星野日本語指導教師と日本語教師一同懇談会

十五　徳田マリア・イベチさん事務所勤務

二十九　日本人学校生徒　日伯診療所で健康診断を実施

五・八　海外法人医療基金　長宗事務局長、千葉労災病院副院長加藤医学博士来訪され診療所を視察される。併せて、移住地を視察訪問

十　エフィジェニオ・サーレス地区の巡回診療

十三　ベラビスタ地区の巡回診療

二十一　国際交流基金　日本語学習成績優秀者本邦研修に元木セルジオ受講生が決定

六・二十三　マナオス老人会の懇談会

七・四　ソニー・ダ・アマゾニア会社よりテレビ二十九インチの

寄贈を受領

八　　パリンチンス日伯文化協会会長　猪股　正氏来訪され懇談

十四　マナオス婦人会の盆踊り大会が会館で挙行される

二十八　マナオス支部主催ゲートボール大会を武田グランドで開催

八・二　長崎県雲仙普賢岳大火砕流の援助募金を送金

十八　一九九一年度慰霊祭を会館で執行

二十八　総領事館の国費留学生選考試験を日本語学校教室で実施

三十一　第四回マナオス日本語弁論大会

九・十六　汎アマゾニア日伯交流センター落成式に、江藤会長と出田副会長出席のため、ベレーンへ出張

十九　セイコー・ダ・アマゾニア会社より、会社創立十周年記念としてコンピューターの寄贈を受領する

二十四　万国博覧会基金へ補助金交付要望書を総領事館へ提出

十・九　海外移住家族会連合会　第二十四次訪日団員古賀邦次氏帰伯の挨拶に来訪

十三　老人クラブ創立総会の開催及び慰問浪曲公演の開催

二十　高拓生入植六十周年ミサ並びに記念式典が会館で開催される。

二十六　ＪＩＣＡ派遣　星野日本語指導教師　来所され授業参観と研修会を開催

十一・六　老人クラブ第一回役員会開催

十二・二十二　総領事館、日伯協会、老人クラブ共催による天皇誕生祝賀会開催

室谷貞二氏（エフィジェニオ・サーレス）へ勲章、勲記の伝達式

老人クラブ忘年会を開催

二十八　業務納め

一九九二年

一・六　業務始め

十　加藤総領事招待による日伯協会理事との夕食懇談会

十九　成人式

二十二　マナオス青年会幹部十四名、加藤総領事他館員及び日伯協会理事との懇談会

二・十七　大沢事務局長病気のため三月末日まで休職

三・一　第十三回通常総会

二十　パナソニック社よりレーザージスコの寄贈

二十三　日系団体代表者会議参加のため、出田会長ベレーンへ出張

四・一　ＪＩＣＡベレーン事務所長　前川洋右氏帰国の挨拶に来訪

九　村瀬看護婦メキシコへ研修出発　二十八日に帰着

二十八　日伯診療所内部の改装工事

五・二十三　ベラビスタ地区の巡回診療

三十　日本語学校教師研修会

六・二十三　丸同様より図書二百六冊寄贈され、図書室へ収納

二十五　ＪＩＣＡベレーン事務所長　森下朝充氏　所長就任の挨拶に来訪

三十　近藤副領事（総領事館日伯協会担当）送別会を日伯協会理事会、日伯診療所運営委員会で開催

七・十　ＪＩＣＡ派遣シニア専門家　寺山テル子氏着任、二カ年の滞在で日本語指導に当たる

八・十一　万国博覧会基金より補助金交付決定通知受領、会館へ大型冷房装置の設置

十五　ＪＩＣＡ派遣　星野日本語指導教師　来訪され教師合同研修会開催

二十四　会館改装工事開始

二十七　海外移住家族会訪日団員に森　源吾氏の決定通知受領

九・八　移住者子弟技術研修員選考筆記試験を実施

二十　峰川領事送別会、岩間領事、秋岡副領事歓迎会を会館で開催

二十三　日本語生徒本邦研修員の選考、面接と筆記試験を実施

十・十八　マナオス支部、カントリークラブ共催　第一回運動会

二十六　大沢事務局長　心臓精密検査のため二ケ月の休職となる

十一・二一　村角　泰駐ブラジル大使ご夫妻来訪され慰霊碑へ参拝献花される

三　村角大使ご夫妻の歓迎会を会館で開催

七　エフイジェニオ・サーレス入植三十四周年記念式典並びに敬老会が開催される

十　海外移住家族会連合会　会長　田中龍夫氏より日伯協会への表彰状を訪日団員森源吾氏に託送され受領

十三　会館用大型冷房機材をヒタチ・アール・フリオ会社に発注

十四　野沢幸助氏（エフィジェニオ・サーレス）叙勲伝達式が日伯会館で挙行される

第五回マナオス日本語弁論大会

浜田副領事の送別会を都食堂で開催

十七　会館内の冷房装置の基礎工事開始

十八　日本道路緑化協会南米調査団一行四十二名来訪

二十二　査察担当大使　恩田　宗氏他来訪

十二・五　日伯協会主催　日本語検定試験実施

一九九三年

一・一　日伯協会会館で新年名刺交換会を開催

四　業務始め

十七　平成五年度（一九九三年）成人式を挙行

二十五　日伯協会会議室にて総領事館主催の生け花教室開講

三十一　慰霊祭開催

会館内装工事完成視いを挙行

二・九　村瀬看護婦　ＪＩＣＡ開発青年三カ年の業務を終了、帰国のため送別会開催

十一　神内良一国際福祉事務所長ご夫妻他一行サンパウロよりベレーンを経由マナオス観光に来訪され日伯協会で懇談会開催

十二　神内良一氏他一行の歓迎会を会館で挙行、日伯協会施設の増改築資金の援助を確約されてアマゾン河観光を楽しまれ帰国される

三・七　高村正寿氏日本帰国のために送別会を会館で開催
開発青年　村瀬ルリ子さん任期を終了し本日帰国

九　出田会長　開発青年受入のためＪＩＣＡベレーンへ出張

十　開発青年　沢田八重子さん出田会長と同道で着任、日伯診療所勤務となる

十四　第十四回通常総会

四・八　平野　稔総領事着任マナオス空港へ出迎える

十八　平野総領事並びに後藤領事の歓迎会を会館で開催

十九　マナオス地区巡回診療

二十二　藤江保子アマゾニア援護協会勤務のＪＩＣＡ派遣シニア専門家（福祉士）来訪され、市内及び移住地の高齢者を訪問される
五月二十六日まで滞在

二十四　ベラビスタ地区巡回診療

六・十六　汎アマゾニア日伯協会　堤事務局長来訪

二十六　ＪＩＣＡベレーン森下所長、須藤所員来訪されＪＩＣＡ研修員近況報告会を開催

七・十八　マナオス支部の盆踊り大会をカントリークラブで開催

八・二　ブラジル老人クラブ連合会相談役　三橋誠一氏来訪

十六　総領事館　国費留学生選考試験を日本語学校教室で実施

二十八　沢田看護婦によるベラビスタ地区の健康相談

二十九　マナオス支部ソフトボール大会（武田グランド）開催

九・二　神内基金による会館増改築工事着工地鎮祭を執行
十一　第六回マナオス日本語弁論大会開催
十・二　総領事館より大原友信氏に支給の保護謝金、第二回目申請を受領、六ケ月間毎月本人に支給する
十一・一　日伯協会事務職員として　寺野カツミさん勤務
十四　日本県議会議長会来訪され慰霊碑に参拝
十二・十一　マナオス日本大学校開校記念式典を学校講堂で開催
十二　日伯協会、日系商工会、日本文化振興会の共催による忘年会を会館で開催
十三　パリンチンス日系人調査のため、出田会長、大沢事務局長、寺山シニア専門家、沢田看護婦が同地へ出張
十八　沢田看護婦　年末年始の休暇を利用し国内視察旅行に出発
二十　出田会長、中村理事ベレーンへ出張

一九九四年
一・五　業務始め
十五　成人式、慰霊祭、老人会総会等が開催される
十九　ＪＩＣＡブラジル事務所長　鈴木　功氏、管内視察に来訪
二・三　中村理事　弓場バレー団受入についてサンパウロへ出張
五　神内施設の竣工式を会館で挙行
弓場バレー団のマナオス公演アマゾナス劇場で開催される
十四　海外移住家族会連合会より西脇祐平氏　研修員の実態調査に来訪

三・八　マナオス婦人会より什器備品の日伯協会へ移管、寄贈品目録を受領

二十四　出田会長　サンパウロで開催の日系団体代表者会議に出席のため出張

四・三　第十五回通常総会

十　研修生懇談会

五・十一　日伯修好百周年記念事業運営委員会の発足

十二　アマゾニア援護協会の藤江福祉士と太田援護部長来訪

二十　総領事公邸で寺山シニア専門家の送別会が開催される

二十四　総領事公邸で岡　留久氏の叙勲伝達式が開催される

二十八　エフィジェニオ・サーレス移住地の巡回診察

大貫医師、白柳女医、沢田看護婦による

三十一　総領事公邸で国費留学研修生OB会結成準備会が開催される

六・十二　マナオス日本人学校の運動会が日伯運動場にて行われる

十八　日伯協会日本語学校の学習発表会

二十三　日伯修好百周年記念事業運営委員会開催

二十五　創価学会環境問題研究所開所式に三木副会長と錦戸理事が出席

ＪＩＣＡ派遣シニア専門家　寺山テル子氏の送別会開催

七・二一　立川談志一行四名とサンパウロ　ガルポンブエノ尾西貞夫氏同道で来訪

三　立川談志の公演を会館で開催、午前中はアマゾン河の観

光を楽しまれた

十五　日伯修好百周年記念事業運営委員会

二十二　ＪＩＣＡ大能ベレーン支所長来訪
アクレ州リオブランコ市、ロンドニア州ポルトベーリョ市、アリケメス市、ジパラナ市の日系人調査に三木副会長と大沢事務局長一週間の予定で出張

八・十三　パリンチンスの日系人調査に松浦理事と松下理事が出張

十八　海外移住家族会訪日団員　猪股　正氏に決定通知受領、九月初めに訪日

二十　エフィジェニオ・サーレス健康相談（沢田看護婦）

二十二　ＪＩＣＡ主催高校生作文コンクール入賞者四名
ＪＩＣＡ川端職員に引率され来訪、市内観光、移住地訪問される
マナオス地区健康相談（沢田看護婦）

二十八　マナオス支部ソフトボール大会（武田グランド）

九・二　三木副会長、中村理事、沢田看護婦　ロライマ州ボアビスタ市の日系人調査に出張、九月八日帰着

十八　通産大臣表彰式に列席のため出田会長訪日、帰伯までの期間三木副会長代行

十・一　第七回日本語弁論大会

十六　マナオス支部主催運動会

二十七　出田会長帰着

十一・十　日伯修好百周年記念事業運営委員会

十三　エフィジェニオ・サーレス入植三十六周年記念式典開催
十二・二十一　イピシューナ郡行救援物資の譲渡式（百周年委貞会）

一九九五年

一・一　新年視賀会を会館で挙行
三　協会事務所に盗賊侵入し、電話、ファックス、ワープロ他盗難に遭う。被害額約一万ドルになる
六　野々垣元マナオス総領事夫妻来訪され、有志により歓迎会を会議室で開催
八　高拓会会合を会議室で開催
十五　成人式
十七　兵庫県南部、淡路、神戸地方に地震発生被害甚大のニュースの発表
十九　出田会長　国際交流基金の全伯日本語スピーチコンテスト開催に関する連絡会議に参加出席の為サンパウロに出発
二・十二「がんばれコーベ」チャリティーレストランを西部アマゾン日伯協会日本語学校生徒並びに教師一同により開催、利益金を救済委員会へ納入した
二十二　日系医師との日伯診療所運営に関する競技会を開催
三・二　日伯修好百周年記念事業運営委員会
六　JICA 派遣中元指導教師来訪、錦戸教育担当理事同道でアクレ州リオブランコ市の教育事情調査に出張
十九　第十六回通常総会

二十八　日伯修好百周年記念事業運営委員会

五・十九　浅井外次氏の叙勲伝達式が総領事公邸で開催される

二十五　岩間領事、秋岡副領事帰国、野々村副領事着任の歓送迎会を会館で開催

二十八　日本語教師ブロック研修会を会議室で開催

六・五　安全対策連絡協議会が総領事公邸で開催される

十一　第十五回マナオス日本人学校の運動会

十九　辻田三千子さん事務局勤務となる

二十三　血液検査器の修理終了　サンパウロより到着

二十六　大沢事務局長退職に伴い送別会を役職員で開催

七・十七　佐藤エリカ事務局勤務となる

八・五　巡回診療

十二　エフィジェニオ・サーレス入植三十七同年記念盆踊り大会

十三　辻田職員ベレーン日伯援護協会厚生ホームへ一週間の予定で研修のため出発

二十三　大阪、京都外国語大学生三十四名来訪、診療所へ医療品を寄贈

八・二十七　マナオス支部のソフトボール大会

二十九　辻田職員ＪＩＣＡ中堅技術向上研修（福祉関係）三ケ月の予定で訪日

九・四　「振り返れば百年ブラジルと日本」パネル展を会館で開催

八　総理府派遣訪伯団大学生十一名と社会人三名（団長、副団長、通訳）来訪、懇談会を会議室で開催

十二　ブラジル日本都道府県入会連合会「移民の故郷巡り」一行八十七名来訪され、歓迎会を会館で開催

十五　総領事館主催現代ポスター展が会館で開催される
国際協力事業団ブラジル事務所長　松本宣彦氏管内視察に来訪

九・二十三　大賀ソニー会長の演奏会がアマゾナス劇場で開催される

十・八　釣田領事着任歓迎会

十二　医療基金より辻専務理事来訪、一週間の滞在

二十八　第八回日本語弁論大会

十一・五　百周年記念事業始まる。盆踊り、慰霊祭、記念碑除幕式、文化祭

十五　エフィジェニオ・サーレス入植三十七周年記念ソフトボール大会と記念式典

十七　みやらび太鼓のマナオス公演

二十四　出田　務氏の叙勲伝達式が総領事公邸で開催される

十二・二　日本人学校学習発表会が会館で開催される

十七　出田氏の叙勲、神田久彦氏の外務大臣表彰祝賀会を会館で開催

二十二　業務納め　休暇に入り一九九五年度終了

一九九六年

一・五　新年視賀会

十四　成人式

十九　沢田看護婦三カ年の業務終了

二・五　沢田看護婦帰国送別会

三・六　開発青年　松村朋枝着任

九　平野総領事帰国送別会

十　第十七回通常総会

四・一　大貫医師　日伯診療所運営

六　木場克子　日本語教師短期研修、木場千恵美JICA上級研修訪日

八　中村総領事夫妻を空港に出迎える

二十　中村弥寿平前理事訪日に伴い夕食懇親会を開催

二十三　中村総領事着任歓迎会開催

五・二十二　江藤てらし氏の勲章伝達式が総領事公邸で開催される

六・四　モト・ホンダ社バイク二百万台生産達成記念式典。会長出席。

六　海外日本語学校成績優秀者　アルベルタ・モランゴ訪日研修

十　ＪＩＣＡ日本語研修に錦戸　健理事訪日出発

老人ホームの建設に着工

七・十六　日本週間運営委員会

九・九　「ハル」音楽グループ表敬訪問

十一　「ハル」親善公演を会館で開催

十五　東洋大学藤木三千人教授、日系人調査に表敬訪問

二十四　モト・ホンダ社専用船ピラルク二世号進水記念航海船上

パーティーに関係者招待
二十七　移住家族会訪日団員として森進一郎夫妻訪日
二十八　第九回日本語弁論大会
十・二十六　日本語教師合同研修会
十一・二一　第二回全伯日本語スピーチコンテストがリオデジャネイロで開催され、梅津教師引率で日系、非日系各一名参加
九　憩いの園落成式
十二・七　黄熱病予防接種を日伯協会にて行う
十五　憩いの園開園、施設紹介招待　中村総領事他、企業代表
二十一　白柳クララ女医、日本研修を終わり帰伯
二十四　一九九六年度業務納め
二十九　忘年会を憩いの園で開催

一九九七年
一・四　JICA 医師再研修に大貫医師訪日
五　新年会
十二　成人式
三十一　日伯管理人シュウイチロウ・ナカムラ退職し、マルコス・アントニオ採用
二・十六　寺野義勝氏夫妻　憩いの園管理人として入居
二十六　マナオス市役所へ ISS（Imposto Sobre Serviso）の免税申請

三・二十　ベラビスタ自治会より日本語成人講座開講の要請
三十　第十八回通常総会
三十一　ＪＩＣＡ上級研修員　矢野幸重、大貫医師帰伯
四・一　海外移住家族会移住者子弟研修員　酒井勇樹帰伯
十七　ショープラ工場のイナグラソンに日伯協会理事出席
五・二十二　ＪＩＣＡベレーン支所長　鈴木達男氏、大西所貞来訪
三十一　天皇、皇后両陛下ベレーン訪問、歓迎会に出田会長出席
六・一　第二回アマゾン俳句大会が日伯会館で開催される
七・九　警備会社と契約　十日より警備員派遣される
十四　ソニー片岡代表よりカラオケ室に小型スピーカー四台寄贈受領
八・二　七十周年祭典委員会開催
九・三　出田会長移住七十周年祭典準備のため十四日の予定で訪日、三木副会長が代行
十　椎茸栽培講習会　三分一講師
二十七　第十回弁論大会並びに第一回お話し大会
二十八　マナオス婦人会「高齢者感謝の日」
二十九　ＪＩＣＡ一般技術員　室谷美帆帰伯
十・八　出田会長帰伯。
二十一　日本海外協会理事長　今村忠雄氏の七十周年日本側委員を委嘱する
二十五　第三回全伯日本語スピーチコンテスト錦戸理事引率で岩本さとみとエロイ・ジュニオールがクリチーバに出張

三十　寺野　憩いの園管理人退職

十一・九　「ハル」音楽コンサートをテアトロアマゾナスで開催

二十七　日本海外協会　今村理事長来訪　憩いの園宿泊

十二・四　天皇誕生視賀会

二十　日伯協会役職員教師の忘年会　憩いの園

二十四　一九九七年度業務納め

一九九八年

一・四　新年会

十一　成人式

十二　中村弥寿平氏目伯職員として勤務

二十五　憩いの園で老人会の会合四十二名参加

二・十五　塚田千裕大使夫妻を空港で迎え

十六　塚田大使歓迎会

三・十五　ＪＩＣＡ上級技術研修員　木場千恵美二カ年の研修終了帰伯

四・二　中村総領事夫妻歓送会

二十五　小林健一総領事歓迎会

六・一　ラジオ体操一行十一名来訪　憩いの園で老人会会員と懇親会開催

十七　七十周年祭典委員会

二十九　七十年誌編纂委員会

七・二十三　日系社会シニアボランティア西野義男氏着任

三十　熊本県副知事一行マナオス来訪

八・二十三　「こだま」テアトロアマゾナスにてマナオス公演
外務大臣表彰　アクレ小池　修氏、トレゼ・デ・セテンブロ山口宣行
氏、ベラビスタ友田ちよの氏、エフィジェニオ・サーレス佐藤ちよ氏
九・十二　ベラビスタ四十五周年入植記念祭
十九　第十一回日本語弁論大会　第二回お話し大会
十・九　Sociedade Bras-de Estado Municipalistaより、日
本人移住九十周年の表彰額を受領
十一・七　エフィジェニオ・サーレス四十周年入植記念祭
八　日伯慰霊祭　日伯盆踊り大会
第四回日本語スピーチコンテスト　ブラジリア大会　半田講師と
二名出発
十二・十八　リオネグロ横断競泳大会
二十四　一九九八年度業務納め
一九九九年度
一・三　日伯協会新年会
十　成人式
二・一　ボアビスタ方面巡回診療実施
二十七　JICA開発青年　松村朋枝、任期終了帰国
二十八　第二十回通常総会
三・三　在マナオス総領事公邸の移転通知受領
四・十三　JICA日系社会青年ボランティア　中野敦彦着任
十九　武田商会より会館舞台幕寄贈
二十五　第一回敬老慰安会

六・七　関西大学探検部学生三名がアマゾン事前調査に来訪
十五　五十年以上一度も帰国したことのない日本人への第三十二次海外日系人訪日団員募集要項受領
十八　海外日系人協会賛助会員申込書と年会費を送金
七・二十二　旧診療所のレントゲン機材一式をジュタイ郡政府診療所へ無償譲渡手続き開始
二十五　慰霊祭、日伯盆踊り大会
八・十二　ＪＩＣＡ派遣農業専門家、近藤四郎氏来訪、サーレス、ベラビスタ移住地訪問
十六　宗田千恵子一行三名、マナオス公演のため来訪、十八日に日伯会館で公演
九・十八　第十三回日本語弁論大会、第三回お話し大会をＳＥＮＡＩ講堂で開催
十・二　二日間にわたり、APAE（身障者の親と支援する友の会）バザー開催
十　マナオスカントリークラブ、日伯協会共催運動会
十一・六　日伯会館で西部アマゾン移住七十周年記念式典を挙行、ＳＥＮＡＩ講堂で第五回全伯スピーチコンテストを開催。
七　式典出席来賓とスピーチコンテスト参加者を招待したアマゾンクルーズを実施、創舞流舞踊と　歌手菅原やすのりマナオス公演がアマゾナス劇場で開催される

【日本人叙勲者一覧】

在マナオス総領事館（一九九九年十一月二十三日現在）

（年　度）（氏　名）（勲　等）（受章時年齢）（在伯年数）（功績、備考）

昭和四十一年秋　尾山良太　勲五等瑞宝章　八十四　三十三　ジュートの新種発見・普及。死亡。三十三年、ブラジル移住五十周年「黄綬褒章」。

1999年11月6日　日伯会館にて西部アマゾン移住70周年記念式典が挙行される

昭和四十四年秋　大石小作　勲五等瑞宝章　八十　三十九　グァラナ栽培。死亡。

昭和四十五年春　高村正寿　勲五等瑞宝章　六十八　三十七　ジュート及び戦後移住導入。帰国。

昭和四十八年春　中内義正　勲六等単光旭日章　六十九　四十　ジュート死後叙勲。

昭和五十年秋　岡田秀臣　勲六等瑞宝章　七十九　四十五　医療援護。死亡。

中島敏三　勲六等瑞宝章　六十四　四十四　邦人援護死後叙勲。

昭和五十一年春　杉山義見　勲六等瑞宝章　七十三　四十五　ジュート及びピメンタ。死亡。

昭和五十二年春　内山健吉　勲六等瑞宝章　八十八　四十八　ジュート及び邦人援護。死亡。

昭和五十三年春　松野浩生　勲六等単光旭日章　五十九　二十四　営農普及、邦人援護。死亡。ブラジル移住七十周年。

矢野健一　勲六等単光旭日章　六十四　二十四　営農普及、邦人援護。ブラジル移住七十周年。

藤田　猛　勲六等単光旭日章　六十三　四十五　邦人援護、日伯交流。死亡。ブラジル移住七十周年。

錦戸理平　勲六等単光旭日章　六十七　二十　組合関係。ブラジル移住七十周年。

昭和五十七年春　高野連弥　勲六等単光旭日章　七十一　二十二　邦

人援護。死亡。

昭和五十七年秋　辻　福重　勲六等単光旭日章　六十九　二十八　営農普及、邦人援護。

岡部鶴吉　勲六等単光旭日章　七十　二十八　営農普及、邦人援護。死亡。

昭和五十八年春　佐藤義一　勲六等単光旭日章　七十一　二十五　農業協同組合。死亡。

昭和五十九年秋　金子力太　勲六等単光旭日章　八十　二十九　邦人援護死亡。

南　政　勲六等単光旭日章　七十五　五十二　邦人援護死亡。

昭和六十一年春　東　龍次　勲五等瑞宝章　七十一　二十七　農業協同組合、邦人援護。死亡。

宍戸良雄　勲六等単光旭日章　八十五　三十二　農業改善、邦人援護。死亡。

昭和六十一年秋　古野　功　勲六等瑞宝章　九十一　六十六　農業改善、邦人援護。死亡。ブラジル移住70周年「外務大臣表彰」。

昭和六十二年春　宮本竹一　勲六等単光旭日章　七十一　二十八　組合関係、邦人援護。死亡。

昭和六十三年春　高木正敏　勲六等単光旭日章　七十　三十四　自治会関係。

川上顕二　勲六等単光旭日章　七十　五十二　ジュート、自治会組織結成。死亡。

平成二年秋　羽田重吉　勲六等単光旭日章　七十一　三十七　自治会組織結成、邦人援護。

岩本康治　勲六等瑞宝章　七十　二十九　組合関係。

平成三年秋　室谷貞二　勲六等瑞宝章　七十　三十一　組合関係。死亡。

平成四年秋　野澤幸助　勲六等瑞宝章　七十四　三十八　営農普及、組合関係。

平成六年春　岡　留久　勲六等単光旭日章　七十二　四十　組合関係、自治会関係。

平成七年春　浅井外次　勲六等単光旭日章　七十　三十五　組合関係。

平成七年秋　出田　務　勲五等双光旭日章　七十　四十一　日系団体関係。死亡。

平成八年春　江藤てらし　勲六等単光旭日章　七十一　三十人　組合関係、自治会関係。

【西部アマゾン日系人調査協力者氏名】

1999年初めより1999年11月にかけて西部アマゾン在住日系人調査を行い、以下の方々に調査票を提出していただきました。

アマゾナス州　マナオス

Tamiko Miyazaki　宮崎泰美子 1sei

Teruo Murakami　村上　輝夫 1sei

Youichi Takeda　武田　要一 1sei

Kusuo Kitagawa　北川九州男 1sei

Ryuko Kohashi　孝橋　龍虎 1sei

Nobuji Matsuura　松浦　信治 1sei

Yoshiji Maruyama 丸山　芳次 1sei

Hajime Hattori　服部　　元 2sei

Michiko Tsujita　辻田三千子 1sei

Sadao Sadahiro　貞弘　貞男 1sei

Hiroshi Matsushita　松下　　博 1sei

Kenya Konasugawa　小茄子川健家 1sei

Naoki Hashimoto　橋本　直樹 1sei

Kiyoshi Miki　三木　清司 2sei

Katsumi Muroya　室谷　克己 1sei

Takayoshi Miki　三木　孝美 1sei

Kenjiro Nishi　西　健二郎 1sei

Masao Nagaoka　長岡　正雄 1sei

Maria Okada　　2sei

Shiro Yamazaki　山崎　四郎 1sei

Hachiro Sato　佐藤　八郎 1sei

Takayasu Yoshida　吉田　孝安 1sei

Hideyasu Shishido　宍戸　秀安 1sei

Hiroshi Nakatani　中谷　裕 1sei

Nobuyoshi Tsuji 辻 信義 1sei

Kazuma Nakazaki 中崎 一馬 1sei

Rikio Ishizawa 石沢 力雄 1sei

Seiki Ideta 出田 世紀 1sei

Yoji Ideta 出田 洋次 1sei

Isao Sakamoto 坂本五三男 1sei

Susumu Shibuya 渋谷 奨 1sei

Masatoshi Takagi 高木 正敏 1sei

Shoji Hashimoto 橋本 捷治 1sei

Misao Fujimoto 藤本 操 1sei

Emiko Yasui 安井恵美子 1sei

Sukeo Sato 佐藤 助夫 1sei

Tadataka Otonari 音成 忠孝 1sei

Yukisachi Nagata 永田 行幸 1sei

Yoshiteru Yamaguchi 山口 芳輝 1sei

Hiroshi Nishiki 西木 広司 1sei

Shigeo Nozawa 野沢 重夫 1sei

Masahiko Watanabe 渡辺 正彦 1sei

Osamu Fujii 藤井 治 1sei

Hidenobu Yano 矢野 秀信 1sei

Takafusa Matsuzaki 松崎 孝房 1sei

Shigeichi Hazaoka 羽座岡 繁一 1sei

Masaru Kubo 久保 勝 1sei

Kazuo Oka　岡　　一雄 1sei

Hideyuki Nozawa　野沢　英幸 1sei

Hiroyuki Higashi　東　　博之 1sei

Yoshiharu Tsuji　辻　　佳治 1sei

Yukio Hashiguchi　橋口　幸生 1sei

Takeshi Okamura　岡村　　猛 1sei

Hatsuo Kimura　木村　始生 1sei

Mitsue Osawa　大沢みつえ 1sei

Koremoto Murayama　村山　惟元 1sei

Hakuei Murayama　村山　伯英 2sei

Norimoto Murayama　村山　伯元 2sei

Senchiro Owada　大和田誠一郎 1sei

Hayao Shibuya　渋谷　捷男　1sei

Takemaru Osawa　大沢　武丸 1ei

Ken Nishikido　錦戸　　健 1sei

Jirson Handa　　2sei

Toshiyuki Kawada　川田　敏之 1sei

Pedro Hideo Ashitani　　2sei

Manabu Shibuya　渋谷　　学　1sei

Koyo Takeda　武田　興洋　1sei

Chiaki Takeda　武田　千昭　1sei

Yasumi Takeda　武田　靖視 1sei

Kazuhiro Takeda　武田　和洋 1sei

Seiichi Nozawa　野沢　清一 1sei

Mitsugu Kiba　木庭　貢 1sei

Shizuko Kashimura　樫村　静子 1sei

Hiroshi Koguchi　小口ひろし 2sei

Shoshi Otani　大谷　尚視 1sei

Toshio Sasahara　笹原　俊雄 1sei

Koichi Koba　木場　孝一 1sei

Hiroya Takano　高野　裕弥 1sei

Toshiko Inoue　井上　俊子 1sei

Kazuteru Noguchi　野口　和照 1sei

Toshiro Takano　高野　俊郎 2sei

Masuyo Sato　佐藤ますよ 1sei

Masahide Kurosawa　黒沢　昌英 1sei

Sadaji Yonekura　米倉　定治 1sei

Yuji Ishii　石井　雄二 1sei

Jukichi Hada　羽田　重吉 1sei

Felix Ossamu Hada　　2sei

Takuya Tsukuda　佃　拓也 1sei

Shiro Fujii　藤井　志朗 1sei

Kazunori Noguchi　野口　和則 1sei

Kuniko Yamaguchi　山口久仁子 1sei

Raimunda Ikuno Brito　　2sei

Tomoyuki Nakata　中田　智之 1sei

Minoru Iwata 岩田　実 1sei

Fusako Shiroyanagi 白柳　房子 1sei

Takashi Yoshida 吉田　貴志 1sei

Choko Yanai 矢内　長幸 1sei

Chotoku Yanai 矢内　長徳 1sei

Osvaldo Kenjiro Sassaki　2sei

Kiyomi Okubo Mota　2sei

Matsuyoshi Hanada 花田　松義 1sei

Tatsuro Ijichi 伊地知龍郎 2sei

Ivo Kiyoshi Iegami　2sei

Arthur Seiji Onuki　2sei

Seiichi Sakai 酒井　清一 1sei

Ken Sakai 酒井　健 1sei

Kanji Sakai 酒井　完治 1sei

Eizo Sato 佐藤　栄三 1sei

Akira Yamashita 山下　明 1esi

Isao Yamada 山田　勇夫 1sei

Hisahiko Kanda 神田　久彦 1sei

Yoshiharu Ito　伊藤　吉春 1sei

Takahiro Komorita　小森田隆博 1sei

Massamitsu Masuda　2sei

Pedro Noboru Hiraishi　2sei

Mari Otsuka de Lima　2sei

Sumiko Okada　岡田すみ子 1sei

Hisashi Hayashida　林田　久 1sei

Yoichi Otsuka　大塚　洋一 1sei

Osmar Kazuo Kabashima　　2sei

Roberto K. Inamasu　　2sei

Roberto Teisuke Maruoka　2sei

Yoji Aoki　青木　陽次 1sei

Hamilton Nakano　　2sei

Some Kakimoto　柿本　ソメ 1sei

Luis Motoya Nishiwaki　2sei

Takuya Kawada 川田　拓哉 1sei

Katsuo Ito　伊藤　勝男 1sei

Mie Maeda 前田　〃ヒ 1sei

Hagime Takayama　高山　一 2sei

Yoshikatsu Terano　寺野　義勝 1sei

Paulo Outi　　2sei

Tomoaki Takeno　竹野　友章 2sei

Sumiko Higashi Claro　　2sei

Shuji Yamauchi　山内　修一 1sei

Paulo Youiti Nomura　　2sei

Bernardo Yoshihiko Nishiwaki　2sei

Jorge Kenichi Naito　2sei

Amazonia Alfaia Esashika　2sei

Deusdete Hada　2sei

Yoshidi Alan Yokota　2sei

Kenji Miki　㈱木　健児　2sei

Yumiko Nakayama　中山裕美子　2sei

Helio Katsuhiro Harano　2sei

Nonko Mori　1sei

Celso Kiyoku　2sei

Hideaki Tashiro　2sei

Katsuhito Takita　2sei

Lucas Masaharu Nozawa　野沢　正晴　2sei

Xisto Tsuji　2sei

Hitoshi Otani　大谷　等　1sei

Kensyu Otani　大谷　賢収　1sei

Hisashi Umetsu　梅津　久　1sei

Satomi Murayama Chaar　2sei

Yoshimitsu Ikuno　生野　芳光　1sei

Rei Shibuya　渋谷　励　2sei

Nobuo Miki　㈱木　信夫　2sei

Tamiko Suzuki　鈴木多美子　1sei

Kyouhei Hada　羽田　恭平　1sei

Rikio Ishizawa　石沢　力男　1sei

Kunihiro Kakizoe　垣添　邦広　1sei

Ivone Assako Murayama　2sei

Kunitaka Ideta　出田　邦隆　1sei

Antonio Adachi Iwata　2sei

Tereza Iwata　2sei

Hiromi Iwata　　2sei

Francisco Jose Iwata　　2sei

Maria Jose Ramos Iwata　　2sei

Aureho Ramos Iwata　　2sei

Jose Maria Ramos Iwata　2sei

Junice Vasconcelos Iwayta　　2sei

Bento Antonildo Pereira Iwata　3sei

Yoshihiro Hashimoto　橋本　嘉博 1sei

Yasutoshi Nabeshima　鍋島　保寿 1sei

Tadashi Nabeshima　鍋島　　正 1sei

Shizuko Kashimura　樫村　静子 1sei

Takuo Yamamoto　山本　拓男 1sei

Mamoru Jmnai　陣内　　衛 1sei

アマゾナス州　エフイジェニオ・サーレス移住地

Yoshihiro Miki　三木　祥弘 1sei

Takano Kinya　高野　欣也 1sei

Tomiya Takano　高野　富弥 2sei

Hideo Ishizawa　石沢　秀雄 1sei

Kouichi Eto 江藤 幸一 1sei

Hayao Iwamoto 岩本 逸男 1sei

heisuke Matsukuma 松隈 平介 1sei

Kayoko Iimori 飯盛嘉代子 1sei

Norio Shimizu 清水 矩夫 1sei

Nobuyuki Yano 矢野 信幸 1sei

Takao Ito 伊藤 孝男 1sei

Norikatsu Miyamoto 宮本 倫克 1sei

Nobuyuki Higashi 東 信之 1sei

Minoru Yamagata 山形 稔 1sei

Goto Sato 佐藤 五郎 2sei

Teruyuki Matsugu 真次 照幸 1sei

Hideaki Eto 江藤 英明 1sei

Shigeru Eto 江藤 茂 2sei

Ikuya Eto 江藤 育也 1sei

Masao Asai 浅井 正男 1sei

Itsuo Koba 木場 逸雄 1sei

Fujiki Fujii 藤井 藤記 1sei

Takashi Nozawa 野沢 孝志 1sei

Mutsuo Sato 佐藤陸奥雄 1sei

Etsuji Satono 里野 悦次 1sei

Akira Sakamoto 坂本 明 1sei

Katsumi Muroya 室谷 克巳 1sei

Masanori Tahara 多原　正則 1sei

Norio Muroya 室谷　捷男 1sei

Zentaro Sakamoto 坂本善太郎 1sei

Mitsuyoshi Kamezaki 亀崎　満義 1sei

Fumiaki Matsugu 真次　文明 1sei

アマゾナス州　ベラビスタ移住地

Tsuneo Kaneko 金子恒雄 1sei

Tokihiro Tomoda 友田時広 1sei

Hiromitsu Shishido 宍戸宏光 1sei

Kazuyoshi Nishiki 西木和栄 1sei

Hiroyuki Otani 大谷広行 1sei

Fukushige Tsuji 辻　福重 1sei

Takao Otake 大竹隆雄 1sei

Kenichi Yano 矢野健一 1sei

Tadao Noji 野地忠雄 1sei

Minoru Nagata 永田　実 1sei

Toshio Nagata 永田敏雄 1sei

Yasuhei Nakamura 中村弥寿平 1sei

Tomio Hirata 平田富夫 1sei

Hiromi Hashimoto 橋本博美 1sei

Masayoshi Ishihara 石原正義 1sei

Hirotomo Kawashima 川島博知 1sei

Tomehisa Oka 岡　留久 1sei

Keiji Kaneko 金子啓次 1sei

Kenji Takahashi 高橋健次 1sei

Shigeki Makimoto 蒔本茂樹 1sei

Hiroshi Takahashi 高橋裕志 1sei

アマゾナス州　パリンチンス

Avenilza Tokuta Castro 2sei

Celso F. Kakauchi Filho 2sei

Alberto Kimura 2sei

Alaide Akiko Sakamoto 2sei

Aluysio Mory 2sei

Aderb al Kunimuny 2sei

Cedo M. Yamaguchi 2sei

Celina Nomura 2sei

Celso Toyoshigi Nakauchi 2sei

Dilermando M. Sakamoto 2sei

Enedina K. Yoshii 2sei

Francisco da Silva Hatta 2sei

Francinaldo Okamura Brandao

Hileia da Silva Hatta

Hissato Fugiwara da Silva 2sei

Homero H. Hidaka 2sei

Yoshimachi Yoshii 吉井ヨシマチ 1sei

Tadahisa Shoji 東海林タダヒサ 1sei

Irene Yshima Sakamoto

Yoshinaka Taketomi 武富ヨシナカ 1sei

Inalda Ois Leal 2sei

Ilson Sena Inomata 2sei

Jose Elizeu Sena Ynomata 2sei

Olinda da Silva Hatta 2sei

Liziete T. Sakamoto 2sei

Leopoldo M Sakamoto 2sei

Luiz F. Sakamoto 2sei

Luiz Alberto Kimura 3sei

Massaki Nakanome 中の目正明 1sei

Maria Zete Tokuta 2sei

Matian Nakanome

Maria das Gracas Ono 2sei

Maria Izabel Kataki 3sei

Maria da Conceicao Kimura

Viuva do 1sei

Munekazu Kimura 木村ムネカズ 1sei

Maria lvonete Sena Inomata 2sei

Mario Sakamoto 2sei

Mario Jorge Barroso 2sei

Margareth Brandao Okamura 3sei

Marina de Santos Yamane 2sei

Mana Sena Inomata 2sei

Marilene Okamura Pinheiro 2sei

Nelson F. Nakauchi 2sei

Nelson M. Sakamoto 2sei

Nilda Kimura Okamura 2sei

Nachiko Yoshii 2sei

Benlardo Kawakami 3sei

Orlando da Silva Hatta 2sei

Ozorio Oliviera Koga 2sei

Otoniel N. Toguchi 2sei

Osila Koga Preste 2sei

Oscar Oliveira Koga 2sei

Roberto da Silva Hatta 2sei

Heissu Kataki 2sei

Ronaldo Taketomi 2sei

Raimunda Oliveira Koga

Bras. Mae do 2sei

Raimundo Evail Sena Inomata 2sei

Roberto Lima Kimura 2sei

Satoshi Okamura 2sei

Zennonshin Shoji 東海林善之進 1sei

Maria Sonia Sakamoto

Takashi Kawakami 2sei

Tamon Oyama 尾山　多門 1sei

Vibarto Hidaka 2sei

Valda Tokuta Gama 2sei

Kleber Tsunematsu Hatta 2sei

Genji Tokuta 徳田　源治 1sei

Elves F. Nakauchi 3sei

Ademar Correa dos Santos 2sei

Liezio Correa dos Santos 2sei

Humbert Correa dos Santos 2sei

Kyoi Ono de Souza

Jose Raimundo Kataki 3sei

Fsterrofiin Yoshu de Souza 2sei

Dorinilce Shoji da Costa 3sei

Ronaldo da Silva Hatta 2sei

Paulo M. Sakamoto 2sei

Katia Helena Sakamoto 3sei

Marilena Okamura Farias 2sei

Neyde Yoshii 2sei

Helinara Prata Tokuta

Lia Santarem dos Santos 2sei

Lenize Santarem dos Santos

Ana Gorete Sakamoto 2sei

Aldenor da Suva Hatta

Piedade Inomata Pimentel 2sei

Juscelino Sena Inomata 2sei

Everaldo Sena Inornata

Aldair Kimura 2sei

Jitsuko Kawakami 三斗 美子 1sei

Joaquim Azedo Kawakami 2sei

Mariana Shoji de Castro 2sei

Nery Sakamoto Pontes 2sei

Edmar Sakamoto Pontes 2sei

Tobias Satoshi Hara 2sei

Marilia Okamura Brandao 2sei

Suzana Mary Kawakami Oliveira 3sei

Maria da Silva Hatta Bras. Mae da 2sei

Erivaldo Vilkson Sakamoto 2sei

Mauricio Nomiyama 2sei

Aderaide T.de Sousa Kimura

Karla Rose Kimura Seixas 3sei

Kelcilena Nakauth 2sei

Takacy Tokuta 2sei

Shinichiro Mori　森 進一郎 1sei

Tinete Nathico Yoshii Souza 25sei

イイヅカ ヨシハル　イイヅカ ヨシハル

Yoshiharu Iimori　飯塚　義治 1sei

Rozalia Koide da Silva 3sei

Sumiko Dailza Koide da Silva 2sei

Midiam Koide da Silva Cabral 3sei

Maria Valdely Koide da Silva 3sei

Maria Celia Koide da Silva 3sei

Maria Kumiko Patacho Koide 2sei

Ilorencio Cazuo Kuriyama 2sei

Simao Kuriyama 2sei

Maria Madalena Kuriyama da Fonseca 2sei

Yataro Kuriyama 2sei

Sandra Maria de Matos Kuriyama 3sei

Maria Kuriyama Cavalcante 2sei

Nilda Shizue Kuriyama de Oliveira 3sei

Ruth Hatehuell Monteiro 3sei

Jackson Nagai Hatehuell 3sei

Estelita Nagai Hatehuell 2sei

Jsaoc Nagai Hatehuell 3sei

Gerson Moyses Levy 3sei

Choichi Tomioka 2sei

Jose Aderson Tamioka 2sei

Takeo Tomioka 2sei

Silvana Tomioka Ouintino 3sei

Minami Argentina Tamioka Levy 2sei

Renato Lima Uchiyama 2sei

Elcana Uchiyama Levy 2sei

Taketoshi Yamaue 2sei

Massanoli Neo 2sei

Kiyomi Neo 2sei

Naomi Neo de Oliveira 2sei

Masaharu Neo 2sei

Massakatsu Neo 2sei

Toshiko Neo Gomes 2sei

ﾄﾐｵｶ ｹｲｺ　ｵﾀﾞ ｼﾙﾋﾞｱ

Silvia Keiko Oda 2sei

Tomiko Oda da Silva 2sei

Kayoko Oda Sarubi 2sei

Raimunda oda da Silva 2sei

Maria Silmar Oda Sarubi Costa 2sei

Francinei Oda da Silva 2sei

Francilmar Oda da Silva 2sei

Francisco Monteiro da Silva Filho 2sei

Silvana Maria Oda da Silva 2sei

Mary Ane Tatikawa Miranda 3sei

Miano Pereira Kato 2sei

Ciro Ito 2sei

Pedro Kitami Osaki 2sei

Tereza Osaki Lopes 2sei

Naoshi Kawati 2sei

Yoshito Kawati 2sei

Yorikuni Kawati 河内よりくに 1sei

Ely Samuel Osaky Lopes 2sei

Fileto dos Santos Lopes Neto 3sei

Joao Batista Lopes Sobrinho 3sei

Morika Oda 小田もりか 1sei

Isao Kakizoe　垣添　勲 1sei

Paulo Tomihiko lmay 2sei

Jorge Kakizoe 2sei

Mana do Carmo Osaki Conceicao 2sei

Paulo Jose Ozaki Lopes 3sei

Vanda dos Santos Osaky Dia 3sei

Masaru Kitami Osaki 2sei

Henrique Yamane 2sei

Terezinha Osaki Lopes da Cunha 3sei

Helio Jose Osaki Lopes 3sei

Maria Ines Oda da Silva 2sei

Quito Tatikawa 2sei

Edison Gengute Mori 2sei

Camoes Ono 2sei

Sebastiao Kitami Osaky 2sei

Caetano Kitami Osaki 2sei

Oreste Choso Tatikawa 2sei

Irene Hissako Oda 2sei

Sheila Oda da Silva 2sei

Margrete Oda da Silva Maciel 2sei

Francisca V.Iwata Viuva da 2sei

Amelia Maria Iwata Andrade Rabello 3sei

ヤマグチカツオ　ヨアリ

Katsuo Yamaguchi 山口勝男 1sei

Tatsuo Nakanishi 中西達男 1sei

シゲルアルファイアエサシカ　テフェ

Sigeru Alfaia Esashika 2sei

Robson Alfaia Esashika 2sei

Roberval Takafaz 2sei

アマゾナス州　アウターゼス

Ivana Suguiyama Nakajima　2sei

Harumi Nagata da Rocha 永田　晴美 1sei

ロライマ州　ボア・ビスタ

Luiza Maya Doi Chan　2sei

Shigeko Doi Ribeiro リベイロ土井茂子 1sei

Tatsuro Doi　土井タツロ 1sei

Tsuyoshi Doi 2sei

Moyo Doi 土井　モヨ 1sei

Cesario Hirokichi Eda　2sei

Pedro Hiromasa Eda 2sei

Hiroshi Eda 江田ひろし 1sei

Sumi Eda 江田　すみ 1sei

Yasuko Eda 江田やすこ 1sei

Masaru Eda 江田まさる 1sei

Tetsuo Eda 江田てつお 1sei

Clovis Hiromi Eda 2sei

Mizuko Hideshima 秀島　瑞子 1sei

Yasunobu Hideshima 秀島やすのぶ 1sei

Kazuto Hideshima 2sei

Yoichi Nakamura　中村よういち 1sei

Tadashi Nakayama　中山　正 1sei

ChizukoTsukuda　佃 千鶴子 1sei

Sandra Lea Tsukuda 2sei

HaruyoTsukuda　佃 晴代 1sei

Kazuo Tsuji 辻　一夫 1sei

Minoru Kuchida　朽田みのる 1sei

Eduardo Satoshi Yamaguchi 2sei

Katsue Taniguchi　谷口かつえ 1sei

Shiro Seki 2sei

Shoichi Kato 加藤 奨一 1sei

Masahiro Sotodate　外舘 雅弘 1sei

ロンドニア州　トレゼ・デ・セテンブロ移住地

Katsuhiko Matsuno　松野　克彦 1sei

Michio Kadowaki 門脇　道雄 1sei

Heishiro Kuriyama 栗山 平四郎 1sei

Takayuki Okabe 岡部　隆之 1sei

Norio Kadowaki 門脇 法雄 1sei

Tamotsu Isohata 磯畑　保 1sei

Shigeto Kuroda 黒田　重人 1sei

Nonyuki Yamaguchi 山口　宣行 1sei

Takeshi Maru 丸 猛 1sei

Shinichi Kawada 川田　信一 1sei

Shunsuke Tanabe 田辺　俊介 1sei

Keiki Matsuzaki 松崎　恵樹 1sei

Yoshihiko Matsuno 松野　良彦 1sei

Paulo Tsutomu Sudo 2sei

Edgard Brasil Junior　Marido da 2sei

Koichi Kuroda 黒田　孝一 2sei

Alberto Nobuo Kuroda 黒田 信夫 2sei

Susumu Kadowaki　門脇　進 2sei

Munehiro Okabe 岡部　宗弘　1sei

Wader Sales da Silva Mando da 2sei

Michiko Kuroda 黒田三千子　1sei

Satsuki Kida 木田　五月 1sei

Fumiko Okabayashi 岡林富美子　1sei

Claudio Eiji Okabe 岡部　栄二 2sei

Osamu Kuriyama 栗山　　修　1sei

ロンドリア州　ゲアラジャベリン

Mihoko Mukouyama 向山美保子　1sei

ロンドリア州　ポルトベーリョ

Shigeo Ono 2sei

Osmar Garcia Ribeiro 3sei

Kan Kikuchi　菊地　カン 1sei

Luiz Ossamu Ishida 2sei

Maria Luiza Ribeiro Gomes 3sei

Emilia Keiko Kikuchi Vasconcelos 2sei

Edoson Issao Oikawa 3sei

Celso Massakatsu Ezaki 3sei

Alice Kiyoko Kikuchi Yamura 2sei

Ronaldo Sawada Viegas 3sei

Mario Ouiyoshi Marubayashi 3sei

Cynthia Rosario Ishizuka 3sei

Hiromi Sawada Viegas

Yoichi Natori [illegible] 1sei

Anderson Makoto Kayama 2sei

Antonio Hidemi Nakamura 2sei

Durval Shiguetoshi Ezaki 3sei

Egina Ruriko Natori

Edisom Mimura Iguchi 2sei

Emilia Yoshimi Iguchi 2sei

Guerino Imada 2sei

Heiko Adoriana Kuroki Souza 3sei

Jacy Yosio Kussaba

Paulo Akira Okabayashi 3sei

Rosangela Megumi Tanabe Hijazi

Suzana Massumi Shirota 2sei

Tereza Hiromi Iguchi Sato 2sei

Yoichi Abematsu あべまつ よういち 1sei

ロンドリナ州　アリケメス移住地

Antonio Kjueiro Aida 2sei

Francisca Takano Aoyama 2sei

Helio N. Aoyama 2sei

Roberto Shiutsu Aoyama 2sei

Ruzuberto Tomiya Aoyama 2sei

Shideo Aoyama 2sei

Mario Akira Asano 2sei

Celso Asano 2sei

Miguel Asano 2sei

Helena Tiyoko Aoyama Breda 2sei

Anderson Pedro de Gasperi 2sei

Claudio Massahiro Goto 2sei

Tadashi Hayashi 林　ただし 1sei

Daniel Takeshi Higuti 2sei

Milton Katsumi Higuti 2sei

Toshio Higuti 2sei

Vitono Massatoshi Higuti 2sei

Antonio Massao Hirama 2sei

Haruo Hirama 3sei

Hisako Dina Ishida do Nascimento 2sei

Kenhyti Ishitani 2sei

Luiz Alberto Tadashi Ishitani 2sei

Gilson Tetsuo Kamiya 2sei

Masami Kamiya おさみ まさみ 1sei

Wilson Sussumu Kamiya 2sei

Marcia Kanazawa 2sei

Mario Minoru Kanazawa 2sei

Dorival Kotti 2sei

Tetsuo Kozima 2sei

Luiz Yoshiaki Kubota 2sei

Celina Teriko Kubotani 2sei

Gilberto Hiromi Kubotani 2sei

Jose Kubotani 2sei

Tereza Harue Kubotani 2sei

Tony Massaharu Kubotani 2sei

Roberto Yoshio Kuwano 2sei

Cleide Yumiko Maeda 2sei

Aracildo de Castro Lopes 2sei

Edith Takeuti Matsubara 2sei

Oscar Hissao Matsubara 2sei

Pedro Toshio Matsubara 2sei

Amauri Matsumoto 2sei

Jorge Matsumoto 2sei

Paulo Matsumoto 2sei

Valter Akira Miasato 3sei

Ponardo Massaiuqui Nagahiro 2sei

Hiromu Nakamura 中村ひろむ 1sei

Tetsuro Nakamura 中村てつろう 1sei

Paulo Yoshiyuki Nakassugui 2sei

Hissao Nakayama 2sei

Alexandre Akira Ochiai 4sei

Leandro Kensi Ochiai 4sei

Mario Mitsuyuki Ochiai 2sei

Nai Ayako Ochiai 3sei

Sergio Terumitsu Ochiai 3sei

Jose Kazuyoshi Okamoto 2sei

Massato Okamoto 2sei

Augusto Saito 2sei

Gilberto Massaharu Saito 2sei

Marli Sakamoto 2sei

Antonio Nobuo Sato 2sei

Marcia Ota da Silva 3sei

Bokuichi Suzuki 鈴木牧一 1sei

Mineo Suzuki 2sei

Jiro Takahashi 2sei

Joaquim Seiji Ueda 2sei

Julio Luiz Pedri Valenca 2sei

Agenor Yabumoto 2sei

Flavio Tetsuyoshi Yamagishi 2sei

Julio Hidemitsu Yamagishi 2sei

Mauro Shigueo Yamagishi 2sei

Roberto Yurio Yamagishi 2sei

アクレ州　リオ・ブランコ

Gilberto Furuno 3sei

Julho Kamei 2sei

Seitoku Mori　森　　清徳 3sei

Toshiro Iwai　岩井　敏郎 2sei

Tomoko lwakura 岩倉　朋子 2sei

Hisako Kimura 木村　久子 2sei

Yutaka Nakamura 中村　　豊 3sei

Shiro Takahashi 高橋　四郎 2sei

Joao Calos Ueno 3sei

Jose Ueno 3sei

Katsuyoshi Fujita 藤田かつよし 1sei

Mitsuyo Nishizawa 西沢　光代 1sei

Yoshio Nakamura 中村　好夫 3sei

Tomas Kimura 3sei

Takashi Takahara 高原　　孝 2sei

Katsuichi Takagi 高木　勝一 2sei

Nozomu Haga 芳賀　望 2sei

Mario Sasagawa 3sei

Atsushi Sasai 笹井　厚 2sei

Takashi Sasai 笹井　　隆 2sei

Tetsuo Kawada 川田　哲夫 2sei

Yoneo Sano 佐野　米夫 1sei

Toshiko Komatsu 小松　年子 1sei

Masako Yonekura 米倉　正子 1sei

Hisashi Sekiguchi 関口　　久 1sei

Ichi Nishizawa 西沢　イチ 1sei

Hiroshi Nishizawa 西沢　広司 1sei

Masaichi Nishizawa 西沢　正一 1sei

Kazuko Hamaguchi　浜口 カズ子 1sei

Hironori Hamaguci 浜口　博典 1sei

Noriyo Hamaguchi 浜口　典代 1sei

Keiko Hamaguchi 浜口　啓子 1sei

Augusto Hamaguchi 2sei

Mayumi Hamaguchi 2sei

Hideo Nakamura 中村 秀夫 3sei

Arberto Jorge Ishii 2sei

Antonio Iharagi

Gilberto Minoru Marui 3sei

Takeshi Murata 村田　剛 2sei

Tadashi Yonekura 米倉　　正 3sei

Eiji Yonekura 米倉　英治 3sei

Minoru Inada 稲田　　稔 2sei

Kouji Maeda 前田　康司 2sei

Yoshio Seiku　清久良夫　2sei

Hako Taromaru 田呂丸 はこ 2sei

Jizelda Furuno 3sei

Zejimar Furuno 3sei

Jorge Furuno 3sei

Zejilda Furuno 3sei

Zizeli Furuno 3sei

Sueno Furuno 古野 末乃 2sei

Valquilha Furuno 2sei

Zejivaldo Furuno 3sei

Vilma Furuno 3sei

Valter Furuno 3sei

Valderci Furuno 3sei

Valdir Furuno 3sei

Osamu Koike 小池 修 1sei

Keiji Matsuo　松尾 啓二 3sei

Vanda Furuno 3sei

（1）各地における日系人の数

地域		マナオス	エフィジェニオ・サーレス	ベラビスタ	パリンチンス
家族数		127	42	22	93
日系人数		521	172	116	432

・年齢・世代別人数

世代		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
0～10歳	男性		5	18	3		1	11			2	1				27	13
	女性		5	16	2		1	7			2					21	13
11～20歳	男性		28	22	1		12	2			13	1			1	47	5
	女性		35	16	1		10	3			5	1			7	48	3
21～30歳	男性	1	39	9			22	3			11				4	42	2
	女性		38	9			15	1			14	1			26	20	2
31～40歳	男性	1	23	5			7			2	5				19	13	
	女性	2	25	6			5				7				23		
41～50歳	男性	18	11			8	1			10	2				26	5	
	女性	24	12	1		9	2			4	2				18	2	
51～60歳	男性	36	4			11	2			5					16		
	女性	23	9			8	1			5					11		
61～70歳	男性	18	2			6				6	2			1	5		
	女性	14	4			6	1			5				1	1		
71～80歳	男性	4				7				1	1			2	1		
	女性	18				6				3							
81歳以上	男性	9				1				2				5			
	女性	2				3				3				2			

地域		マウエス	ボアビスタ	リオブランコ	ポルトベーリョ
家族数		33	27	61	28
日系人数		201	110	206	79

・年齢・世代別人数

世代		マウエス				ボアビスタ				リオブランコ				ポルトベーリョ			
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
0～10歳	男性			3	7		2	13			2	6	7			2	6
	女性		2	6	9		1	7				6	2			5	7
11～20歳	男性			20	10		10	9			6	7	15			7	1
	女性		3	18	4		4	11			5	8	12			7	3
21～30歳	男性		2	30	2		9				8	4	5		3	2	1
	女性		1	21			6				3	4	7		2	2	1
31～40歳	男性			16		1	4				3	7	1		2	6	
	女性		1	21			3				7	3			4	2	
41～50歳	男性		2			3	4			5	10	13		1	1	2	
	女性		2	5		3	3			4	5	11			3	1	
51～60歳	男性	1	5			5					6	1			3		
	女性		2			3	1			2	6				1		
61～70歳	男性		3			3				1	2			2			
	女性		5			2				1	3			2			
71～80歳	男性									2	1						
	女性					2				2	2						
81歳以上	男性																
	女性					1				1							

地域		トレゼ・デ・セテンブロ	アリケメス	イタコアチアラ	その他の地域
家族数		27	72	42	7
日系人数		122	220	223	27

・年齢・世代別人数

世代		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
0～10歳	男性		4	6				19	7			9	1				
	女性			5				20	5			17	9			1	
11～20歳	男性		5	7				17	2			20	4				
	女性		13	6				23	2		1	25	2		2	4	
21～30歳	男性		11	1			4	10	2		1	24	2			2	
	女性		9	1			4	9	2		7	30	2		2	5	
31～40歳	男性		5				15	3			1	14			2	2	
	女性		5				13	2			3	13					
41～50歳	男性	6	2			1	17	3			7	2					
	女性	8	5				10				5	1			1		
51～60歳	男性	7				1	7			1	11				1		
	女性	4					8				6			2			
61～70歳	男性	2				1	5							1			
	女性	1				1	3				2						
71～80歳	男性	2				2				1							
	女性	4				2					1			1			
81歳以上	男性	1												1			
	女性	2								1							

（2）各地の職業別人口

	マナオス	エフィジェニオ・サーレス	ベラビスタ	パリンチンス	マウエス	ボアビスタ	リオブランコ	ボルトベーリョ	トレゼ・デ・セテンブロ	アリケメス	イタコアチアラ	その他の地域	合　計
農業(畜産，漁業)	16	32	21	26	10	9	5	1	11	15	10	1	
商業（自営業）	50	3		17	7	12	30	16	11	41	16	3	
会社員	26	3		5		2	7	1		6	2		
公務員	8	2		6	2	2	7	2	2	1		1	
政治家							1						
弁護士								1					
医師	1			1			4	1	1	2			
教師	1			10	1		3	4		1	4	2	
無職（家事）	15	1	1	28	13	2	4	3	2	6	11		

注）調査表提出者のみ集計。

移住地部では、ほぼすべての入植者より回答を得たが、世代が進むにつれて分家独立等、家族数が増加、及び他地域より転入、転出が相次ぎ、正確な実数をつかむことが不可能であった。

都市部、また、西部アマゾンに点在する日系人は調査期間の不足により完全にはできていない。

（3）出身地別　1世の数

	マナオス	エフィジェニオ・サーレス	ベラビスタ	パリンチンス	マウエス	ボアビスタ	リオブランコ	ポルトベーリョ	トレゼ・デ・セテンブロ	アリケメス	イタコアチアラ	その他の地域	合　計
北海道	2	2						1	1				6
青森	3	4					1						8
秋田													
岩手						1							1
山形	3	1							2				6
宮城	3	1	1	1			1						7
福島	2		1			4							7
栃木	1												1
茨城								1					1
群馬	1												1
千葉									2				2
埼玉													
東京	2		1						3				6
神奈川	3						1						4
山梨	1												1
静岡	1					1							2
長野													
新潟	6												6
富山	3		1										4
石川	7	10											17
福井							1						1
愛知													
岐阜	2		1				1						4
三重													
滋賀													
和歌山							1			2			3
奈良	1												1
京都	1												1
大阪	2					2							4
兵庫	2	1											3
岡山	2			1									3
鳥取													
広島	1		1										2
島根													
山口				1			1				1		3
香川	1		1										2
徳島													
高知													
愛媛	1										1		2
福岡	4	9	3			1				2			19
佐賀	2					5							7
長崎	5	3	4		1		4		1				18
大分	1								2				3
熊本	16	1	7	1		1	4		7		1		38
宮崎	1					2		1					4
鹿児島	7	2	1			1			2	2			15
沖縄													
不明	1			4			2			3			10

■参考文献一覧

当七十周年記念誌の執筆、編纂に際しまして、次の文献を参考、一部引用させていただきました。また、以前に執筆された原稿に参考文献が記入されていなかったため、そのまま掲載した部分がありますが、ご了承願います。

・高拓生アマゾン開拓の歴史（高拓生アマゾン入植五十周年誌　小谷祐次、安井宇宙、原田公三、丸岡京、佐脇忠　共著）
・高拓会会員名簿
・アマゾナス州における日本移民の歴史（川田拓哉著）
・ブラジル日本移民七十年史（ブラジル日本移民七十年史編纂委員会一九八〇年）
・機関紙「なかま」
・アマゾン移住三十周年誌（生島重一著）
・ブラジル日本、日系社会史年表（サンパウロ人文科学研究所編　一九九六年）
・アマゾン移住日本人移民六十周年記念誌（汎アマゾニア日伯協会編一九九四年）
・アマゾン開拓は夢のごとし（安井宇宙　著　一九九八年草思社）
・奥アマゾンの日系人（中武幹雄著　一九九八年　鉱脈社）
・アマゾンにかけた夢（藤崎康夫著　一九九三年　国土社）
・アマゾン地域における邦人移住のあゆみ
・移住五十五周年記念号（汎アマゾニア日伯協会編）

・移住地概要 昭和五十六年度版（国際協力事業団）
・アマゾナス州ベラビスタ移住地創設三十年史（ベラビスタ移住地自治会 一九八六年）
・天園歩み二十年の譜（エフィジェニオ・サーレス植民地二十年誌刊行委員会 一九八三年）
・天園第二部 その後の十年の譜（エフィジェニオ・サーレス自治会三十年誌刊行委員会 一九九三年）

結びの辞

西部アマゾン日本人移住七十周年記念事業の一環として記念誌の発行が企画され、約二年余り、乏しい資料から、そして各移住地の関係者からの心温まる執筆をいただき、ようやく発刊にこぎつけました。

西部アマゾン地域には、戦前の移住地があります。グァラナ栽培目的で設立されたアマゾン興業株式会社によるマウエス、ブラジルの経済発展に貢献した高拓生によるジュート産業発祥の地、パリンチンスのビラ・アマゾニア。これら日本人が最初に入植した大原始林に開拓の斧が振られてから七十年の歳月が流れました。戦後の移住地には、

西部アマゾン四州にまたがり、八地域の移住地が造成され、多くの日本人入植者は過酷な立地条件と戦い、生活の基盤を求めて大都市へと転住した人も多数で、現在では幻の移住地として消滅したところもあります。

しかしながら、移住者はその地域の経済発展に協力して参りました。一世移住者は後継者にバトンタッチし、営農の拡張と子弟教育に日本人としての誇りを失うことなく生活の安住が確立しているのも、アマゾンに入植された七十年前の日本人の脈々と流れる勤勉さの賜物と感謝している次第であります。

七十周年記念誌の発刊にこぎつけるまでに、アマゾン移住五十周年記念にさかのぼらねばなりません。編纂委員長の病気のために挫折し、多数の資料が紛失、ついで六十周年記念事業として企画しましたが、原稿等の収集に終り、資金面に行き詰まり、七十周年記念事業として故出田務七十周年記念祭典委員長の訪日、国際協力事業団との折衝により、助成金の決定を受け、記念事業としての陽の目を見ることとなりました。戦前戦後の移住の歴史や記録は多数出版されていますが、この七十周年記念誌は移住した農民が綴った開拓の記録であります。

発刊にあたり、この事業のために心温まる助成金を賜りました国際協力事業団、並びに当地マナオスで操業中の日系企業、そして会員各位の資金援助に敬意を表するものであります。

尚、内閣総理大臣小渕恵三殿、外務大臣河野洋平殿、国際協力事業団総裁藤田公郎殿、駐ブラジル日本国全権特命大使鈴木勝也殿、在マ

ナオス日本国総領事小林健一殿より、発刊に際し祝辞、メッセージをいただきました。

また、委員長の逝去に伴い中断し、行き詰まっていた本誌の編集に関し、国際協力事業団、日系社会青年ボランティアとして派遣された中野敦彦君による、原稿打ち込みから、構成、内容確認調査、文章修正及び校正、写真の収集、本誌レイアウトと編集全般にわたる尽力、奮闘がなければ刊行にこぎつけることができなかったと言っても過言ではありません。その他、総領事館領事沢内民雄殿はじめ、様々な方から助言をいただいたことや、パラー高拓会にご協力いただいたことにも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

七十年間の記録としては十分なものではありませんが、西部アマゾン地域の開拓にたずさわった日本人の記録とし、本誌発刊の結びの辞とさせて戴きます。

一九九九年十一月六日

西部アマゾン日本人移住七十周年記念誌編纂委員会委員長

三木　祥弘

西部アマゾン日本人移住70周年記念誌編纂委員会

委員長　三木　祥弘

委　員　村山　惟元、中村弥寿平、久保　勝、梅津あや子

記念誌編集を終えて

マナオス、西部アマゾン日伯協会に昨年の4月に着任してから数カ月、ようやく西部アマゾン日本人移住70周年記念誌の編集を終え、印刷、出版までたどり着くことが出来ました。

着任当初、集まりつつあった原稿のパソコン入力から始め、原稿の内容確認のため執筆者、また長年その移住地に生活されている方のお宅を何度も訪問し、その都度加筆修正、また写真の収集を行い、原稿が出来上がると校正をし、さらに内容再確認と一連の編集作業を行ってきました。この過程の中で、多くの移住者の方々に出会い、アマゾンについて、また、入植地やそこに生活する人々などについて、様々な話を聞くことが出来たのは私にとってかけがえのない財産となりました。独特な個性を持った移住者の方々は、苦労しながらもそれ以上にアマゾンでの生活を楽しむすべを知っており、日本から来た私にとって、年老いても尚生き生きとした彼らの目から、現在の日本では消えつつある、なにか言葉では言い表せない新鮮な感じを受けました。

記念誌編纂が長い間中断していたせいもあり、当初、委員会は機能しておらず、本の企画・構成もあいまいになっていたため、編集に関し、私個人が独断で突っ走ったりと周囲の方々には迷惑をかけてしまったことも多々ありました。しかしながら、仕上がりつつある本を見て、完璧な編集内容とは言えませんが、執筆していただいた方々の体験や失われつつある記憶を後世に残すには十分なものができたので

はないかと感じます。

アマゾンの地に赴任し、移住70周年という節目の年に記念誌編纂をはじめ、様々な記念行事の仕事にたずさわれたことを、多忙ではありましたが、私自身幸運に思うとともに、このような機会を与えてくださった方々に感謝いたします。

1999年11月

国際協力事業団　日系社会青年ボランティア　中野　敦彦

緑　西部アマゾン日本人移住70周年記念誌
1929 ― 1999
発行日　1999年11月
編　纂　西部アマゾン日本人移住70周年記念誌編纂委員会
Associacao Nipo ― Brasileira da Amazonia Ocidental
Rua Terezina, 95 ― Adrianopolis
CEP 69057 ― 070　Manaus-AM-Brasil

緑　西部アマゾン日本人移住70周年記念誌
1929～1999

発行日　1999年11月

編　纂　西部アマゾン日本人移住70周年記念誌編纂委員会
Associação Nipo-Brasileira da Amazônia Ocidental
Rua Terezina, 95 - Adrianópolis
CEP 69057-070 - Manaus - AM - Brasil
Tel.: (92) 234-7185 - Fax: (92) 232-3694

発行者　村山　惟元
Koremoto Murayama

印刷所　トッパン・プレス印刷出版有限会社
Editora Gráfica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - Cambuci - São Paulo
CEP 01534-000 - SP - Brasil
Tel.: (11) 279-5522 - Fax: (11) 279-3975
e-mail: keiji@tpress.com.br

Tel.：(92)234 | 7185 | Fax.：(92)232 | 3694
発行者　村山　惟元
Koremoto Murayama
印刷所　トッパン・プレス印刷出版有限会社
Editora Grafica Topan | Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 Cambuci-Sao Paulo
CEP 01534 | 000 SP-Brasil
Tel.：(11)279 | 5522 Fax.：(11)279 | 3975
E | mail: keiji @tpress.com.br